プロレスライセンス証つきプロレス増刊号!!

enterbrain MOOK

MMA & PRO-WRESTLING MAGAZINE

kamipro Special

2009 SPRING

860yen



「俺は変態じゃない!!」
変態座談会シリーズに電撃参戦!
中邑真輔

大好評!「1993年の女子プロレス」
柳澤健、3万字インタビュー
ライオネス飛鳥

よみがえれ! ズンドコヤングライオン伝説
天山広吉×西村修

ドラゴンゲートに再び学びました!!
吉野正人

酔いどれ血まみれデスマッチ対談
ネクロブッチャー×掟ポルシェ

"地獄のど真ん中"のカテエ真実!!
谷津嘉章

日本一カワイイ女子レスラー
KG

魔性のマブダチアラフォー対談!!
国生さゆり×尾崎魔弓

第二次UWF伝説
鈴木みのる×ミヤマ☆仮面

いまこそ"プロレス上流地帯"宣言せよ!!
俺、変態(プロレス)のミカタです……

kamipro Special 2009 SPRING 俺、変態のミカタです……

2009年4月10日
〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1 ☎0570-060-555(代表)
印刷・製本／大日本印刷株式会社

enterbrain



待望の日本公演、
チケット好評発売中!
SMACK DOWN
LIVE
2009.7.7［火］.8［水］
開場17:30／開始18:30
日本武道館
入場料金 SS:20,000円／S:15,000円／A:10,000円／B:5,000円／C:3,000円
チケットのお求めは以下のプレイガイドで
【チケット発売場所】
キョードー東京 03-3498-9999／イープラス http://eplus.jp/wwe/／チケットぴあ 0570-02-9999
／ローソンチケット 0570-084-003(Lコード37000)／CNプレイガイド 0570-08-9999
WWE日本語公式WEBサイト(http://www.wwe.co.jp)／WWEモバイル (http://m.wwe.co.jp)
※詳しくは「WWE日本語公式サイト」(wwe.co.jp)、
WWE公式携帯サイト「WWEモバイル」(http://m.wwe.co.jp)にて
※お問い合わせ・詳細：●キョードー東京:03-3498-9999
●WWE Japan:03-5464-6053
The names of all WWE programming, talent, images, likenesses and logos are the exclusive property of World Wrestling Entertainment, Inc.
© 2008 World Wrestling Entertainment, Inc. All Rights Reserved.

CONTENTS



PRO-WRESTLING

Presents

MMA & PRO-WRESTLING MAGAZINE
kamipro Special
2009 SPRING

表紙写真／タイコウクニヨシ

プロレス上流地帯



カ、カエッテキタ!!（永島勝司調）。

マグマ120パーセントの〝プロレス増刊号〟が帰ってまいりました！

え〜、どうしてこんなに早く帰ってきたかというと、決算期の都合やインリン様のためだったり（←ジョークです。念のため）、いろんな理由はあるんですけども、もちろん前回の内容が大好評だったからに決まってます！

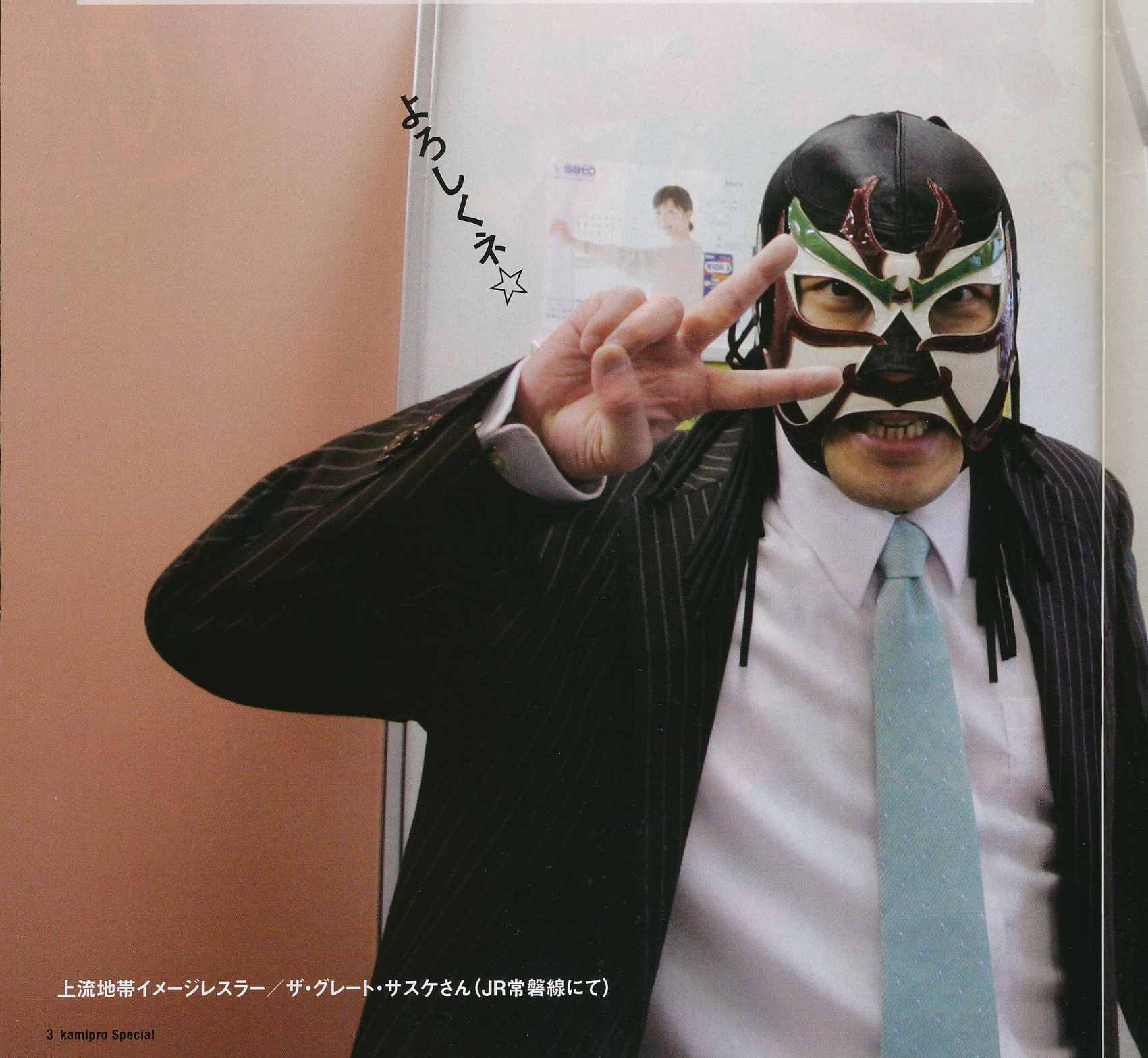
そういえば、同時期に発売された『プロレス下流地帯』なるプロレスムックもたいへんおもしろかった。原田（久仁信）先生のＷＪ劇画は最高です！

大不況マット界の「現場」を行くというコンセプトの、あのムック。なるほど現在のマット界を指して〝プロレス下流地帯〟とは言い得て妙ですが、感心ついでに本誌は考えました。「プロレス上流地帯とは何か――？」と。


たとえば、会場を満員すること、試合内容が素晴らしいこと、目ん玉が飛び出るストロングスタイルなこと。それは立場や見方によって当然異なってくるでしょう。でも、本誌が言えることは、プロレスがプロレスであるがための〝過剰さ〟が一つのキーワードになるんじゃないかと思っております。

もちろん過剰さにも一流から三流まであるわけですし、そんなものは精神的な豊饒さにしかつながらないと指摘されればそれまでですが――。経済的な上流地帯進出は団体の皆さんにお任せいたしますよ。

というわけで、前回同様、今回の増刊号でも、こんな時代に「プロレスだ！」と胸を張るインタビュー、過剰な読みものをご用意いたしました!!



上流地帯イメージレスラー／ザ・グレート・サスケさん（JR常磐線にて）



中邑、おまえ変態（プロレス）だろう!?

本誌大人気企画
『変態座談会』に
中邑真輔が電撃参戦!!



「俺は変態じゃないですよ!!」
疑惑は解明されるのか?

「中邑真輔って、プロレスの変態的なファンだよね?」——以前から本誌編集部では、中邑のポテンシャルの高さが評価されてきたのである(嬉しくないとは思うが)。「次に取り上げるときは、あの変態性にアプローチだ!」——そしてついに実現した本誌人気企画「変態座談会」への登場!! 変態扱いされることに中邑は不満のようだったが……。

タコ　え〜、今日の変態座談会は、スペシャル変態ゲストとして新日本プロレスの中邑真輔選手にお越しいただきました！
中邑　（ちょっとムッとした表情で）自分、変態なんですか？
ガンツ　間違いありません！　サムライTV主催のプロレスクイズ大会でも優勝していますし、立派な変態です（笑）。
中邑　いやいや、ボクは変態じゃないですよ。んなこと勝手に言うなら、まず変態の定義から教えてほしいですよね。
タコ　そりゃそうだ。
ガンツ　簡単に言うと、プロレスは、ただ観て楽しむだけじゃなくて、プロレスファンという人生を送るというか……。
井上　（さえぎって）実際、中邑選手はプロレスをやってるから！（笑）。
中邑　やってますねぇ。
井上　プロレスファンどころか、プロレスラーという人生を送ってるんだから。
タコ　変態の趣味が高じすぎてっていう（笑）。中邑選手は90年代のプロレスを一番観てたんですよね？　今日はそこらへんをテーマにしましょう！
中邑　そうですねぇ。平成元年からインディーが出てきたし、女子プロもちゃんと観てましたね。それでマジでプロレスラーになろうとしてましたから。……まあ、なってますけど。
タコ　ボクらだってなりたかったんですよ！
井上　そうだそうだ！（笑）。
ガンツ　小学校の卒業文集で「将来の夢」は、もちろん「プロレスラー」ですよ！
井上　中邑選手は変態の夢を実現させてるんです！（笑）。
タコ　そういう意味で中邑選手は我々変態の代表やなあ。
中邑　それは困ったなあ（苦笑）。まあ、プロレスとつくものは、なんでも食いついてましたよ。でも、ボクの実家は京都の田舎だったので、それこそちっちゃい頃の『紙プロ』だって売ってないわけで。ちょっと遠出して市内に行ったときに、たまたま見つけて買って帰るくらいでした。
タコ　確かに昔は"プロレスモノ"自体がそんなになかったから、書籍であろうがグッズであろうが「プロレス」って書いてたら、とりあえず買ったりしてたなあ。
中邑　そうやってプロレスっていうものを掘り下げていくしかない。で、ウチはWOWOWに入ってたんですよ。だからWOWOWで放送しているリングスとJWPは押さえられたんですよね。でも、JWPを観るためには、まずはジャパン女子（プロレス）を勉強しなきゃいけない。

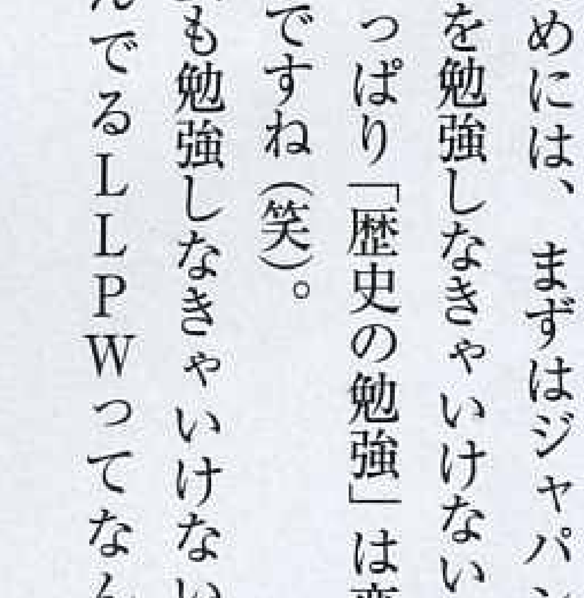
JWPを観るためにはLLPWも勉強しなければならなかった



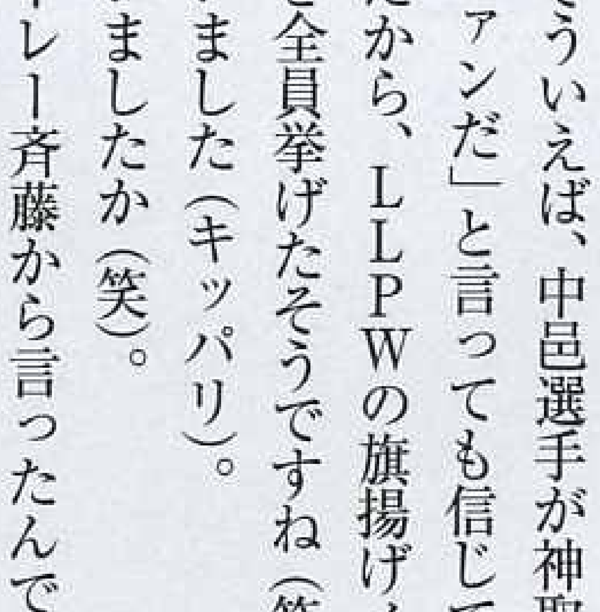
これがイーグル沢井だ！　中邑真輔が口にしなければ、本誌に掲載されることはなかったと断言できる。というわけで、明日からソバージュの女の子は「イーグル！」と呼ぼう!!

ガンツ　やっぱり「歴史の勉強」は変態に必要な作業ですね（笑）。
中邑　全女も勉強しなきゃいけない。JWPと絡んでるLLPWってなんだろう？　と。
ガンツ　そういえば、中邑選手が神取（忍）さんに「ファンだ」と言っても信じてもらえなかったから、LLPWの旗揚げメンバーの名前を全員挙げたそうですね（笑）。
中邑　言いました（キッパリ）。
タコ　言いましたか（笑）。
中邑　ハーレー斉藤から言ったんですよ。イーグル沢井はもう普通じゃないですか。だって、ソバージュの女の子は「イーグル沢井」っていうあだ名だったでしょ？
ガンツ　嫌なあだ名ですね（笑）。
中邑　で、キャロル美鳥を言ったところで神取さんに信じてもらえましたね。
井上　キャロル美鳥！　今日中邑さんに会わなかったら、もう一生聞くことがなかった名前ですよ（笑）。
中邑　プロレスは全団体好きだったんですよね。リングでやってるものはとりあえず全部。だからK―1も観てましたし。
井上　要は『週プロ』と『格闘技通信』が一番元気がよかった頃の世代だ。
中邑　そうですね。一緒に買ってたけど、『週ゴン』はあんまり覚えてないし。まあ、骨法にもハマったクチですから。
井上　骨法には大人のオレらでもハマりましたよ（笑）。じゃあ、グレイシー直撃世代でもある。
中邑　グレイシーで「ちょっとおかしいな？」って思ったんですよね。グレイシーなんて身体が小さいガイジンだぞ、と。「なんでUWF勢もパンクラス勢も出ていかない？　おかしいなあ……」ってね。「武藤敬司が出たら最強だろ！」とは思ってましたけど。
井上　新日とUWFの対抗戦って、武藤さんの強さがはみ出してましたよね。「あれ？　こいつにはUの攻撃があまり効いてねえんじゃねえか」っていう。
中邑　ん〜、Uにはあんまり興味なかったんですよね。田舎の少年にとってUWFは敷居が高すぎて。ビデオも高いし、チケットも高いし、地上波はやってない。地上波で一度だけ観たのが高田vs北尾ですよ。

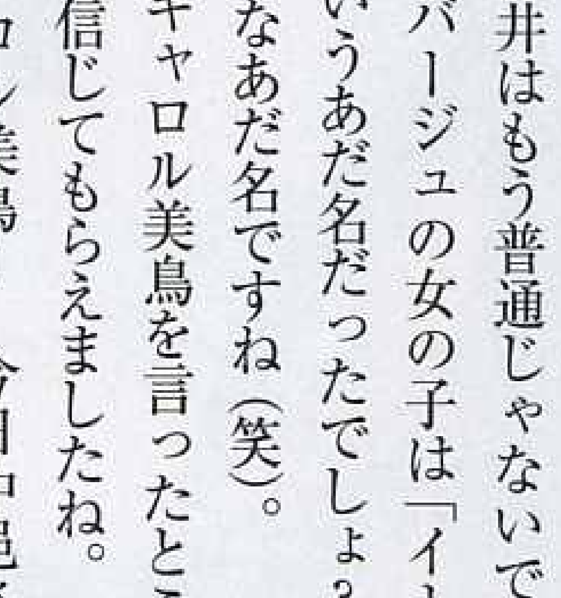
座談会出席者



堀江ガンツ
本誌編集部。ちっちゃい頃から変態的なプロレスファン＆UWF信者として鳴らし、『kamipro』編集部に入ってからもUWF研究家を自称。当変態座談会の主宰者でもある。



井上崇宏
ペールワンズの総帥。高田延彦にあくなきこだわりを持ち、山本小鉄のモノマネ第一人者。その模様は『kamipro.com』のポッドキャスト『mimipro』で堪能できる。



原タコヤキ君
元『紙のプロレス』の編集者。現在は音楽プロデューサーにして、自転車とギターと恋に夢中な38歳。『kamipro.com』のポッドキャスト『mimipro』の司会もやってる。

中邑、おまえプロレス変態だろ!?

ガンツ　TBSの特番だ（笑）。

中邑　高田延彦といえば、『スポーツWAVE』のニュースキャスターをやってるところしか知らないです。

タコ　中邑選手は京都ですよね。ボクも関西なんですけど、もう90年代の『ワールドプロレスリング』ってゴルフ特番でしょっちゅう放送が飛ぶし、TBSでたまにやってるUインターも「関西ではやってへんがな」っていう感じでしたよね。

中邑　そうそう。だからUWFに関しては『週プロ』とか雑誌で読むしかなかったですね。「田村潔司は相撲をやってたのか！」とか。

ガンツ　UWFって完全に『週プロ』の独壇場でしたよね。妄想で楽しむしかないっていう。横三角絞めとか、かかった写真はあるんだけど、「どうやって入ったんだろう」っていう。

井上　わかんない、わかんない！（笑）。プロレスごっこのしようがない。

中邑　いまでは考えられないですよね〜。

タコ　それだけプロレスに詳しいと、新日に入って周りの新弟子に対して「意外とプロレス知らんなあ」とか思うでしょ？

中邑　いや、逆にボクはそういう話は一切しなかったですね。同期の山本尚史（現・YOSHITATSU）とかは「ここに前田さんとか高田さんとかいたんだあ……」とか、いちいち感慨深げに騒いでるんですよ。「うるさいよ！」って（笑）。

タコ　変態やったら、それが普通やないですか。

中邑　ボクはマジで生活がかかってたんで、悲壮な覚悟でプロレスに入ってましたから。ボクは大学1年のときに親父を亡くしまして、もう大学を辞めて働こうと思ったんですよ。そこを母親が頑張って大学を卒業させてくれまして、強くもなりたい、有名にもなりたい、海外に勉強しにも行きたい。すべてひっくるめてかなえてくれるのがプロレスしかなかったんです。だから「何があっても絶対に辞めない」と思ってましたし、クビにもなっちゃいけない。けっこういっぱいいっぱいだったから、山本みたいに「ここで前田日明が……」なんてやってる場合じゃない（笑）。

ガンツ　でも、新日本のスカウト部長だった木村健悟さんが青山学院大学のレスリング部へ視察に来たときは、もう嬉しくてウロウロしてたんですよね？

中邑　いや、嬉しさじゃないです。新日本に入りたいんですけど、「どうしたらいいんだろう？」って。



タコ　そういうウロウロですか（笑）。

中邑　悩みましたよ！　その当時は昼間レスリングをやって、夜は総合格闘技をやって、バイトもやってる状態だったんです。プロレスラーになる準備もできてなかったから、「いきなりテストされたらどうしよう？」って。よくあるじゃないですか、小鉄さんに会場でテストされたとか。橋本（真也）さんとかそうでしょ？

井上　橋本にはね、学生服のままスクワットやらせましたね！（小鉄ボイスで）。

中邑　そうそう、そういうエピソードを読んでましたからね。

井上　プロレス耳年増（笑）。知識があるがために考えすぎるみたいな。

中邑　で、風の噂で国士舘大学の後藤洋央紀がプロレス入りするらしいって聞いたから、後藤に「どうやって入んの？」っていろいろ聞いたんです。だって『週プロ』を開いても、いつもリングスの入門テストしか載ってないんですよ。

井上　なんかリングスの新弟子募集って、やたらやってたような気がするんだよな。

ガンツ　常に新弟子の欠員があるっていう（笑）。

タコ　誰のせいか知らんけど（笑）。

中邑　ボク、慧舟會に通っていたから、ちょっとしたデビューのチャンスはいっぱいあったんですよ。「格闘技の試合に出ないか？」っていう。ボクはプロレスも格闘技もどっちも好き派だったんで、やってもよかったんですけど、「格闘技で名前が出ちゃってからプロレスラーになるのはマズイだろ」と思って。それで格闘技の試合には出なかったんですよね。

ガンツ　エライ!!　プロレス変態の鑑ですよ！

タコ　でも、当時は格闘技の人気が上がってきた時期じゃないですか？　「プロレスでいいのかな？」とは思いませんでした？

中邑　ぜんぜん。それに、ボクにとってはいまが一番いい時期だとしか言いようがないんですね。「ドームがもっといっぱいになってたんだけどな」って言われても経験してないですから。

タコ　上の世代はよく言うじゃないですか。「オレらの試合はゴールデンタイムで流れてた」みたいな。

中邑　楽観的に「また流れは来るよ」みたいなことを言う人はいますけど、待っててもしょうがねえことだろうなとは思ってますけどね。プロレスのあり方が変わってきたっていうのは実際そうですし。それこそ『kamipro』の守備範囲的なことでいえば、ちょうどボクが入門する前にミスター高橋本が出たんですね。でもボクは信じなかったんです。実際、そうじゃなかったことが多かった。

タコ　ほう、相違点がたくさんあった、と。

中邑　でもまあ、そういうところからファンの見方も変わってきたたんじゃないかなと思いますね。いまは『kamipro』みたいに、プロレスと総合格闘技を同じ目線で観る人って、ほとんどいないでしょ。プロレスはプロレスっていう蔑んだ見方

田舎の少年にとって地上波もやってないUWFは敷居が高すぎたんです

中邑、おまえ変態(プロレス)だろ!?

もまた別で。まだそういう人もいると思いますけど。プロレスはプロレスっていうジャンルなんだという見方がわかってもらえたらいいと思います。
タコ ボクらからすると、中邑選手ってデビュー当時は対総合格闘技用っていう見方もあったし、そういう打ち出し方もあったじゃないですか。
中邑 ボクはイヤだったんですもん。それにプロレスラーが総合で負けるのを観て、ヒックリ返ってましたからね。「ケンドー・ナガサキ、出ないくていいよ!」って。
タコ ケンドー・ナガサキは「酔ったら一番強い」とか意味不明な持ち上げ方をされてましたね(笑)。
ガンツ 場外乱闘で大仁田がビビって逃げた。だから強いとか(笑)。
中邑 でも実際、レスラーの打たれ強さって、ほかの格闘技の選手と比べたらハンパないぐらい凄いんだなって思いました。だから自分がヒザ蹴りなんかガンガン顔面に食らっても立ち上がれたりするのは、プロレスをやってたからだろうなって思います。あとは場慣れ。これはデカいなと思いますね。
ガンツ ジョシュ・バーネットも同じことを言ってましたね。新日本プロレスの大きい会場で試合ができたことが凄く経験になってるって。
タコ 中邑選手にとっては、プロレスのための格闘技だったんですね。
中邑 そうなんですけど、デビューしてすぐにアメリカに飛ばされて。ロサンゼルスの道場にはプロレスを教えてくれる人がいなかったんですよ。だって、ヴァリッジ・イズマイウ、ジャスティン・マッコリー、ウラジミール・マテシェンコ。プロレスの練習なんかできるはずがない(笑)。
変態一同 ガハハハハ!
中邑 逆に「ナカムラ、新日の練習はどんなやり方なんだ?」ってボクに聞いてくるんですから。
タコ オレに聞くか⁉ と。
中邑 そうなんです。木戸さんに習ったことしか教えられないし。デビュー1試合だけして、当時社長だった藤波さんに「オマエ、アメリカ」って言われて。「何をしてきたらいいんですか?」って聞いたら、「う～ん、オマエが決めろ!」(藤波ボイスで)って(笑)。
井上 古舘さん、これはけっこう似てますよ‼(小鉄ボイスで)。
中邑 結局アメリカでは格闘技の練習しかできなかったんです。で、帰国が決まって「やっとプロレスができるんだ」と思ったら、02年の『猪木祭り』のダニエル・グレイシー戦だったっていう。
タコ へえ～。ある意味、呪縛ですよね。
中邑 あれ、対戦相手が決まったのが二日前とかでしたもんね。「これがプロレスの世界では普通なんだ!」って思い聞かせてましたね。だから必要以上にビビることもなかったですし。
タコ 確かに中邑選手はプロレスファンだったから、急に命令をされることも織り込み済みですもんね。そういうことも含めて、新日本のストロングスタイルっていうイメージはありますよね。「いつ何時誰とでも闘う」っていう。
中邑 ボクもプロレスも格闘技もどっちも好きだったから、ストロングスタイルは非常にビンビンくるんですよ。アマレスを始めた頃にタックルを教えてもらうんですけど、そのタックルがなかなか難しくて。『ファイヤープロレスリング』でやっても全然相手にダメージを与えられないはずの軽い技が、スゲェ難しいんですよ。

デビューしてすぐアメリカに飛ばされて 結局アメリカでは格闘技の練習しかできなかった

ガンツ 『ファイプロ』では簡単な技でしたね(笑)。
中邑 ボクがアマレスを始めた頃、プロレス中継を観てると、ホンモノのタックルを使うヤツがいるんですよ。プロレスのあの空気の中に、ホンモノの技術が垣間見えたりすると、プロレスと格闘技の壁を取っぱらっておもしろいものになってる。
ガンツ 昔のプロレスって、格闘技なところがありますよね。こないだ、たまたま猪木vsマサ斎藤の手錠マッチを観ていたら……。
中邑 (さえぎって) たまたまって、ちょっと通りがかりに観たみたいに(笑)。
ガンツ ホントにたまたまなんですけど(笑)。あの試合って、格闘技的に凄くおもしろいですよ。マサさんがロックアップにいくところを猪木さんが片足タックルで入って、それをマサさんが切ってバックを奪って。
中邑 だから実際にプロレスをやってる人間からしても、そういう絡みができるレスラーのほうがおもしろいですね。伝わるかどうかは別として、「プロレスっていいな～」っていうのがリング上で感じられるんですよ。
井上 そんな中邑さんに質問です! 入門時代にプロレスの〝強さ〟の洗礼を受けた先輩っていました?
中邑 その前に言っておきたいのは、ボクはまったく基礎練習についていけなかったんです。もう大変でした。ブリッジをやっても足がグラグラになって、木戸さんに「井上さん以来のヘタクソなブリッジだなあ」って言われて。
井上 すいません、その「井上さん」って誰ですか?
中邑 知りません。日プロの終わりの頃の人かなって思ったり(笑)。
タコ あの木戸修が「さん」づけですからね(笑)。
中邑 で、スパーリングだけはなんとかな





超貴重なツーショット! 猪木軍のメンバーだった頃のリョートとイズマイウだ。デビュー当時の中邑は、新日本というより彼らと同じく猪木軍であり、そこにアントンや木戸修の教えが注入されていた。


U.W.F.
PRIDE

中邑、おまえ変態だろ!?

ったんですよ。当時の新日本って、ガードポジションの概念がないんです。だからアマレスの延長のサブミッションレスリングですよね。たとえばバックを取った状態から始まるといったような関節の取り合いなんですけど。レスリングが強くても、ガードポジションやスイープをわかってる人がいなかったんで。ボクからすると、スパーリングが唯一のちょっとした休憩時間だったんです。だから、ガチガチッと上から固めて「はあ〜、疲れた〜」って休んでると、木戸さんから「中邑、いごけっ!」って言われるんですよ（笑）。

井上　いごけっ!!（笑）。

中邑　で、いごいて（笑）。ボクはスパーリングだけしかとりえがなかったんですね。

タコ　スパーリングが休憩時間だったというのも凄い話やなあ。

中邑　いやいや、ほかの練習がもの凄すぎるんですよ。いまだに小鉄さんが道場に来ると、ブリッジしながらベンチプレスするし。「スゲエな、この身体をいじめるアイデア!」と思うぐらいのトレーニングが多いんですよ。だって、ロープにぶら下がって人に足を持たれながら、ロープを昇るんですよ。「な、なんだ、これは!?」って（笑）。

ガンツ　誰が考えたんだっていう（笑）。

中邑　あと、ボクらは「ライオン式」とか言ってますけど。スクワットと腕立てを一緒にやる、もの凄くキツい練習があるんですけど、名前がかわいいんですよね。

タコ　どんな名前なんですか?

中邑　「ペッタン」（笑）。スクワット1000回やったあと、木戸さんが「次、ペッタン!」とか言って。殺す気か!っていう。

ガンツ　前田日明はいまだに所英男に「所、ペッタンいけ!」（前田ボイスで）って言ってるらしいです。

タコ　またモノマネ入りました（笑）。

中邑　で、その木戸さんとスカウト部長の木村さんの小さな縄張り争いがあったんです。

井上　それは興味深いですねぇ。

中邑　ボクらの練習は朝10時から始まってました。木村さんが「オレがスカウトしてきたヤツらはどんなもんかな」って、たまに練習を見に来るんですよ。で、10時から地獄の練習が待ってるにもかかわらず、9時くらいから練習をやらせるんです。しばらくして木戸さんが入ってきて木村さんと言い合いになって。「なんだよ、オマエが教えんのか!?オマエが教えんのか!?」「いや、そんなことはないですけど……」という感じのやりとりがあって（苦笑）。

タコ　確かに小さな縄張り争いや（笑）。

中邑　それで木村さんは帰るんですけど、またイチから練習をやらされて。文字どおり「倒れるまで」というか。うさぎ跳びってスゲエ有名じゃないですか、やってはいけないトレーニングで。2002年、普通にやってましたから（笑）。

ガンツ　さすが新日本!（笑）。

中邑　でも、そういう練習をみっちりやらされたから、いまの基礎体力があると思います。だって水が飲めないんですよ!? いまはもう新日本の道場が改装されてトタン屋根じゃなくなったんですけど、当時は夏場になると50度近くなるんですよね。けど、マジで水を飲めないんですよ（笑）。ただ、3時間の練習の中で一回だけ木戸さんがトイレに行くタイミングがあって。

タコ　必ず決まってるんや（笑）。

中邑　その瞬間が水を飲めるタイミングだったんですよ。道場にコップとか用意できませんから、ペットボトルを凍らしてリングの下に隠しとくんですよ。で、木戸さんがトイレに行ったら、みんなゴソゴソとペットボトルを取り出すんです。真水になってるんですけどね。

ガンツ　とても2000年代とは思えない話ですね（笑）。

井上　再び質問です! 木戸さんとスパーをやったとき「いつ肛門に指を入れてくるんだろう?」って思いませんでした?

中邑　あ、いちおう身構えましたね。木戸さんや小鉄さんにはプロレスの裏技のいろいろと教えてくれたんです。……「な、なんて卑怯な技なんだっ!」と思いましたけど（笑）。

プロレス

変態一同　ガハハハハ!

中邑　で、アメリカに行ったときに猪木さんとスパーリングをやったんですけど、ボクがことごとく猪木さんの裏技を跳ね返したんですよ。小鉄さんや木戸さんのおかげで。

タコ　でも、新人なんだから、ある程度はやられなきゃ。

中邑　その当時、空気読めなかったんです（笑）。たとえば猪木さんがアラン・ゴエスやイズマイウに「プロレスにはこんな技があるんだぞ。なあ、サイモン」（猪木ボイスで）とか言いながらグリグリやると、ガイジンは「さすがマスターです!」と崇めるわけですよ。でも、ボクの場合はことごとく裏技を跳ね返して、スパーリングが30分ぐらいに長引いてしまったんです。

変態一同　ガハハハハ!

中邑　で、自分も空気が読めないから「早くギブアップしてくださいよ」と思いながら攻め込んだんですよね。猪木さんの腕を取って、これ以上曲げたら壊れちゃうくらいに。でも、猪木さんはギブアップしないから次の展開にいく。……40分ぐらいして、やっと気づいたんですよ、「これはこっちがギブアップしないと終わらないじゃん!?」って（笑）。

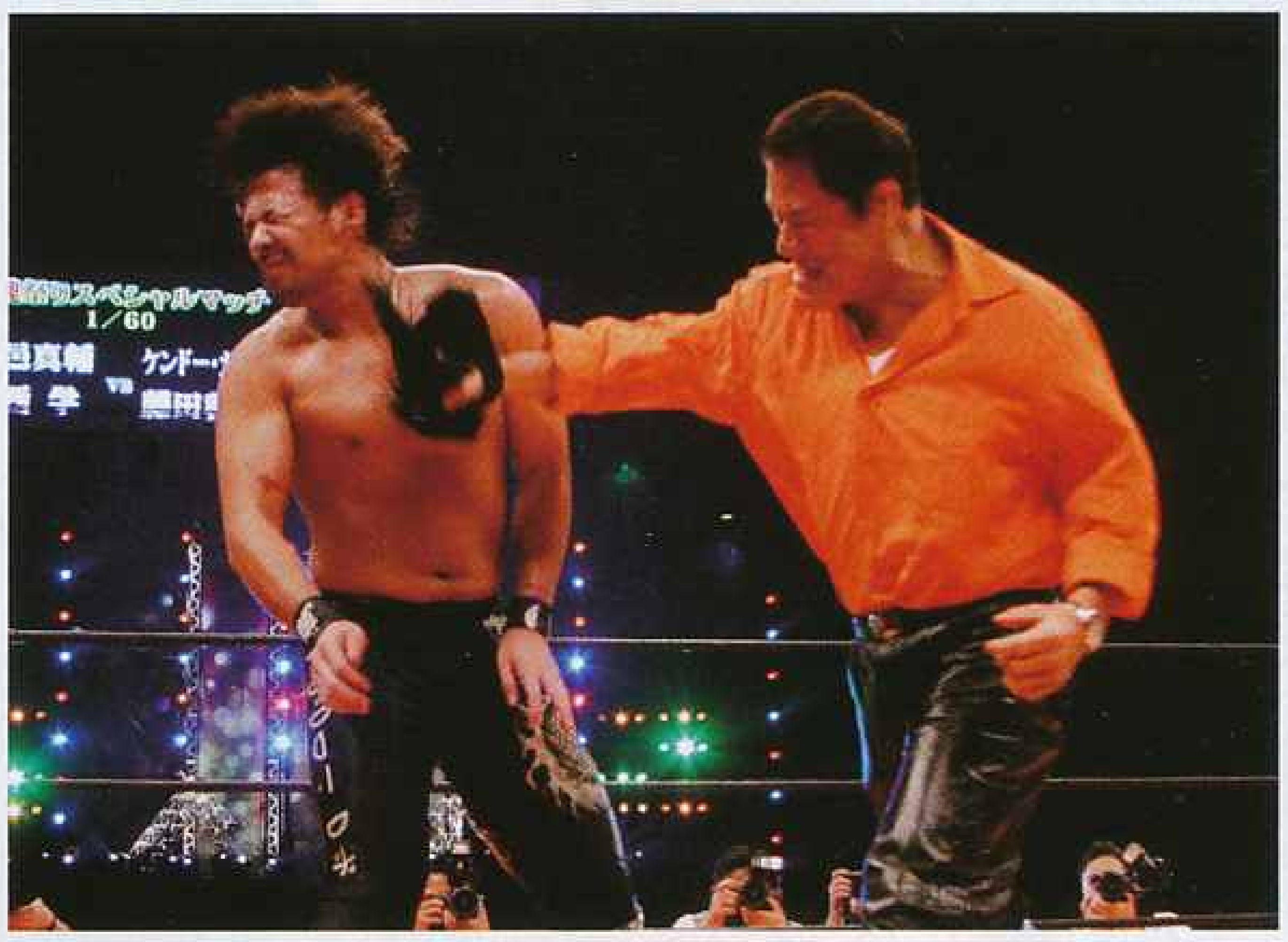
変態一同　ガハハハハ!

中邑　アキレス腱固めでボクがギブアップして。そうしたら猪木さん、髪の毛をグッチャグチャにしながらボソリと言ったんです。「…………………中邑、やるじゃねえかっ!」って（笑）。

変態一同　ガハハハハハハハ!

中邑　髪の毛をグッチャグチャにしながら、シャワーに行きましたけど（笑）。

猪木さんはダブルジョイントです。ホントに関節が極まらないんですよね


アントンから意味不明な鉄拳制裁を食らったこともある中邑（タオルを巻いての制裁に本気度が見える）。それでもアントンLOVEを絶やさないのは、やはりアントンの上流地帯を肌で感じたからに違いない。ダー!!



プロレスはリアルなものもありますし かといってエンタメも失なうわけでもない

井上　でも、ボクは逆にビックリしたんだけど、あの歳になっても猪木さんはガチガチにできるんだ。猪木さんのほうこそやるじゃねえかっ!!（笑）。

中邑　そこは猪木さん、凄いと思いますよ。これ、おもしろおかしく言ってますけど、もの凄い技術を持ってますよ。

ガンツ　グレイシー柔術を通ったわけでもないのに。

中邑　よく猪木さんは、ダブルジョイントで関節が極まらないっていう話が……。

井上　（さえぎって）いままさにその質問をしようと思ったんですっ！

タコ　変態好みの話やなあ。

中邑　スパーして思ったのは、ホントに極まらないなって思いましたね。

井上　猪木、ボンバイエ!!（笑）。

タコ　中邑選手、オレらを気持ちよくしようとして大げさに言ってない？（笑）。

井上　こらこら！　ルスカだって猪木さんを極められなかったんですよ？

中邑　だから普通の人だと極まるところよりも、あと何センチが可動範囲があるっていう。俗に言う『猿手』っていうやつですか。それは本当だったと思いますし、猪木さんってもの凄く身体が柔らかいんですよ。股関節が非常に動くから、アキレス腱を取ろうが、ヒールを取ろうが、わかりやすく極端に言えば、ヒールなんかはどれだけ絞り上げても極まらない。

井上　へえ～、嬉しいなあ！（笑）。

タコ　こらこら、確実にメロメロになっとるやないか！　それにしても中邑選手、さすが元プロレスファンだけあって、変態が喜ぶツボをわきまえていらっしゃる（笑）。

中邑　いやいや、これは事実です。猪木さんは脚の180度開脚をいまだにやってますからね。トレーニング場でも柔軟しかしないんですけど、ずっと「中邑、柔軟をしろ」って繰り返し言ってたのは、そういう意味があったんだなって思いますね。

タコ　「この人、若いとき強かったんやろな」って思いました？

中邑　思いましたね。手脚が長くて、ムチャクチャ、バランスがいいんで。



なかむら・しんすけ■1980年2月24日、京都府出身。02年8月29日、安田忠夫戦でプロデビュー。MMA、そして変態座談会にも打って出るプロレスラー。本誌変態メンバーをすっかり手のひらで転がしたのでした!!　188cm、103kg

井上　もっと猪木さんのことを話してくださいっ！

中邑　いいですよ（笑）。あるとき「中邑、ディスカバリーチャンネルの『アニマルプラネット』を観てるか？」って言われて。

井上　猪木さんはあれが大好きなんですよね。

中邑　ボクはいまでもちゃんと観てますからね。豹やピューマの動きを参考にしろという意味だと思うんですけど、ボクは「ミーアキャット、かわいいなあ！」と思いながら観てて（笑）。で、あれって一話でだいたい一回は交尾のシーンが出てくるんですよ。

井上　ボクも猪木さんから聞いたことあります。「象の交尾はハンパじゃねえぞ！」って。「いまのレスラーも象の交尾ぐらいスゲエことやってみろ！」って（笑）。

中邑　そういう猪木さんなりのたとえが『アニマルプラネット』にたどり着いたんでしょうね。「こういうときはこうしろ」っていうことじゃなくて「お客さんには伝わる闘いはどうすればいいのか？」と。だから猪木さんは初めて試合する選手とでもプロレスの試合にしてしまえたんだろうなと思いますね。プロレスを格闘技としてとらえてるからこその説明だと思います。

タコ　それをどうわかりやすくするかということで、別物としてるわけではない。

中邑　だからプロレスと格闘技が一緒だっていうのは凄く哲学的な話で、それこそプロレスマスコミと格闘技マスコミの血で血を洗う悪口の言い合いにファンも巻き込まれてしまった感じでしたけど。ボクは単純な話だったと思いますよ。格闘技としてプロレスを見れば、もっとリアルに入ってきますし、実際、リアルなものもありますし。かといってエンターテインメントも失なうわけではない。だからプロレスはおもしろいと思いますし。逆にプロレスとして格闘技を見ると、もっとおもしろく見れるわけじゃないですか。『kamipro』なんてまさしくプロレス的な視点で格闘技を見てるわけだから、猪木さんの言ってることも間違いじゃなかったなあと思いますね。で、90年代のプロレスはどこ行ったんですか（笑）。

ガンツ　今日は完全に中邑先生による変態授業になっちゃいましたね（笑）。

井上　いやあ～、大喜びで聞き入ってしまいました（笑）。

タコ　中邑選手があと10センチ身長が低かったら、確実に『kamipro』に入社してる（笑）。

中邑　ボク、身長を伸ばすためにウェートをやりませんでしたからね。

タコ　エリートやなあ。

中邑　エリートだったら、こんな努力しないでしょ（笑）。

井上　いまのは「変態のエリート」っていう意味です（笑）。オレらは新日本に入れないもん。

タコ　ふざけてると思われたらイヤですけど、ボクらはやっぱり新日本に入りたかったんですよ。ま、ライガーが出てきて、身長が足りなかったという言い訳は通用しなくなりましたけど。

ガンツ　中邑選手は、ボクら変態の代表として潜入調査をしてるみたいなもんですからね。中邑選手は変態じゃなくて変態スパイです！

タコ　じゃあ結論は「中邑真輔は変態スパイだった」ということで（笑）。

中邑　どのみち変態はつくんですか（笑）。

【09年3月変態吉日／新日本プロレスにて収録】

×西村修



破壊王ゲノム炸裂！花の同期生対談!!

超スンドコ伝説の原点はコレだ!!

07年7月発売の『紙の破壊王』続編（小社刊）で、天山は破壊王以外にも先輩・小原道由の壮絶イジメ話などを告白。だが、西村は天山自身が問題三昧、と新人時代の爆笑ズンドコ話を続々披露！　今回はその真相を当事者に直撃！

天山広吉

超ズンドコ

ヤングライオン伝説!!

前回の『kamipro Special』の恐妻伝説も大好評!! 絶賛療養中だが、破壊王的な“どプロレス”を一番感じさせる天山と、天山の新人時代の珍エピソードを誰よりも知る新日本プロレス“同期生”西村修が再会! 天山のポンコツ車話など新エピソードも発掘!! まさにネタの上流地帯から超ズンドコ話をお届け!!

聞き手／真下義之　撮影／乾晋也　写真協力／西村修

――今日は花の新日本プロレス同期生対談ということでよろしくお願いします。

西村　よろしく！　目（網膜剥離）のほうはもう大丈夫なの？

天山　ええ。だいぶよくなりました。そろそろ復帰しないと嫁もうるさいんで……。

――ワハハハハ！　じつは以前、天山さんに新弟子の頃の話を聞いたあと、西村さんに聞いたら「天山は情報操作してる」と。

天山　ハハハハハハハ！

西村　勝手に自分に都合のいい事実を作りますから（笑）。

――で、今日はあらためて新弟子時代のズンドコ話を聞けたらな、と。

天山　この人、なんでも知ってますもん。よく覚えてるから始末が悪いんですよ！

西村　昨日のことは覚えてないんですけどね（笑）。

――最初の出会いは新日本のレスラー養成所、新日本プロレス学校ですよね。

西村　実質、かぶってたのは3カ月ぐらいだと思います。自分はオープン当時からで、彼が入ってきたのは後半ですから。

――天山さんは友だちと二人で練習に来てたからホモ疑惑があったとか。

西村　いや、ホモ疑惑どころか……。

天山　アホ疑惑ね（笑）。

西村　疑惑じゃないよ（笑）。疑惑って疑わしいことでしょ？　疑惑じゃなくてアホだから！（キッパリ）。

――そんなにヒドかったですか（笑）。天山さんはいろんなところで言ってますけど、新日本プロレス学校で「西やん」「山ちゃん」の仲だったのに天山さんが新日本に入ったあと二日で辞めて、しばらくして出戻ったときには西村さんの態度が豹変していた、と。

西村　違いますよ！　新日本プロレス学校では「西やん」「山ちゃん」の呼び名はないですから。

――そこから間違ってましたか（笑）。

天山　でも、ホントにイジメられてたんですよ、西村さんには……。

西村　イジメじゃなく、とにかくミスが多すぎなんです！　常人じゃ考えられないミスをするんですから。初めてですよ、雨の日にビショビショになりながら水をまいてる人を見たのは……。

――ワハハハハ！　もはや伝説のエピソードですね。

西村　それに一回寝ると絶対起きない！　ホント睡眠薬でも摂ってんじゃないかってぐらい。油断すると15～16時間寝ちゃうでしょ。

――はぁ～。でも、さすがに朝は起きるんですよね。

西村　起きませんよ！

――朝も起きないんですか（笑）。

西村　起きても、2分とかでチャッチャッと掃除を終わらせてまた寝ちゃう。

天山　そんなことないですよ～。

西村　でも、普段は絶対に起きないのに、一カ月に一度くらい朝パッチリ起きるときがあって……要は風呂マニアなんです。

――え？　風呂マニア？

西村　下半身の処理。つまり泡風呂です！（キッパリ）。

――ワハハハハ！　泡のほうのマニア。

西村　早朝から川崎まで電話するために起きるんです。当時はまだ携帯はないから道場の裏の公衆電話に行くんですけど、早朝6時の予約開始直後にバッと起きて、ビャーッと走ってね。

天山　一人もの凄い金星がいてねぇ……。

――金星の予約時間を死守するためなら早起きは可能、と（笑）。

天山　6時ちょっとでもすぎたら、予約がいっぱいになるんですよ！

西村　だから、みんなで奪い合いですよ、その公衆電話を（笑）。だって、道場周辺は公衆電話が一カ所しかないんですもん。

天山　さすがに道場の電話でバレたらヤバいですし（笑）。

――話を戻すと、そんな天山さんは入門たった二日で逃げ出したんですよね。その原因は初日に橋本さんに、死んだネコを埋葬させられたことだとか。

天山　そう。橋本さんの車のエンジンにネコが引っかかってるのを、帰るときに橋本さんが見つけて、「なんとかしろ！」と。こっちは入門したばかりだから「こんなことさせられんの？」って。で、橋本さんが書いた「南無阿弥陀仏」って札を持って、新人と自分で多摩川で埋葬したんですけど。「こんな世界でやっていけるのか」と。

西村　死骸を段ボール箱に入れて、川に流したってこと？

天山　いや、埋めたんじゃないかな？　でも、触るのイヤじゃないですか、血まみれのネコなんて！

西村　天山は動物が大っ嫌いなんですよ。

――当時、ワカって道場犬がいましたけど、ワカの世話はしなかったんですか？

天山　いや、無理矢理やらされましたね。でも同じ部屋の三澤（威・現トレーナー）さんは犬好きでもの凄いかわいがってたんですよ。ベッドで一緒に寝てたりしてるんですけど、こっちは犬嫌いだから「なんじゃ、この人？　大丈夫か？」って。

――犬好きにもほどがある、と。

天山　しまいにどっちが犬かわかんないくらい顔が似てきて（笑）。で、かわいがってるクセに三澤さんは絶対風呂に入れなくて、「おまえやれ」って言われて洗うんだ



天山はライガーさんのコネで凄いボロ車を買わされまして（笑）

橋のど真ん中で車が止まったりJAFの人も毎日呼んじゃって（笑）



× 西村修

けど、キャンキャンキャン叫んで、こっちは「ギャ〜！」「じっとしろ！」と。

——風呂場で犬と大暴れ（笑）。

天山　こっちが嫌いだから、犬もわかるんでしょうね。シャンプーも買ってゴシゴシして。でも犬なんて毎日洗うことないじゃないですか？

——毎日は洗いすぎですよ！

天山　でも、三澤さんや橋本さんは「臭くなるから毎日洗え！」と。内心「犬なんて普通は臭いじゃんか！」と思いつつ（笑）。

西村　ワカといえば道場の改装で、道場の壁を小林邦昭さんとミスター高橋さんがペンキを塗っていたときにペンキが余ったんですよ。そこで、（獣神サンダー・）ライガーさんが「天山を連れてこい！」と。そこで天山は身体中に塗られたんですよ、真っ白のペンキを（笑）。

——ワハハハハ！　山海塾（舞踏集団）みたいに（笑）。

西村　写真持ってくればよかったな……。

——あるんですか！

西村　そのへんは全部ありますよ。（西村の提供で16ページに一挙掲載！）。しかも、天山に日本酒を一升飲ませたから、ベロベロで。で、まだペンキが余ってたからワカにも塗っちゃって。そっちは黒いペンキでトラ柄みたいにしちゃって（笑）。

——毎日洗ってるのにペンキを（笑）。完全に動物虐待です。

西村　で、白い人間とトラ柄の犬が完成したんですけど「そのまま散歩に行ってこい！」と。で、多摩川沿いを一緒に散歩しちゃって。

天山　ええ。多摩川沿いを引きずり回されまして（笑）。

西村　その時点で天山はグチャグチャに酔っぱらってるわけです。しかも油性だから、いくら洗ってもペンキが取れない。そのあと疲れたのか部屋の2段ベッドでずーっと寝てたんです。そこでまたライガーさんがイタズラして。あのサロメチールってあるじゃないですか？

——ええ。筋肉の痛み止めですよね。

西村　あれを熟睡してる天山のポコ◯ンにビャーッと塗ってね（笑）。

——ワハハハハハ！

西村　で「ギャーーーッ！」って一度目を覚ますんですけど、あんまり騒いだもんで2段ベッドの底が「ドーンッ！」と抜け落ちたんです。

天山　上にいっぱい荷物が入ってたからね（笑）。

西村　で、凄いのが天山はベッドが抜けてもまだ寝てるんですよ！　しかも1週間ぐらいそのまんま、部屋の中グチャグチャで生活してるんだから、狂ってますよ！

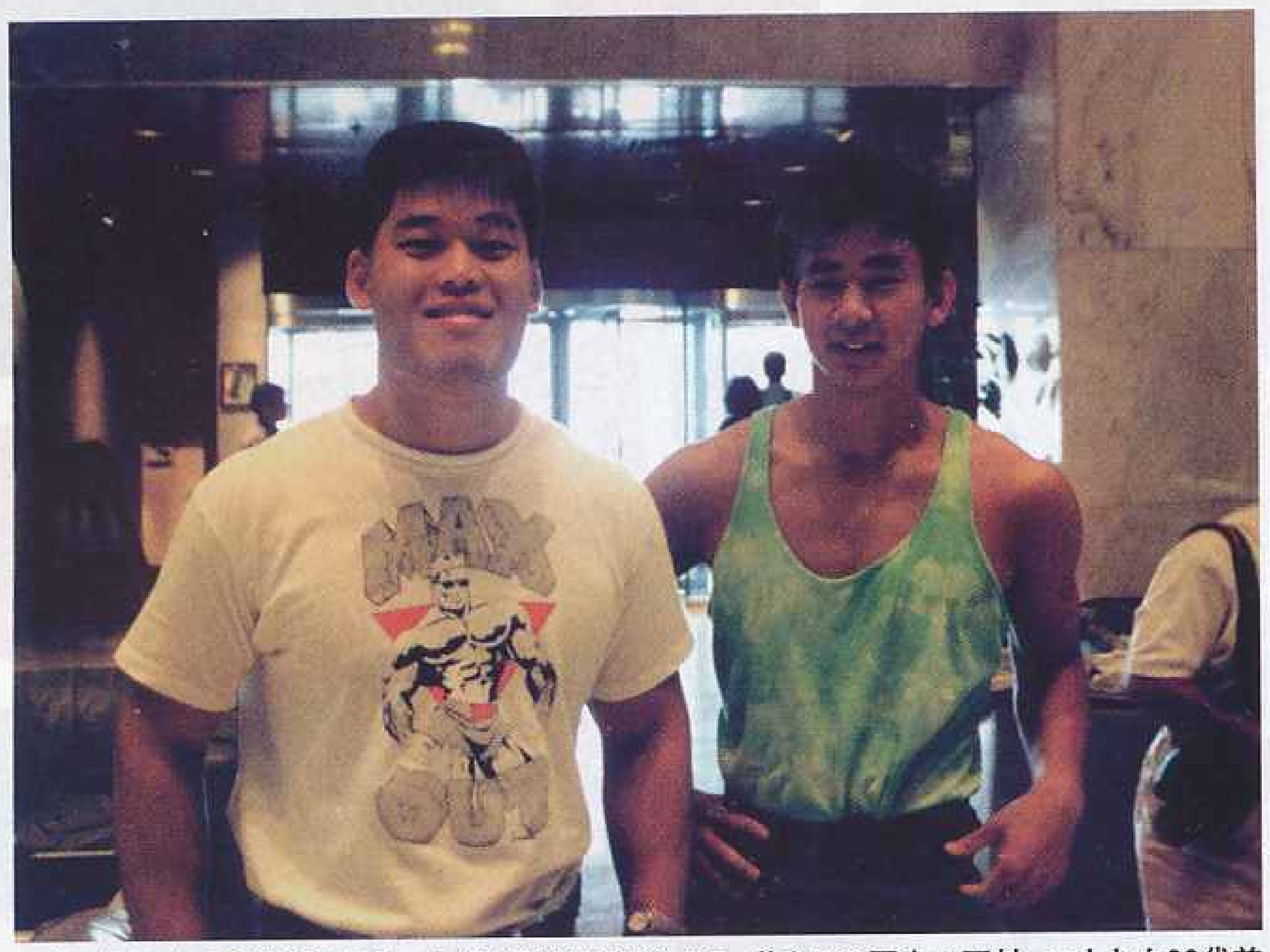
天山　ワハハハハハハ！　でもね、自分はミスが多かったとは思いますけど理不尽なことはいっぱいありましたから！　とくに小原（道由）さんはバリバリ体育会系の国士舘（大学）出身で。ホンマ目の敵じゃないですけど、徹底的にイジメるんですよ。練習以外でも雑用をガンガンやらされて。西村さんとは、あとで仲よくなるんですけど、最初は小原さんと自分をイジメてたんですね。で、「あのやさしい西村さんはどこにいったんだ！」って。

西村　小原は同室で、妙にウマが合っちゃったんだよね（笑）。

——小原さんの話で一番凄いのが天山さんと西村さんが道場の居間でファミコンしてたら……。

天山　そう！　小原さんがダダダダッて階段を降りてきて、自分の後頭部にドロップキックしたんですよ！　西村さんいな

かったでしたっけ？
西村　いや～、そんなのはしょっちゅうだから（淡々と）。
――そのレベルで日常茶飯事（笑）。
西村　でも、いま考えても同期にあれだけシゴかれるって見たことないですね。全日本プロレスも含めて（笑）。で、次の年には小島（聡）が入って、今度は小島が小原の標的になってしょっちゅうブン殴られてましたよ。グーパンチで顔面を。
――日常的にグーパンチ（笑）。でも、大学出で上下関係に慣れていればともかく、10代で入ったら大変だったでしょうね。
西村　大学出の連中はやはり要領いいですよ。でも、我々は凄く要領が悪かった。
天山　ただ、西村さんはテキパキ仕事はこなしてたし、あまり問題はなかったと思うんですけど、自分はやることなすこと失敗の連続でしたから……。
西村　有名な話ですけど、ライガーさんがプラモデル作るとき「瞬間接着剤買ってこい」って言われて「わかりました！」って近所のスーパーにブワーッって走って『週刊新潮』買ってきちゃって（笑）。
――あと長州さんにガウンを着せろって意味で手を出したら……
天山　それ、橋本さんでもありましたよ。「ガウン着せろ」って手を出されたのに、自分も手を出してガッチリ握手しちゃって（笑）。「なに握手してんだ、コラ！」と。
――破壊王にもやってましたか（笑）。でも、当時の合宿所ってそんなに規律が厳しかったんですか？
西村　外泊は基本的に禁止、私用の無断外出も禁止。田舎に帰るのなんて、年間一、二回ですよ。
天山　でも、西村さんは車を持ってたから、外の仕事が多くて、うらやましかったですけど。
西村　ああ、車といえば天山の話はいろいろありますよ。
――ぜひお願いします！
西村　とにかく彼は車に対しての知識にうといんです。いまでも忘れないけど、日産のグロリア430の4ドア。それをライガーさんのコネで買ったんです、凄くボロい車を（笑）。で、ライガーさんは、私以外にもいろいろ雑用で使いたいという野望があって、「バレたら大変だから、ほかの人には言わないよ」って約束で、天山は多摩川沿いのガレージを車用に借りたんですよ。
天山　誰にも内緒でね（笑）。
西村　その車がとんでもないポンコツで、とにかく毎日バッテリー上がっちゃうんです。道場近くの二子橋の道路は片側一車線なんだけど、たまに大渋滞になるときがあったんです。当時、その渋滞の一番前の車はだいたい天山の車（笑）。



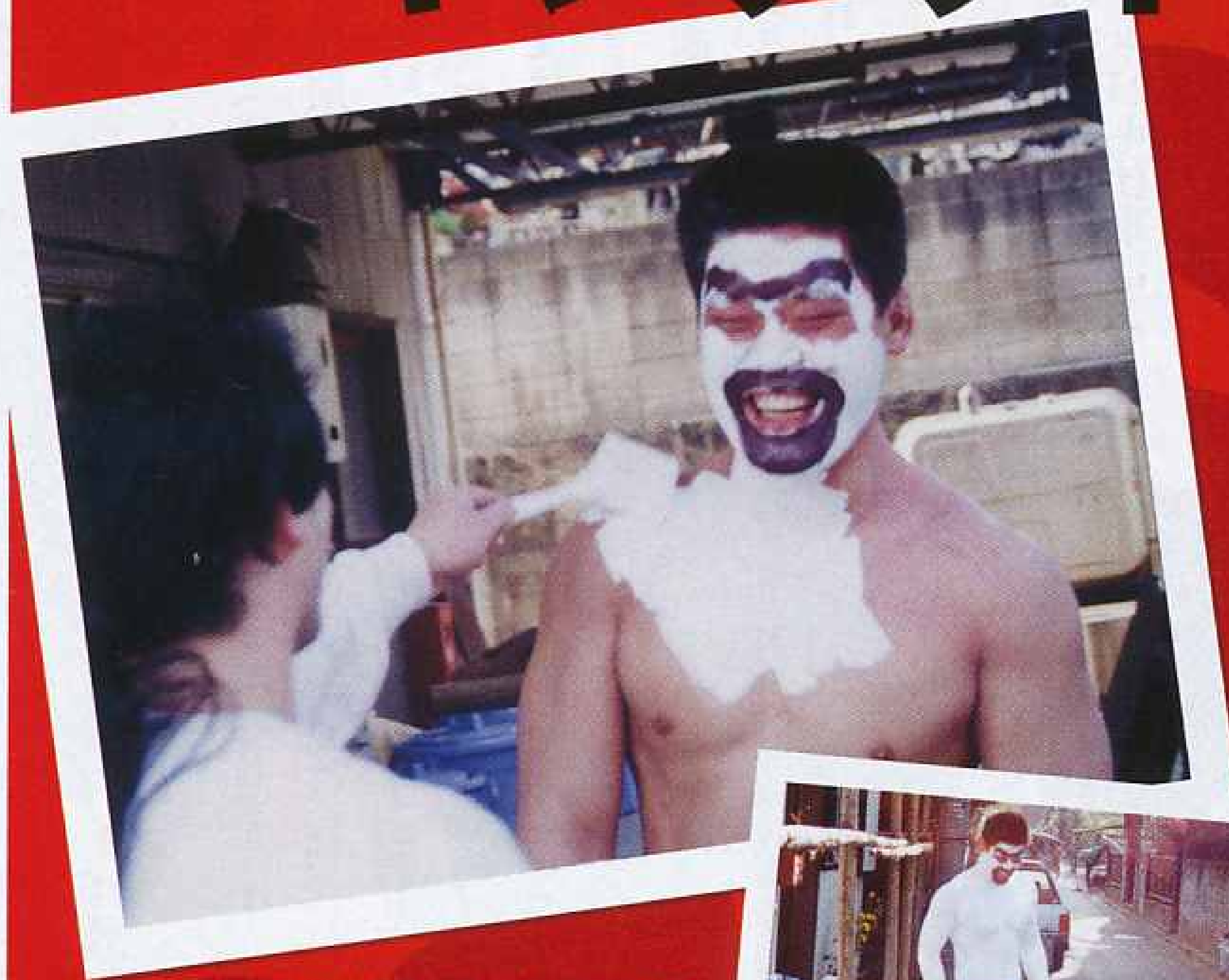
92年、新日本の香港遠征のフォト（提供は西村修）から、若き日の天山＆西村。二人とも20代前半。じつに利発そうな西村と茶目っ気たっぷり＆迂闊そうな天山は変わっていないといえばまったく変わっていない、ナイスなツーショットだ。

天山広吉 ×

――ワハハハハハ！
天山　真ん中で止まっちゃうんですよ。橋のど真ん中で！　それでブーブーブーブー鳴らされるんですけど。「鳴らされても動かねぇよ！」って。で、とりあえず横に停めて、まずはJAFですよね。
西村　というか毎日がJAFなんです（笑）。
――ワハハハハハ！
天山　で、JAFの人に「あれ？　昨日もじゃなかったっけ？」と言われて（笑）。「もう乗り換えたほうがいいよ。バッテリー替えても一緒だから！」とか言われつつ、また次の日も呼んじゃったりして。
――ウハハハハハ！
西村　バッテリーだけじゃなく、車全体が全部ダメだから。ワイパーもおかしくなって、晴れてるのに常にワイパーが動いてるんです（笑）。で、止め方もわかんないから動いているあいだにサッと手を入れて、ティッシュで瞬間的に窓を拭いたり（笑）。
天山　メチャクチャ危ないですよ！　それにバッテリー交換して、ガソリンスタンドで「もう大丈夫」って言われても、そのまま走ったら、だいたい二つ目ぐらいの信号で「プシュプシュ、プシューッ……」って止まるんですよ。「何これ！」と思って、一回エンジン切ったら完全にかからなくなっちゃって（笑）。
西村　あと、橋本さんにバレないように天山はその車に乗るときは常にヤンキースの帽子を被ってて（笑）。
――非常に怪しいですね（笑）。でもライガーさんと西村さんしか知らなかった？
西村　あと三澤さんぐらい。橋本さんにバレたら、御用使いの私みたいになっちゃうから。
天山　じつは一回橋本さんの車ともすれ違ったことあるんですよ（笑）。「うわ～！」と思って下を向いたらバレなかったけど。
――ヤンキース帽効果で（笑）。
西村　あと、その車のトランクを開けたら傘が30本ぐらいと斧があったんですよ。
天山　斧は入ってましたねぇ、あとは長靴と。
――それ……人殺しとかしてたんじゃないですか？　大丈夫ですか？（笑）。
天山　自分は開け方がわかんなかったんでトランクも西村さんが開けたんです。開けた瞬間、「なんじゃこら！」って。
――傘がいっぱいで（笑）。
西村　傘だらけ（笑）。たぶん土木の関連の人が持ってたんじゃないですか。
天山　怪しかったですねぇ。でも内緒で乗ってるから、自分は挙動不審気味で。一回ライガーさんに「買物に行ってくれ」と言われて車庫から出たときに確認しないで出たらドカーン！　ってほかの車とブツかっちゃって。
――それ大丈夫だったんですか？
天山　ダメですね（笑）。完全に車がエグれちゃったけど、修理に出さないで乗ってました。ワイパーも動かなくなって。ついにクラクションまで鳴らなくなっちゃって。しょうがないから、何かあると自分で手をこうクルクル窓を開けて……。
――ダハハハハハハハハ！
西村　クラクションがないから、窓を開けて天山が「ピーーーッ！」とか言ってるんですよ（笑）。
天山　自由が丘でも窓をクルクル開けて、普通に「プップーーー！」って（笑）。
――ワハハハハハハハ！
天山　街中が「はぁ？」みたいな（笑）。女

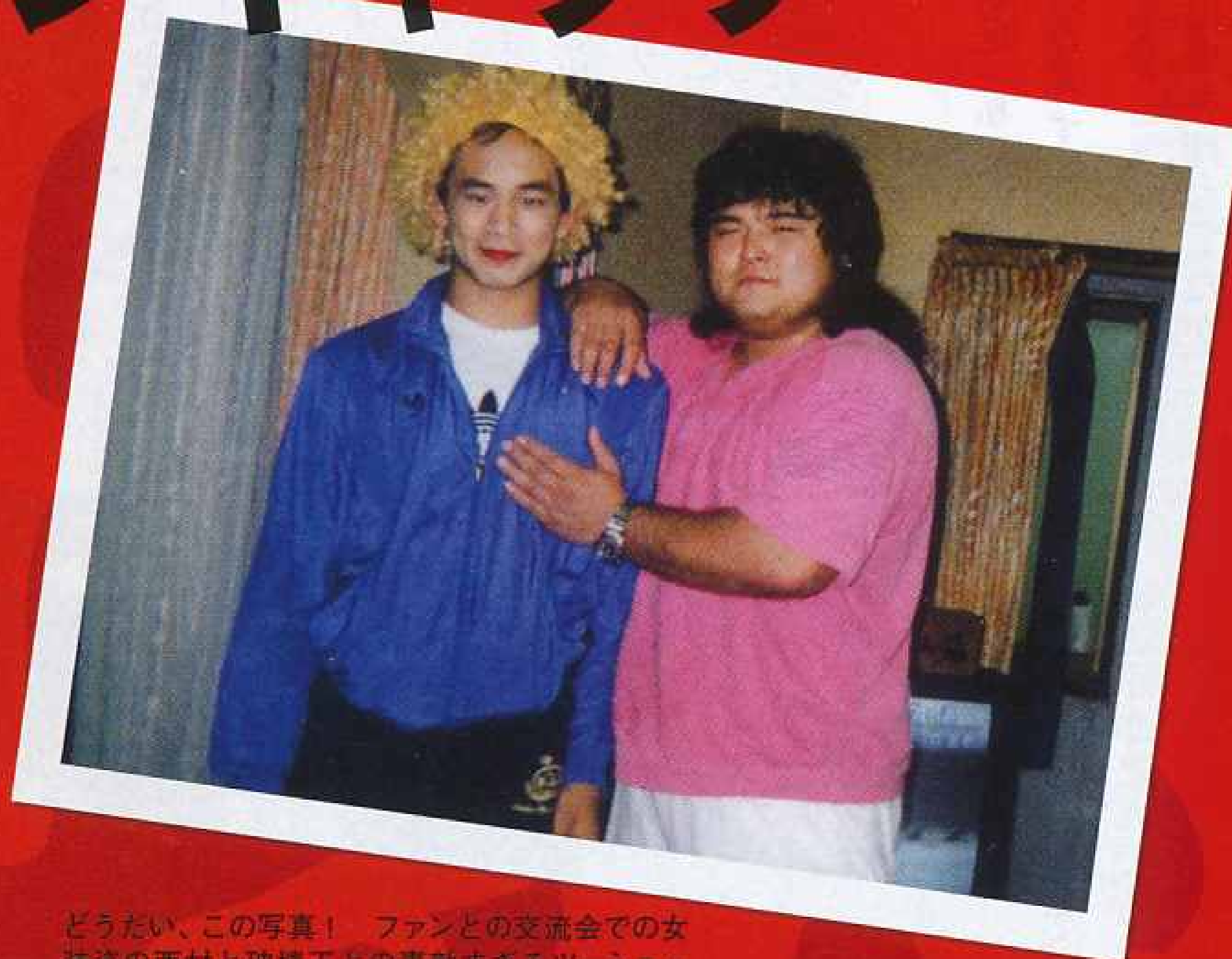
西村修提供!!

超ズンドコ ヤングライオンギャラリー





本文で西村が言及していた、天山白塗り写真がコレ！　ライガーにペンキを塗られる天山はなぜか喜色満面！　トラと化した道場犬ワカとの散歩写真も含め、当時の合宿所のクレイジーぶりがビンビン伝わってくる。

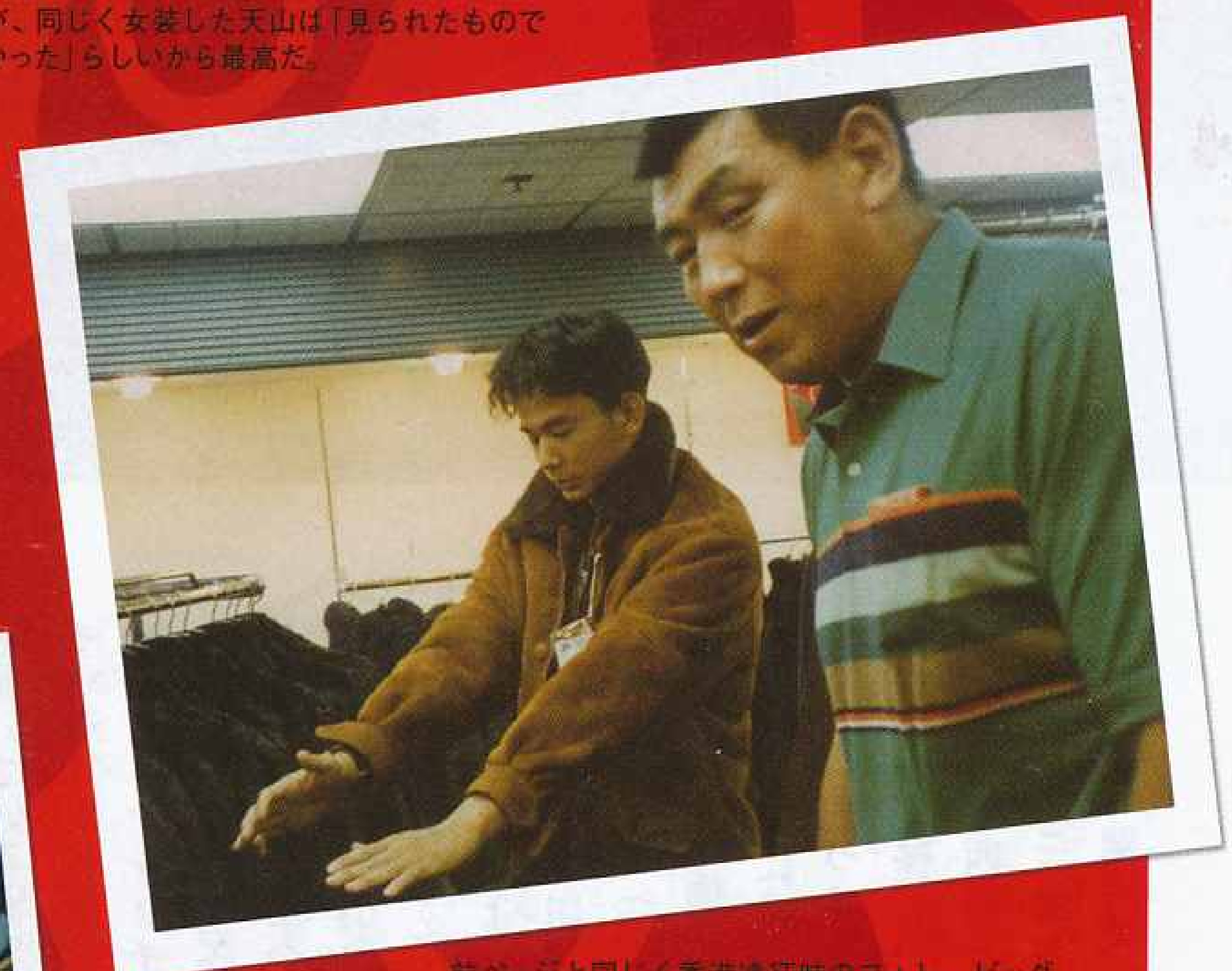


どうだい、この写真！　ファンとの交流会での女装姿の西村と破壊王との素敵すぎるツーショット。西村はなかなかの美麗っぷりで好評だったようだが、同じく女装した天山は「見られたものではなかった」らしいから最高だ。



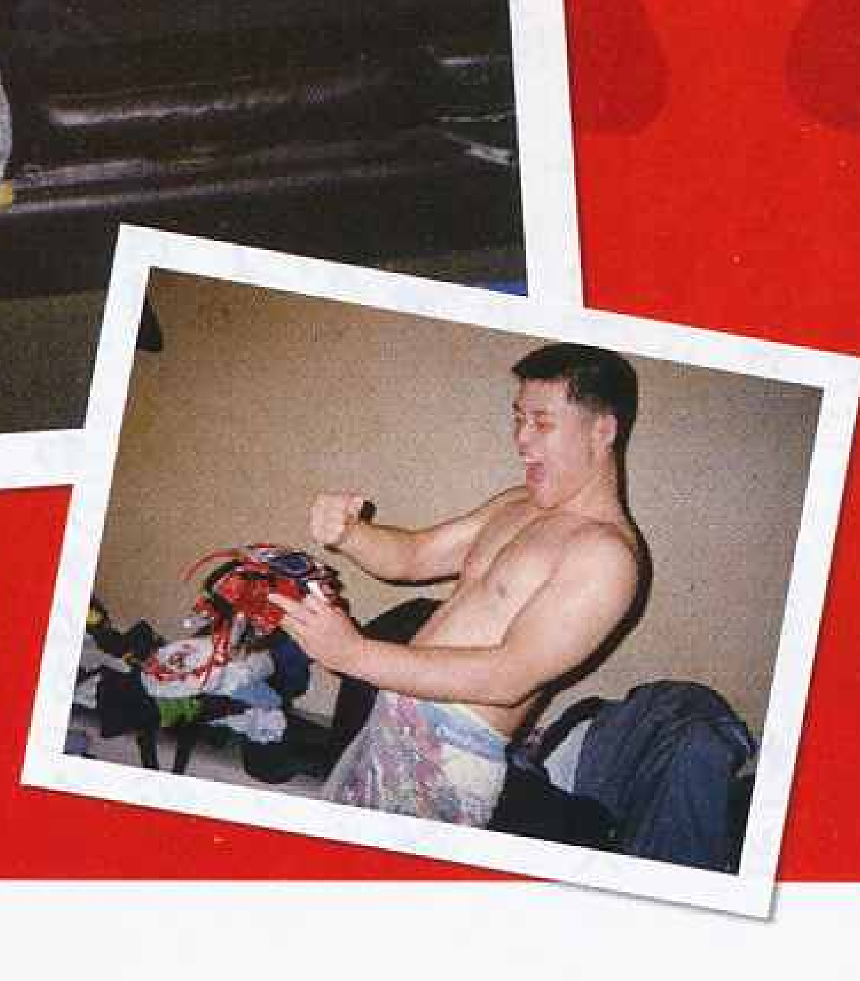


奇行は終わらない！　酒でベロベロ状態で白塗り＆散歩の試練を終え爆睡していた天山は、ライガーのボ◯チンサロメチール攻撃で騒ぎ立てて２段ベットを破壊!!　さらに爆睡＆この状態で何日も生活し続けたのだから最狂だ。

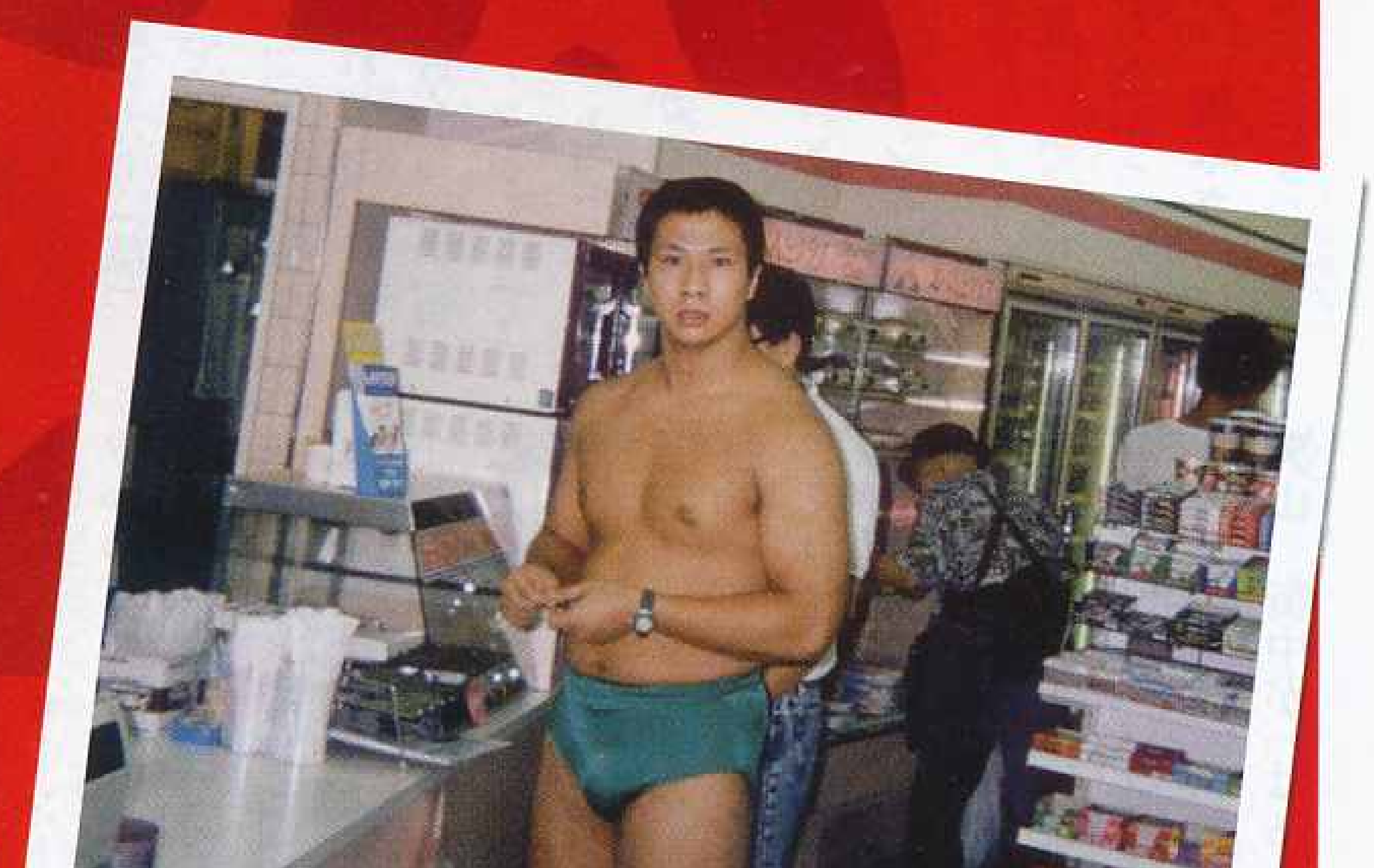


前ページと同じく香港遠征時のフォト。ビッグサカが連れていってくれた毛皮専門店でコートを物色する若き西村。ビッグサカが気前よくプレゼント！　と思いきや「自腹で買ってギャラが全部吹っ飛んだ」というからさすが。





合宿所での天山ノリノリショット。破壊王のヘビ皮ブーツの匂いに鼻をつまみ、ライガーの覆面にパンチ（このあと当然のように着用）するお調子者ぶりを見るにつけ、先輩にイジられるのは必然だったことが理解できる。



標的は天山だけじゃないって！　後輩・小島聡に試合用タイツ、ニーパッド、シューズ着用で周辺のコンビニ数店にお使いに行かせた伝説のイタズラ写真がおそらく本邦初公開!!　腕時計だけしているところがチャーミング。

天山広吉×西村修

子高生とかも「何？　いまの」みたいな顔されて。「プッププーって言っとるやん！　どけよホラ！」って感じで。

――クククククク！（涙を流して）。

天山　車も前が派手にヘコんでるからジロジロ見られるし。みんな「直せよ」って顔してるんです。

――いや～、凄い！　やっぱり天山さんは神がかってますね（笑）。

天山　クラクションは「直そうかな」と思ったけど、金銭的に余裕なかったし、「もういいや」って放置して。

――じゃあしばらく「プッププー！」でやってたんですか？

天山　ええ。よくあんな車で走ってましたね。最初っから事故車みたいな車で（笑）。

――いまなら普通に捕まりますよ！

天山　よく交通事故の写真とかでグシャグシャになってる車がありますよね？　あれが普通に走ってるんですもん（笑）。

西村　最後は道場の近所でスクラップにしたんだよね。

天山　しかも5万円もかかって（笑）。廃車代で「ハイ、5万円」って言うから「こっちがほしいよ！」と。

――凄いなぁ。あと、天山さんが破壊王の射撃したスズメの丸焼きを食べさせられたあと、目黒寄生虫館に行った話ってどこまでがホントなんですか？

西村　天山はホントに食べたんですよ。羽根をむしってスズメを焼いて。

天山　それからもうゲッソリと……。

西村　ドンドン痩せちゃって。で、ライガーさんは昆虫とかに詳しいから、「絶対、寄生虫がいるよ！」って力説されて。でも、電話しただけですよ。そしたら「ウチは、寄生虫館ですけど、そういうことは病院に行ってください」と（笑）。

天山　検査をしてるわけじゃないもんね。

西村　検査じゃなく研究が仕事ですから（笑）。ただ、その時期にずっと漢方薬飲んでたんじゃない？

天山　そうそう。なんでかかっていったら……恥ずかしながらその当時、○○になってたんですよ（笑）。

――ワハハハハハハ！

天山　病院行って治せばいいんですけど、外出できないから仕方なく漢方薬ばっかり飲んでて。けっこう利尿作用があるから。それも痩せた原因の一つでもあるのかなって（真剣な表情で）。

――絶対、それが原因ですよ！（笑）。

西村　あとさ、穴ぼこだらけのメガネかけたりしてたよね？

――あ、穴ぼこだらけのメガネ？

天山　よく覚えてますねぇ。自分は近視



ひさしぶりの新日本プロレス道場訪問となった西村修はリニューアルぶりに感心しきり。なんと西村の到着寸前まで、“天敵”長州力が練習しており、危険すぎるニアミス寸前！　取材陣は冷や汗ものだったのは言うまでもない。

だったんで、雑誌とかに出てる視力回復の〝近視が治るグッズ〟を通販で買ったんですよ。サングラスみたいなのに穴がバーッと開いてて、「それをかけてれば、だんだんよくなります」みたいな（笑）。あと付属の機械があって、それを目に当てていると超音波で治るって機械を買って使ってたんです。「ピーーーッ！」て音がするんですけど。

――ワハハハハハハハ！

天山　新日本入る前に買って、合宿所に持ってきてたんです。

西村　でも、昼は昼で雨の中水まいてるし、夜は夜で怪しいサングラスを部屋でかけて「ピーーッ」てやってんですから「絶対、頭イカれてるな」って（笑）。ホントにアホなのか、とぼけてるのかわからないんですよ！

天山　よく「わざとやってるだろ」って言われましたけど「わざとならもっとうまくやるよ！」って。

――逆に西村さんは比較的ヒドい目には遭ってないですか？

西村　いやいや、私のケースはもっと深刻ですね。よく手は出されましたよ、橋本さんにしろ、後藤（達俊）さんにしろ……。私は車を持っていたんで、みんなの送り迎えが多かったんですけど、あるとき橋本さんを新横浜の駅に送ったあと、合同練習があるから急いで道場に帰ったんです。で、一人だし気分もいいから、上のルーフを開けて、音楽もかけて運転してたんですけど、「ブルルッ」て橋本さんから車内電話が鳴ったんです。とっさに音楽を小さくしたけど声がよく聞こえなかったんですね。私はてっきり「何日後に駅に迎えに来い」ってことだと思ったんですが、最初の言葉が聞きとれなかったんです。

――外の音がうるさくて。

西村　でも、聞き直すこともできないから「わかりました！」と切ったんです。で、道場に帰って合同練習をしてたら、しばらくして「橋本さんが呼んでるぞ」って誰かが呼びに来たんです。で、部屋に入ったら……橋本さんがいるんですよ！

――うわ～。怖いですねぇ！

西村　……要はそのとき急に用事がなくなって目的地へ行かなくなったんです。つまり最初の電話は「いますぐ戻ってこい！」って電話だったんですよ。それでもうボコボコに殴られまして……。

――身の毛がよだつ失敗談ですね。

西村　あと大阪の巡業中で調子に乗って朝までファンの人たちと遊んじゃって、新幹線でうっかり寝ちゃったんです。……ま、寝てもいいとは思うんですけど（笑）。

――そうですよね（笑）。

西村　でも、橋本さんが様子を見に通ったときも寝ていて挨拶できなかったんですね。ただ、いけないのは、タクシーの中でもつい寝ちゃったんですよ。しかも横に橋本さんがいる一緒のときに！　で、合宿所に帰ってきて橋本さんに呼ばれまして、「気ぃ抜いてんじゃねえぞ！」とグッチャグチャにやられましたね……。

天山　橋本さんにはけっこうやられてま

クラクションが壊れた車の窓から天山が「ピーーッ！」って言ってて（笑）

したよね。

西村 ヘビ革のブーツでボコボコに蹴られまして。いまでも顔に傷が残ってます。そのときは生まれて初めて殺意を抱いて。3時間包丁を見つめて「この人が世の中からいなくなるんだったら、10年でも20年でも刑務所入ってもいい」と思うぐらいで……。同じようなことは、後藤さんにもやられましたけど。

——後藤さんの酒乱は有名ですが、イジメのイメージはあまりないですけど。

西村 いや、後藤さんは凄いです!

天山 あれはヒドいですよ!

西村 24時間体制での雑用はあたりまえ。「迎えに来い」「○○まで送れ」「飯作れ」。そこはしょうがないけど、「コンビニでアレ買ってこい」とか、注文が細かいんです。

天山 自分も一度「○○借りてこい」って言われて行ったんですけど……。○○ものが好きなんですよ。

——ワハハハハハ!

天山 「そんなの借りるのイヤだな〜」と。ま、好きそうなヤツを適当に選んで。1000円かなんか預かって、おつりを適当に小銭で渡したら、「何円足りない!」と言われてグチャグチャにされましたね。「○○ものを借りさせられて、なんでそこまでやられなあかんねん!」と(笑)。

——踏んだり蹴ったりで(笑)。

西村 しかも道場には常に皆さんに便利な私の車があるじゃないですか? で、あるとき橋本さんが「オイ! 今日の夜、ちょっとおまえの車貸せ!」って言うんです。で、「すみません。明日の朝11時に後藤さんを迎えに行かなきゃいけないんです」と言っても「おお、その前に帰ってくるから!」って。……帰ってくるわけないんですよ!

——ワハハハハハハ!

西村 でも、私のミスになるわけで。後藤さんはタクシーで夕方頃にやってきて、私がブン殴られるわけです(笑)。さらに続きがあって、そのあと後藤さんが合宿所の居間でテレビを観てるんですけど、後藤さんが観てるドラマの裏番組でものまね番組をやってるんですね。で、橋本さんってものまね番組が大好きなんですが……。

——うわ〜。まさか!

西村 「それを録画しろ!」って言うんですよ! でも、いまのデッキみたいに簡単録画とか、便利な機能はないですし。それに後藤さんはドラマを真剣に観てるんですよ!

——ワハハハハハハ!

西村 朝、すっぽかしてるんでよけいにシンドいですよね。で、録画をするには、一度ものまね番組に変えてセットして、ドラマに戻さなきゃいけないんですけど……。

——CM中とかに「ちょっと失礼します!」って感じで(笑)。

西村 それをやった瞬間、うしろからガーンと蹴っ飛ばされて、顔が変形するくらいブン殴られましたから。

——一応、「こういう理由でやらせてください」と断るんですよね?

西村 言っても反応ないですね。でも、しょうがないんですよ……。我々は小島を含めてそうやって精神面が異常に鍛えられたのはありますから。そんな環境っていま絶対ないじゃないですか、24時間雑用体制で、昼寝もできず、何かあればグチャグチャに殴られて。

——西村さんは、当時は太れなくて悩んでいたようですが。

西村 そんな環境で太れるわけないんですよ! 常に神経使わなくちゃいけないから。じつは長州さんの迎えもすっぽかしたことあるんですけど。

——長州さんも!

西村 武藤さんの用、橋本さんの用、後藤さんの用といろんな仕事がきて、「あっ!」と思ったら。迎えを忘れてたんですよ。

——考えるだけで冷や汗が出ますね……。

天山 やっぱり「西村さんに言えばなんとかなる」ってみんな思ってて安心して頼めるんですよ。だから、みんな頼みすぎて混乱しちゃうんですね。

西村 ま、基本はタクシー代わりですよ。だから、基本的に道場の外の用係なんですよ。天山は中の係でね。それでも、そのぶん先輩方にはかわいがってもらいましたけどね。メシ連れてってもらったり、小遣いもらったり。

——そんな中、93年のヤングライオン杯の決勝がお二人だったんですが、西村さんは天山さんとやるのは感慨深かったですか?

西村 やはりプロレス学校のときからのことを全部思い出しましたね。

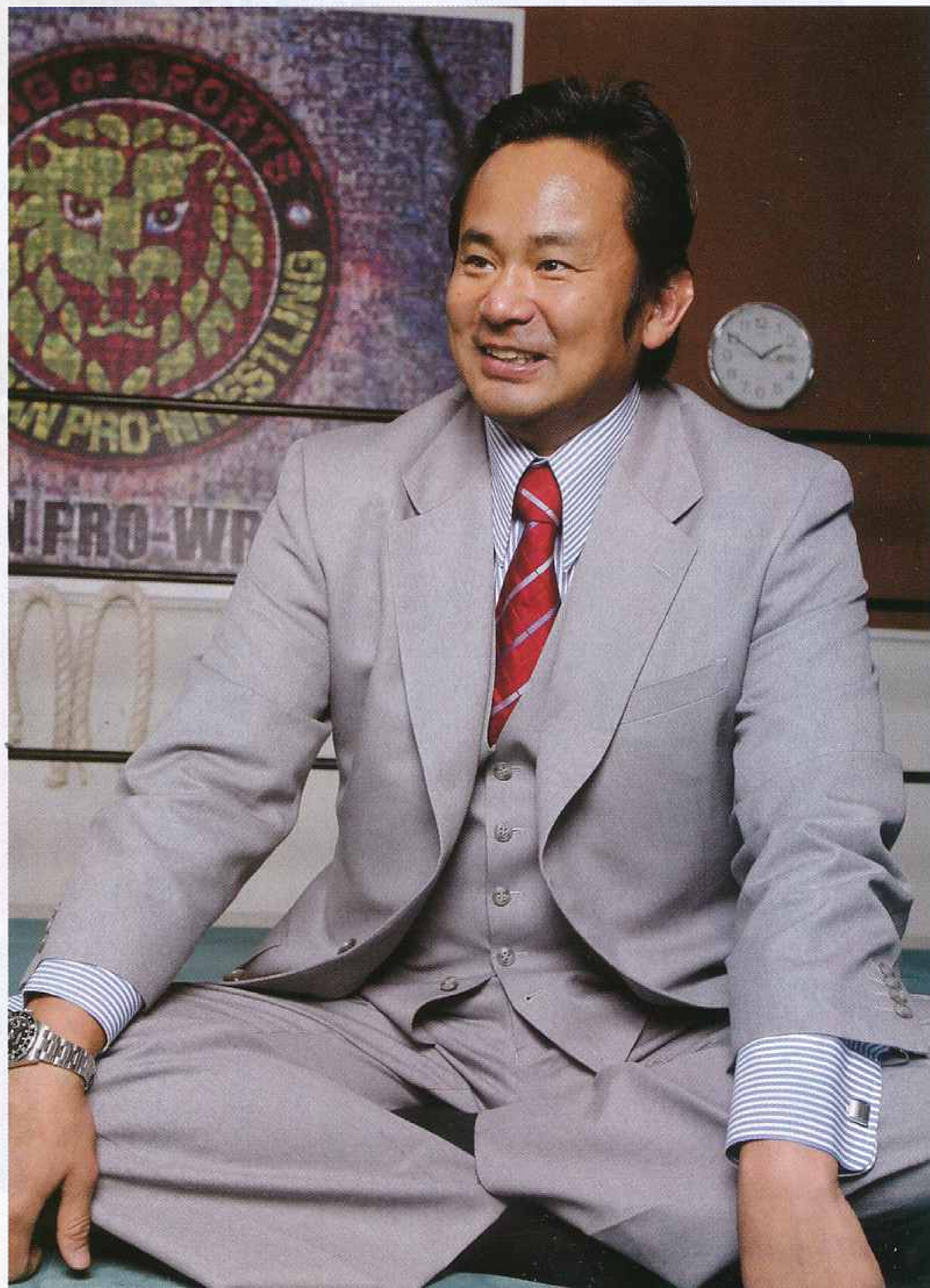
天山 ああいうツラい時代を乗り越えてきたうえでの決勝なんで。

——で、二人とも海外遠征に行くわけです

私の車はタクシー代わり、長州さんの迎えをすっぽかしたこともある

× 西村修

にしむら・おさむ■1971年9月23日生まれ、東京都出身。90年に新日本プロレス入門。一時はガンで長期欠場も見事に復活。06年1月に新日本退団後は無我ワールド・プロレスリングに参加も、07年10月に全日本プロレスに電撃移籍。クラシカルスタイルの求道者として絶賛活躍中。186cm、105kg。



あのときがあるから、いまがある……と思うしかないですよね（笑）

けど。やっぱり海外に出るまでが……。
西村　一番濃い時間でした。
天山　濃かったですねぇ。当時はイヤで仕方なかったですけど、あのときがあったからいまがある……と思うしかない（笑）。
――試合といえば、天山さんがムーンサルトで脳天から突っ込んだときの相手も西村さんでしたね。
西村　あったねぇ！
天山　あれはG1が明けた9月のシリーズの金沢で、G1のエクストラみたいな試合でね。会場も暑くて、バテバテの状態だったのに、なぜか自分から「延長戦やろう！」って言ったんですけど、その時点で具合悪かったんです（笑）。
――不調なのに無理矢理延長戦を。
天山　「オイ、決着つけようや！」って。でも、すでにフラフラ状態やったんですね。
西村　私もフラフラだったんですよ。じつは前の日に海外から帰ったばっかりのバッドコンディションでしたから。そんな中で、天山はムーンサルトで脳天から突っ込んだんですよ！
天山　でも、西村さんは俺が突っ込んだあとも、冷静にそのままスピニングトーホールドにいったあと、4の字にいきましたから（笑）。
西村　ハハハハハハ！
――そこはあくまでも冷静に（笑）。
天山　そこはあわててよ！　どう考えても突っ込んだ時点でストップでしょ？
――結局、4の字でギブアップして。
天山　その前にとっくにギブアップしてたんですけどね（笑）。
西村　で、控室戻ったら、「アァァァーッ！　アァァー！」って凄い声でうなってるんですよ。馳（浩）さんの事故のときと同じ状態です。
――一時心肺停止状態になった馳さんと同じくらい危険な状態。
西村　馳さんの場合、目がイッてて。そのときも私が救急車を電話したんですけど、それに似た状態で関係者はみんなパニックですよね。
――「ホントに死ぬんじゃないか？」って。
西村　で、救急車が来ても、押さえつけて乗せるのが大変で、みんなに暴力を振るおうとするんですよ。それを強引に押さえつけて……あとは聞いた話ですけど病院でもレントゲンのためにMRIに入るときに凄い暴れたらしいですよ。
天山　「ウワアァアァ！」って暴れたみたいで。なんか知らないけど「焼かれる！」と思って（笑）。
――ワハハハハ！　「棺桶に入れられる！」みたいな感じで。
天山　完全にパニクって暴れちゃって。で、落ち着いて冷静になって、検査してもらったんですけど。
西村　強い注射を打たれたらしいですよ。で、終わったあとに看護婦さんの笑顔を見て、いきなり電話番号聞いたらしいです。
――ワハハハハハ！
天山　ウソ！　それはないって！
西村　ホントだよ。三澤さんから聞いたもん。
天山　ウソ～～ッ！
西村　目を開けたらいきなり、「電話番号教えて～」って（笑）。
――非常にいいオチをいただいた感じがしますので、今回はこのへんで（笑）。
西村　そう？　いや、まだまだ全然話し足りないですよ！
天山　まだいっぱいありますもんね。ま、出せないことも多いけど（笑）。
――では、続編ができることを祈っております！　ありがとうございました！

【09年3月5日／都内・新日本プロレス道場にて収録】

天山広吉 ×



てんざん・ひろよし■1971年3月23日、京都府京都市生まれ。90年に新日本プロレスに入門。G1クライマックスを3度制覇、IWGPヘビー級王座は4度戴冠。08年は"天山劇場"で再ブレイクも、年末に網膜剥離で緊急入院。現在は復帰を目指して自宅で絶賛療養中。183cm、115kg。

天山復活までしばし待て!
新日本プロレス4月度スケジュール

Resolution '09
4月5日(日) 東京・両国国技館 17:00開始

Circuit 2009 NEW JAPAN BRAVE
4月11日(土) 静岡・ツインメッセ静岡 18:00開始
4月18日(土) 三重・桑名市体育館 18:00開始
4月19日(日) 和歌山・岩出市立市民総合体育館 16:00開始
4月21日(火) 大阪・大阪府立体育会館第二競技場 19:00開始
4月22日(水) 大阪・大阪府立体育会館第二競技場 19:00開始
4月24日(金) 山口・周南市総合スポーツセンター 18:30開始
4月27日(月) 長崎・長崎県立総合体育館 18:30開始
4月29日(水) 広島・広島産業会館西展示館 18:00開始
4月30日(木) 大分・大分イベントホール 18:30開始

お問い合わせ　新日本プロレス TEL.03-6407-3111

君の街にも西村がやってくる!
全日本プロレス4月度スケジュール

GAORA SPECIAL 2009チャンピオン・カーニバル
4月5日(日) 東京・後楽園ホール 18:30開始
4月7日(火) 新潟・ハイブ長岡 18:30開始
4月8日(水) 静岡・アクトシティ浜松 19:30開始
4月9日(木) 大阪・大阪府立体育会館第二競技場 18:30開始
4月11日(土) 三重・四日市オーストラリア記念館 18:30開始
4月12日(日) 東京・JCBホール 17:00開始

2009 GROWIN' UP
4月17日(金) 宮城・石巻市総合体育館 18:30開始
4月18日(土) 岩手・北上市和賀多目的催事場 18:00開始
4月19日(日) 群馬・藤岡市民ホール 16:00開始
4月22日(水) 三重・志摩市阿児アリーナ 18:30開始
4月24日(金) 香川・高松市総合体育館 18:30開始
4月25日(土) 広島・ふくやま産業交流館ビッグローズ 19:00開始
4月26日(日) 岡山・卸センター・オレンジホール 15:00開始
4月29日(水) 東京・後楽園ホール 12:00開始

お問い合わせ　全日本プロレス TEL.03-3288-0610

DRAGON GATE PRO-WRESTLING

に学びに来ました! 初級編

“プロレス不況”、アントニオ猪木、総合格闘技……etc.
ドラゴンゲートにとってのプロレスとはなんなのか!?

ゲーレスラーの プロレス観に迫る!!

ドラゴンゲートのスピードスター

吉野正人

前回のドラゲー企画、岡村社長インタビューに続き、今回はリング上で闘うプロレスラーから、好調の理由を探ってみた。登場していただいたのは、ドラゲーを象徴するレスラーの一人であるヨッシーノこと吉野正人。はたしてヨッシーノはどんなプロレス観を持っているのか!?

聞き手/松下ミワ　撮影/菊池茂夫　試合写真/平工幸雄、乾晋也

前回『kamipro Special 2009 APRIL』でドラゲーの好調の理由を探るべく、岡村社長にインタビューさせてもらったが、その経営スタイルの盤石さは圧巻! なので、今回はリング上の“盤石さ”を探るべく、ドラゲーレスラーでも絶大な人気を誇る吉野正人にインタビューを試みた。

その吉野だが、話を聞けば聞くほど本当にプロレスという“スポーツ”に真剣であり、ズバリ言って超優等生! プロレスラーにこんな真面目な人がいたなんて……。それまでレスラーといえばアントニオ猪木をはじめ、破壊王や天山広吉など、トンパチなわけのわからないイメージばかりがあったが、そこから考えると“異常なほど普通”なプロレス観の持ち主だ。

そういったレスラーたちが、好調なドラゲーを作り上げていることを考えると、これがいくつにも枝分かれしていったプロレスの一つの形態だということか。確かに吉野は猪木さんが全盛期をすぎた96年からプロレスを観始めたという。そんな世代に生まれたドラゲーレスラーのプロレス観を、以下のインタビューから読み取っていただきたいと思う。

――「ドラゲーに学ぼう!」企画第2弾! ということで、今回はドラゲーの象徴的レスラーの一人である吉野正人選手にお話をおうかがいしたいと思います。

吉野　よろしくお願いします!

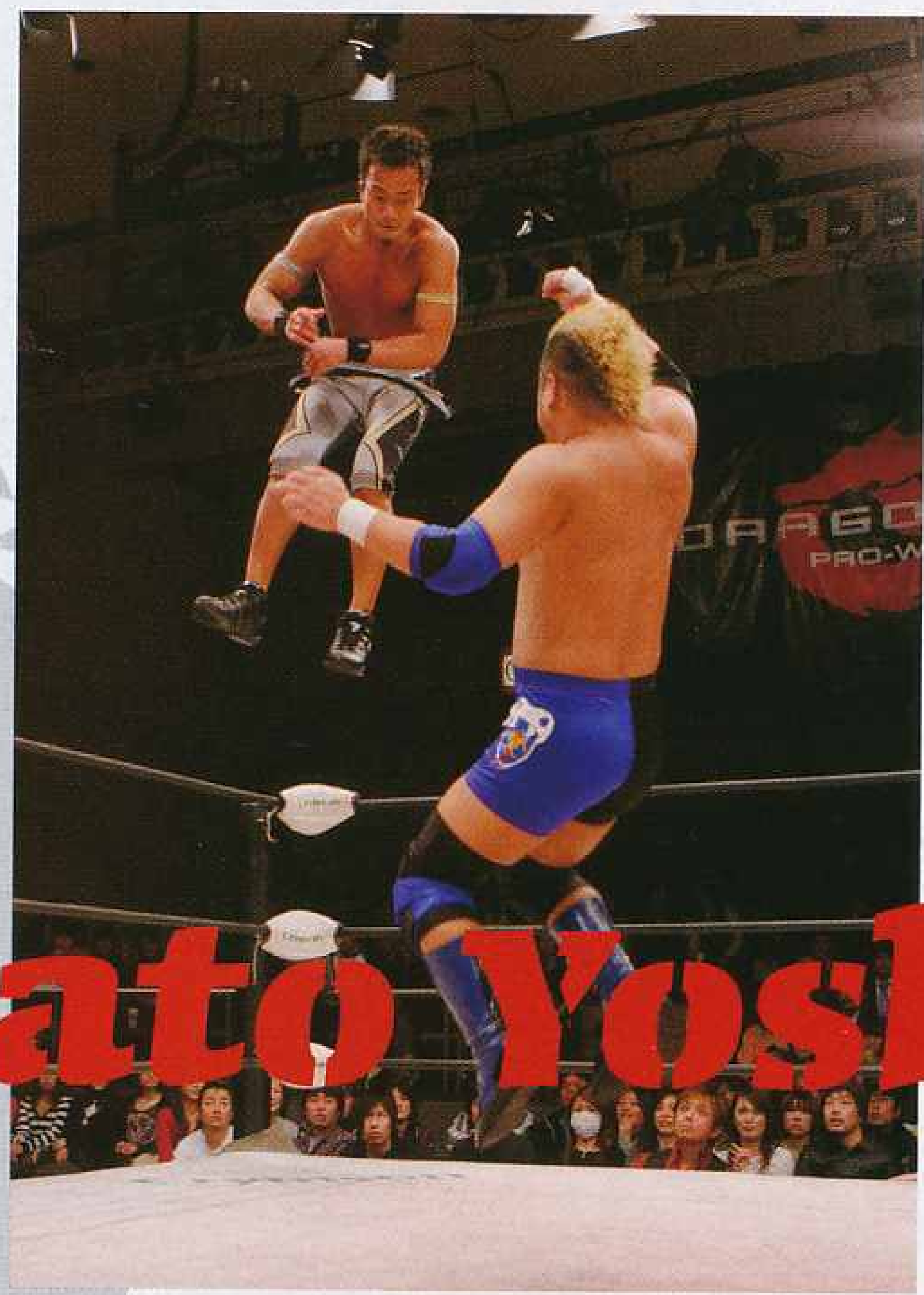
――先日、岡村社長にお話をおうかがいして、ドラゲーの好調の秘密をおうかがいしたんですが、一番衝撃的だったのが、『週刊プロレス』で「DRAGON GATEに学べ!」というコピーが表紙の号が発売されたときにすぐミーティングをされたと



「言葉で伝えるのは難しいんですけど
プロレスの魅力ってあるんですよ」

ドラゲ

いうお話だったんですよ！
吉野　ああ、ありましたねえ。
――ここまで好調なのに凄い気の張りようだなと思ったんですけど、選手としてあの号が出たときはどう思われました？
吉野　うーん、佐久間（『週刊プロレス』編集長）さん、凄いこと書くなあっていう感じですかね。「なんてこと書いてるんや」と思いましたよ、ホンマ（笑）。ま、単純にありがたいと思いましたけど。ただ、社長の言うように嬉しい反面、それに浮かれることなくいままでどおりの自分らのスタイルを貫いていかないといけないなとは感じました。
――評価されてなお襟を正すということですね。でも、やっぱり嬉しいし誇りに思う部分もありますよね？
吉野　誇り……（首をかしげて）。いや、誇りに思うってことはないですねえ。
――ないんですか!?（笑）。
吉野　社長もよく「初心、進化、継続」ということを言われてますけど、もう一度それを身に染みて感じたというのが本音ですよ。『週プロ』さんの表紙になった件はあくまでも外の評価であって、自分たちは自分たちの道を行かないといけないですから。じゃあ、いまお客さんが入ってるから何もしないというわけにはいかないんで、入ってるときこそ何かしないといけないことってあると思うんですよ。
――はー。話を聞けば聞くほど、ドラゲーは組織としてしっかりしてますね。
吉野　そうですか？　でも、そのへんは社長がやってることなので（笑）。
――しかし、いまのプロレス業界というのは、たとえば老舗の専門誌だった『週刊ゴング』が休刊になったり、他団体ですけどノアのテレビ中継がなくなったりとか、ちょっと寂しい現状があるんですが、プレイヤーから見てプロレス界の現状についてはどう捉えてます？
吉野　まあ、昔観てた人たちが離れていってるというのは現実だと思いますね。知り合いの方でも「昔はよくプロレスを観てたんだけどね」という声が多いですよ。「昔は」という言葉が絶対につきますから。でもそこに関して自分たちは、本当にブレることなく、自分たちのスタイルを貫き通してきたということじゃないですか。
――でも、いつも満員御礼のドラゲーの選手にとって〝不況〟を感じる部分ってそんなにないんじゃないですか。
吉野　いや、やっぱりありますよ。選手もリング外で動いてる部分がありますからね。それを、じゃあ選手も何もせずにリングでただ試合だけをしてればいいかというと、そういう考えではきっといまみたいな感じでは続かないと思ってます。
――その会社としての努力が実を結んでいる、と。


“スピードスター”というニックネームが示すとおり、技の速さで観客を圧倒する吉野。空中殺法など、動きが激しいドラゲーの中でもトップを走るレスラーである。

Masato Yoshino

ウチの選手の7～8割は、日焼けサロンに行ってると思うんですよ

吉野　ただ、ウチに関していえば女性のお客さんが多いじゃないですか。いままでプロレスというのは男の人が観るようなイメージが強かったですけど、そこを女の人でも楽しく会場に来れるというのがウチの良さでもあるのかなって。新しいファンを取り込めてるのかなとは思ってますけどね。
――吉野さん自身、選手として新しいファンを取り込むことに関してはどう思われますか？　岡村社長は選手自身も自己プロデュースというか、自分自身を磨く努力を惜しまないとおっしゃってたんですよ。
吉野　ああ、それはありますね。本当にそのリングを降りたときのファッション一つにしてもそうですし、ウチの選手の7～8割は日焼けサロンに行ってると思うんですよね。
――7～8割が日焼けサロン！
吉野　やっぱりボクらは観られる商売じゃないですか。そこは見た目に磨きをかけるというのは大事にしてますから。
――たとえばB×Bハルク選手とかって、女性ファンを見るとジャニーズ級の騒ぎ具合ですもんね。
吉野　キャーキャー言われてますねえ。
――そんなふうに選手一人一人が「この層に向かって球を投げたい」とか、そういう戦略まで立てたりもしてるのかなって。
吉野　僕自身、どの層に球を投げたいってことはないですね。本当に小さいお子さんから年配の方まで楽しめるようなプロレスを目指してます。ただ強いて言えば、自分はやっぱり技のスピード、初めて観た人でも速くて凄いなという、そういうのを投げかけないといけないとは思ってますね。選手個人個人が初めて観る人に何を投げかけるかという。それで勉強になったのが、04年と05年にフジテレビがやってた『お台場冒険王』の「お台場毎日プロレス」なんですよ。
――ああ、『お台場冒険王』にはドラゲーも参加してましたね。ただでさえ興行数が多いのに、あの時期は毎日毎日試合があって。
吉野　もう毎日プロレスですよ！　でも、あれは勉強になりましたね。もちろんいつも会場に来て応援してくれる方も観に来てたんですけど、やっぱりああいうところに行ったらプロレスを観に来てる人ばかりじゃないじゃないですか。
――どちらかというと『お台場冒険王』のようなイベントが目的ですよね。夏休みで小さいお子さんたちが多いでしょうし。
吉野　実際「プロレスやってるんやったら観てみようかな」ぐらいの感覚で観てる人が多かったと思うんですよ。でも、そういうところでいかに観客を惹きつけるかというのを勉強させられましたね。
――それを機に、ドラゲーのイベントの中で変わった部分もありますか？

吉野　いまもずっと続けてますけど、試合開始前に〝プロレス講座〟というのをやってるんですよ。

――プロレス講座⁉

吉野　はい。初めて観る人にもわかるように、簡単なルール説明があったり、応援の仕方を教えたり、リングアナの菊池さんがされてるんですけどね。そういう部分で少し変わっていった部分はありますね。

――なるほどぉ。そういう吉野さんがプロレスにハマったのも、そんなに古い話じゃないとうかがいました。

吉野　ええ。自分がハマったのは96年からですね。ちょうど、猪木さんとビッグバン・ベイダーの試合を観たのがきっかけですね。

――それまでは観てなかったんですか？

吉野　自分、ずっと野球をやっててプロレスにはまったく興味がなかったんですよ。ただ父親がプロレス好きで、新日本さんの『ワールドプロレスリング』の試合とかを観てたんですよね。夕飯を食べるときとかいつもそのチャンネルがついてたんで、観ようとしなくても目に入ってきてたんです。で、たまたまパッと観た猪木さんとベイダー選手の試合が衝撃的で一気にハマったんですね。「あ、プロレスってこんなにおもしろいんや」って。

――具体的にどういう部分にその試合の凄さを感じたんですか？

吉野　やっぱり一番は、もの凄く体格差があったんですね、猪木さんとベイダー選手では。でも、その体格差をあまり感じさせないような猪木さんの強さ、そこに凄さを感じたんですよ。そっからはもう、雑誌も買うようになりましたし、毎週録画したりして、おもいっきりハマりましたね。で、その時期って僕自身、ちょうど野球をあきらめた時期だったんですよ。

闘龍門&ドラゲーの吉野正人プチ解説



ドラゴンゲートの中軽量級トップの象徴であるオープン・ザ・ブレイブゲートのベルトを作ったのも吉野である。05年に創設し、自らも何度となくそのベルトを巻いている。



ミラノ・コレクションA.T.に誘われ、03年にイタリアンコネクションに所属することとなった吉野。当時のリングネームはイタリアふうの「YOSSINO（ヨッシーノ）」である。



00年9月にメキシコにてプロデビューした吉野。当時は長髪にご覧のような出で立ちでコーナーに上がって雄叫びをあげるという「ターザン」をモチーフにしたキャラクターだったのだ。注＝あっちのターザンじゃありません。

――じゃあ、野球と入れ替わるようにしてプロレスが入ってきたんですね。でも、当時から観る側ではなく、リングに上がりたいと思ってたんですか？

吉野　いや、やっぱり自分の身体のサイズではプロになれると思ってなかったですね。でも、そういう時期にちょうどドラゴンゲートの前身である闘龍門ができたんですよ。その闘龍門が身長、体重の制限がない、そしてスタイル的にも軽量級だったんで、もうやるとしたらこのスタイルしかないだろうな、と。どんだけ好きでプロレスやりたくても、規定で落とされたらどうしようもないですから。

――ちなみに、その当時は他団体はどんな制限があったんですか？

吉野　身長180センチ以上、体重80キロ以上みたいな。でも、身長なんてどう頑張っても伸びないんでね（笑）。

――プロレスが好きになるきっかけが猪木さんだった吉野さんにとって、はじめ闘龍門のスタイルはどう思いました？

吉野　最初はやっぱり異次元のプロレスだなというのが印象だったんですけどね。ただ、きっかけは猪木さんのヘビー級の試合でしたけど、だんだん鍛えていって自分でやりたいなと思ってたときは、重量級の試合よりはジュニアの試合が好きだったんですよね。で、そのときに闘龍門できて、あそこはみんな軽量級だったわけで、そこで引かれる部分はありましたよ。

――本当に自分がやるんだったら、ドラゲーのスタイルが一番フィットしている、と。

吉野　でも、はたして闘龍門でもホントにデビューできるかどうかってわからないじゃないですか。もちろん「プロになってやる！」という気持ちはありますけど、運もあるわけですからね。自分だけで決められることではないんで。でも、これだけ自分のスタイルができたんで、ドラゲーで正解だったんだなと思いますね。

――プロレスラーになったいま、あらためて猪木さんについてはどう思います？

吉野　猪木さんですか⁉　まあ、自分が初めて観た試合以降はそんなに試合してないと思うんですよね。だから昔の映像とかで観ますけど、凄いお客さんが絶叫して

体格差を感じさせない猪木さんの強さに、凄さを感じたんですよね



周囲の反対を押し切って闘龍門に駆け込んだという吉野。2年間のメキシコ修行を経てメキシコでプロデビュー。写真はメキシコシティの中心部ソカロという街にあるラテンアメリカ最大の教会を背景にした写真である。

プロレスと格闘技は別モンですから
プロレスって違うジャンルじゃないですか



Masato Yoshino

よしの・まさと■1980年7月17日、大阪府出身。00年伊藤透戦でデビュー。デビュー当時はターザンをモチーフにしたキャラクターで活躍し、その後T2Pメンバーの中核ユニット「イタリアンコネクション」の一員に。これを機にYOSSINOに改名。また、05年には中軽量級トップの象徴であるオープン・ザ・ブレイブゲートを設立し、幾度もベルトを巻いている。ROHに上がった際は「地球上で最も速いレスラー」と称されたほど、技の速さは他に類を見ない。172cm、75kg。

るじゃないですか。総立ちになって「ウオー!」って。そういうのを観ると、やっぱ凄い人だなと思いますね。

——猪木さんといえば、リング外での話題も豊富じゃないですか。タイガー・ジェット・シンの伊勢丹襲撃事件や、片や永久電機だったり、いまではTRIPLE—Pとラップを歌ってたりしますけど……。

吉野 (さえぎって)ラ、ラップ?

——ええ、IGFのリングとかでも一緒に歌ってるんですよ。

吉野 へえ~。知らんかった(笑)。まあ、自分は猪木さんにはお会いしてお話ししたことがないんで、どういう考えを持っておられるかというのはわからないんですけどね。でも、何か常に話題を提供する、お客さんを飽きさせないというのは素晴らしいいんじゃないですかね。

——なるほど。その猪木さんですが、古い話ですけど総合格闘技イベントと関わってたことでも話題を呼びました。プロレスが盛り上がってた90年代、ちょうど吉野さんがプロレスにハマっていった時期ですが、それと同時に総合格闘技が右肩上がりに人気が出てきたと思うんですよ。そういう総合格闘技についてはどう思いますか?

吉野 自分はテレビで観るぐらいですねえ。K—1とかテレビでやってるんで、放送してたら観るぐらいの感覚ですね。

——じゃあ、とくに意識する部分もないですか。

吉野 プロレスと格闘技は別モンですから。まあ、広い意味ではどちらも格闘技になるのかもしれないですけど、またプロレスって違うジャンルじゃないですか。

——ただ、日本の総合格闘技ってUWFから枝分かれしてできあがったというのもあると思うんですよ。

吉野 でも自分はプロレスを観だしたのがその頃なんで、あんまりUWFとかよく知らないんですよね。よく名前は聞きますよ、UWFインターとかもあるんでしょ? けど、生で観てなかったので正直わからないという感じです。プロレスを観始めたのが遅かったたですから。

——極端な話、格闘技って競技志向な一面があるじゃないですか。吉野さんはずっと野球をされてたということで、まさにスポーツとしての世界に没頭してたことがあると思うんですけど、その吉野さんが総合格闘技ではなくプロレスにハマったのは凄く不思議な点でもあるんですよね。競技志向の人ってそっちを選びがちという勝手な思い込みなんですけど。

吉野 うーん……。言葉で伝えるのは難しいんですけど、なんかこうプロレスの魅力ってあるんですよねえ(しみじみと)。それがどこなのかというと非常に難しいんですけど、なんでいまプロレスをやってて好きなのかなと考えたら、その「好き」という言葉以外に出てこないですね。

——単純に「好きだからやってるんだよ!」っていう(笑)。

吉野 そう。すべてひっくるめて好きなんですよね。マイクパフォーマンスにしても、試合にしても、プロレスの仕事に携わってることが好きなんです。

——プロレスをやってて一番嬉しいことってどんな瞬間ですか?

吉野 やっぱりリングに上がってるときじゃないですか。自分、このあいだまでケ

ガで欠場してたんですよね。やっぱりリングを離れて遠目にほかの選手が闘ってる姿とかを見ると、いかにリングに上がって試合できることが幸せかということを感じますね。ま、そんなに長い期間ではなかったんですけどね。でも、それでもケガしたときにできない歯がゆさというのがあるんですよね。

——年間でハンパなく試合してる吉野さんでも、まだ試合したいと思うんですか？

吉野　それだけできるということは幸せですよ。確かに身体はキツいですけどね（笑）。でも、まだ自分も30歳手前で身体も動きますんで、身体が動くかぎりは世界最先端のオリジナルのスタイルを見せたいなと思いますね。

——たとえば、他団体に参戦してみたいという欲もあったりします？

吉野　参戦したいというのはとくにないんですけど、いままで交流した団体もあったじゃないですか。年間の試合数が多いんで、他団体の方と絡むということはあんまりないんですけど、年に何回かそういうのもあるといい刺激にはなりますよね。

——ちょっと前ですが（獣神サンダー・）ライガーさんと一緒に試合されてましたし、ノアと絡んだこともありましたよね。

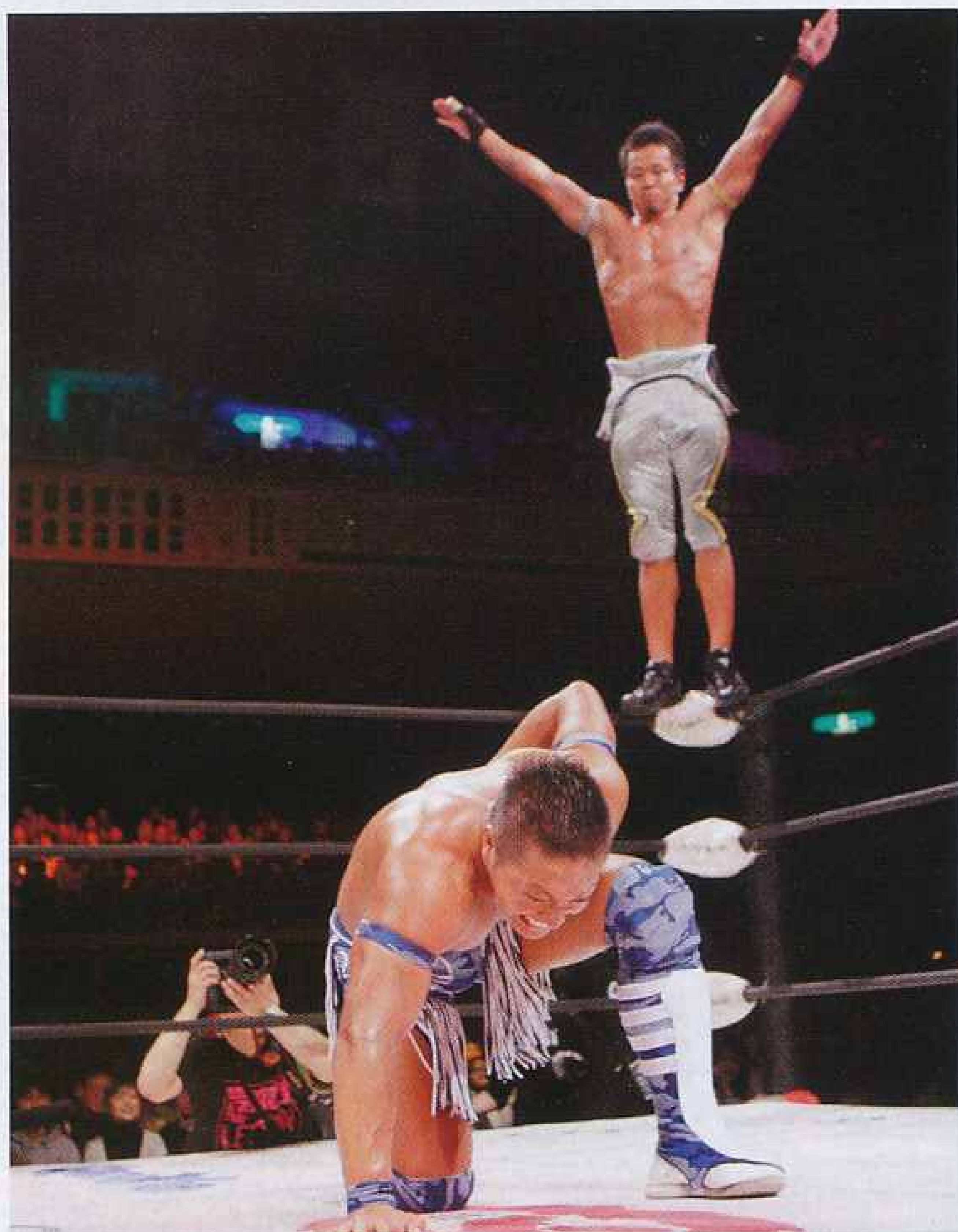
吉野　あとは海外も凄く好きなんですよ。最初、メキシコ修行に行ってた時期もありましたけど、いまはアメリカですよね。ロスとかハワイで自主興行をやりましたし、もっとこう、その海外にも打って出たいなという気持ちもありますね。とくにプロレスの本場であるアメリカには興味がありますよ。

——やっぱり日本と違いますか？

吉野　お客さんのノリは全然違いますね。やっぱりラテン系というか、すべてのことに反応して盛り上がってくれますよ。総立ちになって大喜びしますから（笑）。

——プロレス道を突き詰めていく中で、やっぱり意識する選手も海外の選手になります？

吉野　そうですねえ。いまは日本というよりはアメリカのほうですかねえ。凄いなと思ったのが試合の日の午前中とかにスーパースターたちが黙々とトレーニングしてるんですよ。



3.22ドラゲー両国大会では、ケガからの完全復帰をアピールしたいドラゲーの絶対的エースであるCIMAと、吉野が持つオープン・ザ・ブレイブゲートのベルトを懸けて闘い、吉野はフォール負けに。これからどうなるんだ、ヨッシーノ!

——試合当日にですか。

吉野　僕ら向こうに行ったときに足もないから「トレーニング場に連れてってほしい」ってお願いするんですけど、行ったらやっぱりそのスーパースターが朝8時ぐらいからやってるんです。本当にベテランの人なんですよ!?　でも、そういうレスラーがそれだけちゃんとコンディションを作ってる姿を見たんで、こっちも考えさせられることがありますよね。

自分がプロレスを楽しんでるからこそ観てるファンもついてきてくれる

——吉野さんが感動したのはそのプロレスに対する姿勢なんですね。

吉野　普段からそうしてることがリング上で表われるんじゃないですか？　お客さんを納得させられるパフォーマンスをできる。それには見えない陰の努力があると思うんですよね。

——しかし、ドラゲーの選手って、みんな吉野さんみたいに真面目なんですか？

吉野　ま、真面目ですか？　僕（笑）。でも、常に何か新しいことを考えてないとダメなんですよね。それだけプロレスが好きで、自分たちが楽しんでるからこそ観てるファンもついてきてくれるんだなというのは思いますしね。

——プロレスが嫌になったこととかないんですか？

吉野　やっぱ昔はキツいときはありましたよ（しみじみと）。メキシコ修行のときとかですかね。一番最初にメキシコでスパーリングしたときって、5分で顔が真っ青になったんですよ。

——たった5分で!?

吉野　なんでかというと、メキシコって高地にあるんで酸素が薄いんですよね。だからフラフラになったのを覚えてます。「こんなところで1年も2年もできへんわ！」って（笑）。この先どうやってすごそうかなというのは、その瞬間に思いましたね。

——じゃあ、メキシコ修行は地獄の2年間だったんですね。

吉野　しかもメキシコって治安がよくないんで危ないんですよ。「一人で出歩くな」というのはしょっちゅう言われましたし。だから、そんな一人で街を歩けないようなところにどうやって住もうって。自分ではなかったんですけど、周りの選手は「鉄砲を持った人が横を走って通りすぎた」とか、「血だらけの人がいた」とか、そんな話が飛び交う世界でしたから（笑）。

——でも、そこで生き抜いたことは逆に自信になりますよね。

吉野　まあ、そうですねえ。生きていくことが大変な世界ですからね。僕も「なんか因縁つけられたらどうしよう」とか思ってましたから（笑）。ま、辞めたくなるというようなことはなかったですけど、不安でいっぱいでしたね。でも、そこを乗り越えて、たとえばファンの人が自分の試合を観て「元気が出た」とか言ってくれるとサイコーなんですよね。

——プロレスやっててよかった、と。

吉野　ファンの人も仕事とか病気、ケガで悩んだりとかしてるわけじゃないですか。そこで、やっぱり人に勇気と感動を与えられてるんだなと思うとやってよかったなと思いますね。

【09年3月4日／都内・『kamipro』編集部にて収録】

3.22ドラゴンゲート初の両国国技館大会超満員札止め!!

プロレスの上流地帯はドラゲーにあった!

ドラゲー学 初級編

前回のプロレス特集号に続き、"プロレス初心者"の私・松下ミワが、ドラゲー"勝負の"両国大会に行ってまいりました!

文／松下ミワ　写真／平工幸雄

前回のプロレス特集号に続き、"プロレス初心者"の私・松下ミワが、ドラゲーは、観客も試合も想像以上に絶好調でありました。



オープン・ザ・ブレイブゲート王者となったCIMA。「オイ、両国！　これでCIMA完全復活や！」と"CIMAここにあり"のマイク響かせた。



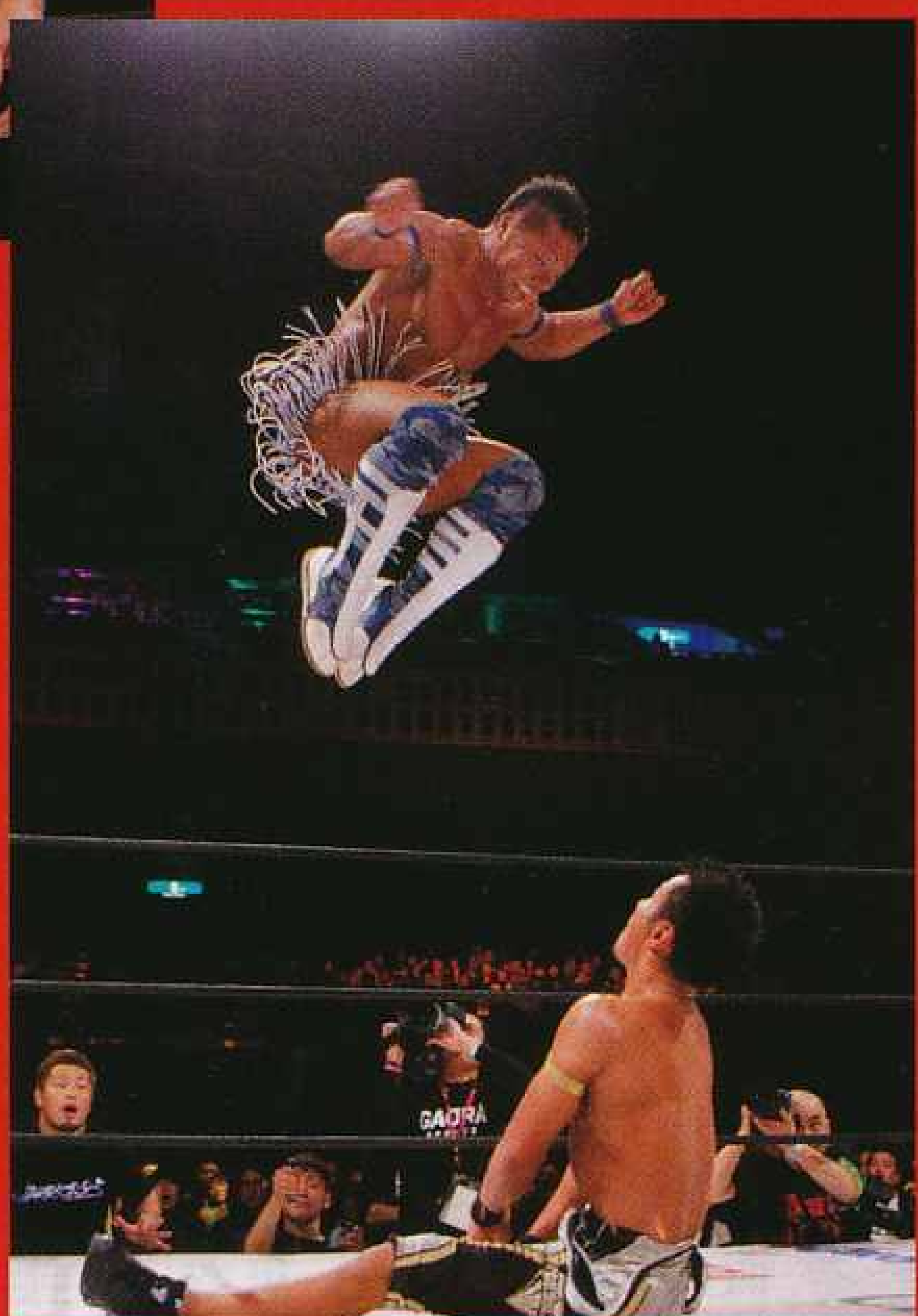
健介オフィス組vsドラゲー組の対戦となったこの一戦。中嶋くんはドラゲーの会場でも大人気だ。"アラフォー世代"の望月成晃らに果敢に向かっていき大歓声を浴びていた。



モニターのうしろの2階席を急きょ開放することとなった今回の両国国技館大会。もうそれだけで大成功の証である。



両国大会のメインを務めた土井成樹は感極まる表情で試合後もリング上にたたずんだ。舞台裏では「大仕事をやってのけたな」と金本に言葉をかけられていた。



ケガからの完全復活を証明したいCIMAを前に、吉野正人は無念の敗北。2度にわたって防衛していた中量級トップの象徴オープン・ザ・ブレイブゲートのベルトを明け渡すことに。



過去に2回負けた北斗晶に対戦要求した"ハリウッド"ストーカー市川だが、登場したのは旦那の佐々木健介。とんだサプライズマッチとなった！

超満員御礼、バンザーイ！

ドラゲーはやっぱり凄かった。初進出となった3・22両国国技館大会は、もう「まいりました！」と降参してしまうくらいの大盛況に。とにかく観客があふれんばかり。業界内でもドラゲーの好調さはおおいに叫ばれていたが、今回の両国大会はその評判を証明するものとなったから凄い！

あふれんばかりといえば、そもそもJR両国駅に着いた瞬間から、イヤでもそれは実感することとなる。というのも、両国国技館から始まる人の列が、その両国駅までつながっていたからである。私が両国駅に到着したのが試合開始の20分前ぐらいだったのだが、その時点でざっと見ても100メートルぐらいはあったんじゃないでしょうか。この日のドラゲーは、そのあたりから早くもただならぬ雰囲気が漂っていたのだ。

その列をたどるようにして館内に入っていくと……!?　会場では若干の違和感が。選手入場ゲートの真うしろの2階席が妙にまばらな客入りになっているのだ。外にあれだけ人があふれていたのに、そこのブロックだけは客がチラホラしか入っていないのは凄く不思議である。

しかし、大会終了後にベテランカメラマンの平工幸雄氏に事情を聞くと、なんと客が予想以上に来すぎて、急きょ暗幕を外してそこに観客を入れたということだった。そのぐらいこの日のドラゲーは盛況だったのだ。

以前、岡村隆志社長に話をうかがったときに、「条件が重ならないとビッグマッチはやらないし、できない。でもその条件は"重なる"のではなくて、"重ならす"んです」ということを言われていたが、その言葉を聞いていただけに、条件を見事に自ら

重ならせた今回の両国大会はホントに努力の賜物なのだろうと実感させられた。いまのご時世、プロレスでも格闘技でも、招待券を配ってもなかなか客が入らない場合もあるのに、1万1500人（主催者発表）の人を集めるには並々ならぬパワーが必要だったはずだ。

ただ、この両国大会までの道のりが穏やかに感じられたのは、ここが個人的嗜好に走りすぎる自由奔放な『kamipro』編集部［※『kamipro Special 2009 APRIL』ドラゲー特集参照］だからだろうか。というのも、この両国大会が誌面、ネット含め、そこまで大きな話題になったり、ガンガン煽られていたようには感じなかったからだ。……はっ！　もしかして、下流な『kamipro』が知らない〝上流地帯〟の誌面やネットでは大きく取り扱われていたのだろうか……。

でも、同じく岡村社長の話を引用すると、「（マスコミの取り上げ方が小さくても）ぜんぜん気にならないですよ」ということを言っていた。「それよりも食っていくことが大事」と。そこから勝手に想像すると、マスコミに煽ってもらおうというある意味〝他力本願〟的な考えはいっさい持たず、堅実に自分たちの手で客席を一つ一つ固めていったのではないかと思ったのだ。「地上波がつかないと世間に届かない」とか「話題にならなければ客が集まらない」とか、マット界ではいろんな〝定説〟が聞こえてくるが、両国国技館にあれだけの人が入っているのを見て、「本当にそうなのだろうか」とあらためて考えさせられた。

条件を見事に重ならせた両国大会はホントに努力の賜物なのだろう！

3.22 ドラゴンゲート

『THE GATE OF ANNIVERSARY』

東京・両国国技館　観衆／11,500人（超満員札止め）

第0試合

○スペルシーサー&シーサーBOY［6分39秒 ヨシタニック］K-ness.&超神龍×

第1試合

○KAGETORA&RYOMA［6分31秒 片エビ固め］戸澤陽&近野剣心×
※一騎当千

第2試合

○望月成晃&ドン・フジイ&マグニチュード岸和田
［10分23秒 片エビ固め］中嶋勝彦&宮原健斗&起田高志（健介オフィス）×
※脳天かかと落とし

緊急決定試合

［“ハリウッド”ストーカー市川暴走十番勝負〜第8戦〜］
○佐々木健介［1分30秒 片エビ固め］“ハリウッド”ストーカー市川×
※ノーザンライトボム

第3試合

［オープン・ザ・ツインゲート統一タッグ選手権試合］
○Gamma&横須賀享（王者組）［12分37秒 反則］（挑戦者組）堀口元気&斎藤了×
※レフェリーに暴行。王者組が初防衛に成功

第4試合

［オープン・ザ・ブレイブゲート選手権試合］
○CIMA（挑戦者）［18分08秒 エビ固め］（王者）吉野正人×
※メテオラ。CIMAが第13代王者に君臨

第5試合

［オープン・ザ・トライアングルゲート選手権試合 3WAY タッグマッチ］
（王者組）鷹木信悟&岩佐拓&ドラゴン・キッド vs
（挑戦者組）YAMATO&神田裕之&新井健一郎 vs
（挑戦者組）BXBハルク&谷嵜なおき&PAC

○新井健一郎［12分30秒 体固め］BXBハルク×
※ビール瓶攻撃

○鷹木信悟［18分25秒 体固め］神田裕之×
※パンピングボンバー。王者が2度目の防衛に成功

第6試合

［マスカラ・コントラ・カベジェラ（敗者マスク剥ぎ&髪切りマッチ）］
△サイバー・コング［9分3秒 ノーコンテスト］アンソニー・W・森△

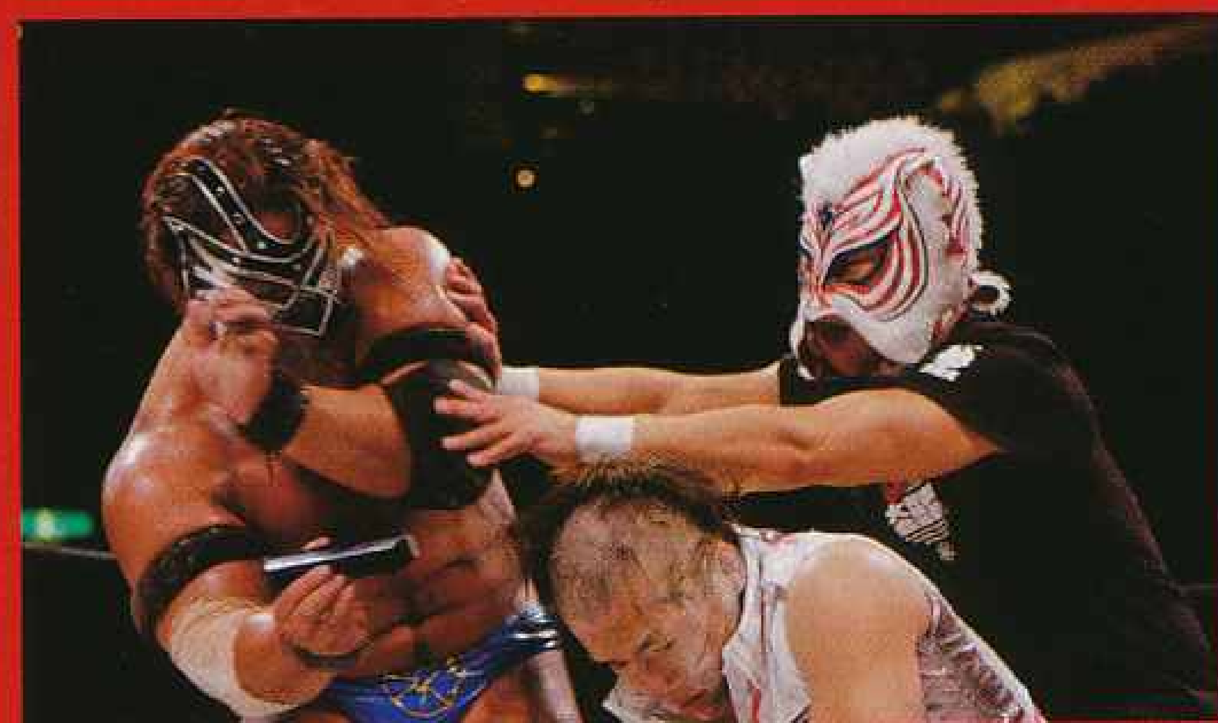
［再試合］
○サイバー・コング［3分59秒 エビ固め］アンソニー・W・森×
※サイバーボム

第7試合

［オープン・ザ・ドリームゲート選手権試合］
○（王者）土井成樹［27分41秒 マスキュラーボム］（挑戦者）金本浩二（新日本プロレス）×
※王者が2度目の防衛に成功



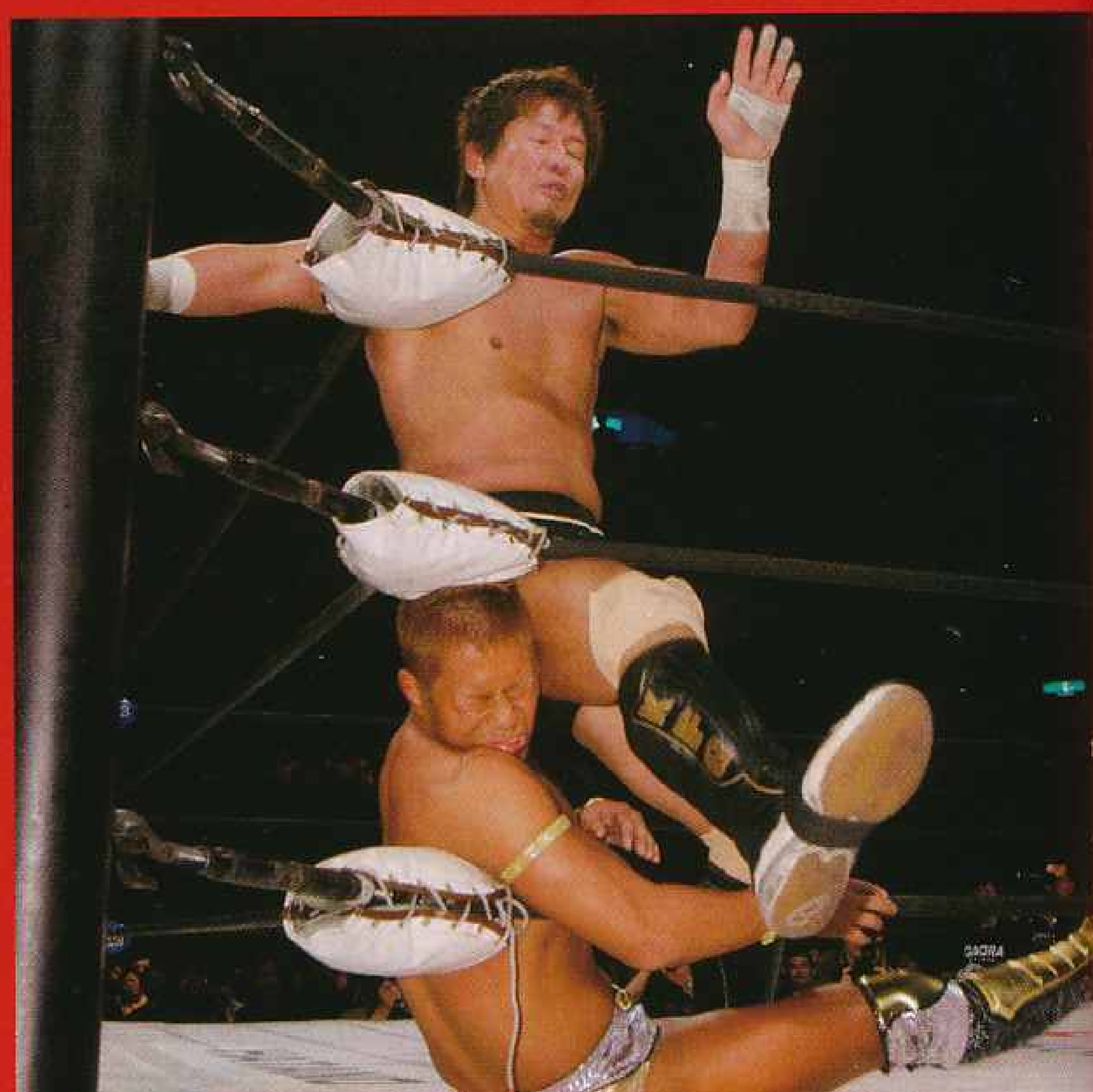
3WAYタッグマッチの一戦となり、なんとリング上には9選手もが入り乱れるという訳のわからない展開に。B×Bハルクや鷹木信悟ら、それぞれファンは思い入れのある選手に歓声を送っていた。



マスクと髪の毛を懸けて闘ったサイバー・コングと“王子”アンソニー・W・森。サイバー・コングにフォール負けしたアンソニーはご覧のような姿に。身体を張りすぎだ！



B×Bハルクのこの入場には、女性ファンの黄色い声援だけでなく、なぜか「ハルク！　おまえしかいない!!」という野太い声も響いていた。叫んだ人はいったいどんな男性だったんだろう……。



メインを飾ったのはオープン・ザ・ドリームゲート王者の土井成樹と新日本プロレス金本浩二との対戦。金本も大技を繰り広げたが、最後は土井が勝利。初の両国大会でメインを張ったということもあり、試合後、土井は感慨深げにマイクした。



斎藤了の裏切りにより因縁が生まれた横須賀享と斎藤了。最後はヒールコンビである斎藤了&堀口元気の反則によって、ドタバタの結末に。

今回のドラゲーだった。

そして、そのパワーは選手たちからも伝わってくる。試合のテーマだけを挙げると、全7試合のうちベルトを懸けたタイトルマッチが4試合、敗者マスク剥ぎ&髪切りマッチが1試合、そしてサプライズマッチでいきなり佐々木健介が登場するという、気合いの入りすぎた内容に。前ページで吉野正人が「選手もリング外で動いてる部分もありますから」と言っていたが、それを含めて考えると、「頑張りすぎなんじゃないかと思うほど盛りだくさんだった。

それにつられるように観客の声援もなかなか途切れない。たぶん、この日会場に来たお客さんはいい意味でグッタリして帰ったんじゃないでしょうか。個人的にも、後楽園ホール規模での大会よりも、ドラゴン・キッドや吉野正人らがコーナーからどんだけ高くジャンプしてるかなどが観られて、じつはドラゲーは大会場向きなんじゃないかと思ったりもした。

メインイベントで、オープン・ザ・ドリームゲート（ドラゲー最高峰のベルト）を懸けて新日本プロレスの金本浩二と闘った土井成樹はベルト防衛後のマイクで「いろんなプレッシャー、重圧、責任があったけど、初の両国大会にこれだけのお客さんが来てくれた。それだけで大成功です」と語っていたが、それはまぎれもない本心なのだろう。それに続いて「これからも初心、進化、継続、感謝を忘れずに……」と、これだけ成功しているのに謙虚すぎるからもう敵わない。

〝上流地帯〟がテーマである今回のプロレス特集号であるが、きっとここドラゲーもプロレス上流地帯の新しい姿なのだ。ああ、『kamipro』も上流地帯に仲間入りした〜い。



萌え伝道師
掟ポルシェ

血まみれ
チ対談

構成／阿修羅チョロ　撮影／丸山剛史　通訳／宇賀神幸子　写真協力／日活　©Niko Tavernise for all Wrestler Photos



デスマッチジーザス
ネクロブッチャー

カリスマデスマッチファイターと
ネクロマニアが高円寺で飲み会!?

酔いどれ
デスマッ

俺たち昭和のプロレス者に局地的大人気を誇る〝闘うホームレス〟ことネクロブッチャーが、突然ワールドワイドなムービースターに!? 重要な敵役として出演したミッキー・ローク主演の映画『レスラー』がアカデミー賞にまでノミネートされる大ヒット! プロレスの凄味と悲哀をあますところなく伝えた大傑作映画から気になる近況まで、ネクロの日本の飲み仲間の掟ポルシェが、飲み会直前緊急インタビュー!

ネクロ お～、『kamipro』の取材か? このあいだは大きく取り上げてくれてありがとう!

掟 白黒ページですいません! 今回は、ムービースターと呼ぶと顔色が曇るという噂のネクロさんに、映画の話を中心に聞かせてもらいたいんですが……。日本での公開は6月とだいぶ先なんですけど、正直もう映画の話はうんざりですよね?

ネクロ いや、全然問題ない! 今日は機嫌がいいから、映画でもワイフのことでもなんでも話すよ(笑)。キミはオレのフレンドだからね(ニッコリ)。

掟 いやいや、俺が会ってるときはいつも機嫌がいいじゃないですか! ビールをガロン単位でバカスカ飲んでるせいもあって(笑)。

ネクロ カンパ～イ! (と言って一人で缶ビールをがぶ飲み)。

掟 飲み会前に一杯ですか(笑)。早速ですが、アカデミー賞にノミネートされ、ヴェネチア国際映画祭では金獅子賞を授賞した『レスラー』に、ネクロさんはけっこう重要な役で出てましたね。どういう経緯で出演することに?

ネクロ ただ、ラッキーだっただけだよ(笑)。ディレクターたちがいろんなオフィスにレスラーを探しに行って、ROHで一人あたりをつけていたみたいだな。で、ロバート・シーゲルというあの映画の脚本家がROHの大会に来て、オレの試合をたまたま観て、そいつとオレのことを指差したんだ。「この人とこの人!」って感じで。

掟 そんなあっさりと(笑)。

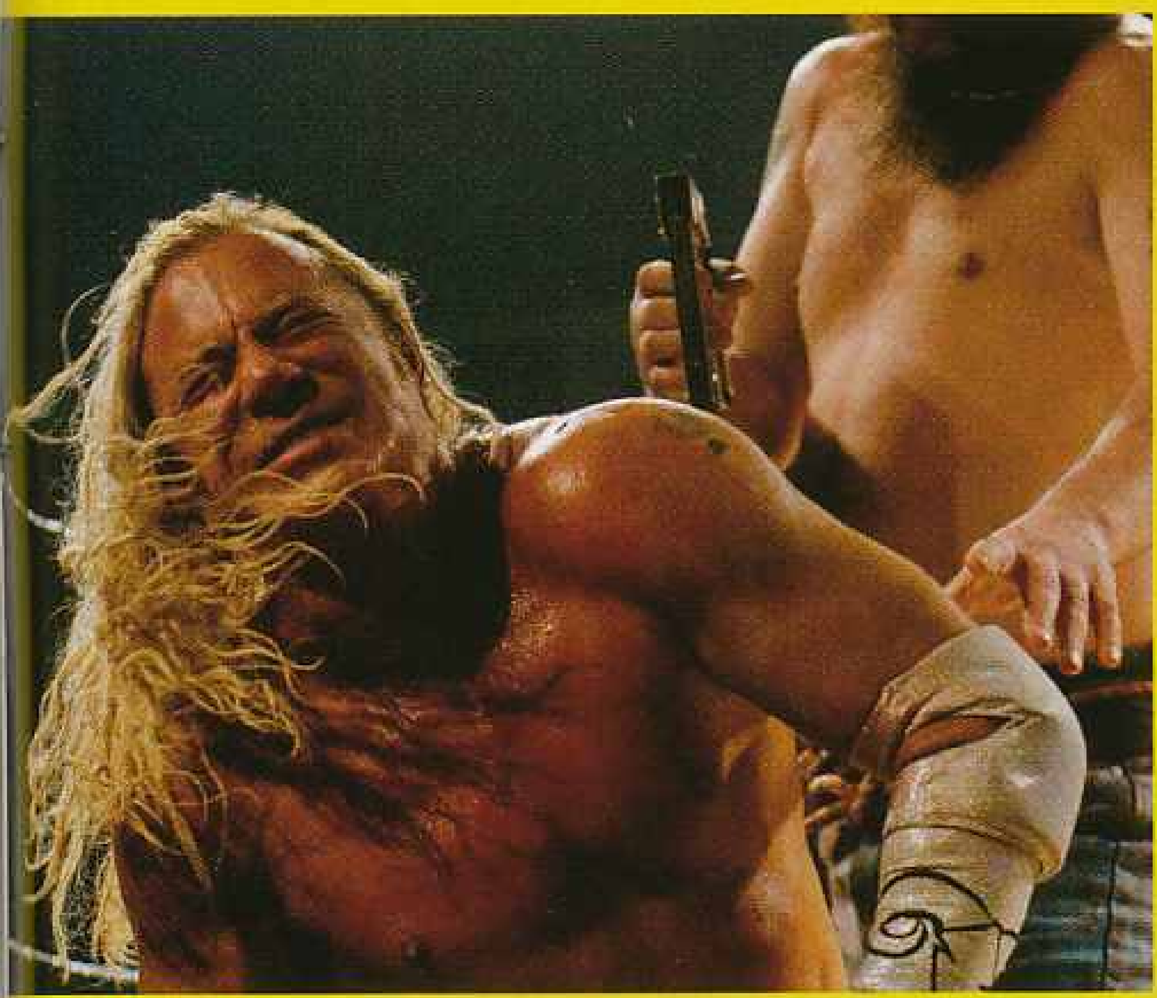
ネクロ 「キミはこの映画のヘルベリー・カーニバル役にピッタリだ!」、「とにかくキミを使いたい!」って言われてね。映画の内容もオレのために書き直しをして、新しく作ったと聞いているよ。

掟 ネクロさんのいつもの死にかけデスマッチが映画の内容にまで影響した、と。

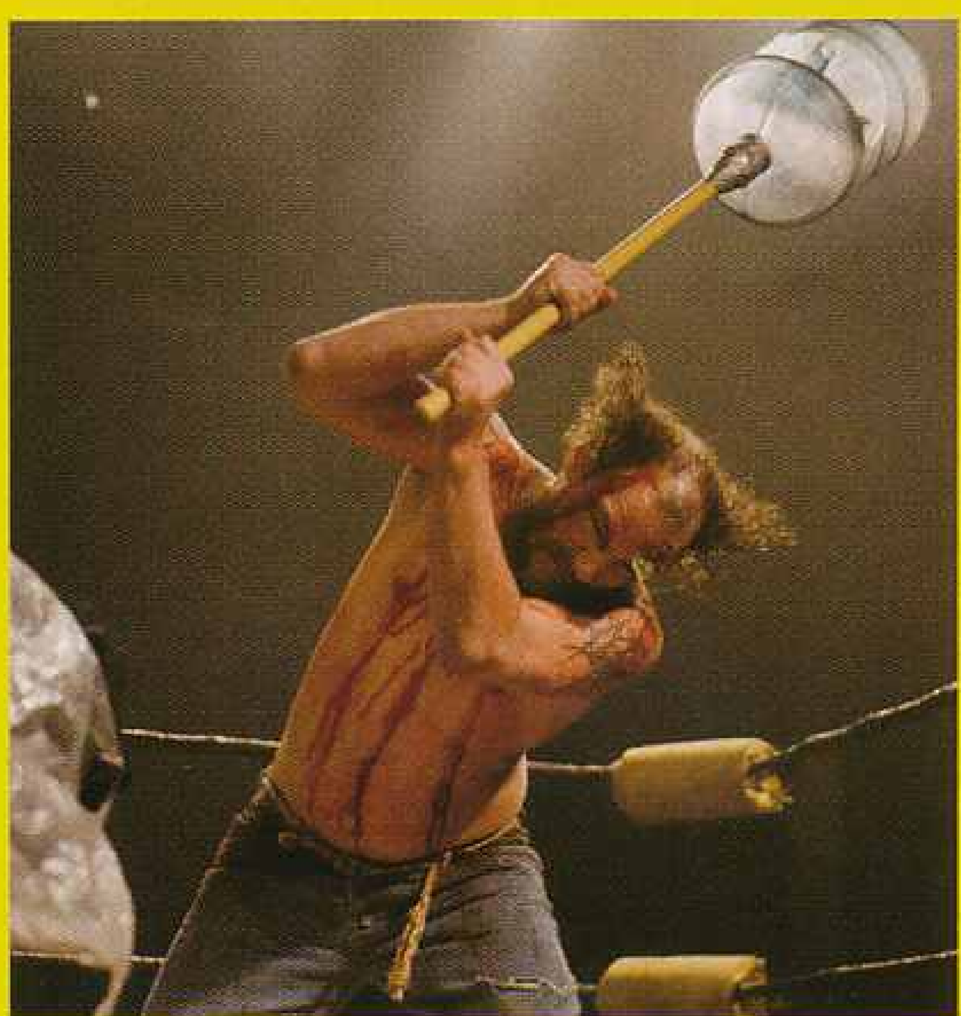
ネクロ 最初は普通のプロレスをやるって話だったんだけど、オレの試合を観て「凶器を使ってやろう」ってことになったんだ。

掟 そのほうがこの映画の説得力が増すと判断されたんですね。納得です! ミッキー・ローク演じるランディ・ロビンソンとの試合で使っていたステープラーガン(巨大ホッチキス)は、いつもネクロさんが試合で使ってるヤツですか?

ネクロ そうさ。CZWで使ってた凶器だよ。ステープラーガン、フォーク、テーブル、ラダー、イスとか全部持っていったんだ。



『レスラー』ではミッキー・ロークのデスマッチの相手として、壮絶すぎる流血戦を繰り広げたネクロ。映画中、控室での試合打ち合わせシーンで自らが提案した巨大ホッチキスを持ち込んだネクロはバンバン打ち込む非道ぶりを発揮!



見てみぃ、この狂気! デスマッチジーザスの名に恥じないネクロの暴走＆ムービースターぶりが目撃できる映画『レスラー』は6月上旬シネマライズ、TOHOシネマズ シャンテ、シネ・リーブル池袋ほかで全国ロードショー公開。

試合を観た映画の脚本家が「キミを使いたい」って言ったんだ（ネクロ）

掟 オール私物ですか!

ネクロ クッキーの缶とかもね。試合のときも全部自分で用意してるよ。

掟 クッキー業者もまさか人の頭をブチ抜く目的で缶が再利用されるとは思ってなかったでしょうね(笑)。じゃあ日本でデスマッチをやるときはバッグの中、凶器だらけで空港に? 逮捕されますよ!

ネクロ ハッハッハッ! 何が入っているかにもよるだろうけど、そこにあるオレのバッグには凶器は入ってないからね。

掟 現在日本での主戦場のIGFは基本、凶器攻撃NGですもんね。

ネクロ そうなんだよ……。マネーや待遇はいいけど、そのへんはビッグジャパン(大日本プロレス)とは大違いだね。

掟 〝デスマッチジーザス〟の異名をとる者としてはツライところですよね。映画の中のヘルベリーと、実在のネクロブッチャーのキャラはほとんど同じといえますが、落ちぶれた元スーパースター・レスラーの役を演じたミッキー・ロークに関してもそうだったみたいですね。

ネクロ そうらしいね。彼は一時期、かなり落ち込んだときもあったみたいだけど、今回の映画でまた表舞台にカムバックすることができた。そういったストーリーを重ね合わせてみたらおもしろいだろうね。

掟 ミッキー・ロークはあの映画に出るまでホントに落ちぶれていたみたいで。

ネクロ それはチラッと聞いたけど、具体的にはどんな生活をしていたんだ?

掟 長年仕事がゼロだったので、バイク屋を経営していた弟さんからの仕送りで生活していたとか。

ネクロ それはオレよりヒドイな(笑)。

掟 家賃5万円のアパートに住んでたみたいで。

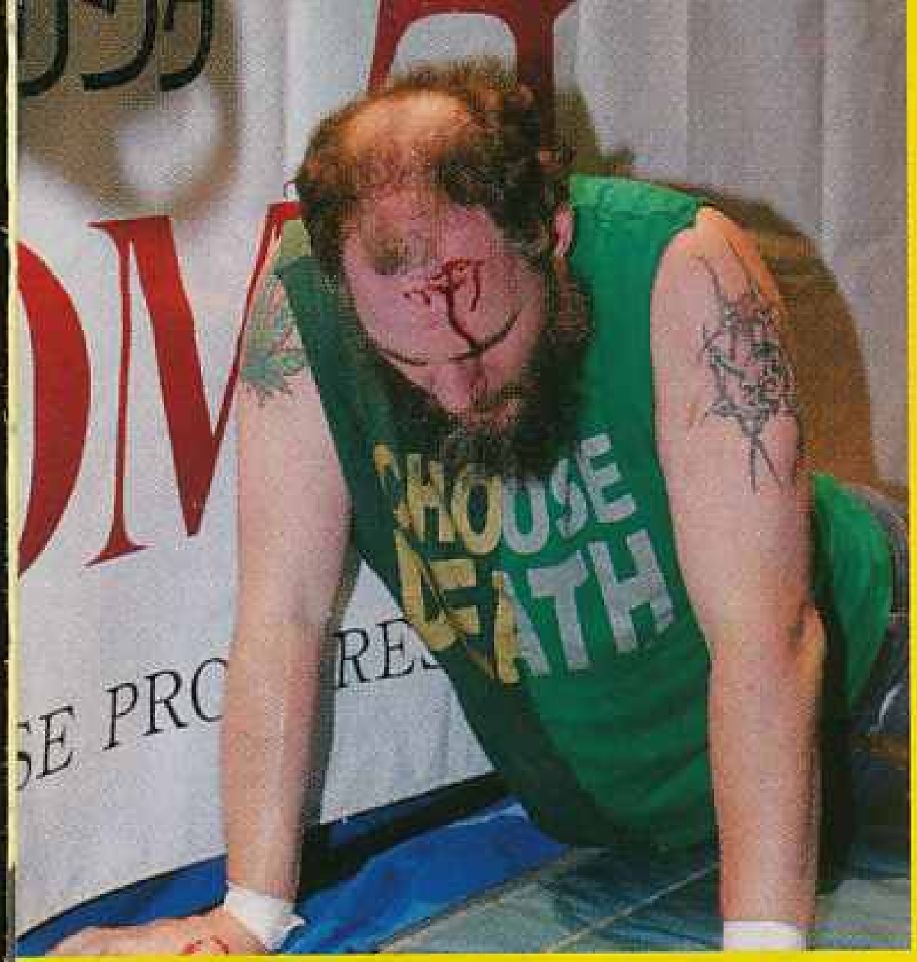
ネクロ そこまでは知らなかった。でも家賃5万じゃオレと一緒だな(笑)。

掟 よく考えたら俺もそうでした(笑)。でも、彼は元スーパースターで年収も何十億の世界の人ですからね。以上、全部『kamipro』での町山智浩さんのインタビューで知ったことなんですけど(笑)。ミッキー・ロークと一緒に映画をやられてみて、どうでした? ミッキー・ロークは「ネクロさんのことをリスペクトしてる」と言ってたみたいですけど。

ネクロ ワ～オ! サンキュー!(満足げ)。彼はオレだけではなくプロレスラーみんなを凄く尊敬してくれていた。もちろん、オレらも彼のことをリスペクトしていた。彼は真剣にプロレスに取り組んでいたからね。

掟 本来主役がニコラス・ケイジかジョン・トラボルタの予定だったのが、ミッキー・ロ

デスマッチ対談



映画『レスラー』では血ノリを使ったネクロだが、普段はもちろんいつ何時でも流血上等!! 現在の宮戸GM体制下のIGFでは基本は流血禁止でもなにげに流血し続けているのだからさすがなのだ。まさにデスマッチジーザス！

ネクロさんの話を聞いてミッキー・ロークが好きになりましたよ（掟）

ークに代わったことでスポンサーが降りて低予算になったみたいですね。

ネクロ 確かにそれほど予算はかかってないというのは感じたね。

掟 それでも杉作J太郎監督の男の墓場プロよりはあると思います！ この映画に出ることによって、ネクロブッチャーの名前が全世界に知れ渡ることになりますよね。

ネクロ オレが聞いたときで3300万人が観たそうだし、アメリカ以外でも凄い勢いらしい。有名人でも、ブラッド・ピットとかアンジェリーナ・ジョリー、ショーン・ペンとか、アカデミー賞の授賞式でオレを観て「（巨大ホッチキスを）やってみて！」って言ってきたから（笑）。

掟 ガハハハ！ そんなところでいきなりできるか（笑）。この映画の成功で、ネクロさんはアメリカ本国でスーパースターになってしまって、もう日本に来ないんじゃないかと心配してたんですよ。

ネクロ オ〜、ノー！ オレはこれからも日本で試合するよ！ いまはIGFが凄くよくしてくれるしな。

掟 それを聞いて安心しました（笑）。でも今後、役者としてオファーが殺到したらどうします？

ネクロ 心配しなくてもオファーはないだろ。オレの職業はプロレスラーだ。プロレスをやることでしか生きていけないのさ。

掟 カッコいいですねぇ。映画をインターネットでチラッとだけ観ましたが、映画だから血ノリを使って、筆で血を書いてるネクロさんを初めて観ました。

ネクロ あれは大変だったよ。何回塗ってもすぐに乾いちゃってね。スタッフがスプレーで水を拭きかけて、乾いたらまた血ノリを塗っての繰り返しで。

掟 普段は本物の血がドクドク出てるじゃないですか？ 我々デスマッチファンはデスマッチを観すぎて、あれが本物の血じゃないことを、血の流れで理解しましたよ。

ネクロ （額を指差して）この傷を見てくれよ。

掟 うわ〜、まだ傷口縫いたてじゃないですか！ そういえば、ネクロさんは自分で縫うんですよね？

ネクロ そう。内緒だけどね（笑）。

掟 自分専用闇外科医！ セルフ・ブラックジャックだ（笑）。

ネクロ 3日前にトーナメントで一日3試合したんだけど、最初の試合で流血して、3回目の試合で同じ箇所をパンチされて大流血したんだ。でもあの映画でミッキー・ロークもホントの血を流していたんだよ。

掟 えっ、俳優なのにリアルな流血!?

ネクロ そうなんだよ。血ノリを使うはずのシーンで、あまり見映えがよくなかったんで、オレがコーチして本番ではホントにカットしたんだ。

掟 ハリウッドスターなら本来そんな仕事は受けないですよね。

ネクロ 彼はプロレスラーをリスペクトしてくれてるから、そこまでしたのさ。

掟 いや、素晴らしいです！ ミッキー・ロークのことがちょっと好きになりましたよ。

ネクロ オレも彼が自分でカットしてからホントに好きになったんだ。

掟 いい話ですねぇ。ちなみにIGFではデスマッチはやらないんですか？

ネクロ ミスター・ミヤトがいるかぎり無理だろうね（苦笑）。

掟 宮戸さんは嫌がると思いますけど、『レスラー』に出演して「デスマッチのネクロブッチャー」が脚光を浴びているときに、それをビジネスに結びつけないのは、猪木イズムとしてどうかと思うんですよ。

ネクロ ミスター・ミヤトはUWFスタイルを望んでいるからね。イスはダメ、流血もダメ。だから、怒られない程度に、リングの外に出たときだけちょっとチャレンジして（笑）、リングに上がったときはちゃんとルールに従おうと思っているんだ。

掟 じゃあ、自分がネクロさんの試合のときだけ宮戸さんの目を塞いでおきます！ その隙にさんざん悪いことをしてください！

ネクロ よろしく頼むよ（笑）。

掟 あと、ネクロさんといえば相撲が大好きなんですよね。前回の来日では両国国技館で試合ができて嬉しかったそうで。

ネクロ スモウアリーナで試合ができて最高だったよ！ アメリカではインターネットで観てるんだ。

掟 ネット観戦するほどスモウクレイジーなんですね（笑）。好きな力士は？

ネクロ 若ノ鵬が好きだったんだけど引退しちゃったからな。あとは露鵬と白露山も好きだったんだけど、引退してしまった。

掟 引退した理由が理由なんですが……くしくもその3人ですか（笑）。

ネクロ そうなんだよ。だから、いま一押しは越ノ龍だね。

掟 越ノ龍さんとは以前ビールの早飲み勝負もしてましたね？

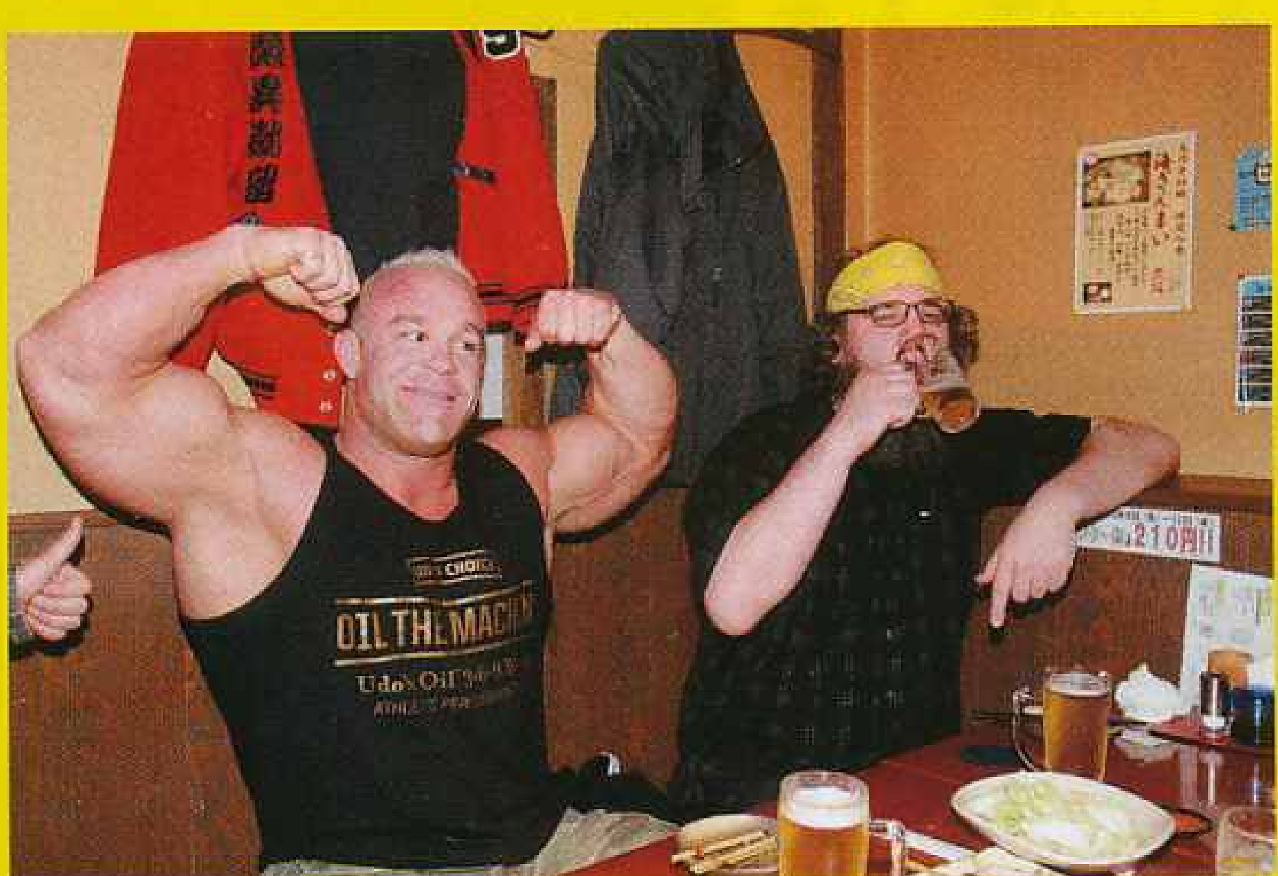
ネクロ キック・マイ・アス！ 神田の居酒屋で、4回ジョッキで一気飲みをして、4回とも負けたんだ。5回目に「オレはデスマッチファイターだ」って言って、二人のジョッキにタバスコを真っ赤になるぐらいに入れて、タバスコビアーで勝負して勝ったんだ。越ノ龍は一滴も飲めなかったからね（得意げに）。試合放棄で越ノ龍の負けだよ。

掟 ロード・ウォリアーズみたいで素敵ですね！ でも、それは日本では「ズル」と言います（笑）。越ノ龍さんとはそれ以来、仲よくなったんですよね？

ネクロ オ〜、イエス！ それから、武蔵川部屋に行ったりしてるんだ。飲んでるときは仕事の話は一切しないよ。

掟 相撲部屋に出稽古ですか！

ネクロ そうだね。剛乃海には突っ張りを教えてもらった。（手のひらの横の部分を指して）ここを使えって言われてね。



取材後は高円寺の居酒屋でガンガン飲みまくったネクロ。数日後のIGFに備えて来日中の"キン肉オバケ"ジョン・アンダーセンも同席、得意げにマッチョポーズを決めるアンダーセンの隣で飲み続けるネクロ。なんだか凄いツーショットだ。



酔いどれ血まみれ

オレが好きな力士は若ノ鵬、露鵬、白露山の3人だったんだけどな……

掟　観ましたよ、ネクロさんの突っ張り！　一昨年、大日本プロレスでの試合ですよね！　試合開始早々、対角線のコーナーまで電車道で。事情を知らないで観てたんで、維新力へのオマージュかと思いました！

ネクロ　ちょっと、まだうまくなかったかもしれないけどね。

掟　いやいや、最高でしたよ！　話は変わりますけど、自分はもうすぐ息子が生まれる予定なんですよ。ネクロさんは6人のお子さんを抱えていますが、父親の先輩としてアドバイスをください！

ネクロ　オッケー。まず大切なのは子どもと一緒に遊ぶことだ。たとえば、自分がeメールをチェックしているとしよう。その際、オレはキーボードを二つ用意しているんだ。

掟　それはお子さん用に？

ネクロ　そうだね。自分のマネをして子どもはキーボードを叩くんだ。それで、うちのベイビーが笑ったら、違うベイビーが笑ってる動画を画面に映るようにして、お互いに笑っているというのを認識させてるんだ。それと、歯がはえてきたらキャロットを与えること。口にくわえてガーーッてかじるようになるからね。

掟　志村けんのスイカ一気みたいな感じ？　茹でたキャロットでいいんですよね？

ネクロ　いや、茹ではしないよ。ナマで。

掟　えっ、ナマでいいんですか⁉

ネクロ　問題ない。ちゃんとシンクで洗って与えれば、嬉しそうにかじってるよ。

その3人は引退しちゃいましたね。引退の理由も理由なんですが……

酔いどれ血まみれデスマッチ対談



おきて・ぼるしぇ■1968年5月3日生まれ、北海道出身。バンド、ロマンポルシェ。ではボーカル、楽器、説教を担当。ほか、コラム執筆、俳優、DJなど多方面で才能を発揮。大日本プロレスでの試合を観戦したのがきっかけで熱狂的なネクロファンに。ここ最近は来日のたびにネクロ本人とネクロマニア数人でエンドレスな飲み会を開催している。

Necro Butcher■本名＝ディラン・サマーズ。1974年7月13日生まれ、アメリカ出身。CZWをはじめインディー団体で、無防備かつデンジャラスな試合とハゲ＆デブ＆ヒゲの風貌で人気者に。04年9月に大日本プロレスに来日、クレイジーファイトで熱狂的支持を得る。最近はIGFを中心に活動。08年は映画『レスラー』でミッキー・ロークとも共演。188cm、104 kg。

掟　それは丈夫に育ちそうですね。ネクロさんといえば、酔うと必ずカラオケに行きますが、いつも決まって唄う歌は？

ネクロ　この前、日本に来たときも一緒にカラオケに行ったよな。オレが好きなのは『カントリーロード』だ。ジョン・デンバーの。

掟　いつも唄ってますよね。十八番！

ネクロ　酔ったときしか唄わないけどな。

掟　リングネームがネクロブッチャーだから、みんなはオジー・オズボーンの歌とかを唄うんじゃないかと勝手に思ってるんですけど（笑）。

ネクロ　残念ながらオレはそういう曲は唄えないんだ。なぜならオレはカントリーボーイだから、田舎の歌しか唄えないのさ。

掟　日本人なら演歌が大好きなプロレスラーって感じですかね。気仙沼二郎みたいな。そういえば、日本に来たらうまいおでんが食べたいと言ってましたよね？

ネクロ　そうなんだ。どこかうまいおでん屋を教えてくれよ。

掟　では、日本で一番うまいおでんを売ってる店の名前をお知らせします！

ネクロ　ホントか⁉　どこにあるんだ？

掟　その店は……セブンイレブンです！

ネクロ　オ〜、それならオレも知ってるよ！　あそこのおでんは最高なのか⁉

掟　セブンイレブンのおでんは日本一テイスティ！　きっと大喜びするはずです！

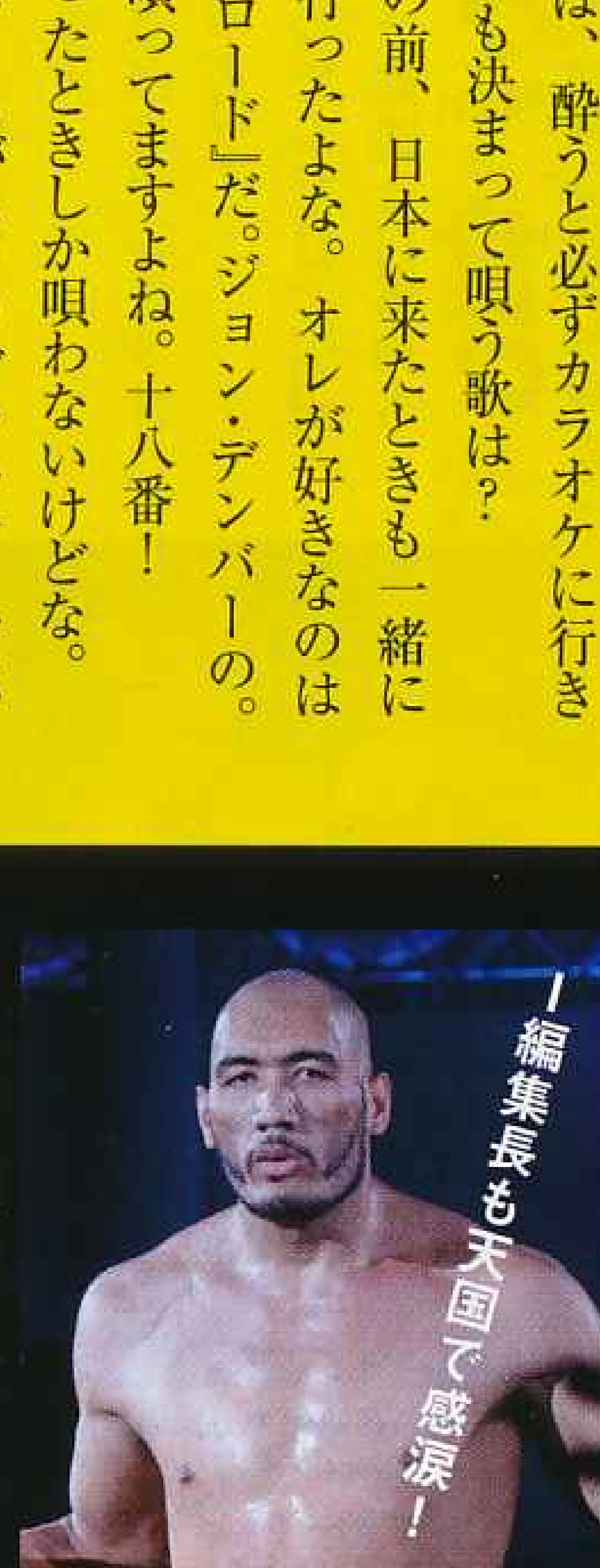
ネクロ　わかった。じゃあ、インタビューが終わったら、まずは居酒屋でビールをたらふく飲んで、カラオケで『カントリーロード』を唄って、最後はセブンイレブンでおでんを買ってホテルで飲み直そう！

掟　長くなりそうですけど、了解しました！

ネクロ　じゃあ早速、コーエンジの街に飲みに行くか！　ビールがオレたちを呼んでるぜ〜、ガハハハハ！

【09年3月12日／都内・高円寺の某所にて収録】

これぞ猪木イズム！　モンタが広島で大暴走!!



モンタだけはホントにガチ!!

〝ブラジルの大巨人〟モンターニャ・シウバ。ー編集長（故・井上義啓氏）から「アイツはやるからねっ!!」と猛プッシュをされていた彼は、いまやエンターテインメントと真剣勝負の狭間を表現してしまう数少ないレスラーになっている！　モンタ本人は気づいてないだろうけど。

ヤツの試合にはハズレがない。3・15ＩＧＦで実現した小川直也＆プレデターvs高山善廣＆モンタのタッグマッチも最高だった。この試合、小川と高山の初接触ばかりに目が行きがちだが、ところがモンタの独壇場。なにしろタッグマッチなのにタッチしないで大暴れを続けるんだから！　なんとか無理矢理タッチした高山は、二度とモンタとタッチしなかったことは言うまでもあるまい。

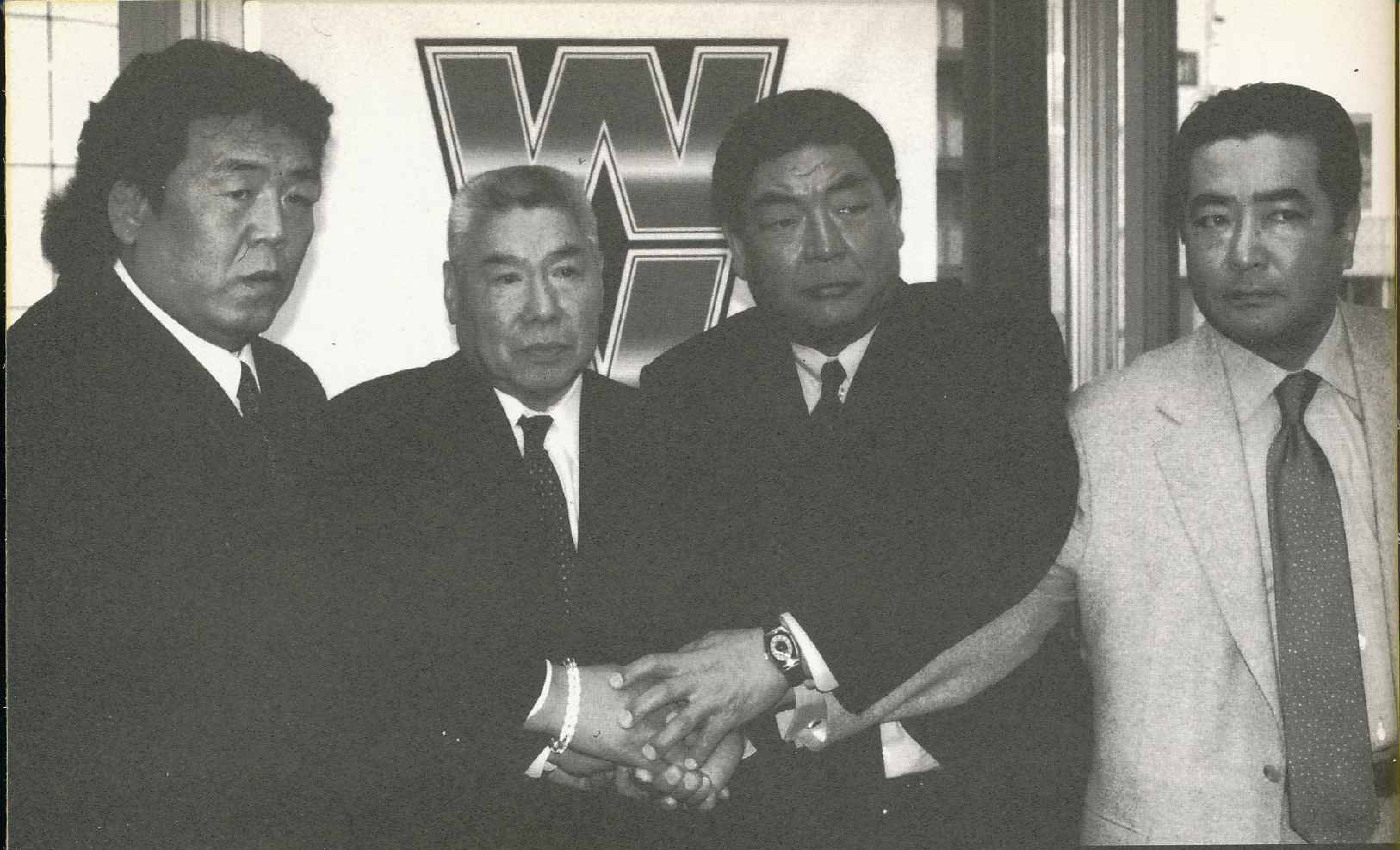
そして攻撃がとにかく容赦ない（ホントに危ない）。逆に攻撃が甘いとモンタは痛がらない。ある選手とのシングルマッチで闘ったときなんて、モンタは多少の攻撃では効いた素振りを見せなかった。逆に本気で蹴りやパンチを叩き込んでいく！　これはあくまで筆者の見立てだが、その試合はほぼガチンコの勝負になってしまい、最終的にモンタは絞め技でタップした。これぞ馬場さんが言う〝シューティングを超えたプロレス〟だよ！

試合後の乱闘も、最近ありがちなナアナアでは終わらせず、『元気が出るテレビ!!』の「しつこい高田シリーズ」を彷彿とさせる粘着質ぶり。追いかけ回されるプレデターは心が折れたのか、途中で姿を消してしまったほど。

つまりモンタが相手だと、いつだって気を抜けない。緊張感のあるプロレスを見せてくれる。

試合後も収まりのつかない小川と高山に向かって、アントンは「勝負なんてどうでもいいんだよ。やるんならブッ殺せ!!」と言い放った。

いや、すでにモンタがやってますよ！



谷津嘉章が明かす“地獄のど真ん中”WJ 一部始終



「“力、カテエ!”のは長州力だけじゃねえよ!」

いろんな意味で伝説となっているプロレス団体WJ。崩壊から約5年の月日が流れているWJだが、今年2月に別冊宝島から出版された『プロレス下流地帯』にて取り上げられた崩壊後の裁判騒動や実録劇画などにより、再び注目を集めている。今回は『kamipro』のご意見番にして、WJに深く関わった谷津嘉章がスキャンダラス団体WJの真実を赤裸々に語りまくります!

聞き手／阿修羅チョロ　試合撮影／平工幸雄、丸山剛史

谷津 今日のテーマはなんなの？
——今回はですね、谷津さんにWJ崩壊の真実を赤裸々に語っていただければと思ってます！
谷津 なんでいま頃WJなんだよ。
——いや、別冊宝島から『プロレス下流地帯』という本が出まして、その中でWJ崩壊にまつわる裁判記事や劇画が掲載されていて、なかなか評判なんですよ。劇画には谷津さんも登場してます（笑）。
谷津 （本をパラパラめくって読み始める）なんだこりゃ。勝手に俺が使われてるよ（笑）。
——あ、無許可でしたか（笑）。谷津さんといえば、WJを退団する直前に『東スポ』の一面で内幕を暴露されていたりもしましたよね。
谷津 いや、俺は聞かれたから答えただけで暴露したつもりはないぞ。
——し、失礼しました（笑）。
谷津 まあ、結局、俺と長州さん絡みっていうのはWJだけじゃなくていっぱいあるわけだよな。ジャパンプロレスもそうだし、（ジャイアント）馬場さんのところもそうだし、あとメガネスーパー（SWS）のときとかさ。いつも俺、あの頃は渦中にいたからな（苦笑）。
——渦中のど真ん中には谷津さんがいたというか（笑）。
谷津 そう。キーポイントにいるんだよ、俺は。だから引退したらまとめて、「あの頃は」っていう感じで本でも出そうかと考えてるんだよ。『kamipro』さんにお願いしてな（笑）。
——ゼヒまとめて出しましょう！（笑）。でもSWSのときは待遇面でいい思いもされていると思うんですが、WJでは谷津さんはあまりいい思いはされてないんですよね？

WJに限らず、いつも俺は渦中のど真ん中にいるんだよな（苦笑）

谷津 全然してねぇよ。まあでも、WJに関してはね、やっぱり長州さんっていうのは、ある意味では俺の兄貴分なんだよね。新日本に入ったときから同じ穴のムジナだったしね。
——同じ穴のムジナ？
谷津 ムジナっていうか、出元が一緒でしょ。アマレスやってたから。彼は専修で俺は日大だったけど、歳も4つ違いでね、兄貴分みたいなもんだよ。ところがプロレスに入って最初の頃は、まだ彼は吉田光雄だったんだよ。要するにアマレスに近かったの、匂いが。
——デビュー当初は本名の吉田光雄として闘ってましたからね。
谷津 そうだよな。まだ、いまみたいな髪型もしてなかったし。それがメキシコ行って長髪になってかませ犬発言してから変わったわけですよ、彼は。
——吉田光雄から長州力へと変わったわけですね。
谷津 そう。それでバーッとブレイクしたわけだよ。あの荒削りのプロレスが。業界ではあれは、しょっぱいって言われてたんだよ、ホントは。



こちらが今年2月に発売された『プロレス下流地帯』（別冊宝島）の表紙だ。地上波中継打ち切りが決定したノアの裏側とともに「2億円裁判」や『プロレススーパースター列伝』でおなじみの原田久仁信先生による実録劇画「地獄のど真ん中」などでWJを大特集。裁判で明かされた新事実や、原田先生がWJ崩壊までの道のりを描いた劇画は必見。まさに"プロレス下流地帯"なネタだらけの一冊。

——いわゆる"ハイスパート・レスリング"ですよね。
谷津 あれがまたウケたわけだよな。何がウケるかわからないけど、そういうウケる素質は確かにあったんだよ。でも、俺はそれまで長州さんとは別の路線を走ってたわけ。要するに俺のほうがもうちょっと待遇のいい路線を歩んでたんだよ。記者会見とかにしてもそうだったし。
——谷津さんはデビュー戦から猪木さんと組んでアブドーラ・ザ・ブッチャー&スタン・ハンセンが相手でしたからね。
谷津 まあ、ボロボロにされたけどな（苦笑）。ところが長州がブレイクしちゃったもんだから、俺は同じ穴のムジナだから、会社の人間にそっちにつかされちゃったの。
——あ、会社サイドの要請で長州さんたちと一緒にやっていくことになったんですか？
谷津 そうだよ。気がついたら俺、維新軍になってたんだから。
——気がついたら維新軍（笑）。
谷津 そういうこと。まあでも、その頃は本隊と離れて行動してたんだけど凄く楽しかったよ。堅苦しくもないし。それでやってるうちにブレイクしすぎちゃって維震軍がもっともっと巨大化しちゃったんだよな。
——一大勢力になりましたよね。
谷津 そこで長州さんは駆け引きしちゃったんだよね。お金の面とかでもな。で、そこから全日本に行ったり、また新日本に戻ったりといろいろあったんだけど、結局、俺は新日本に戻らなかったでしょ。
——そうですね。全日本に残ったかたちになりましたよね。
谷津 そのときだって池尻で一日監禁されちゃったりして大変だったんだから。
——か、監禁されてましたか（笑）。
谷津 笑い話じゃねぇよ（笑）。まあしょうがないから、こっちも一回「うん」って言ったんだけど、結局は行かなかったから「アイツは裏切った」ってなったの。それで、マサ（斎藤）さんなんかと名古屋かどっかでみんなは合流したんだけど、俺は長州さんたちとはそれで一回別れたんだよ。まあ、そのあとも昭和維新軍なんかだってあったけど、ほとんど話もすることがなかったからな。
——それがまた、どういう経緯でWJで合流することに？
谷津 まあ、WJの話が出てきて、もう一回、長州さんと一緒にやるようなタイミングになったから、今度は和解しようと思ったの。
——数年間、距離があったけれども、WJ設立を機に和解しよう、と。
谷津 そう。WJではフロントに永島（勝司）さんがいたけど、高田龍ってのもいたのよ。
——高田龍さんはSPWFのフロントとして谷津さんと一緒にやられていた方ですよね。
谷津 そうそう。高田龍はSPWFの広報部長だったから。それが新日本で平成維震軍がやってた頃、永島さんと高田龍はけっこう交流があったの。そういう関係もあって、長州さんから「悪いけど出てくれない？」って言われて何回か新日本に出たりしたんだよ。
——谷津さんがWJに関わるようになったのは長州さんより高田龍さんの存在が大きかったわけですか。
谷津 う〜ん、そこが難しいところで。厳密に言うと高田龍をWJに引っぱったのは俺なんだけど、まあ流れはいっぱいあったんだよ。
——そうですか。高田龍さんはWJではどんな役職に就かれていたんでしたっけ？
谷津 高田龍はWJでは常務取締役だったんだよ。

"地獄のど真ん中"WJ 一部始終



──かなり重要なポジションだったんですね。

谷津　そうそう。ＳＰＷＦ時代とは立場が逆転しちゃったけど（笑）。結局、永島さんとの関係だよな。俺はその頃、ＳＰＷＦの営業なんかもずっとやってたんだけど、俺についてくる若い連中もいっぱいいたんだよ。

──のちにＷＪ入りする高智政光選手とかですね。

谷津　そうそう。「おまえらチャンスほしいか？」って聞いたら「お願いします！」って言うから、高智と宇和野（貴史）を連れていったわけだよ。

──たしか、宇和野選手は当時はＩＷＡに所属してましたよね。

谷津　宇和野はＳＰＷＦ所属じゃなかったけど、彼は千葉の道場に住んでて、そこで練習させてプロレスを教えてたわけだよ。

──ＷＪとしても選手がほしいというのもあって、お互い利害が一致した感じなんですかね？

谷津　それはわかんない。俺が出した条件っていうのは、俺一人じゃなくて若いヤツにチャンスくれるんだったら行ってもいいよ、と。「その条件を飲んでくれれば営業もプロレスも両方やりますよ」って言ってね。

──結局は谷津さんの条件を飲んだかたちで、谷津さんの入団が決まるわけですけど、やっぱり金銭的な待遇面もかなりよかったんですか？

谷津　いや、そんなことはなかった。そういう話をしたあとで長州さんと焼肉屋でひさしぶりに会って、高智と宇和野連れていったんだけど、長州さんに「おまえの希望はわかった。じゃあ頼むよ」って言われて、「じゃあ、こいつら頼みます」って、それで入ったの。でも実際に入ってみたら、もうあまりにも幼稚でずさんだったから。経営がな。



ＷＪ所属第1号選手として谷津が入団したのが02年11月20日。旗揚げ前には長州の800万円を筆頭に、永島勝司、佐々木健介、越中詩郎、保永昇男、タイガー服部、鈴木健想らに一律500万円、中学を卒業したばかりの中嶋勝彦にも237万5000円が選手支度金という名目で支払われていたのだ。この事実を谷津が知ったのは退団後だったという。

もう旗揚げより全然前の段階で「これは無理だ」って思ってたよ

──経営が幼稚でずさんだった、と。

谷津　だから「これは無理だ」って言ったんだよ。もう旗揚げより全然前の段階から。

──旗揚げ前からお手上げ（笑）。有名な話ですけど、ＷＪでは旗揚げ前の12月に屋形船を借りて盛大な忘年会をしたんですよね。なんでも一晩で500万円も使ったという（笑）。

谷津　いやいや、俺なんかは、その前ぐらいから「ダメだこりゃ」って言ってたんだから。

──忘年会よりもさらに前から！

谷津　うん。だってさ、旗揚げするのは横浜アリーナでしょ。でも長州さんも永島さんも、やれば絶対売れるって発想しかなかったの。でも無理だよ、そんなもん。

──横浜アリーナを満員にするっていうのは簡単なことではないですよね。

谷津　そうなんだけども、あの二人は「これだけのメンバーが集まったら必ず超満員になる」って福田（政二社長）さんを洗脳したわけだよ。

──福田社長は洗脳されてたんですか（笑）。

谷津　そうだよ。俺なんかは「やったって絶対失敗するぞ」って言ったんだよ。「手売りでしっかり売っていかないと絶対無理だ」って。で、旗揚げが近づいてきてから、みんなあわてて手売りで売ったわけよ。

──旗揚げが近づくにつれ、思ったよりも全然チケットが売れないぞと気づいたわけですね。

谷津　その時点でもう遅いんだけど、俺は「選手会だけで3000枚売れ」って言ったんだよ。それで、「会社で3000枚売って、全部で6000枚は売れ」って。それぐらい売らないと絶対失敗する、と。横浜アリーナのキャパは約1万2000人だから、6000枚を前売りで売って、当日券が伸びれば満員になるって言ったの。でも選手会は3000枚売れなかったんだよ。

──でも、かなり頑張って売ったんですね。

谷津　それで、会社のほうでも福田さんが頑張って売って、1500枚ぐらいは売ったの。で、一番売らないのは高田龍だよ、あのヤロー！

──高田さんはあまり売らなかった、と（笑）。でも、福田社長自ら1500枚近くも売ったわけですか。

谷津　ただ福田さんの売り方が問題でな。あの人は銀座とかで売ってるから、結局、それだけの枚数を売っても飲み代とかで500～600万使ってるわけだよ（笑）。それじゃあ話にならないでしょ。

──プラマイで考えるとマイナスですね（笑）。

谷津　いや、さすがにマイナスには

なってないだろうけど（笑）。でも、旗揚げ戦は案の定の入りだったでしょ。

—正直言って超満員にはほど遠かったですね。

谷津　で、あの日は裏でノアが武道館でやってて、あとK—1もあったんだよな。

—ビッグマッチが重なっていたんですよね。

谷津　しかも雨も降ってな。当日券も思ったほど伸びなかったんだよな。でも、永島さんとかは旗揚げ戦の売り上げは全部で3億円って見込んでたの。

—さ、3億円ですか!

谷津　俺は8000万でいいとこだって言ってたんだけど、「そんなことねえだろ!」って長州さんも怒ってな。「興行なんて水もんだから、天気のこともあるし、たいして煽ってもいないし、絶対無理」って言ったら「じゃあ、宣伝カー回せ!」なんて言って、大会の3～4日前に宣伝カーを出したんだけどさ。

—またずいぶんとクラシカルな宣伝方法ですね（笑）。

谷津　「そんなもん、金かかるからやめろ」って言ったんだよ。宣伝カーっていっても一日1台5万ぐらいかかるから、4台使ったら一日20万だぞ。そんなのなんの意味もないっつーの。

—20万以上チケットが売れればいいんでしょうけど。

谷津　そんなの無理無理。だから俺なんかが思ったのは、猪木さんみたいな発想でな、なんか都内で事件でも起こせばよかったんだよ。タイガー・ジェット・シンの伊勢丹前襲撃事件みたいなヤツを（笑）。

旗揚げ戦が終わった時点でもうダメだなって確信したよ

—ガハハハハハ!　まあ、そっちのほうが話題にはなりますよね。

谷津　宣伝カーを横浜アリーナの周りで回したって、観に来るのは横浜のヤツばっかじゃねえだろと思ったけどな。もう、バカなんだよ、ホントに。

—長州さんなんかは「これだけの選手が集まれば満員になるだろ」って思ってたらしいですね。

谷津　入りっこねえよ。永島さんなんかもUインターとの対抗戦でドームをいっぱいにしたのが思い出として残ってるんだよな。だから、俺は言ってやったの。「永島さん、あれは時代背景だ」と。「いや、あれは俺たちが仕込んで入ったんだ」なんて自慢してたけど、「それはたまたま時代背景でそうなっただけであってね、いまは時代が違うよ」なんて言っても「そんなことねえ!　なんでおまえはそんな悲観的なこと言うんだ!」なんてやりとりしてさ（苦笑）。

—それは大変でしたね（笑）。

谷津　で、案の定、俺の言ったズバリのことになっちゃったよ。PPVも全然ダメだったし。

—そういえば、旗揚げ戦はPPVをやってましたね。



こちらが我らが谷津さんが堂々と一面を飾った03年9月30日付の『東スポ』。選手兼営業本部長として登場した谷津は長州の運営方針を批判し、近い将来のWJの崩壊を予告。翌日の『東スポ』で長州は谷津への怒りを爆発させるも、WJはそれから1年ももたずに崩壊……。

谷津　そうなんだよ。で、最初の頃、森沢（広明・取締相談役）さんって人がいたんだけど、あの人の関係でハイビジョンで放映したんだよな。

—たしか、森沢さんはウッドオフィスというテレビ関係の会社のお偉いさんだったんですよね。

谷津　そう。そういうのもあって、WJの旗揚げ戦のPPVはハイビジョンでやったんだよ。そしたら、それがハンパじゃねえんだよ。高くて。

—WJの旗揚げ戦はハイビジョン放送でしたか!

谷津　いまじゃあ、ハイビジョンも珍しくないけど、当時は出始めで、ハイビジョン用のスペシャルな機材使ってやったりしたんだけど、その金がハンパじゃなかったんだよ。通常だったらさ、たとえば1かかるものが3ぐらいになっちゃった感じでな。で、結局PPVも制作費のほうで持っていかれちゃって。ホント、バカじゃねえかと思った。

—当時は洗脳されていたという福田社長も旗揚げ戦で3億は利益が出ると思ってたんですよね。

谷津　そうだよ。だから密室で山分けする話をしてたっていうからな（笑）。旗揚げで3億入ってくる、と。チケット代にPPV、それにグッズも売れる、と。ところが全然でしょ。

—全然話が違う、と。

谷津　でもな、利益は出たんだよ。

—あ、そうなんですか。

谷津　たぶん2000万か3000万ぐらいは出たんじゃないかな。

—谷津さんは新日本を抜けてからインディーの世界も経験してますし、当時のプロレス界の事情も把握してたんでしょうけど、長州さんや永島さんはやっぱり新日本時代のいい頃のイメージがまだ残っていたんでしょうね。

谷津　そうだよ。だってさ、「興行なんて水もんでしょ」って言ったら、長州さんなんかは「水もんっていうのは水があふれるから水もんなんだ」って言うんだからな（笑）。

—アハハハハハ!

谷津　そんなこんなで旗揚げ戦が終わった頃に、「もうダメだな」って確信したよ。

—旗上げ戦で白旗ですか（笑）。

谷津　もう次元が低すぎ!　宣伝カー回したりとか、時代錯誤も甚だしい。まだSPWFでやってたことのほうが斬新だったよ。

—確かにSPWFでの津谷章嘉なんかは非常に斬新でした!（笑）。

谷津　まあ、あれはおいといてな（笑）。

—永島さんの話だと、（佐々木）健

目ん玉も飛び出る!?　WJズンドコ史

※ほんの一部です。あしからず。

2002年

11月12日　株式会社ファイティング・オブ・ワールドジャパン、通称WJプロレス設立会見。長州は「プロレス界のど真ん中を歩いてやる」「目ン玉が飛び出るようなストロングスタイル」と、WJの方向性を表現。社長に就任した福田政二氏は「長州の新革命魂を前面に立て、メガトン級以上のマグマ級のプロレスの息吹を感じさせる団体にしていく」と所信表明

11月20日　谷津嘉章、石井智宏、高智政光、宇和野貴史らが入団。谷津は「20周年のプロレス人生の集大成として、全知全能で残りの格闘本能をかけたい」と意気込んだ

2003年

1月20日　佐々木健介が入団

2月4日　越中詩郎、鈴木健想、保永昇男レフェリーが入団

2月12日　ノア所属のまま海外遠征中だった大森隆男がノアを退団し、フリーとして参戦を表明

2月13日　鎌倉の海岸で大仁田厚が越中詩郎、永島勝司氏立ち会いのもと電流爆破の実験を行ない、スイカを木っ端微塵に

3月1日　横浜アリーナで旗揚げ戦「MAGMA01」を開催。メインでは長州vs天龍のシングル6連戦の第1戦が行なわれ、長州がリキラリアットで勝利。観衆は1万3200人超満員札止め（※もちろん主催者発表）

3月15日　東京・後楽園大会。WJ初の後楽園大会。メインでは天龍が長州に"53歳"で勝利し、旗揚げ戦のリベンジに成功

3月18日　群馬・太田市民体育館。"頭部打撲"と診断された天龍がこの日から欠場に（※じつは負傷していたのは長州）。旗揚げシリーズの目玉だった長州vs天龍の6連戦は、わずか3戦で頓挫

3月19日　埼玉・草加スポーツ健康都市記念体育館。長州が"全身の倦怠感"との理由で、この日から欠場



WJ崩壊後もリキプロで使用していた大田区の道場だったが今年2月いっぱいで残念ながら閉鎖。かつて、この道場では激しいトレーニングはもちろん、餅つき大会やファン参加のちゃんこパーティなども頻繁に行なわれていた。右端にいるのは現グラバカの福田力です！

WJ"地獄のど真ん中"一部始終

介さんがWJ入りしたのも、すんなり入団させるのはどうかってことで、アングルを組もうと思ったら、長州さんに「よけいな仕掛けは必要ねえ」と言われたみたいですけど。

谷津　健介だってかわいそうだよな。長州さんは先輩だからついて行かざるをえなかったわけでしょ。

――そのあとX－1を開催するときに健介さんは約500万円をWJに貸して、いろいろとトラブルになったみたいですからね。

谷津　ご愁傷様としか言えないよな（苦笑）。

――いま裁判で表沙汰になっているのは、WJでは入団時に支度金として、ほとんどの選手が約500万円もらっていたみたいなんですけど、そのリストに谷津さんの名前は入ってなかったんですよ。

谷津　俺はもらってないもん。

――あ、そうなんですか。中嶋（勝彦）くんにも200万円以上支払われていたみたいですけど。

谷津　そんな話は辞めたあとで聞いたよ。さすがに怒ったけどな（笑）。

――なんでもらえなかったんですかね？

谷津　要するに長州さんとか永島さんとかが引っぱってきた人はもらえたってことじゃない？　俺が連れていったヤツらももらってないから。たぶん、大森（隆男）くんももらったんじゃないか？　まあ、それも含めて、スタートからズッコケてるんだよ、WJなんて。

――ズッコケてますね（笑）。

谷津　だって永島さんがわかってねえもん。過去の栄光ばっかり言って。

――永島さんは永島さんで長州さんのことを「カ、カテエ！」って言ってましたけど。

谷津　そんなこと言ったら、永島のオヤジだってカテエよ！

――永島さんもカテエ、と。

谷津　全然古い！　長州さんは柔軟性がないって言うけど、永島のオヤジだってねえよ。さっきの本もチラッと見る限り、永島さんの目線で書かれてるけど、俺から言わせれば、永島のオヤジも同罪だよ。なんだか知らないけど経費ばっかり使っちゃってな。

――そうでしたか（笑）。

谷津　あの人は酒が大好きだから居酒屋で毎日飲んだりとか。でも福田さんみたいにそんな高い店じゃないけどな（笑）。まあホント、バカ負けだよ。

――WJでは旗揚げ戦から長州vs天龍の6連戦をやると発表して、途中で天龍さんが負傷欠場したかたちになってますが、じつは長州さんの負傷が原因で流れたみたいですね。

谷津　そうそう。そのへんからはもう歯車が狂いっぱなしだよ。まあでも、その6連戦っていうのは悪くなかったんじゃない？

――企画としては間違ってなかった、と？

谷津　そう思うよ。東京でやるようなカードを地方のお客さんにも見せるっていう、要は出血サービスだよな。ホントにやってくれるんだろうかって思ってたら、途中でなくなっちゃったけど（苦笑）。

――わずか3試合で頓挫してしまいましたからね。

谷津　そうだろ。長州さんは営業にも全然協力してくれなかったからな。

――長州さんは自分が出ればチケットは売れるだろうっていう発想があったみたいですね。

谷津　かなりあったんじゃない？　そのくせ売れないと俺たち営業のせいにするから。「おまえらがしっかりやらねえから」ってさ。こっちとしては、長州さんが出るからってチケットが売れるわけでもないから当然「何を！」ってなるんだけど、彼から見れば、人が入らなかったら「営業が悪い」の一点張り。だから俺なんかはダメになるっていうのは早い段階からわかってたんだよ。

――そのあとも、悪いことは重なるもので、ジャイアント落合さんが道場で亡くなったり、起死回生を狙って仕掛けたX－1も失敗に終わって。

谷津　X－1なんていうのも、中嶋を売り出すための一つの策としてやったわけだけど、無理だっていうの、あんなものは！

――谷津さんはX－1には直接は関わってなかったんでしたっけ？

谷津　俺は一切タッチしてなかった。俺は「プロレスの興行の営業はしますけど、そっちはできません」ってハッキリ言ったの。

――それはどういった意味で？

谷津　もちろん、企画の段階で無理だろっていうのもあったし、あとは単発の興行だったら俺がいなくたっ

WJは時代錯誤も甚だしい。まだSPWFのほうが斬新だよ！

3月20日　千葉・流山市民総合体育館　当時、国会議員だった大仁田厚がアメリカのイラクへの武力行使による国会からの「禁足令」により、この日の大会を欠場

4月6日　都内・大田区でWJ道場の道場開きを行なうも、道場内はマスコミには公開せず

5月4日　神戸・神戸ワールド記念ホール。長州が試合後に引退を示唆する発言

5月20日　6・12相模原大会を「諸事情により中止」と発表。WJでは、この後も同様の理由での中止が相次ぐことに

5月22日　東京・後楽園ホール。鈴木健想が高智政光とのシングルマッチで自ら両肩をマットにつけ、不可解なフォール負け。試合後、健想は「おまえは長州のイエスマンじゃねえか！　この小長州！」と健介批判

6月2日　千葉の教育機関を視察に訪れた大仁田厚参議院議員（当時）が山中で崖から転落し右耳を42針縫う大ケガ。参戦予定だった同月8日の浜松大会は欠場に

7月8日　岩手・岩手県営体育館　8年ぶりに長州とのタッグを結成した天龍が、試合後に消臭スプレー（消臭力）を取り出し、「臭えんだよ、長州」と不機嫌にアピール

7月20日　東京・両国国技館。WJ最強決定トーナメントを開催。決勝で健想を下した優勝した健介が初代WMG（ワールド・マグマ・ザ・グレーテスト）王者となるも、海外で製作中だった同ベルトは「輸送上のトラブル」のためこの日までに届かず、健介の腰にベルトが巻かれることはなかった

7月28日　都内・WJ道場。プロレスラーデビューを目指していたジャイアント落合さんが練習中に倒れ、意識不明に

8月7日　8・21大阪大会で健介のWMG王座に挑戦するはずだったベイダーの欠場が発表される。代役はダン・ボビッシュ

8月8日　入院中のジャイアント落合さんが急性硬膜下血腫により逝去

8月21日　大阪・大阪府立体育会館。この日の大会を最後に鈴木健想が離脱

9月6日　神奈川・横浜文化体育館。金網総合格闘技イベント『X－1』を開催。大会途中で金網が壊れ、関係者が金網を押さえながら試合を行なうなど、さまざまな伝説を残す

ていいわけよ。俺はずっと地方のコースを切ったりしてたわけだから、そんな暇もないしな。

―PRIDEに出場したこともあるわけですし「谷津も出てくれ」みたいな話はなかったんですか？

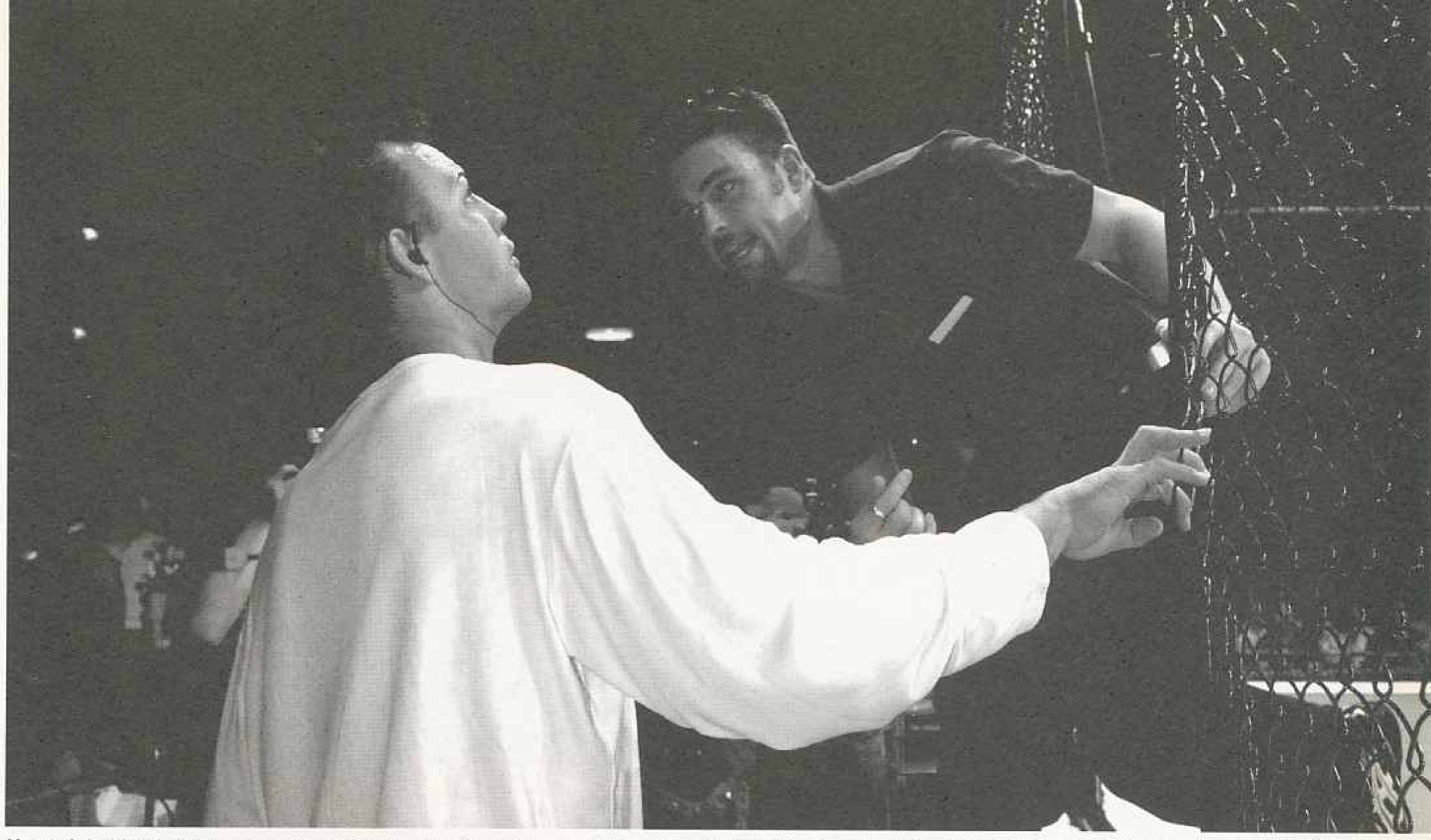
谷津 ないない。俺はハナからそんなの相手にしなかったから。どうなるかわかってるから。だいたい、餅は餅屋なんだから、無理ですよ。

―でもX-1に出てた選手がいまUFCとかで活躍してたりするんですよね。

谷津 そうみたいね（笑）。笑っちゃうよな。

―たしか、X-1が終わって数週間後に谷津さんは『東スポ』でWJの内情を暴露したと思うんですが。

谷津 だから暴露じゃなくて俺は正当な理由を語っただけだよ。



壊れた金網を関係者が必死に押さえながら大会を続行した03.9.6『X-1』。マサ、長州とともに大会をプロデュースしたブライアン・ジョンストンも首を傾げっぱなし。



サムライTVでの『X-1』中継のゲスト解説を務めた北斗晶だったが、大会運営資金として健介が会社に貸した500万円近くが返済されなかったため、長州と健介ファミリーはこれ以降距離を置くかたちに。



“逆方向のど真ん中”なるキャッチフレーズがつけられた『X-1』でデビューしたのが中嶋勝彦。ジェイソン・レイを秒殺した中嶋の祝福に武蔵がリングイン。WJ退団後の中嶋にはK-1参戦の噂も出ていた。



興行不振が続いていたWJが起死回生を狙ってスタートさせたのが金網総合イベント『X-1』だ。大会前、永島専務は「サップにも観てほしい」とラブコールとともに招待状を送るも、サップは姿を見せず。

“地獄のど真ん中” WJ一部始終

―失礼しました（笑）。

谷津 まあでも、その頃には、長州さんもじれったくなったんじゃない？「客が入ってねえじゃねえか！」なんて言ってさ。

―前とあんまり変わってないですね（笑）。

谷津 さすがにそんな時期になっても俺たち営業のせいにしてるから、俺は言ってやったんだよ。「売れない売れないって言うけど、アンタらに商品価値ねえからだよ、コノヤロー！」ってさ。

―えっ、それは長州さんにですか？

谷津 言ってやったよ。そしたら「おまえ、もう営業から外れろ」って言うから、「わかったよ」って言って俺はもうやらなくなったの。バカバカしくて。それで辞めちゃったんだよ。

―たしか、谷津さんが辞める直前の沼津大会ではチケットがプレイガイドで1枚しか売れなかったという報道もありましたよね。

谷津 沼津大会は俺もけっこう売ってたんだよ。だけどもう営業のヤツらに「売らなくてもいい」って言ったの。売ったところでみんなに迷惑かかると思って。だから俺が担当したのは、三重県の津大会まで。「じゃあ営業は俺がやる」なんて言うヤツがいたから「じゃあ、コース切って自分でやってみろ」って言ってやったんだけど、誰もコース切れなかったんだよ。

―それぐらいから地方巡業はほとんどやらなくなりましたよね。

谷津 単発でやるしかなくなったけど、永島さんができるわけじゃねえし。あげくの果てに「営業と一丸となって」って最初言ってたのが、「俺は営業じゃねえ、広報だ」なんて言ってさ。そんなこと言ってる場合じゃねえだろって思ったけどな。

―谷津さんが辞める前には鈴木健想さんもギャラの未払いとかがあって辞めちゃいましたけど、谷津さんから見たらしょうがないっていう感じですか。

谷津 だから、コンセプトとして、新日本以上に高いギャラで引っぱってきたわけだよ。本来なら「新日本の2分の1のギャラになるけど、社員もみんなで頑張りましょう」って考えるなら、まだうまくいったかもしれない。だってそれが最初から新日本の1・5倍なんだから無理だよ。

―1・5倍でしたか。それはよっぽど興行で成功しないと長続きはしませんよね。

谷津 そういうこと。だから逆なんだよ！　新日本で100万もらってたら、50万でみんなやらないと。長州の男気で、「俺についてこい」って言ってね。裏で金をちらつかせて「ついてこい」じゃなく、表から「ついてこい」って言わないとマズいわけよ。金でだったら誰でもついていくんだから、そんなもん。

―金の切れ目が縁の切れ目になったというか。

谷津 ホントそうだよ。「半分の給料になるけど、頑張ってやっていこ

まだまだ続く WJズンドコ史

9月16日 発表済みの10月22日の後楽園大会がボクシング興行とバッティングしていることが発覚。のちにWJで正式に会場を押さえていなかったことが判明、その後、WJからお詫びとともに正式に大会中止がアナウンスされる

9月30日 この日付の『東京スポーツ』の一面で谷津嘉章がWJの内部事情と自身の退団を明かす

10月1日 WJの選手&関係者で緊急会議が行なわれ、内定していた宮崎満教氏の社長就任が選手サイドの反発によりお流れに。この会議を受け、大部分の選手の契約書が返却される

10月3日 財政上の事情により、10月26日の木更津大会が中止となる

10月19日 青森・新青森総合運動公園。『X-1』で骨折し、欠場となった健介がシリーズ中の全大会で握手会を開催すると発表するも、盟友のホーク・ウォリアーの葬儀に出席するため緊急渡米。握手会は一回で終了。この日、越中、大森が永島専務にリングデビューを要求するも結局は実現せず

10月29日 WJや『X-1』で活躍するダン・ボビッシュのPRIDE参戦が発表される。ボビッシュは11・9『PRIDE・GP』でゲーリー・グッドリッジと対戦するも打撃で秒殺負け。会場で見守っていた福田社長は「勝てる試合だった」と無念の表情

10月30日 ホームページ上にて宮崎大会の中止、鹿児島大会の延期を発表。この日発売の『週刊ファイト』で新間寿氏が9・23WJ静岡大会のプレイガイドでの売り上げが1枚だったことを暴露

11月1日 東京・日本武道館。越中詩郎がノアの武道館大会に乱入し、全日本時代のライバル、三沢光晴に対戦要求

11月7日 東京・後楽園ホール。大森隆男がZERO-ONE（当時）後楽園大会に柔道着に白覆面姿の怪覆面Xとして参戦。試合中に素顔になった大森は、それ以降もZERO-ONEに継続参戦

11月18日 東京・ZERO-ONE道場。橋本真也の会見中に長州力が乗り込み、俗に言う〝コラコラ問答〟を展開。WJ長州軍とZERO-ONEの抗争が本格的に

まあ、いまになってみれば WJもみんないい思い出だよ

う」って、ど真ん中だかなんだか知らないけど、理想のプロレスを追っていくんだったらまだ可能性はあったよ。それが、俺とかにはメチャクチャ待遇悪くして始めたってあとから知ってよけい腹立ったよ。

――支度金がほかの選手に払われたのを知ったのはWJを辞めてからなんですね？

谷津　それまでまったく知らなかった。だからそれは○○っていう経理の人に聞いたからわかったんだよね。その人は福田さんが経理として札幌から呼んだんだけど、銀行マンだったの。その人が経理部長をやってて、彼と話をしてて「絶対この団体は無理だぞ。たぶん3年以内に潰れる。ヘタしたら来年だぞ」って言ってたんだけど、全部そのとおりになったわけだよ。

――なっちゃいましたね。

谷津　経理の彼も、「やっぱり谷津さんの言うとおりでした」なんて言ってたしな（笑）。でも俺も支度金とかもらわなくてよかったと思うよ。

――それはどうしてですか？

谷津　だって、そんなのもらったら罪だよ。辞められなくなっちゃってたでしょ。でも、俺はもらってないし、逆に営業本部長として自分のギャラの何倍もチケットを売って会社に利益をもたらしてるわけよ。だから、大手を振って辞めて、「ふざけんな、コノヤロー！」って言えるわけだよな（笑）。

――よっ、営業本部長！（笑）。

谷津　「べつに、こんなとこにいなくたって食っていけるわ！」って感じだよ。俺も頭を下げられたらいろいろと改革案も考えてたんだけど、そんな人間は出てこなかったしな。

――谷津さん退団後は、崩壊へ向けて加速していった感じでしたよね。

谷津　もう末期ガンにモルヒネ打つようなもんで、給料カットしたり、多少努力はしたみたいだけど、もう無理だよな。

――いまは永島さんなんかは福田社長から借りたお金の返済で大変な生活をしてるみたいですけど。

谷津　かわいそうだけども、ある意味、自業自得だわな。彼なんかは新日本にいた頃以上の金をWJでもらってたわけだよ。まだ結果も出てねえのに給料は増えちゃってるんだから、それは続かないっての。

――谷津さんからするとWJは潰れるべくして潰れた、と？

谷津　そうだよ。だいたい普通の会社だってそうじゃん。まず始めてみて、2～3カ月は最低限の資金でやって、それから給料とかは決めるもんだよ。それがいきなり儲かる前提で設定してるんだから、それは無理な話だよ。テレビ局なんかもテレビ東京の話があったのに「12チャンじゃダメだ！」とか言ってたしな。

――テレビ東京じゃあダメだ、と。

谷津　でも結局12チャンの話もポシャってね。ホント、つくづくバカな団体だったよ！

――WJはバカな団体でしたか（笑）。長州さんとはその後、話をしたりとかはないんですか？

谷津　一切ない。なんの価値観も合わないしな。

――永島さんとは？

谷津　会う必要もねえだろ。まあでも、福田社長とはたまに電話で話したり交流はあるよ。

――福田社長とはいまでもつながりがあるんですね。

谷津　たまに電話がかかってきて、「おまえの言うとおりになっちゃったな」なんて言ってるよ（笑）。

――ある意味、福田さんも騙されたって思ってるところもあるんですかね。

谷津　絶対ありますよ。だから「社長、もうちょっと早く俺と出会ってたらね」って言ったら「遅いよ、バカヤロー！」って（笑）。

――アハハハハ！

谷津　でも、福田さんも浅はかなんだよな。やったことないことをやっちゃったもんだから。結局は長州とか永島ばっかりが悪いんじゃなくて、三者三様でやったことだから。福田さんはたまたま金を貸しちゃったことになってるけど、3人が悪いんだよ、やっぱり。

――福田社長が金を出さなかったらWJはできてなかったわけですからね。

谷津　そういうことだよな。「ど真ん中だ」「男気だ」なんて言っても、結局はみんな金だったんだよ。ホントに男気で動いたのは俺だけだろ。興行のことだって誰もわかってなかったしな。

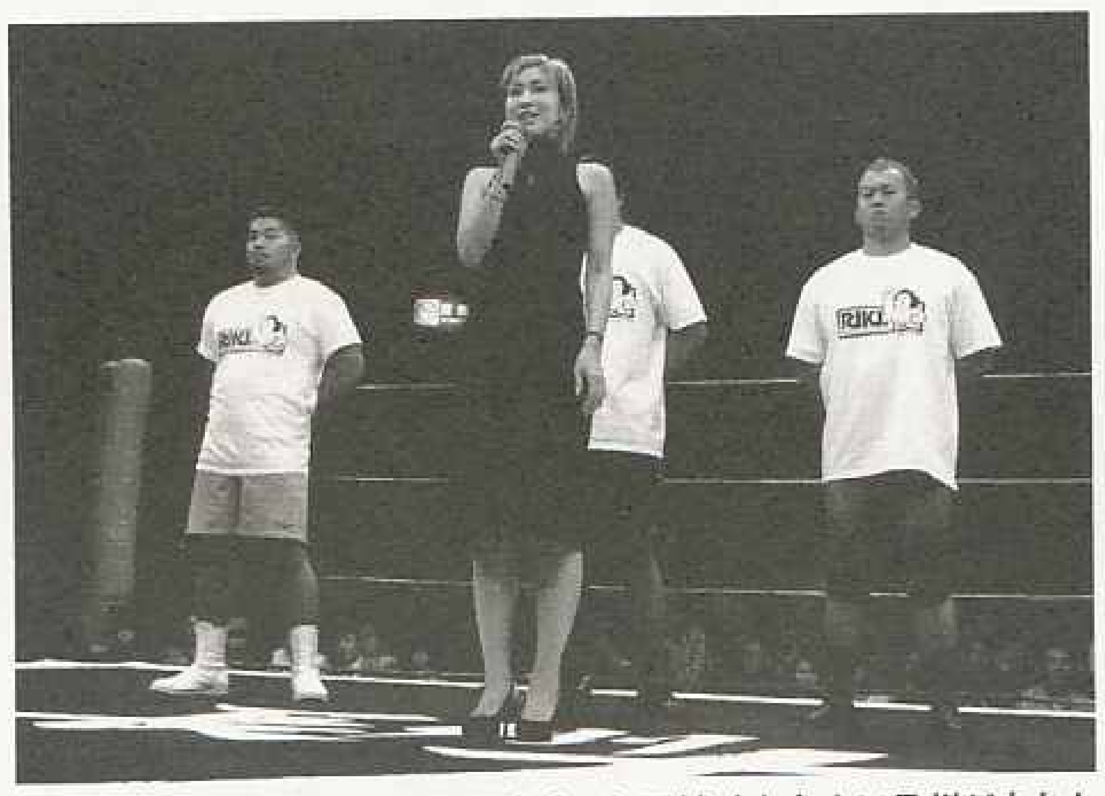
――谷津さんは男だった、と。では最後に、谷津さんとってWJとは？

谷津　まあ、いまになってみればみんないい思い出だよ。一切ひっくるめて。逆に言えば楽しかったな。不揃いで個性豊かな連中がいっぱい集まってたから（笑）。

【09年3月7日／都内某所にて収録】



崩壊間際のWJで大暴れしたのが越中詩郎、安生洋二、木村浩一郎、大森隆男らレイバーユニオン。リングに永島専務を上げ、客前で未払い分のギャラを請求したり、レスラーデビューを要求するなど、やりたい放題！



WJ崩壊後、石井智宏、宇和野貴史、和田城功を中心に長州が立ち上げたのがリキプロ。代表はWJのフロントとして活躍した立石史さん（現在二児の母）。現在もリキプロでは単発興行ロックアップを主催している。

11月21日　WJは規模縮小することを発表。所属は長州以下若手5人となり、スタッフは11月20日付で契約社員、もしくはアルバイトに。巡業バスも売却することに

12月9日　大阪・大阪府立体育会館。健介がひさびさに新日マットに登場。WJとは10月以降契約していないことが明らかに

12月14日　東京・両国国技館。長州率いるWJ軍と橋本率いるZERO-ONE軍が全面対抗戦で激突するも、最後は橋本が長州を下し、ZERO-ONE軍が勝利

2004年

1月5日　東京・後楽園ホール。メインイベントで中嶋勝彦が石井智宏相手にプロレスデビュー

1月10日　北海道・札幌テイセンホール。この日予定されていた興行が大雪による飛行機欠航により大会中止に。翌日の同所での興行をダブルヘッダーで行なうことに

1月11日　北海道・札幌テイセンホール。大会後に福田社長が「本業に専念します」と辞意を表明し、WJから撤退を表明。永島専務は「これからは僕と長州が中心になってやっていく」と宣言。この日をもってWJは事実上の活動停止に。都内の一等地の事務所も道場内に移設し、社員も解雇、経営のスリム化を図り自主興行のかたちで活動を続けていくことに

3月1日　東京・後楽園ホール。WJの1周年記念興行として行なわれた本大会。試合前にはリング上で「WJは死なない。夏までに大きな大会を必ず実現させる！」と宣言した永島専務だったが、大会終了後、会場費を全額支払えず、後楽園ホール担当者に軟禁される

3月31日　この日をもって中嶋勝彦がWJを退団。これ以降は健介オフィスに所属

6月21日　熊本・熊本興南会館。この日がWJとしての最終興行に

7月13日　道場にて会見を行なった長州が3カ月間の活動休止を発表。WJとしての活動は完全に休止となるが、選手会が主催する自主興行『ロックアップ』を長州がサポートしていくことに

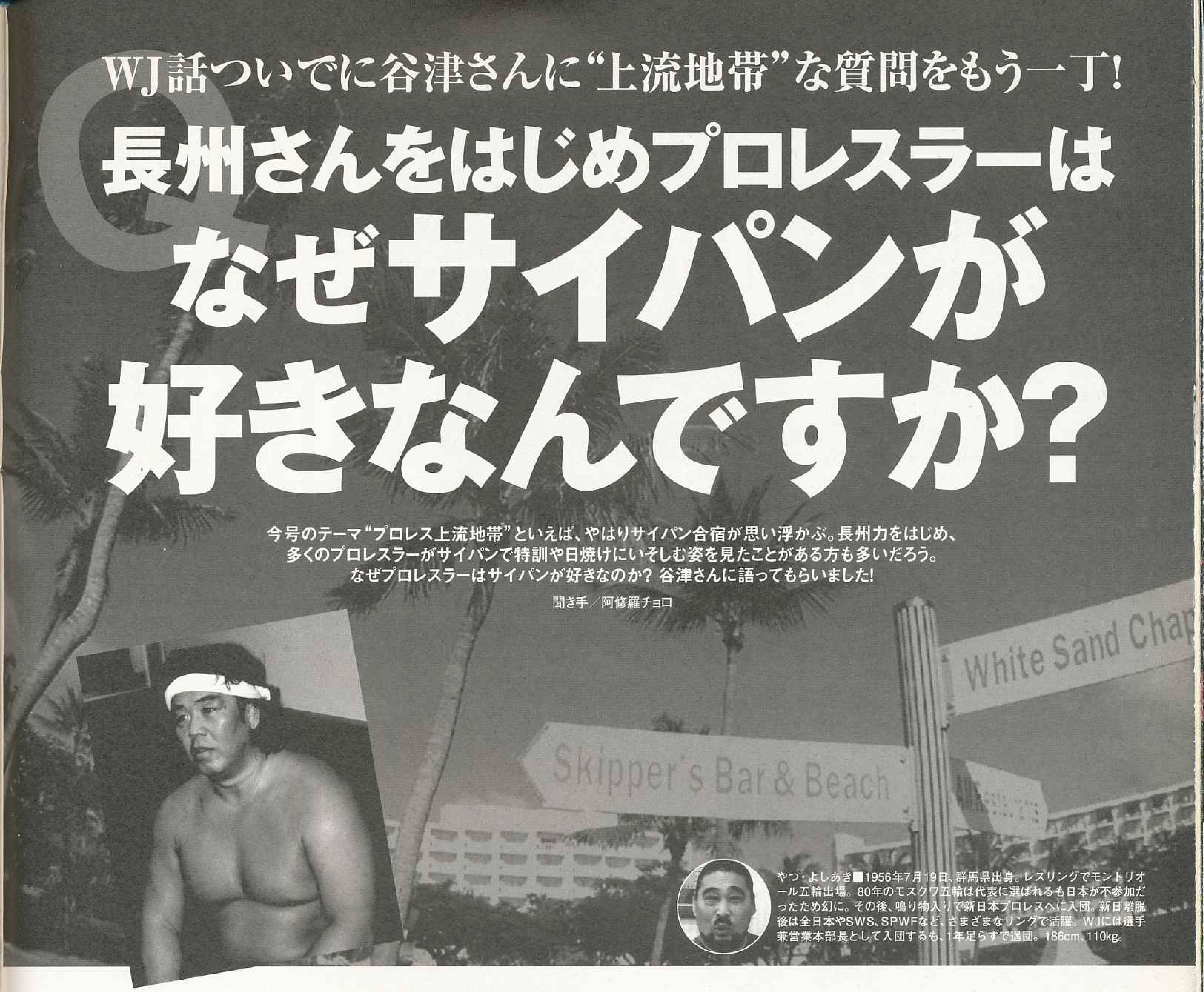
8月13日　長州力のもとに残った若手の石井智宏、宇和野貴史（のちに引退）、和田城功の3選手がリキプロを設立。代表にはWJプロレス時代からフロントとして活躍した立石史さんが就任

WJ話ついでに谷津さんに“上流地帯”な質問をもう一丁!

Q 長州さんをはじめプロレスラーは なぜサイパンが好きなんですか?

今号のテーマ“プロレス上流地帯”といえば、やはりサイパン合宿が思い浮かぶ。長州力をはじめ、多くのプロレスラーがサイパンで特訓や日焼けにいそしむ姿を見たことがある方も多いだろう。なぜプロレスラーはサイパンが好きなのか? 谷津さんに語ってもらいました!

聞き手／阿修羅チョロ



やつ・よしあき■1956年7月19日、群馬県出身。レスリングでモントリオール五輪出場。80年のモスクワ五輪は代表に選ばれるも日本が不参加だったため幻に。その後、鳴り物入りで新日本プロレスへに入団。新日離脱後は全日本やSWS、SPWFなど、さまざまなリングで活躍。WJには選手兼営業本部長として入団するも、1年足らずで退団。186cm、110kg。

――谷津さん、WJ話ついでに、もう一つプロレス界の〝上流地帯〟な質問に答えていただければと思ってまして。

谷津 なんだよ、その質問は。WJと〝上流地帯〟は全然無縁だろうよ（笑）。

――まあそうなんですけどね（笑）。で、何を聞きたいかというと、なぜ長州さんをはじめ、プロレスラーはサイパンが好きなのかという、非常にくだらない質問なんですが（笑）。

谷津 まあ、サイパン好きなプロレスラーといえば長州さんになるわな。それは間違ってない。で、なんだっけ?

――なぜ長州さんをはじめ、プロレスラーはサイパンが好きなのかなって。

谷津 そんなもん俺が知るか! 直接、長州力に聞いてこい!!（笑）。

――聞けるんだったら、とっくに聞いてます。長州さんは数年前のインタビューで「サイパンは好きですか?」と聞かれて、「好きなんて言葉で片づけられるもんじゃないよ」って言ってましたね。

谷津 へぇ～。俺が思うに、なぜプロレスラーがサイパンに行くかというと、まずは日焼け目的だな。これは長州さんもそうだけどな。まあでも、日焼けするだけだったら日本でも、それこそ日焼けサロンでもできるっていう話じゃんか。

――そうですよね。

谷津 そういう意味では、確かに〝上流地帯〟の趣味と言えるかもしれないな（笑）。でも、羽振りがいいときなら、サイパンだろうがハワイだろうが、あるいはシャンパンだろうが、どこで日焼けしようが誰も文句は言わないっつの。

――さすがにシャンパンでは日焼けはできないと思いますが（笑）。

谷津 （無視して） ただし、またWJの話に戻るけども、長州さんはWJのときも何回かサイパン合宿してるだろ。

――旗揚げ前のサイパン合宿に単身乗り込んだ石井智宏選手が弟子入りを直訴したなんてこともありましたし。

谷津 なんかずいぶんと壮大なアングルを組んでるよな（笑）。でもな、俺がWJに対して、「こりゃあ、ダメだ」って思ったのはそういうのも原因の一つ。旗揚げ前で、まだ収益も生んでないのにサイパンなんかで合宿してる場合じゃねえだろって。……まあ俺もサイパンは嫌いじゃないんだけどな（笑）。

――谷津さんも嫌いではない（笑）。

谷津 そりゃあ、そうですよ。狭い島国のジャパンで暮らしてたら、たまには南国の島で羽を伸ばしたいだろ。

――そうですよね。ちなみにYahoo!で「長州 サイパン」で検索したら4万4000件以上ヒットしたんですよ。

谷津 あ、そう。長州さんは新日本やジャパンプロレス時代から何かしら理由をつけては、合宿だ、家族旅行だってサイパンに行ってたからな。

――ちなみに、カメラ嫌いで有名な長州さんが、カメラが嫌いになった決定的な理由がサイパンで『フライデー』されたかららしいです（笑）。

谷津 それはちょっとハメを外しすぎたな（笑）。でも、長州さんに限らずプロレスラーがサイパンに行くっていうのは、ある種、プロレスラーとしてのステータス的な部分も大きいだろうな。

――プロレスラーのステータスですか。

谷津 サイパンは比較的お金もかからないし、お手軽感はあるけども、やっぱり、そこそこプロレスラーとして活躍しないと行けるところじゃないからな。

――確かに。そういえば、谷津さんが三崎和雄選手とばったり会ったのもサイパンだったんですよね?

谷津 そうそう。まあでも、俺なんかはサイパンは、わりとビジネス絡みで行くことが多いんだよ。

――サイパンでビジネスですか!?

谷津　いや、ビジネスというよりも、知り合いのお手伝いみたいな感じで、サイパンには何回か行ってるんだよ。

――たぶん、それとも関係してるんだと思うんですが、一応「谷津　サイパン」でも検索してみたんですよ。

谷津　おぅ、何件だった？

――3万2000件となかなかのヒット数だったんですけども。それで、一番上に表示されていたのが『marshu（マーシュ）』という福井県の美容室のホームページだったんですよ。

谷津　そうそう。そこの人とちょっとした知り合いでな、テレビのコマーシャルの撮影でサイパンに行ったんだよ。

――『kami-pro』読者もゼヒ、こちらにアクセス（http://www.marshu.co.jp/making.html）してほしいんですけど、モデルの女の子と一緒に、なぜか谷津さんが出演しているCMのメイキングシーンを発見したんですよ。

谷津　あ、発見されちゃったか（笑）。まあでも、俺の場合は誰にも迷惑かけてないからいいじゃんか。まあ、自分で負担してるわけでもないけどな（笑）。

――それなら問題ないと思います！（笑）。しかし、そのホームページで紹介されていた谷津さんのコミカルなウォーキング写真は最高でした！　福井県のオシャレな美容室と谷津さんにどんな接点があるのかはよくわからないですが、そういった謎の交遊関係も谷津さんらしくて素敵だな、と。

谷津　べつに何もうしろめたい関係はねえっつの！（笑）。WJみたいに裁判沙汰になるより、サイパンで日焼けでもしてたほうがよっぽど健全だろうよ。

――〝裁判〟と〝サイパン〟をかけたわけですね（笑）。え〜、そのこころは？

谷津　なんだよ、いきなり（笑）。

――いや、谷津さんなら、うまくオチをつけてくれるかと思いまして（笑）。

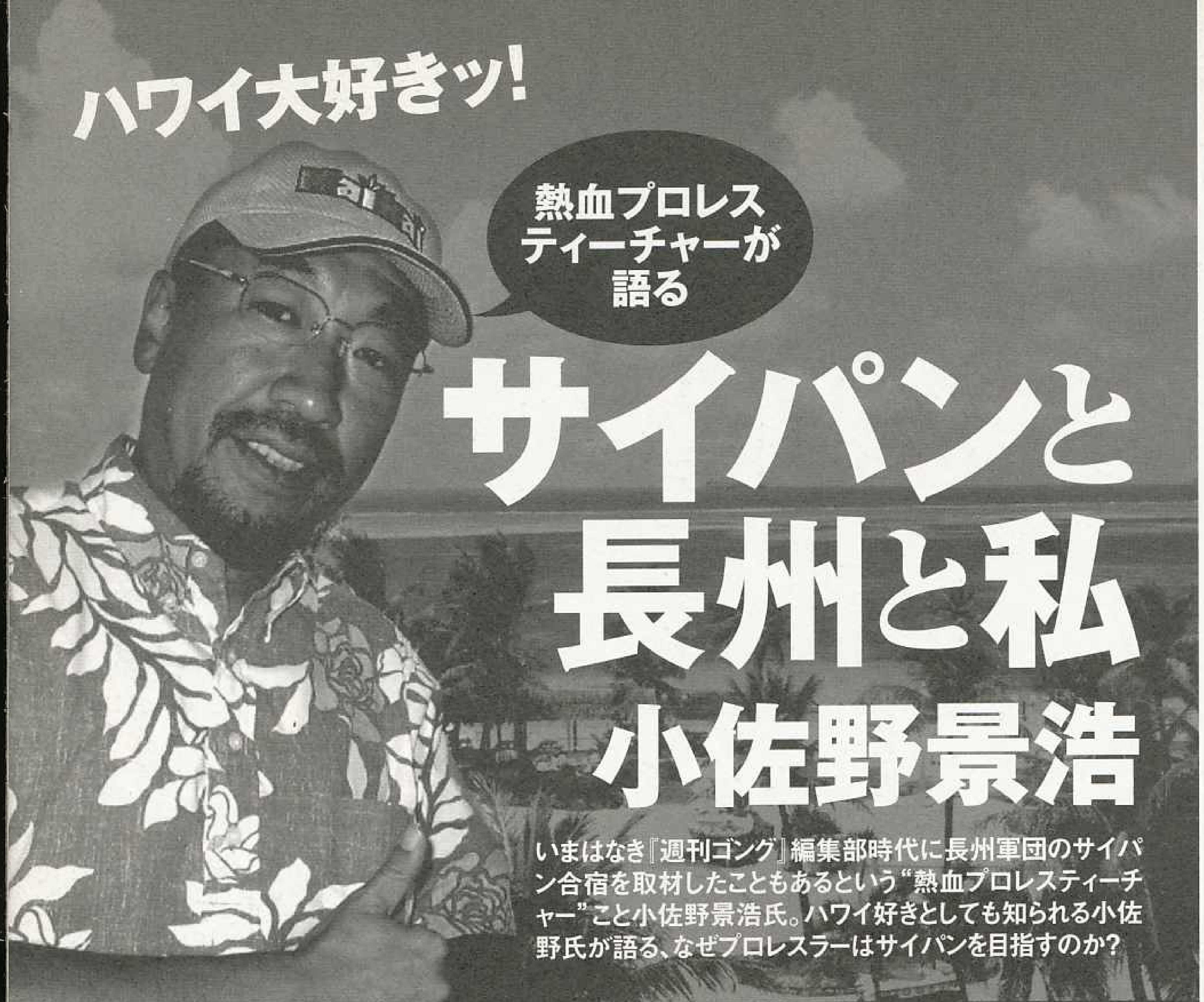
谷津　……サイパンで黒くなるのはいいけども、裁判で黒はマズイ……って、ちょっと違うか（笑）。

――ガハハハハ！　ど真ん中の解答ありがとうございした！

【09年3月7日／都内某所にて収録】



そんなもん俺が知るか！　長州さんに聞いてこい!!



ハワイ大好きッ！

熱血プロレスティーチャーが語る

サイパンと長州と私

小佐野景浩

いまはなき『週刊ゴング』編集部時代に長州軍団のサイパン合宿を取材したこともあるという“熱血プロレスティーチャー”こと小佐野景浩氏。ハワイ好きとしても知られる小佐野氏が語る、なぜプロレスラーはサイパンを目指すのか？

なぜ、長州さんをはじめプロレスラーにサイパン好きが多いのかってことなんだけど、マジメに答えると、まず日本から近くて時差が少ない。あと気候が暖かくて、金額的にもそれほど高くないっていうのが理由なんじゃないかな。

サイパンと聞いてイメージするのは、やっぱり長州さんなんだけど、長州さんがよく泊まってるホテルがあるのはサイパンでもなんにもないところなんですよ。だからリラックスして練習だったり日焼けに専念できるんでしょうね。

プロレスラーが日焼けするっていうのは昔からの伝統みたいなもんで、日プロとか国際プロレスの時代から、坂口（征二）さんやストロング小林が海外から帰ってくるときなんかは、日本に戻る前にハワイとかに寄って日焼けしてワイルドな感じで戻ってきたりしてましたから。だから、長州さんなんかもその流れを汲んでいるんだと思うんだけど、それもイメージ的な問題だよね。プロレスラーは色が白いよりは黒いほうが強そうに見えるっていうだけで（笑）。

僕も長州さんのサイパン合宿を取材したことがあるんだけど、長州さんたちが全日本から新日本に出戻りする直前で、たしか87年だったから、もう22年前になるよね。そのときは朝10時ぐらいからプールサイドを占拠してベンチプレスの道具から何から持ってきて、それぞれがちゃんと練習してましたよ。

僕が行ったときにいたのが、長州力、スーパー・ストロング・マシン、小林邦昭、ヒロ斉藤、馳浩、佐々木健介、笹崎伸司。で、谷津さんや寺西（勇）さんなんかは長州さんたちと別れて全日本に残ったから来てなかった。

まあでも、取材といってもとくにやることがないんですよ。ひたすら練習してるか日焼けしてるだけだから、こっちは勝手に写真を撮って、お昼ごはんを食べたあとは、当時まだ若手だった馳（浩）くんとか、同い年のヒロ斉藤を誘ってジェットスキーみたいなのをやって、その写真を撮った記憶があるよね（笑）。

時差を考えるとサイパンのほうが楽だけど、僕は断然ハワイ派です！

僕は個人的にハワイが一番好きなんだけど、ハワイは時差もかなりあるし、人目にもつくし、それなりに時間も必要だから、短期間の滞在だと疲れちゃうんですよ。馬場さんみたいに自分でマンションを持ってるとかだったらべつだけど、練習をするとしたらサイパンっていうのは一番適してるんじゃないかな。

まあ、僕の場合は特訓ではなくて、遊びに行ってるだけなんでね（笑）。5日ぐらいの休みが取れたらサイパン。もっと長い休みが取れるんだったらハワイ、みたいな感じですね。どっちが好きかと言われたら断然ハワイ派ですけどね。



おさの・かげひろ■1961年9月5日、神奈川県出身。フリーのプロレスライターとして『Gスピリッツ』、『東京スポーツ』などで執筆中。プロレスネタはもちろん、ハワイ情報も満載のHPアドレス→http://maikai.boy.jp/

こんな時代の……“プロレスLOVE”とは何か？究明座談会‼



08年に発売したマッスル本『八百長★野郎』（小社刊）は賛否両論がクッキリ分かれるも、表立っての批判はないという不思議な反応だった。加えて「『kamipro』にはプロレスLOVEがない」という批判もある中、『八百長★野郎』に携わった編集部のジャン斉藤、真下義之、そして格闘技ライターながら『八百長★野郎』を評価した橋本宗洋氏が“プロレスLOVE”について語り合う上流地帯時代の異色座談会！

大会写真／平工幸雄

『八百長★野郎』とは何か？

「元プロレスファンに捧げるプロレス再入門書」として08年10月に発売（小社刊）。監修者・マッスル坂井のインタビュー＆対談と菊地成孔、森達也、大槻ケンジなど知識人インタビューでカミングアウト時代のプロレスの見方を『マッスル』を通じて捉え直した問題作。

――今日は、なんと「プロレスLOVEとは何か？」を考える座談会なんですが……。

斉藤　ズバリ言って『八百長★野郎』（小社刊）反省会です。

橋本　あ、そういう趣旨なんだ。でも遅すぎやしない？　『八百長★野郎』を出したのって去年の秋くらいでしょ。

斉藤　まあ、せっかくのプロレス増刊号ですし、『ｋａｍｉｐｒｏ』には「プロレスLOVEがない」というご意見を業界の多くの方々からいただいてるんですね。

橋本　ちょっと待って。『ｋａｍｉｐｒｏ』にプロレスLOVEがないのは、いまに始まったことじゃないでしょ（笑）。

斉藤　そうなんですけど、思い当たるフシが凄くあるんですよ。

橋本　アンタは格闘技自体もそんなに好きじゃないでしょ。「プロレスや格闘技に興味はあるけど、愛してはいない」って感じで。

斉藤　だから今回は「完全にプロレスLOVEがない」橋本さんをお呼びして、いろいろと語りたいなって。

橋本　確かに俺はないなぁ。昔はプロレスファンだったけど。だからこそ『八百長★野郎』はおもしろかったんですよ。

斉藤　ああ……、もっとほめてください！「プロレスLOVEがない」とか言われて、けっこう落ち込んでるんですから。

橋本　いや、ホントにおもしろかったよ。去年読んだ書籍のベスト3に入る。１位は杉作J太郎さんの『恋と股間』（理論社）だけど。

――ああ、『恋と股間』にはとても勝てませんけど（笑）。

橋本　だいたいさ、「プロレスLOVEって何？」って話なんだけど。

斉藤　簡単に説明しますと、2000年代のプロレス界の最大の発明は、〝プロレスLOVE〟っていう言葉だと思うんです。プロレスLOVEという言葉をもって総合格闘技の侵攻を少しは食い止めたし、ミスター高橋本の呪縛からもプロレスファンを救ったところもあるんですね。

橋本　プロレスラーがPRIDEやK−1に出ちゃあ負け、って時代に武藤敬司が言いだした、純プロレス回帰のメッセージだよね。

斉藤　ただ、その言葉自体が免罪符や隠れ蓑になって、無条件に「プロレス、大好きです‼」っていう看板を掲げていれば、なんでも許されるムードを業界から強く感じるんですよね。

橋本　ふ〜ん。裏を返せば「プロレス、大好きです‼」っていう看板を掲げてないなら、プロレスを語るなってこと？

――そうですね。武藤本人のニュアンスは違うと思うんですけどね。「こんなプロレスだけど、俺は愛してしまってる」っていう部分が曲解されてて。

斉藤　で、プロレスだけの『ｋａｍｉｐｒｏ Ｓｐｅｃｉａｌ』を作るにあたって、

座談会出席者

ジャン斉藤
本誌編集長。〝雀鬼〟桜井章一の内弟子を経て、『ｋａｍｉｐｒｏ』編集部へ。永久電機などアントニオ猪木の怪しげな事業の調査がライフワーク。『八百長★野郎』ではマッスル坂井のメインインタビュアーを担当。

橋本宗洋
フリーライター。本誌執筆ほか、携帯サイト『ｋａｍｉｐｒｏ Ｍｏｖｅ』でもコラム連載中。08年はDEEPメガトンGP実行委員としても活躍。格闘技メインの元プロレスファンながら『八百長★野郎』を絶賛。

［司会］真下義之
某世界的アーティストの内弟子を経て、『ｋａｍｉｐｒｏ』編集部へ。新日本プロレスや『マッスル』など、プロレス＆文化人系などを担当。『八百長★野郎』では編集作業全般に携わっている。

ある記者から「こんな本を出したら仲田龍さんに怒られますよ！」と（斉藤）

プロレスの方向性をいろいろと考えたんですよ、愛がないながらも。たとえば「ケーフェイを触ったほうがいいのか、触らないほうがいいのか」とか。関係者や団体の人にも話を聞いたんですが、一様に「触らないほうがいい」と。

橋本　へぇ〜、そうなんだ。

斉藤　ただ、破壊王が目指していた〝どプロレス〟的な方向性なら、ケーフェイうんぬんは関係ないじゃないですか。

橋本　言うだけヤボだよね。

斉藤　で、「触らないほうがいい」って人のベースは、おそらく母性本能からのプロレスLOVEなんじゃないか、と。「何からでも守ってあげる！　包み込んであげる！」って感じです。かといって「触ったほうがいい人」にプロレスLOVEがないかといえば、そんなことはなくて。それは父性本能のプロレスLOVEを持ってるんですよ。あえてプロレスを崖から突き落として、その底力というか可能性を試したがる人ですよね。

橋本　で、キミは誰に言い訳してるの？

斉藤　は？　言い訳なんてしませんよっ。

橋本　だって「崖から突き落とすけど、オレもプロレスLOVEを持ってる」って言いたいんでしょ？（笑）。

斉藤　違いますよ〜。ボクはどちらかというと……、プロレスが崖から突き落とされるのを見ているほうなんじゃないのかなあ。

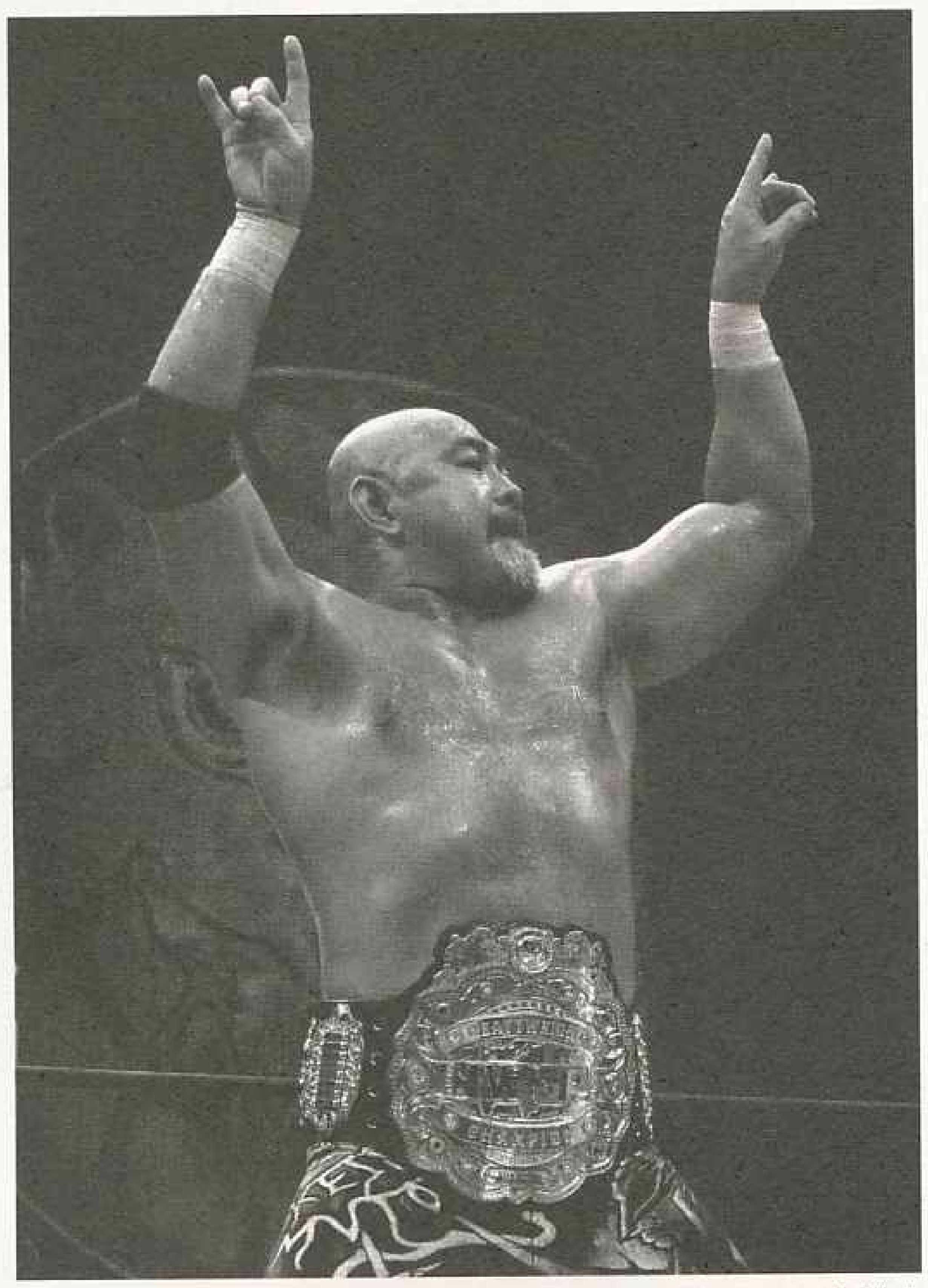
橋本　それは単なる傍観者だろ！

斉藤　いやいや、「そこからどう這い上がるんだろう？」という興味ですね。

橋本　それ、守ってはいないでしょ？

斉藤　いや、〝見守る愛〟ではありますよね。

橋本　言葉って都合がいいね。でもさ、這い上がるも何も、そんなたいした崖じゃないよね？　『kamipro』を読んでも、マッスル坂井自主興行にミスター高橋が出たことが「そんなに大事件なの？」と思ったりするんだよ。



元祖〝プロレスLOVE〟武藤敬司。プロレス界がMMAに巻き込まれる危機感の中での発言だったが、武藤は業界屈指のオープンな性格だけに〝プロレスLOVE〟という言葉だけが一人歩きしているフシも。

斉藤　じつはそんなに驚くことじゃないんですよね。でも、外野の橋本さんが思ってる以上に、いまのプロレス界って凄く母性的なんです。で、『八百長★野郎』の評判は凄く〝いい声〟もあれば〝悪い声〟の反応もあったんですが、〝悪い声〟を消化できていないんですよ。たとえば、編集担当の真下はあるプロレス雑誌記者から「こんな本出したら、仲田龍（ノア取締役）さんに怒られますよ！」と真顔で言われたんですけど。

橋本　ワハハハハ！　そこは怒られとこうよ（笑）。その光景はぜひ見守りたいね。

——残念ながら、そこにグレイトなプロレス魂は感じませんでしたけど（笑）。

斉藤　あと、あるレスラーを取材したとき、ウチが『八百長★野郎』を出してるとわかった途端、ウチに怒るんじゃなくて、なぜか○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○する人がいたり。

橋本　な、何それ？　カッコワルいなあ。

斉藤　「直接ウチに怒鳴れよ！」って話ですよね。絶対に逃げますけど（笑）。あと編集部の坂井ノブが地方大会へ取材に行ったとき、あるライターを車で送って途中のココイチでメシもおごったあとにその人を降ろす直前、「呪われたファンなんていませんよ！」って捨てゼリフを吐かれたり。

橋本　ワハハハハ！　その行為がもはや呪われてるよ！（笑）。

斉藤　批判はあってもいいんですけどねぇ。我々は「プロレスはこうあるべきだ！」なんて偉そうなことを言うつもりはないし、プロレスを考える表現としてこっそり出してるだけなんだから。

——なんかモヤモヤするんですよね（笑）。

斉藤　それこそ「森達也さんのインタビューを読んでるのか？」って話じゃないですか。「世の中、シロかクロじゃないんですよ」って。

橋本　でも、そういうヒステリックな反応しかできないんだろうね。ぶっちゃけ、『八百長★野郎』はそれなりに売れてんの？

斉藤　それなりですね。『生前追悼ターザン山本！』よりは売れてないけど（笑）。

橋本　じゃあ、少なくともプロレス界で読んでる人は多いんじゃない？　で、正面きった反論が出てこないのは、「ここに書いてることを誰も表立って否定できない」ってことだよね。

——それも「ここはイイけど、ここはダメ」とかじゃなく「完全にノー」っていう極端な拒否反応なんです。

橋本　そういうレベルで読む本なのかな？　『八百長★野郎』ってタイトルで、プロレスラーが84年くらいに出してたらビックリするけど、08年にこんなタイトルをつけるのはもう一周してOKでしょ。

——ある意味、ギャグですよね。

橋本　ケーフェイを踏まえつつも、〝プロレスの向こう側〟みたいなことがキッチリ語られてるわけだし。

——あと、本の批判としては、「『kamipro』にダマされて、（マッスル）坂井がやらされてるんだ」みたいな声もありました。

橋本　『kamipro』隠謀論だ（笑）。そもそも、どういう経緯で作ろうと思ったの？

斉藤　最初は『マッスル』が武道館大会をやろうとしているから、それに合わせて本を作ろうって話が編集部であって。それに自分は一切関係なかったんですけど。

——でも、その計画はまったく動きませ

んでしたけどね。

斉藤　で、自分は自分で「『ハッスル』を使ってケーフェイや高橋本以降のプロレスを考えたい」という頭があって、ホントは『ハッスル』でこういう本をやりたかったんです。

橋本　あ、そうなの？

斉藤　ええ。「『ハッスル』を使ってケーフェイや高橋本以降のプロレスを考えたい」っていうのが出発点だったけど、でも大所帯だからいろんな人の許可をとらなければいけないし、業界のしがらみもあるだろうし、そうすると時間がかかるじゃないですか。「川田利明とモンスターKは同一人物として取り扱っていいでしょうか？」というレベルからのスタートだから。でも、『マッスル』ならDDTとの向き合いはあるかもしれないけど、おもしろがって協力してくれるんじゃないかなって。で、一度「呪いなきプロレス」っていうくくりで、本誌で『マッスル』特集をやって感触を確かめて、「これはいけるんじゃないか？」と思ったんですね。

橋本　それってさ、『マッスル』自体にはあまり興味なかったってことでいいの？

斉藤　……大きな声では言えないですけど（笑）。そこは真下と阿修羅チョロが編集することでバランスはとれるし、『マッスル』をよく知らないボクはやりようがないですから。で、話を戻すと、いまのプロレスを楽しむならば、守るでもなく、突き落とすのでもなく、見守るでもなく、新しいアプローチを考えなきゃならないと

『八百長★野郎』はあらゆる意味で〝プロレス界っぽくない本〟だよね（橋本）

は強く思ったんです。だって、突き落としたらもうさすがにプロレスは死んじゃうじゃないですか。

――そんなにタフじゃないですよね（笑）。

橋本　でも、従来のプロレスの楽しみ方って、ホントいまは限られてるよね。守るにしても突き落とすにしても。たとえば、08年の真ん中で突如、武藤がIWGP王座を獲ってしまう、と。しかも年間通して防衛を重ねていく。で、翌年の1・4東京ドームという大興行でベルトを落とす。そういうストーリーで新日本を回していく頭の使い方とか、「ここで武藤が獲っちゃうの？」「防衛し続けちゃうわけ？」って驚きやアイデアを楽しんでくことしか俺はできないなぁ。

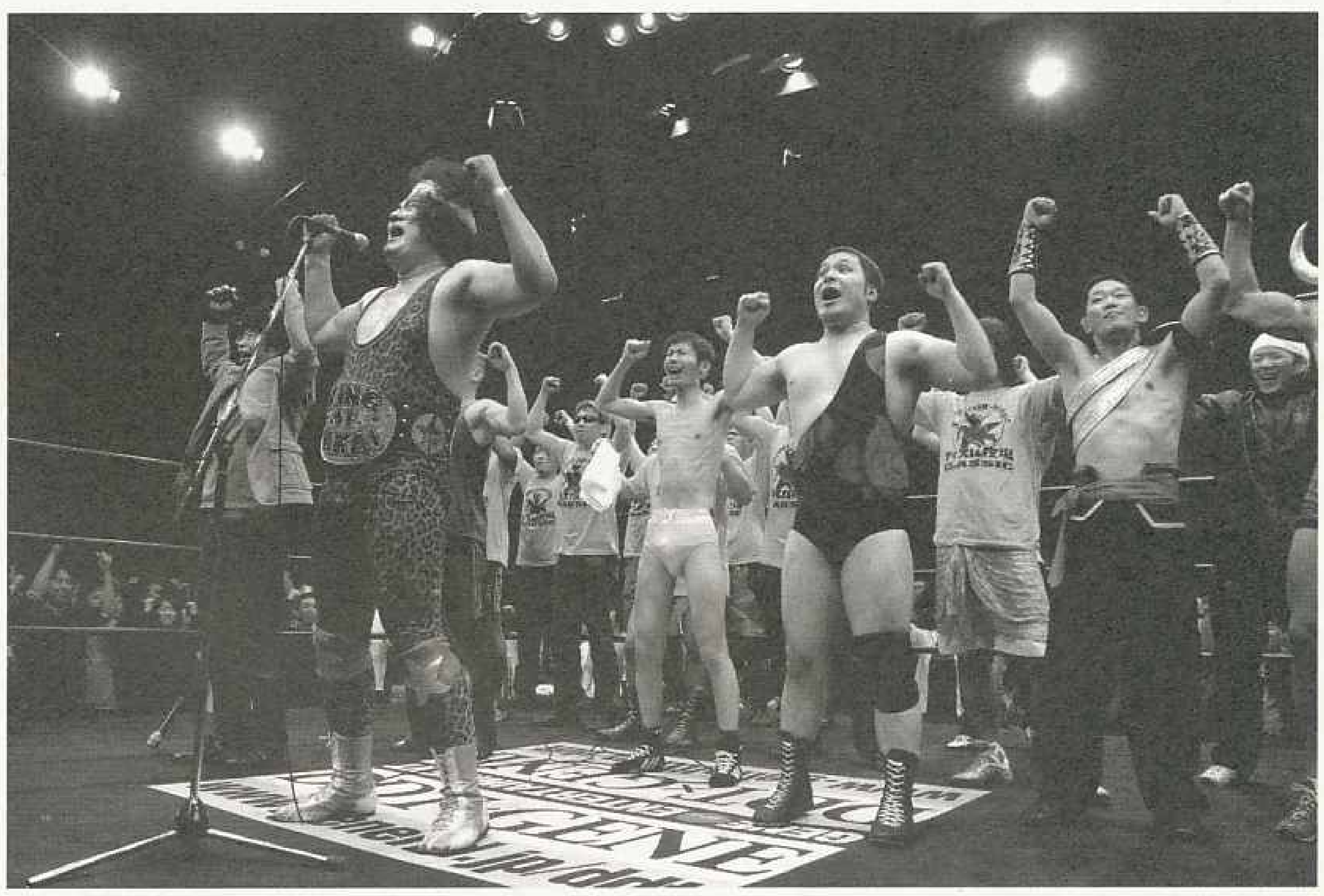
――「勝負論なきあとのプロレスは過程で驚かすしかない」ということですね。

橋本　映画でも「泣いた」とか「興奮した」ってだけじゃなく、脚本の出来とか監督の意図、カメラワークなんかを見るでしょ。それと同じ感覚っていうか。

斉藤　プロレスって、格闘技が幅を利かすまで、「競技＋群像劇」の興味だったと思うんです。でも、いまは格闘技に競技の部分を奪われて、「群像劇の質や方法論」が問われてるとは思うんですね。

橋本　そういう構造をひっくるめて「プロレスを考えよう！」っていうのが本趣旨の一つだったりするでしょ。「正面きってカミングアウトしろ」とは言ってないけど、そこに異様な拒否反応が起こるのは……、何を守ろうとしているんだろうね？

斉藤　あ、そこもポイントなんです！たとえば麻雀界って、ボクの師匠の桜井章一（雀鬼として知られる天才麻雀家）の存在を否定するというか、無視するんですよ。その理由の一つには、どんなゲームにも〝流れ〟という大局的な見方があって、麻雀でも「一局一局の結果が次につながる」と言われますけど、麻雀の全自動卓で次局の牌がもう内部でセットされるから、科学的にはこの局で何が起ころうが「つながらない」のが正論なんです。冷静に考えれば、いまの失策が次の局の結果に何か関係するわけがない。でも桜井章一って、そこすらもあたりまえのように何が



時代の空気感に会わせるように恐る恐るカミングアウト指向を進めてきた『マッスル』。その先鋭的な内容に反して、旧来のプロレスファンも巻き込んでいることから、大会を重ねるたびに坂井の葛藤は深くなってきている。

起きるか予想したり、操作できちゃうし、言語化できるんですね。信じられないでしょうけど。

――科学や人智を超えた神業的な部分がある、と。

斉藤　ボクは麻雀プロより強かったんですけど、桜井には何もさせてもらえませんでしたから。でも、そんな超人を認めるのは麻雀業界からすればいろいろと不利益なことなんですよ。麻雀業界にそんな超人はいないし、凡人が凡人に指導していくわけですから。だから無視するのは納得できるんですが、いまのプロレス界はカミングアウトを隠すことで何が守られるのか。そこはちゃんと考えるべきだと思うんですね。

橋本　要するにさ、新しい共犯関係を作ろうってことなんでしょ。

斉藤　そうなんですよ。ただ、自分や橋本さんはいまのプロレスにこだわってないから、そこは余裕を持って考えられるのかもしれない。

――二人は〝プロレスLOVE〟な業界人より「余裕がある」かもしれないですね。

橋本　確かに昔ながらのプロレスのままじゃないと困る人はいるもんね。

――だから、「そのジャン斉藤がマッスル坂井の聞き手を務めてる」のが気に食わなかったのかもしれない（笑）。

橋本　それだ！　それが最大の原因だ（笑）。

斉藤　……ボクだって、聞き手をやるつもりはなかったんですよっ。企画・立案だけですませたかったし、どちらかといえばPRIDE本のほうを作りたかったんですから。ただ、版元（エンターブレイン）の松林さんから「一つだけ条件があるとすれば、『マッスル』の広報みたいな本に

“プロレスLOVE”とは何か？

は絶対にしたくないから、（阿修羅）チョロだけには聞き手をやらせるな!」と言われて。

橋本　あ〜（笑）。

――僕も企画段階から全面的に編集に関わりましたけど、ホントはチョロさんがやるべき仕事だったと思います。というか、編集をやるはずだったんだけど、結局……。

橋本　できなかったんだ（笑）。まあまあ、本来ならば本誌のモノクロページで「『マッスル』が後楽園初進出!」とかやってたチョロさんが仕切って、全編インタビュアーを務めるはずでしょ。それこそ「愛がある」って思われてただろうね。俺が知ってる範囲でいえば、パンクラスの本は安田拡了さんか、Show大谷さんが作らなきゃいけないというか（笑）。『八百長★野郎』は、たとえるならベースボール・マガジン社がパンクラス本を出すときに突如、朝岡（秀樹）さんが聞き手を務めるような違和感というか。「やらされてる説」を唱える人にもチョロさんなら拒否反応はなかったかもしれないし、あらゆる意味で“プロレス界っぽくない本”なんですよ。収まるところに収まってくれたほうがファンは嬉しいわけでしょ。でも、俺はさいちん（ジャン斉藤のアダ名）がインタビュアーであることで生まれる化学反応がおもしろいと思う。

――その“プロレスLOVE”って“ガチバカ”とも通じる部分はありますか？

斉藤　あ〜、同じかもしれないですね。「じつは余裕がない」って意味では。

橋本　俺もその気（け）がなかったとは言わないけど、いまは「真剣勝負ってそんなにエラいの?」「プロレスで最初から勝ち負けが決まってることがそんなに悪いの?」って気持ちもあるし。というか、プロレスに「八百長」って言葉は適当なのかって問題もあるし。

――公正明大にやってる競技で発覚してこそ問題になることですね。

橋本　あとガチバカもプロレスLOVEも「否定されたら自分がもたない」と思ってるフシがあるから、必要以上に牙をむくことはあるかもしれない。「世の中には自分と違う意見の人もいる」ってことが許容できないっていうか。

――こないだ『編集王』（土田世紀著／小学館）ってマンガの編集者を描いたマンガを読み返したんです。で、昔は主人公のカンパチっていう熱血漢の“マンガLOVE”な若者に感情移入して読んだんですけど、いま読むとカンパチの敵側で価値観が真逆のアンケート至上主義で、売り上げをビジネスとして立てている編集長側の気持ちがもの凄くわかるんです。“マンガLOVE”だけじゃビジネスとして回らないように“プロレスLOVE”だけじゃ、ダメなんじゃないかって。

橋本　ビジネスライクにマンガを作る人がいる一方、思い入れでマンガを作ろうとする人がいる。その構図なら“マンガLOVE”は成立するんですよ。同じようにプロレスが総合格闘技に振り回されてるときだからこそ“プロレスLOVE”発言は成り立ったと思う。でも、いま“プロレスLOVE”って言葉を使うときは何と対立し、何からディフェンスしているのかがわからないよね。

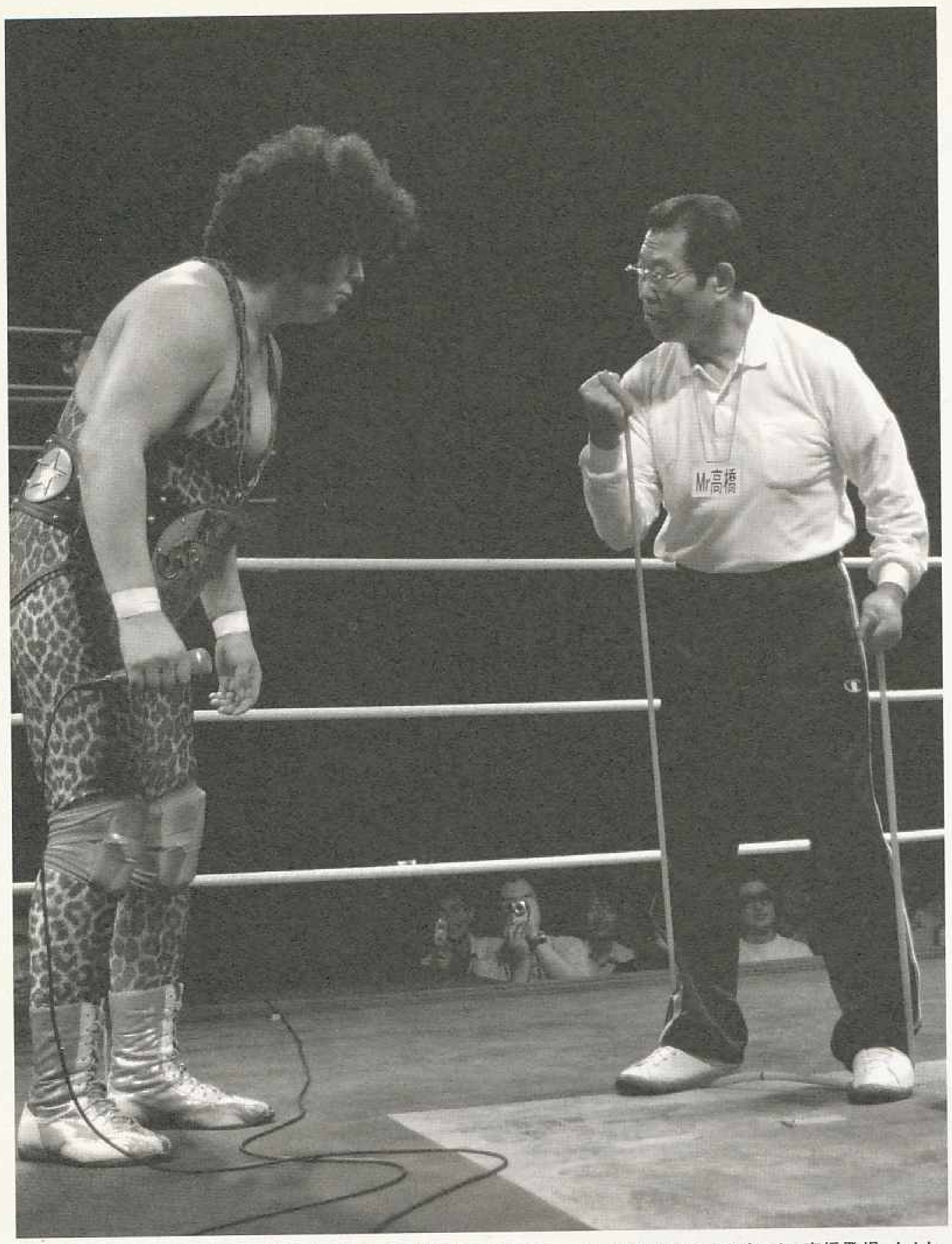
斉藤　だから、教義をしっかりと作って、プロレスは再び宗教化したほうがいいと思うんですね。そうすれば守るものもわかるし、進むべき道も見えてくる。プロレスや格闘技に宗教性は必要じゃないかなあ、と。

――いまは教義がボンヤリしてる宗教ですよね。

斉藤　早すぎたエンタメとして知られるTPG（たけしプロレス軍団）が新日本のリングに上がったとき、ファンもマスコミも一斉に拒絶したわけですよね。いまなら受け入れられるでしょうけど、当時は「まだそっちの宗教じゃないほうが業界は回っていく」というあたりまえの判断があったと思うんです。当時の記者もプロレスの仕組みを知らないことはないわけですし。

――絶対に知ってたでしょうね。

斉藤　猪木さんが新日本に格闘技路線を持ってきたときも、UWFができたときも、選手や関係者は選択を迫られたと思うし、最終的には賢明な判断をしてきたと思うんです。でも、いまの時代は何を判断材料にジャッジするのかを問われますよね。現場の記者は「こっちは身体張って



プロレス業界外の橋本氏が「そんなに大事件なの?」と思った、昨年のマッスル坂井自主興行のミスター高橋登場。しかし、いまだにおおっぴらには触れられないタブー領域として業界からの拒否反応は根強い。

“プロレスLOVE”も“ガチバカ”も「余裕がない」点では一緒かも（斉藤）

プロレスLOVEとは何か？

るんだよ！」と言うと思うけど。

——「明日もノアの取材だ」って環境にいたら言いたいことも言えなくなるでしょうけど。

斉藤 『kamipro』はプロレスではまだ自由だからなあ。そのぶん格闘技方面では面倒くさいんですけど、プロレスに比べたらまだゆるい。だって、映画の『レスラー』でさえ語れないんですよ？

——その映画でも、控室の打ち合わせ場面が普通に描かれている時代ですから。

橋本 いまや、それが「バラしてる」って表現がふさわしいかどうかもわからないでしょ？ もう普通のことだよね。

——そこで「WWEは凄いな」と思ったのは、映画『レスラー』が内幕を描いてることに、「（映画の中の）インディーと俺たちは違うぜ！」とクリス・ジェリコに言わせて、ミッキー・ロークを『レッスルマニア25』に取り込もうとしたんですね。ちゃんと世間とプロレスしてるし、一応「インディーとは違う！」という教義があるじゃないですか（笑）。

橋本 「プロレスは八百長じゃねぇ！」じゃなく、「インディーとは違うぜ！」ってところが凄いなぁ。

——まあ、WWEが言うから説得力があるのかもしれないですけど。

斉藤 あと、プロレス界って業界内発信だと怒るけど、一般メディアに触られると「どうぞ、どうぞ」って部分はありますよね。

橋本 あ、『八百長★野郎』に関しては「業界内から言っちゃダメだろ！」って拒否反応かもしれない。俺らの「あたりまえ」は「世間一般のあたりまえ」で、プロレス界では「まだ、あたりまえじゃない」と。でも「失ないたくない」ものが「ホントはそうじゃない」ことも知っているわけでしょ。その精神構造ってなんなんだろうね？

斉藤 とりあえず「触ってくれるな！」ということにつきるんでしょうけど。う～ん、もともとプロレスは土足で入っていくものなんですけどね。キレイな鑑賞物じゃないと思うんですけど。

橋本 いや、自分の仕事の対象だから「キレイな鑑賞物」のままにしておきたいってことなんじゃないの？ でも、土足で踏み込まれてこそ「それでも素晴らしい部分」が逆に見えてくると思うけどね。格闘技に関してもよく言うんだけど、雑菌は実用なんだよ。無菌室に入れといても体力が落ちるだけだから。

——せめて、イヤなら「入ってくんな！」という心意気を見せてほしいですけど。

斉藤 それが陰で「仲田龍に怒られますよ！」とか言われてもなぁ。

——ワハハハハ！

橋本 俺は『kamipro』が前にやった効果音プロレスの特集とかもおもしろかったけどね。

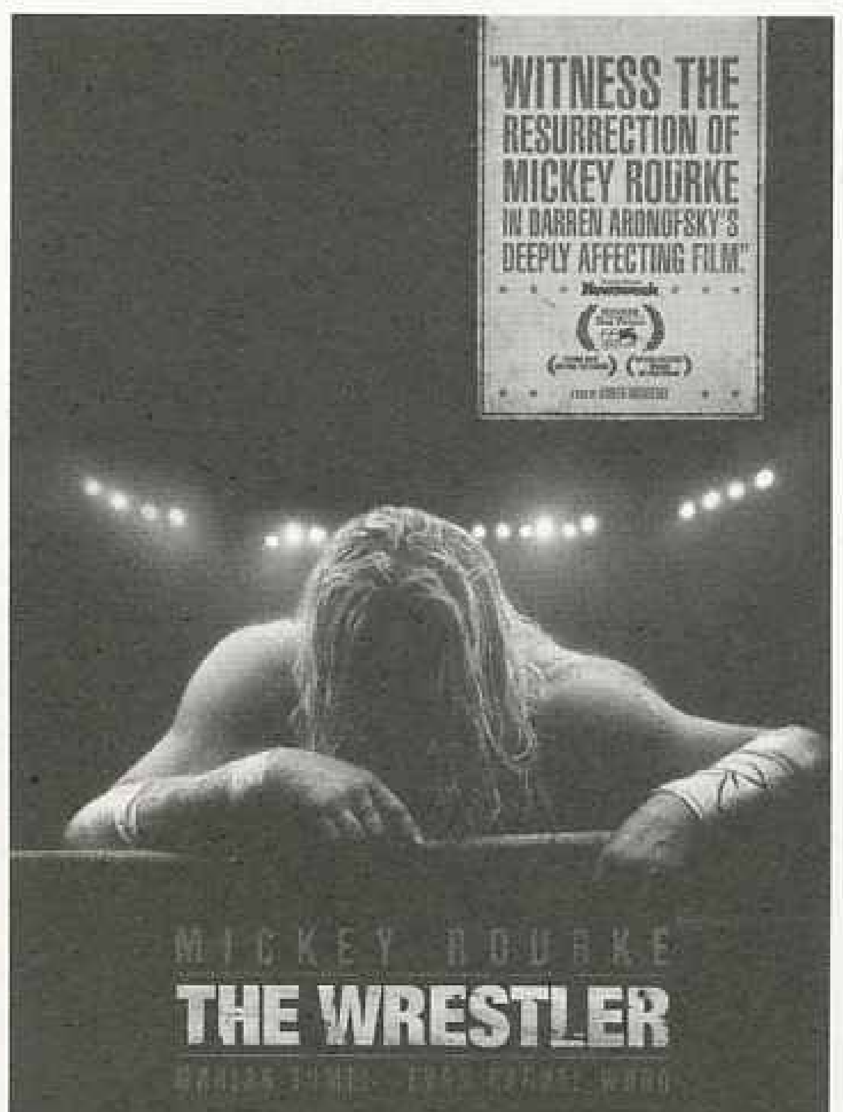
斉藤 あれは中途半端になっちゃって凄く反省してるんですけど。なぜ中途半端になったかといえば、最終的に団体側に気を使ってしまったからです。

橋本 でも、ああいうプロレスの作り方みたいな部分を見せていくのは興味深いよ。逆にプロレスLOVEが盲目的に楽しむだけなら、プロレスのおもしろがり方の幅の狭さを感じるよね。

斉藤 たとえば、いまやマスコミでさえも武藤や安生（洋二）に「プロレスがうまい！」とか言うじゃないですか。

橋本 その「プロレスがうまい」って凄く身内的な評価で、それってケーフェイを認めないと成り立たない「うまさ」でしょ。そのダブルスタンダードも不思議だよね。「（ディック）東郷さんやヒロ（斉藤）さんの受け身は凄い」とかも、完全にダブルスタンダードなわけですよ。そういう部分を気にしつつ、「『八百長★野郎』にはプロレスLOVEがない」って怒るのはどういうことなんだろう？ それとも別の人なのかな？

編集長はプロレス界へのパスポートが期限切れなんですよ（橋本）



日本では6月初旬公開の映画『レスラー』。もはや“あたりまえのこと”として控室の模様が描かれるこの時代に、プロレス業界はどこまでプロレスを守り続けるのか？

斉藤 それはプロレスLOVEじゃなくて、業界LOVEな人なんでしょうね。

橋本 だから業界人的には、新しい手法を提示されたくないんじゃない？ ケーフェイ的な部分を認めると、高橋本以前、以降をまたいで仕事をしてる人は発想の転換を迫られるわけだよね。それこそ原稿の書き方から変えなきゃいけないし。

斉藤 でも、前にあるベテランの方にインタビューしたときに思ったけど……へんに使い分ける人もいるんですよね。ホントは快く思ってないはずなのに。

——「君たちのおもしろがり方はわかってるぜ」的な感じで。菊池孝さんは気持ちよくぶっちゃけてくれましたけど（笑）。

斉藤 「プロレスLOVE」を掲げるならそこは徹底的に守ってほしいし、教義を明確にしてほしいんですよ。そこで意見が違えば議論はするけど、否定はしないですから。

橋本 とりあえず、俺は『八百長★野郎』を読んでマッスル坂井のプロレスLOVEが伝わったし、それは普通に読めばわかると思う。拒否する人は読んでないのか……インタビュアーの問題なのか（笑）。

——ワハハハハ！

斉藤 やっぱり俺かぁ……。

橋本 聞き方がさ、普通にプロレスの仕組みを暴露するよりも冷たいんですよ。あと、キミはプロレス業界に挨拶してねえんです（笑）。

斉藤 そうかぁ……。確かにしてない。

橋本 プロレス界へのパスポートも期限切れだろうし（笑）。

斉藤 再発行してもらえる資格はあると思うけどなあ。だって初期のIGFとか大好きですもん！

——ワハハハハ！

橋本 そういう「壊れるかもしれない」インプロビゼーション要素の高いプロレスの楽しみ方をしてる時点で、彼らの言うプロレスLOVEではないと思うよ。「坂井さん、『マッスルハウス5』のあの場面は最高ですよ！」「斉藤さん、あの場面はですねぇ～」って話から入るんならアリ

だけど、いきなり構造の話をしてるんだから（笑）。あと、プロレスファンは番記者的にタメ口をきく空気が好きなわけでしょ。「なぁ、金沢？」じゃないけど。

斉藤　「なぁ、斉藤？」って感じで。

――この本はよくも悪くも緊張感ありますから、マッスル坂井もあとがきで書いてますけど、「異種格闘技戦」ですしね。

橋本　『八百長★野郎』を否定する人たちは、そんなの求めていないんだよ。この本のインタビュー自体が1・4事変みたいな緊張感のある新日本や、何が起こるかわからない初期IGFだから。

斉藤　う〜ん、そうですかね？　ごくごく普通のインタビューですよ。

橋本　でもプロレスLOVEって「よくできました！」の世界じゃない？

――「今日は合格点に近づいた」って感じですよね。

橋本　あとはこの本が「やむにやまれず作った」ようには見えないというか。「プロレスを先に進めるためには、この方法しかないんだ！」って血の涙を流して作った本じゃない感じがするからじゃない？　金沢（克彦）さんや小佐野（景浩）さんが「時は来た！」って感じでケーフェイに触れるなら、重く受け止めたかもしれないけど。

斉藤　「覚悟が見えない」ってことですか。それは精神的にくるなあ……。

橋本　落ち込むな（笑）。『週プロ』の鈴木健さんがこれを書いたら、誰も文句を言わないでしょ。高橋本のときも業界は「いまはプロレス界の人じゃないから」とか「金で揉めた恨みでしょ？」って矛先をすり替えたから。この本も「プロレスLOVEがない『kamipro』の連中が作った本だから」みたいなことじゃない？　本質を吟味しないところで済ませたいんだよ。だからこそ「『kamipro』にやらされた」っていう意見になるんだと思うな。

「本への覚悟が見えない」ってことなら精神的に落ち込むなぁ……（斉藤）

斉藤　ああ〜、真剣に落ち込むなあ。



精力的な刊行が続く『kamipro books』（小社刊）。とくに橋本の追悼本である『紙の破壊王』シリーズやI編集長追悼本は、プロレス業界的に"出す意味"の大きな本だったが、これでもまだまだ"プロレスLOVE"は足らないらしい。

橋本　「興味本位は許さない！」っていうね。でも、へんな話、自分もエンターブレインから数年前に小林聡の引退本を出させてもらったんだよ。そのとき思ったのは「普段から小林を取り上げていた『ゴング格闘技』、『格闘技通信』が引退記念本やムックくらい作らなくてどうすんだ？」と。なのに実際は『kamipro』メインでやってる俺が構成してエンターブレインから出してる。それってホントは恥ずかしいことでしょ。

斉藤　……そういえば、なぜか自分が小林聡の引退本を編集する話があったことを思い出した。結局、橋本さんが作ることになったけど。

橋本　それは読みたかったなあ、一度も小林聡の試合を観たことのない男が作る引退本（笑）。まあ、内部にいるからって物事を前に進めるパワーがあるとは限らないよね。俺も当時、いわゆる格闘技専門誌にレギュラーで仕事を持っていなかったけど、そういう人間が小林聡の本を作り、PRIDEばかりやってた『kamipro』が『八百長★野郎』を作り、プロレスオンリーの『kamipro Special』も作る。そこまでやってるのに、プロレスLOVE的に作る資格があるインサイダーが何もしてないとしたら、「ホントに愛があるのはどっち？」ってなるよね。フォローするわけじゃないけどさ。

斉藤　（まったく話を聞かずに）あ〜あ、やるんじゃなかった。

――ククククク。

橋本　でも、ベースボール・マガジン社がマッスル本を作るとしたら、絶対にこうならないでしょ。高木三四郎インタビューとか、オールスター座談会とか、全大会ヒストリーとか「マッスルだよ、全員集合‼」的なものになると思うよ。

斉藤　でも、『マッスル』ファンはそういうものを求めてたんですよね。

――ただ、帯に「すべての元プロレスファンに捧げる〝呪いなき〟時代のプロレス再入門書」と書いてあるように、届けたい人には届いた感触はありますけどね。

橋本　「最近、プロレス観てないな」って人に届けてるのに、中にいる人から「けしからん！」って言われてもね。

斉藤　まぁ、業界LOVE側も含めて上手にやれたらよかったな、っていう反省はあります。だから、いずれは『マッスル』のちゃんとした本を……。

橋本　作るの？（笑）。『マッスルだよ、全員集合‼（仮）』みたいな入門書を。でも、それってプロレスマスコミが作るマッスル本のパロディみたいになるんじゃない？　また逆鱗に触れるかもしれないよ（笑）。

――ワハハハハ！　どこまでいっても堂々めぐりですね。

斉藤　結論は最初から一緒ですよっ。「愛してる！」って言えないヤツはプロレスを語るなってことですよね。愛がなんだってんだ！　愛で物事が測れるなら結婚なんかしてないよ！　だってそうでしょ？

橋本　なんの話なんだよ（笑）。

斉藤　新日本とかノアが進めているライセンス制くらい馬鹿馬鹿しい。ただでさえ、WBCの第2ラウンドの決勝で韓国に負けてイライラしてるのになあ。

橋本　ダハハハ。

斉藤　だって四球押し出しですよ？

橋本　しょうがないじゃん。WBCの結果でそこまで精神が左右されるヤツも珍しいな（笑）。

斉藤　はあ？　野球を愛してないヤツがWBCを語るなっ‼

【08年3月某日／都内・「kamipro」編集部にて収録】

kamipro books

秋山成勲は、
悪質な反則野郎である。
チュ・ソンフンは、
悲劇の元・在日韓国人である。
どちらの姿も正しく、
そして正しくない。

魔王——。

日本からでは見えない真実。
韓国からではわからない事象の裏側。
韓国現地取材、証言構成によって、
〝ヌルヌル事件〟桜庭和志戦から
衝撃のUFC参戦まで——。
本書は魔王・秋山成勲の素顔に迫る
書き下ろしノンフィクションである——!!




全国書店にて絶賛発売中!!

魔王
秋山成勲
二つの祖国を持つ男

田中太陽 著

B6変型判 260ページ　定価=1,680円（本体1,600円+税）

enterbrain 株式会社エンターブレイン　〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1 TEL.0570-060-555（代表）[通信販売のお問い合わせ先] http://www.enterbrain.co.jp/




馬場さん、日テレ中継が終わってしまいました――!!

プロレスが超上流地帯だった頃の話

3月末をもってノアの地上波中継は終了、すなわち日本テレビ55年のプロレス中継に幕が下りることになる。これでレギュラー中継はテレビ朝日の新日本プロレスのみとなってしまった。どうなるプロレス!? ここではテレビとともに歩んできた"あの頃"をいまこそ振り返ってみようではないか――。

楽ちゃんのサポーター上流地帯伝説!!

馬場さんと源ちゃんに「プロレスをよろしく!」って頼まれたつもりなんだな



落語家 三遊亭楽太郎

聞き手／ジャン斉藤　撮影／タイコウクニヨシ

――師匠!! 本日はご親友であられた馬場さんや天龍さんとの交遊話を中心に聞かせてください！

楽太郎 馬場さんが亡くなって、もう10年も経つのかな。馬場さんはボクの一回り上の寅年なのよ。だからいま生きてりゃあ71歳か……。あれからプロレス界もいろんなことがあったよね。

――ええ、景色がガラリと変わっちゃいましたね。

楽太郎 日本テレビからプロレス（ノア中継）がなくなっちゃう時代だけどさ、日本テレビはプロレス中継からスタートしたんだからね。

――プロレスは目玉番組だったわけですもんね。

楽太郎 当時の娯楽は、ラジオの落語と、テレビの力道山ですよ。プロレスは生活とは切っても切り離せないところがあったんだから。

――そもそも師匠は馬場さんとはどういったご縁で知り合ったんですか？

楽太郎 馬場さんのコマーシャルを作ってた東洋シネマっていう制作会社の当時のプロデューサーが、ボクの師匠（三遊亭圓楽）のコマーシャルも撮ってたんだよね。『ジャイアントコーン』のコマーシャルは知ってるでしょ？ 馬場さんが「♪サイクリング、サイクリング、ヤッホ〜ヤッホ〜!!」って歌うやつ（笑）。

――ああ、そんなゴキゲンなコマーシャルがありましたねぇ。

楽太郎 そのプロデューサーから「楽さん、麻雀のメンツが一人足りないんだけど、できる？」って言うから「いいですよ」って。そうして麻雀を打ちに行ったら馬場さんがいた。

――へえ〜。麻雀つながりだったんですか。

楽太郎 そういうこと。で、馬場さんに「アンタ、ゴルフもやんの？」って聞かれて「やりますよ」って言ったら、「じゃあ、ゴルフもやろう！」ってことから凄く仲良くなっちゃった。なんで仲良くなっちゃったかというとね、みんな馬場さんに対してビビるでしょ？

――そうですね。気軽に接すると、恐れ多い感じはしますからね。

楽太郎 でも、酒を飲みながら麻雀やってるから、俺、いろんなこと言っちゃったの。「ヒザが痛ぇ！」「ヒザから下を切っちゃえ。そうすりゃ顔のデカイただのオジさんだ」とか（笑）。

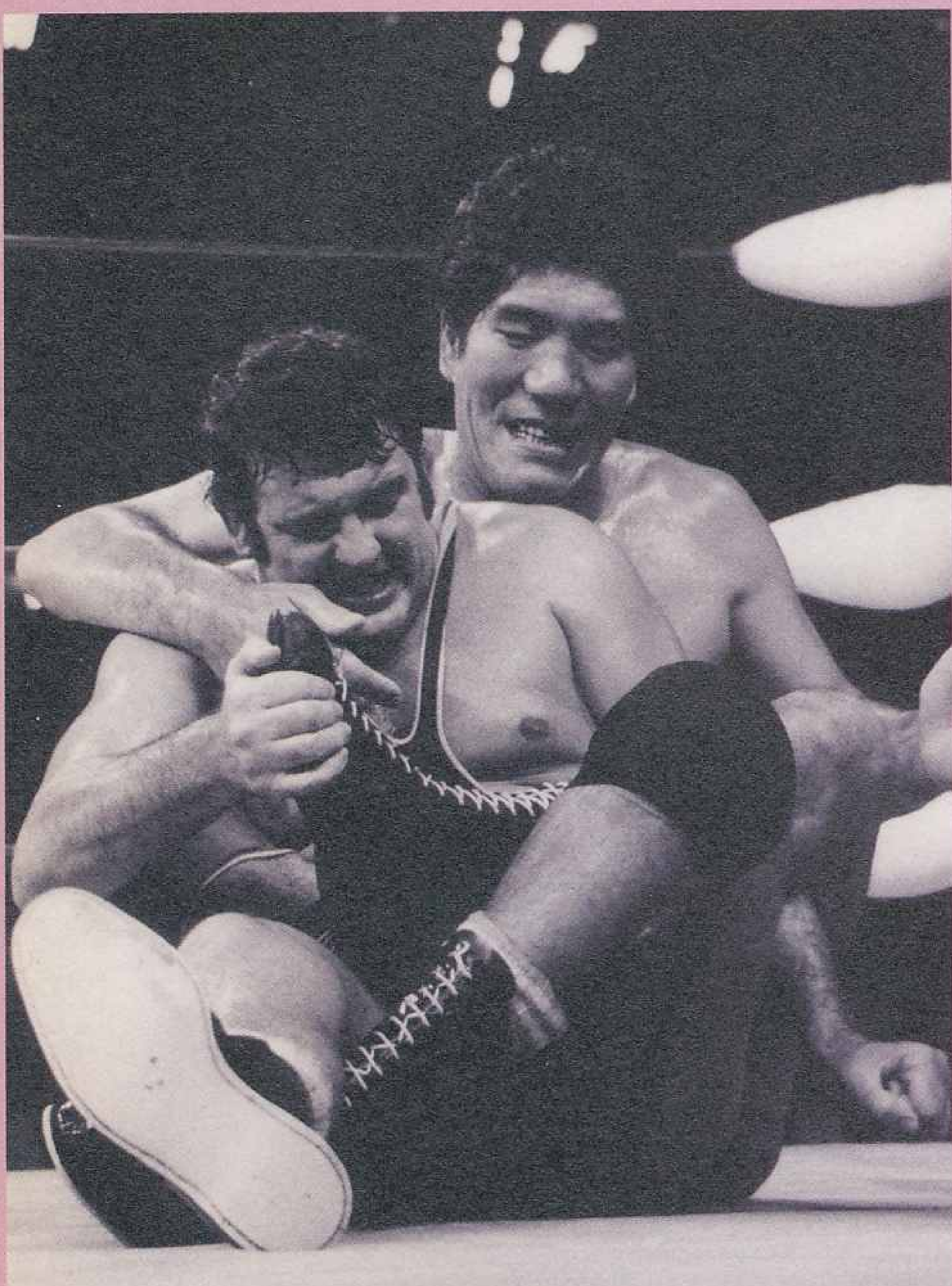
――ワハハハハ！ なかなか言えないですね、それは（笑）。

楽太郎 馬場さんもムキになって言い返してくるんだけど（笑）。俺の物言いがハキハキしてるからさ、非常にかわいがられたんだよねぇ。

――そこから中学時代の同級生だった天龍さんとも遊ぶようになって。

楽太郎 うん。源ちゃんとの付き合いがそこからスタートしてね。それから天龍革命に付き合い、SWSに付き合い、WARに付き合い……、まあ、どの時期もとにかく飲んでたよ（笑）。

オフになると、馬場さんから麻雀やゴルフの誘い。東京の試合のあとは天龍と必ず飲み



馬場さんとは麻雀やゴルフなどで親交を深めていった楽太郎師匠。ちなみに師匠のプロレス観戦術は、声援や野次を飛ばしておもいきり楽しむというもの。さすが上流地帯!!

――ああ、やっぱり天龍さんといえば、〝飲み〟ですよね！

楽太郎 毎日、飲んでた。毎日っていうか、東京の試合のあとは必ず。逆にオフは会わないんだよ。

――それはどうしてですか？

楽太郎 オフになると、馬場さんから麻雀やゴルフの誘いがあるから。

――なるほど！ そこを使い分けなきゃならない師匠も大変ですね（笑）。

楽太郎 その頃はね、地方（シリーズ）も俺のスケジュールが合うと出かけたんだよ。飲むために（笑）。仕事で札幌に行って羽田に戻って、明後日は九州で仕事だった。「あれ、源ちゃんは博多で試合じゃねえかな」。で、博多の会場まで行ったら、ムース（グレート小鹿）がダフ屋を蹴散らかしてさ。「お、今日は何？」「札幌から観に来たんだ！」って。

――やりますねぇ。いまでも天龍さんとは飲んでるんですか？

楽太郎 最近はあんまり。身体のことも考えなきゃ。もう59歳なんだからさ。

――天龍さんといえば、欠かせないのは阿修羅（原）さんですよね。阿修羅さんが金銭問題で姿を消したときも、師匠がかなりサポートされたそうですけど。

楽太郎 いまだに阿修羅とは連絡をとってるね。引退する前は面倒見てたっていうと生意気だけど、いちおう花道を作ったから。だから取材っていうと、阿修羅は俺を通すんだって言うからね。「取材なら楽太郎師匠を通して」って。もうマネージャーですよ（笑）。

――これはファン目線の感想なんですけど、いまのレスラーはみんなサラリーマン

三遊亭楽太郎

「リングサイドをまとめて売っちゃえば」それがいまの年間シート

的なので、阿修羅さんみたいな生き方はホントに昭和レスラーの凄さを感じちゃうんですよ。とにかく飲んで、お金は他人のために使ってて。

楽太郎　いや、だけど、あれをやっちゃったらダメだよ！

——いや、確かにそうなんですけども（笑）。

楽太郎　伝説がなくなるよな。いや、伝説にはなるけど、オレにとっては〝生活〟だから。

——生活といいますと？

楽太郎　だってあいつ、俺ん家でもって17時間、飲んでるときもあったもん！

——17時間も！　確かに伝説というよりは生活ですね（笑）。

楽太郎　17時間、飲んでるあいだにいろんな若手を交互に呼ぶんだけど、そいつらは2〜3時間飲んで帰っちゃう。俺はぶっ通しで17時間だもん。で、「師匠、そろそろオレは寝るよ」「バカヤロウ、俺はこれから『笑点』だよ！」って（笑）。

——ワハハハ！『笑点』の裏側でそんなことがあったなんて（笑）。

楽太郎　あの二人と付き合うのは、だいぶくたびれたよ。なんとか乗りきって、いま生きているけど（笑）。あるときの正月なんて、全日の新年会が終わって、そのまま源ちゃんたちと赤坂で飲んで、朝7時の上野発の電車で茨城に行って、正月の寄席を吐きそうになりながらやったんだから（笑）。

——師匠も〝天龍革命〟の一員だったんですねぇ。

楽太郎　あんな革命はもうできないけどね（笑）。

——それくらい阿修羅さんはけっこうムチャしてたじゃないですか。助言じゃないですけど、何か説教めいたお話しはしなかったんですか？

楽太郎　しないね。だって男なんだ。子どもじゃねえんだから（キッパリ）。

——なるほど！

楽太郎　自分の責任ですよ。だから、しばらく連絡をとってないときの年賀状には、「生きてりゃいい」って書いたんだ。そうしたら阿修羅から電話がかかってきた。「生きてますよ〜」って（笑）。



——いい関係ですねえ……。ホントにいろんなことがあったんでしょうね。

楽太郎　あったよ……（しみじみと）。墓場まで持っていく話もあるから。

——それだけ深い関係だった、と。その一方で馬場さんとの付き合いがあって。

楽太郎　そういえば、馬場さんが「とにかく客が入らない」って言うからね、「東京の試合だけリングサイドをまとめて売っちゃえば」って言ったことがある。それがいまでもやってる年間シートが作られたきっかけ。

——師匠が年間シートを購入してたって話は聞いてたんですけど、それ自体を考案されていたとは！

楽太郎　馬場さんにそう言った手前、俺が2席買ったんだよ（笑）。俺らのグループが7席持ってたね。で、あるときね、俺らのグループが全員、試合の日程を忘れちゃったんだわ。で、席がドーンと空いちゃって馬場さんに怒られてさあ。「あそこは一番テレビに映るとこなんだから。誰でもいいから埋めなきゃダメだ。ウチにお客が入ってないように見えるじゃねえか！」って（笑）。

——でも、そんなVIP席を用意されるんだから、師匠は信用されてたってことですよね。

楽太郎　だから全日本のレスラーは不思議がってたね。「ボスはアンタの言うことは聞くんだよな」って。だから冬木たちがちょっと困ってるときに「全日本に上げてもらえませんか」って馬場さんにお願いに行ったら、「冬木はダメだ」。でも、邪道と外道はちょっと待って」って。で、邪外はテストで上げることになったんだけど、「身体はちっちゃいけど、いいバンプするなあ」って馬場さんはほめてたね。

——へえ、そんなこともされてたんですか。

楽太郎　いえいえ、あんまりね、最近はそういうよけいなことはしない。労多くして功少ないし（笑）。

——そういう世界ですからね（笑）。しかし、天龍さんがSWSへ移籍したあとも、馬場さんとの関係は良好だったのは意外ですね。

楽太郎　というか、俺はなんにも知らないから。田中（八郎、当時メガネスーパーの社長のことも源ちゃんから聞いてないし。ただ、源ちゃんは「俺は一人でSWSに行くんだ」って言ってた。全日本の選手を引っぱっていったわけじゃない。勝手にみ



師匠も一緒に突っ走った天龍革命。天龍、阿修羅、故・冬木弘道、小川良成、川田利明。誰もが一癖も二癖もあるレスラーだ。

んなが来たんだよ。そこで「金で動いた」って言われたのは、源ちゃんとしては心外だろうね。

——SWSは〝金権プロレス〟だということで、『週刊プロレス』からえらくバッシングを受けましたよね。

楽太郎　あの当時はいろいろとあったよ。元子さんから「楽太郎さんからも（天龍に）話をしてくれない？」って頼まれたからね。でも、源ちゃんの人生なんだよ。俺は馬場さんの友だちで、源ちゃんの友だちで、ただそれだけの関係。辞めろとも言えないし、相談にも乗らないし、馬場さんとも源ちゃんとも、このまま付き合っていくしかなかったんだから。

——あの当時の全日本というと、馬場さんのアドバイザー的なかたちでターザン山本！が入り込んでましたけど、師匠は面識はありますか？

楽太郎　うん。だけど俺は馬場さんの友だちであって、プロレス業界の人間じゃないし。ただ、俺は頼られたら悪いようにはしない。利用もしないけど、悪いようにもしない。選手会の忘年会をやってやったり、ガイジンが来たらメシを食わせるとかね。

——阿修羅さんじゃないけど、師匠はかなり面倒見が良いという評判は頻繁に聞くんですよ。

楽太郎　そりゃあもうね、頼まれたらしょうがないでしょうね（キッパリ）。

——男気ありますね！

楽太郎　そんなもんじゃないけどさ（苦

嗚呼、憧れの天龍同盟!!

阿修羅原〜男の見栄伝説〜

■奢らずにはいられない

若い選手と一緒にメシを食うときは、みんなのぶんを払わないと気がすまない。お金がないときは「調子が悪いから」と食事を拒否するやせ我慢ぶり！

■所持金4000円でアメリカ遠征

家を出るとき3万円しか持ってないのに成田空港までタクシーで！（マイナス2万円）。空港で腕時計がないことに気づいて6000円相当のものを購入。たったの4000円で渡米するんだから肝が据わっている!!

■女子レスラーの面倒も見る

男子レスラーだけでなく、同郷の長与千種を筆頭に、女子レスラーも面倒見ていた阿修羅。メシは当然奢るし、何もしてやれないときは「会場に顔を出せない」「一緒にメシを食っても、つらくてメシがノドを通らない」男なのである！

■天龍同盟

さんざん語られている話だが、とにかくぶっ飛んでいた天龍同盟時代。若手レスラー、マスコミを引き連れて毎晩豪遊！　支払いは天龍と阿修羅！　雑居ビルの飲み屋に入れば、一階全店舗制覇はあたりまえ。当然、支出のほうが多くて、阿修羅も内心「天龍、いいかげんにしてくれ！」と思いながら「これも勝負だ！」と、男の見栄を張り続けた！

■馬場さんも男だ！

そんな破天荒なライフスタイルだったので、全日本プロレスに700万円ほど借金（ファイトマネーの前借り）をしていたが、借金問題で全日本を辞めるときにチャラにしてもらったという。馬場さんも凄いなあ。

阿修羅への年賀状に「生きてりゃいい」って書いたんだ。すぐに電話があった

三遊亭楽太郎

やっぱり馬場さんがいなくなったらダメだね
馬場さんがいたから、一つの塊になっていた

笑）。だから冬木軍だってなんだって、そばにいたから相談に乗らざるをえないでしょ。いろんなこと、あったよ。嫌な思いもしたけど、楽しい思いもしたから、なんの文句も言わない。

——いま一番親密なのはウルティモ・ドラゴンですか？

楽太郎　ウルティモ・ドラゴンの浅井ね。闘龍門を作ったときもさ、いろいろと応援したし。いまだに浅井はウチに来るしさ。腐れ縁だよね。

——師匠は浅井さんのどういったところを気に入られたんでしょうか？

楽太郎　浅井はマメだもん。しっかりしてる。たいていのレスラーはいいかげんだけども、あいつはそばへ来て話ができるから。面と向かって頼まれたらしょうがねえもん（笑）。

——来られちゃったもんはしょうがない（笑）。それでメキシコでプロレスと落語のコラボイベントをやったりしてるんですね。

楽太郎　浅井の仕掛けだけどね。まあ、闘龍門はいろいろあってドラゴンゲートと分かれちゃったけどね。それはそれで理由があるんだろうし、俺も深く聞かないし、何も言わない。

——ただサポートはするよ、と。

楽太郎　うん。ただ、いま客が入ってるのはドラゲーぐらいでしょ。だけどあの土台は闘龍門が作ったわけだから。それまでルチャは日本に定着してなかったことを考えると、闘龍門のやったことはたいしたもんだよね。

——そういえば、師匠のご自宅で闘龍門の若手の面倒を見てたって話も聞いたことがありますね。

楽太郎　うん。たまたま部屋が一つ空いてたからねぇ。「おなかが減ったら、勝手にそこらへんにあるものを食え」つって。阿修羅だって、俺が稽古部屋にアパートを借りてたとき、「行くとこがない」って言うから「じゃあ、そこへ住んでりゃいい」って。



さんゆうてい・らくたろう■1950年2月8日、東京都墨田区出身。天龍源一郎とは墨田区立両国中学校の同級生。圓楽一門会所属。『笑点』大喜利のレギュラー出演者。桂歌丸とは、ブッチャーと馬場をも超える抗争劇を繰り広げている。

だから長崎に帰るまでそこに住んでた。

——そこまでサポートするんだから、師匠の周りに自然とレスラーが集まるわけですよね。

楽太郎　下町の荒川の花火大会ってあるんだけど、たまたま「今年はレスラー関係に声かけようか」って声かけたの。で、花火を見終わってリビングをぱっと見たらば、7団体、12グループいたんだから（笑）。

——いったい何人来てたんですか（笑）。

楽太郎　それは馬場さんと天龍のおかげでもって知り合った人たちがいっぱいいるわけじゃない。俺は馬場さんと天龍に「プロレスをよろしく！」って頼まれたつもりなんだな。

——カッコいいですねぇ。そんな馬場さんと最後に会われたのはどういうタイミングだったんですか？

楽太郎　東京の最後の試合かな。観戦に行ったときね。

——どういったお話をされたんですか？

楽太郎　どういう話をしたんだっけなぁ……。俺は試合のことも言わないしね。だって、プロがやってることなんだから。俺は遊びの話しかしないから（笑）。

——馬場さんの体調が悪いっていう話は聞かれてたんですか？

楽太郎　あのね、病気のことは知らなかったんだ。そんな雰囲気はなかったな。馬場さんは弱々しいとこは見せないし、元子さんも秘密主義だったしね。だからほかの選手もそんな大病だとは思わなかったんでしょ。

——知っていたのは一部の人間だけだったみたいですね。

楽太郎　やっぱ馬場さんがいなくなったらダメだね。馬場さんが重石だったのよ。馬場さんがいたら、いまのプロレス界はこうなってないんだよ。馬場さんがいたから、一つの塊になっていた。だから、そういう意味では大きかったよ。やっぱり馬場さんという柱がなくなっちゃったんだな。カリスマがいないとね。

——それはいま、あらためて実感するところですね。

楽太郎　大変だったと思うよ。馬場さんは個人的な金も使ってただろうしね。ただ、下の選手はそれを知らずに「トップは金も持ってるんだろう」と疑心暗鬼になっちゃうんだろうね。そうじゃなくて、トップにはトップの苦労があるんだよね。うん。馬場さんが悲しそうなときもあったし、いろいろ考えて「楽太郎さん、どう思う？」なんてちらっと言ったこともあったな。だけどあんまり人の業界に口を出しちゃいけないから。

——サポートはしても。

楽太郎　俺はいわゆるサポーターだもん。言っとくけど、タニマチでも、中の人間でもないから。これからもプロレスをサポートしていきますよ。……さすがにもう17時間は飲めないけどね（笑）。

【09年2月23日／東京・ホテル日航東京にて収録】



日テレ地上波中継打ち切りに
この男が黙っていられない！

「日テレの後輩たちよ！なんで守りきれんかった〜〜ッ!!（涙）」



プロレスのために日本テレビを辞めたプロレスバカ

若林健治

今年3月いっぱいでノアの地上波番組が打ち切りとなった。これにより55年続いた日本テレビのプロレス中継はジ・エンドに。そんな事態にこの男が黙っているはずがない。昨年末に『プロレスのために日本テレビを辞めた男』（文苑堂）なる本を出版した“プロレスバカ一代”若林健治アナウンサーだ。プロレスを“上流地帯”へと戻すため、この男が吠えまくるぞ！

聞き手／阿修羅チョロ

――若林さん、ついにというか、とうとうというか、日本テレビでのプロレス中継がなくなってしまいましたね。

若林 そうですねぇ……（しみじみと）。今回の打ち切りについて、ちょっとムチャなこと言っていいですか？

――どうぞ、どうぞ！（笑）。

若林 「平川、コノヤロー！」って。

――ノア中継の実況をされていた日本テレビの平川健太郎アナウンサーですね。

若林 僕の後輩になるんですけど、「なんで守れんかった！」って感じですよね。平川はノア中継のチーフをやってたんですけど、野球やサッカー、あとは箱根駅伝の実況をやったり、プロレスだけじゃないですけど、アイツはホントにプロレスが好きですからね。

――たしかに、プロレスの実況がやりたくて日本テレビに入社したという若林さんに通じるプロレスバカなんですよね（笑）。

若林 そうなんです。でもプロレスバカだったら守ってほしかったけどねぇ。

――日テレのノア中継最後の武道館大会ではGHCの新王者になった秋山（準）選手から「また（平川）健ちゃんに実況してもらえるように頑張ります」と言われて涙してたみたいですからね。

若林 もちろん、平川も守るべく頑張ったと思いますよ。僕は辞めた人間だからそのへんはわからないですけれども。あと言えるとしたら、今泉さ～～～ん！

――今泉（富夫）さんは馬場さん時代の全日本プロレス中継から、その後、ノアでもディレクターをされていた方ですね。

若林 そうなんですけど、2年ぐらい前に人事異動で現場から離れたんですね。そのあとは取っかえ引っかえ、ほかのジャンルもやりながらプロレスのプロデューサーもやるみたいなかたちになったみたいで。前はプロレスのプロデューサーっていったらボンっていたわけですよ。

――プロレス専門でやっていたんですね。

若林 そうです。そういう人間が団体側にアドバイスしたり、あるいは会社に「今度、プロレスの枠取ってよ」とか言ってね。枠を取るには編成というところがあるんですけど、そこに足しげく通って「頼むよ～、長年の付き合いだろ。今度酒おごるからさぁ」とか言って人間的な付き合いで転がっていったわけですよ。

――それが時代とともに、転がっていかなくなっていった、と。

若林 まさにそうですね。ノアに関して言えば、キーポイントとなる人がいなくなったのがテレビ中継がなくなった大きな原因の一つですよ。



90年4月13日に東京ドームで開催された日米レスリングサミットでは福澤朗、若林健治、倉持隆夫という『全日本プロレス中継』3大名物実況アナウンサーが集結。ほかにも解説の竹内宏介氏や徳光和夫さんの姿も確認できる。さらには特別ゲストとして馬場さんの麻雀仲間の松山千春まで登場と、豪華絢爛の解説陣。これも地上波の力だろう。

――テレビ局側の事情も大きかった、と。

若林 そうです。ほかにも馬場さん時代の全日本プロレスに深く関わってきた原章さんって方が福岡放送の社長として転身されたのも大きいですね。原さんは日本テレビの取締役だったんですけど、そういったプロレスを支えてきた人たちが散り散りになっていったんです。原さん、今泉さん、僕の先輩の倉持（隆夫）さんもそうですし、身体を張って守ってきた人たちがだんだんいなくなったっていうのも一つの要因じゃないかと思いますね。

――それは大きいでしょうね。

若林 要は日本テレビという会社の中でプロレスという言葉が話題に上がるような空気を作ってあげる人がいなくなった。テレビ局にもプロレスファンはいますけど、それ以外の人を巻き込んでうねりを起こすような環境ではなくなっちゃった。

――キーになる人がいたら、まだプロレス中継は残っていた可能性もあった、と。

若林 そう思いますよ。矢島～～～～～～ッ！（笑）。

――矢島（学）さんもプロレス実況をやられていましたね。

若林 平川と矢島はプロレスが大好きですから。矢島の「小橋が勝ちました！ 腎臓ガンに勝ちました～ッ!!」とか、あれなんかもうMVPですよぉぉぉ！（絶叫）。

――ち、ちょっと興奮しすぎです（笑）。

若林 失礼しました（苦笑）。でもね、いまのテレビ業界っていうのはハッキリ言って3Kなんですよ。

――3Kといいますと？

若林 交通費、広告費、交際費。この3Kなんです。それこそ、銀座なんかに飲みに行ったら、「こんな伝票通さねえぞ！」とか「タクシーばっかり乗るんじゃねぇよ！」とかね。スポンサー筋はだいたいがそんな感じで。「広告なんか入れなくていいんだよ。もっと切り詰めろ」って感じでだんだん出稿しなくなってくる。テレビ局でいえばCMですよね。

――我々、出版業界も同じような感じではありますけども。

若林 世の中全体がそうなってきてるでしょ。ゴールデンタイムでプロレスやってた頃なんてスポンサーも凄かったです。ほとんどが大手でね。そういうスポンサーもいなくなっちゃいましたからね。テレビがなくなることによって、たとえばプロレスの興行のスポンサー、あるいはマットとかコーナーに出してくれるスポンサーすらもなくなっていく方向にあると思うんですよ。だって、テレビに映らなかったから広告を出したって会場に来た何百人しか目にしないわけでしょ。

――あまり効果はないですよね（笑）。

若林 だから、テレビがなくなるってことは単純に放映権料だけではなく、それ以外の部分でもいろいろと大きいんです。

――ホント、悪循環ですよね。

若林 そうですよ。あとテレビの力って

ノア中継の打ち切りはテレビ局サイドの事情が大きかったと思います

リングサイドに有名人が並ぶのはテレビ中継があってこそです！

いう意味では、たとえば会場に原（辰徳）監督が来たりしたら、裏で「永源さん、原監督にツバぶつけて！」とか僕たちがお願いするわけですよ。

――そんなことまでしてましたか（笑）。

若林　原監督はプロレスファンではありますけど、テレビだから来てくれるんですよ。テレビで中継がなかったら、よほど友情が深いとかじゃないと来てくれませんよ。格闘技だってそうじゃないですか。リングサイドに有名人がズラッと並んでるのはテレビがあってこそですから。テレビがなければ絶対に来ないです！

――まあ、そうかもしれませんね。

若林　ああいう手法だって、「へぇ～、あの有名人もプロレスが好きなんだ」って、たまたまテレビをつけた視聴者が思ってくれるだけでいいんですよ。その中の何人かは「じゃあ、どんなものかちょっと観てみよう」ってなりますから。地上波でやっていれば、その数っていうのはバカにならないんですよ。

――視聴率1パーセントでも何十万人が観てるって言いますからね。

若林　そうなんです。だから、なんとしてでもノア中継は存続してほしかったです。新規のファンを開拓するにはやはりテレビの力が大きいですから。

――テレビ局の事情という部分も大きいんでしょうけども、今回の地上波打ち切りはノアに限らず、ここ数年のプロレス界の低迷も影響はありますよね。

若林　それもあるでしょう。プロレス業界もこの不況下ですから、それなりの企業努力をしていかないとダメだと思いますよ。そういう意味で、一般の人に広がる努力というのは、いまだったら武藤・全日本なんかはよくやってますよね。お笑いや『プレイボーイ・チャンネル』とのコラボ興行もやってますし、サンリオさんとか衣装面でのコラボ、あとはグリコさんとかアスリートをサポートする会社とのコラボですとか、レオパレスさんと提携して放送したりっていうのも発表してましたよね。

――いろいろと幅広くやってますよね。

若林　武藤・全日本は、いままでのプロレス界にない新しいかたちを提示していきたいっていう考えは徹底してますし、そうしていかないと新しいファンを開拓できないっていう認識をしっかり持ってますから。あとはＺＥＲＯ１も企業とコラボしたりとか頑張ってますよね。

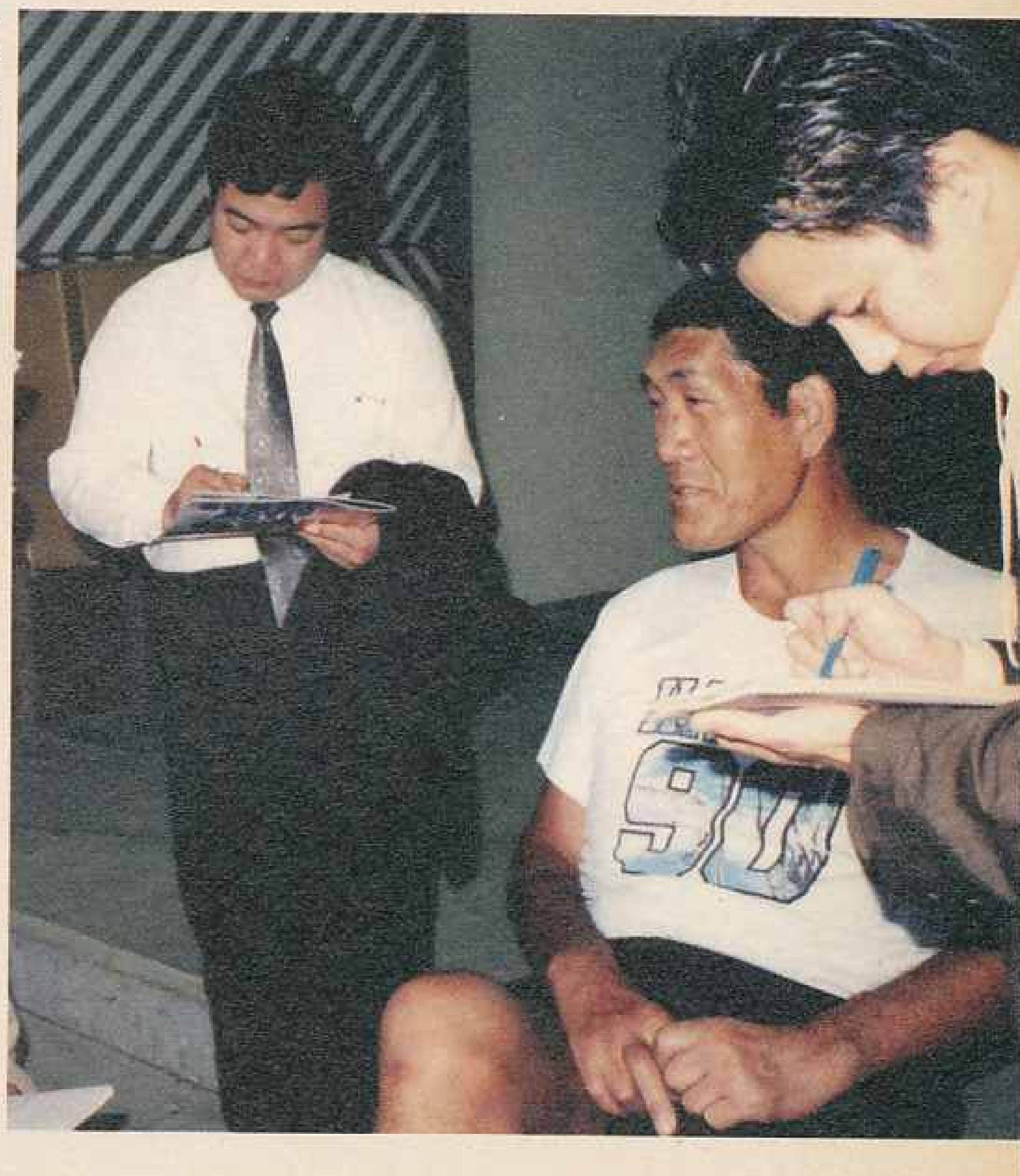
――そういった企業努力がノアはちょっと欠けていたということでしょうか？

若林　いやいや、決してそういう意味で言ってるわけではないですよ（笑）。（仲田）龍ちゃんもディファ（有明）の地下で大量のクワガタを育ててましたから。

――えっ、それはなんのために？

若林　子どもの日にプレゼントしたいって話していて。本当にファンのことを考えている人なんですよ。最近も不況であえぐ人たちに安い値段で観てもらいたい

ジャイアント馬場に憧れプロレスラーを目指していた時期もあったという若林さん。日テレに入社し、全日本中継の担当になってからは、憧れの馬場さんを最前線で取材。キャリアを積んでからは馬場さんや元子さんにアイデアを提案することもあったんだとか。





現在はフリーとしてバラエティや司会業などで活躍する徳光和夫さんだが、日本テレビ入社翌年から約10年間、全日本中継の実況として大活躍。馬場さんや上田馬之助などプロレス関係者との交友も深い徳光さんだが、日テレ以外の番組で三沢との共演もあるか？



全日本でのタイガーマスク時代も含め、かなり長い付き合いとなる三沢社長と日本テレビ。地上波中継はなくなるが、これまでどおりCS放送・日テレG+ではノアを徹底放送。ほかにも4月からテレビ大阪での30分番組、サムライTVでの大会中継も決定している。

ってことでノアではチケット料金の見直しとかも始めましたよね。

――それは知りませんでした。

若林　そういう企業努力なんかもニュースとかで扱ってもらえればいいんですけどね。「プロレス団体のノアが不況の世の中にあえぐ人たちのためにチケット価格を安くする」って流れたら、それを観る人もいるわけですよ。それがいまは不可能に近いかたちになってしまって。

――ここ最近では、小橋さんの復活とかは世間にも届く大きな話題でしたよね。

若林　そうなんですよ！　でも、それを「小橋が復活するからニュースに乗っけてよ」ってニュースの編集デスクにお願いできるのが今泉だったわけですよ。「やってくれたら一番いい席用意するからさ」とか言って（笑）。

――そういう駆け引きもある、と（笑）。

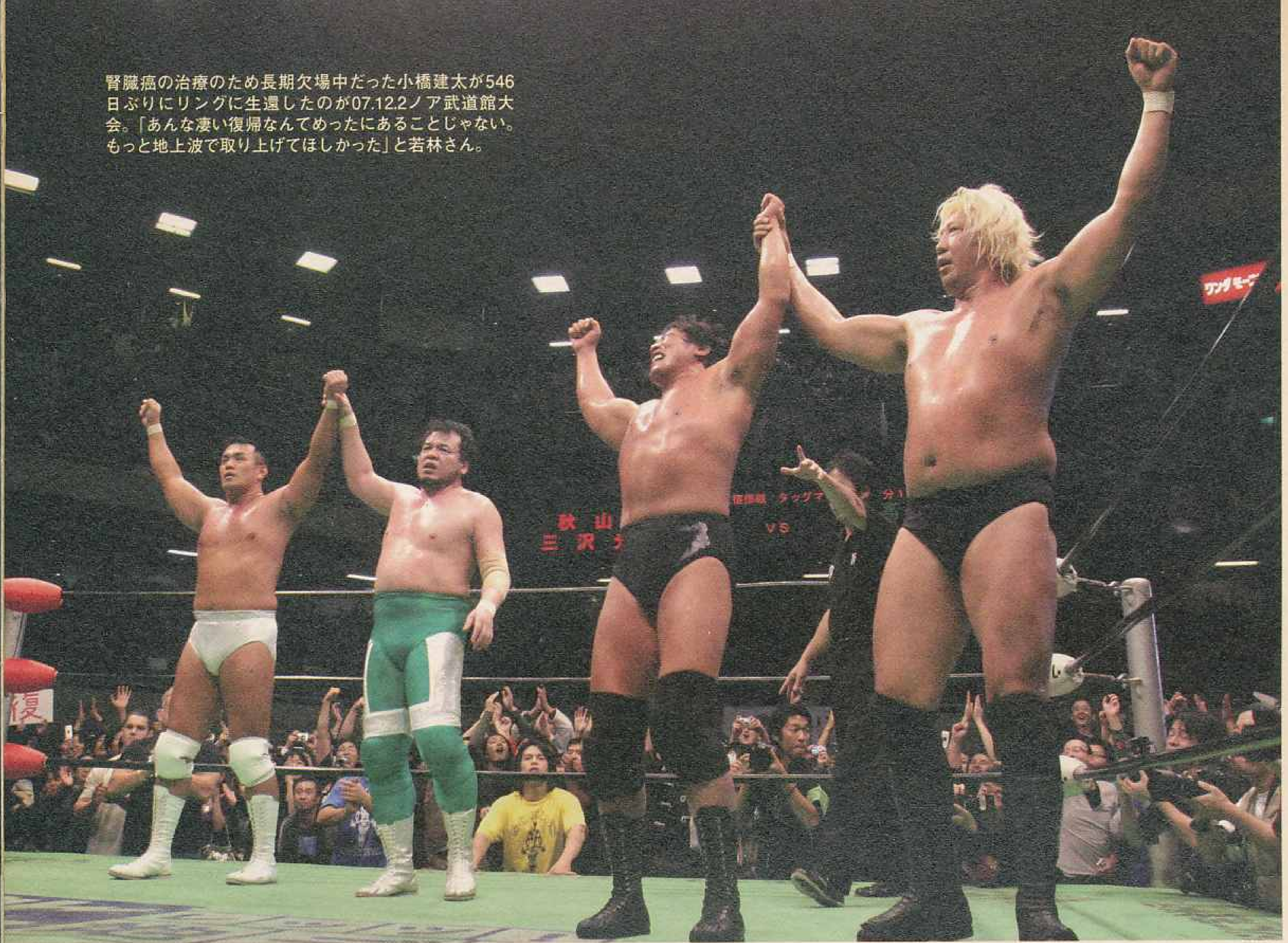
若林　僕らの時代はその役目を我々アナウンサーとかもやれてたんですけどねぇ……（しみじみと）。

――いい時代だったんですねぇ。

若林　残念ながらいまはそういう時代じゃないですから、各団体がそれぞれ企業努力をし始めている。先ほども言ったように各団体のトップ、たとえば全日本の武藤社長は頭が柔らかいです。ＺＥＲＯ１の大谷（晋二郎）さんもそう。で、ノアは社長は三沢さんですけども、ノアには龍ちゃんがいるわけですよ。

――仲田さんといえば、三沢社長の片腕的存在ですからね。

若林　龍ちゃんと僕は全日本時代からですから付き合いはかなり古いんですけど、最近になってかなり努力してますよね。ただ、努力はしたけども、結果的に日テレ



腎臓癌の治療のため長期欠場中だった小橋建太が546日ぶりにリングに生還したのが07.12.2ノア武道館大会。「あんな凄い復帰なんてめったにあることじゃない。もっと地上波で取り上げてほしかった」と若林さん。

は降りちゃったわけです。これは単純に大変なことだと思いますよ。

——報道等によれば放映権料として年間1億5000万円近くもらっていたみたいですけど、テレビ業界に詳しい若林さんから見て、その金額は正しいですか？

若林　だいたい、そんなもんでしょうね。

——年間だと52週あるわけで、単純計算で一回の放送につき250万円近い収入があったということになりますよね。

若林　そうですよ。そういったお金で、新日本から（スタン・）ハンセンを引き抜いたり、輪島（大士）さんを入団させたりできたわけですよ。それがなくなるということはこれは大変なことですよ。ホント、龍ちゃんには頑張ってもらいたい！

若林健治



——ノア設立後は、仲田さんとはちょっと疎遠になっていた感じなんですか？

若林　そうですね。最近は僕もプロレスの現場に戻ってやってますけど、人づてに話を聞くぐらいで、龍ちゃんが出したノアの本もまだ全部読めてないですから。

——まだ全部読めてないですか（笑）。

若林　でもあの本なんかを読むと、ノアの旗揚げ当初は金策で銀行を回ったとか苦労した話も書いてありましたし、そういった苦しい時代を経験してますから、地上波はなくなったけども踏んばってくれるでしょう。……でもね、最初にも言ったように、打ち切りになったのはノアの責任じゃないですから。

——ノアの責任ではない？

若林　じゃないです。たとえばですよ、東京六大学野球で斎藤佑樹くんが活躍しましたよね。

——ハンカチ王子ですね。

若林　あの選手が出てきたときに日テレで放映権を取りに行って5年契約を結んだんです。でも、その契約をわずか2年で破棄したんですよ。契約を途中で破棄すると違約金も発生するわけです。しかも、かなりの金額が。ハッキリ言って六大学野球なんて優良コンテンツですよ。

——ですよね。何か問題でも？

若林　問題というか、そこまでしてでも切り詰めないとダメになってしまったんです。日本テレビは赤字に転落したんですから。とにかく「制作費を削れ」っていうのが至上命令で。「要らないコンテンツは捨てろ」ですよ。

——そこにノアも入ってしまったと？

若林　そういうことです。でもね、コンテンツっていうのは捨てるのは簡単なんです。世界陸上だって日本で一番最初にやってたのは日テレなんですよ。

——いまはＴＢＳでやってますよね。

若林　91年からやってたんですけど、そのあとでＴＢＳに持っていかれたんです。ＮＦＬもそう。そんなことをやってるうちにテレビ局の足元を見て放映権料を高くしたり、テレビ局同士もコンテンツを取ったり取られたりして。そんな中でプロレス中継っていうのは、力道山、馬場、猪木の日プロ時代、全日本、ノアと一貫してやってきたわけじゃないですか。

——55年の歴史がありますからね。

若林　これはどこの局も手を出せないコンテンツなんですよ。だって、全日本プロレスリング株式会社って日本テレビの子会社だったわけですから。

——かつてはそうでしたよね。

若林　どこも不可侵というか、手を出せないコンテンツだったわけですよ。それを切らざるをえない会社的な事情があったわけですよ。う〜ん、情けない。………なんか無意識のうちにテレビ局批判になってきてません？（苦笑）。

——いや、気のせいだと思います（笑）。まあでも、メリットとしては日テレでの中継がなくなったことによって他局に出やすくなるんですよね。

若林　その可能性はあるでしょうね。ただ、ノウハウを知らないと思うんですよ。急に「いろんな番組に出れるよ」って言われても、それに対応できるシステムがないと難しいでしょうし。そんな器用な人ばっかりじゃないですからね。

——専門のプロダクションだったり事務

所がないとうまく対応できない、と。

若林　そう思いますよ。野球選手とかもそうじゃないですか。シーズン中は球団に肖像権とか帰属しますけど、シーズンオフは芸能プロが握ってるというパターンが多い。TBSなんかはプロダクションを作って野球選手とか抱えてますから。

――日テレはどうなんですか？

若林　それが日テレではやらないんだよね。桑田（真澄）もホリプロだったし。

――えっ、桑田さんってジャイアンツ時代からホリプロ所属だったんですか。

若林　そうですよ。それもおかしな話でしょ。ジャイアンツとの関係を考えたら当然、日本テレビ系のプロダクションが押さえなきゃおかしいわけですよ。そんなことが多いんだよなぁ、日テレは。

――若林さん、またちょっと日テレ批判気味になってきてますよ（笑）。

若林　失礼しました（笑）。話を戻すと、今回の騒動を受けての龍ちゃんの一連のコメントは秀逸ですよね。一貫して弱音は吐いてないじゃないですか。

――前向きなコメントが目立ってますね。

若林　ノアのリング上に目を向けても、力皇とモハメドヨネが新しい軍団を作りますし、一時期は盛り上がりに欠けていた感のあるヘビー級も秋山中心になりそうだし、ジュニアは丸藤（正道）やKENTAで前から盛り上がってますけど、最近になってちょっと尻に火がついたっていう感じがするじゃないですか。

――さすがに年間1億5000万円もなくなったら、尻に火もつくでしょうけど。

若林　まあ、そりゃあそうですよね（笑）。

――テレビ事情に詳しい若林さんに確認しておきますが、一度地上波中継がなくなって、また復活するという可能性はあるものなんでしょうか？

若林　まあ、世の中でまたバブルでもボーンっと来てくれればわかんないと思いますよ（笑）。

――バブルを待つしかないですか……。

若林　まあでも、人間の生き方として、未来永劫、地上波はないんだとなったら闘う気力も起きてこないですよね。そういう意味で龍ちゃんのコメントは秀逸だって言ったの。

――なんか、自社ビルの建設予定もあるとか言ってたんですよね。

若林　いや、自社ビルの話は別として（笑）、一連の龍ちゃんの発言で選手がまず安心したと思う。その次にファンが安心したでしょう。「地上波打ち切り」って報道されて龍ちゃんがオタオタしちゃったら、選手は「ヤバイ」ってことになるし、ファンだって一緒ですよね。



08年にプロレス界復帰をはたした若林さんは大仁田厚と2008年版の大仁田劇場を展開し、好評を博すも、諸事情により現在は休止中。プロレスを世間に知らしめるため、次なる若林アナの仕掛けに期待！ やれんのか？ やっちゃってください！

何をやったっていいんです！ プロレスはなんでもありですから

――単純に約1億5000万円の収入がなくなったら普通はオタオタしますよね。

若林　そりゃあしますよ！ それで僕は新日本の菅林（直樹）社長に「地上波を何がなんでも守ってください」とお願いしたんです。プロレス村だから。「一人勝ちでいい」という認識はどの団体にも持ってほしくない。対抗戦やライセンスの交付など、いい流れになってきてますよね。

――地上波打ち切りが決定したあとに、いろいろ動きもあるみたいですね。ノアとしては日テレ中継は終わりますが、これまでどおりG+での大会中継に加え、テレビ大阪の30分番組とサムライTVでの大会中継が新たに発表されましたね。

若林　そうですね。ちなみにサムライTVとかCSの大会中継の放映権料っていくらだか知ってます？

――いや、全然わかんないですね。

若林　ここだけの話ですけどね……（と言って、CSをはじめ、民放各局の放映権料などの話を饒舌に語ってくれた若林さんだったが、生々しすぎるのでカット）。

――勉強になります！ やはり地上波の放映権料と比べたら雲泥の差ですね。

若林　そう考えると、いかに地上波がなくなるってことが大きいことか。あくまでもこれは僕の予想ですよ。

――ん？ どんな予想でしょうか？

若林　龍ちゃんは正式に打ち切りの話を聞いたときは頭は真っ白、目の前は真っ暗になったと思うんですよ。そこでよく折れずに、気持ち的にグッて踏みとどまって「心配するな」ってコメントを出したなって。もうあのコメントなんて聞いたら、僕なんかは三沢社長と並んで「仲田社長！」って言いたくなりましたよ（笑）。

――仲田社長ですか（笑）。

若林　絶対に三沢さんのことは傷つけないように自分が汚れ役を買って出てますからね。僕もよく知っているかつてのあの方みたいに、そういった汚れ役が団体にいないとダメなんですよぉぉ！

――それはあると思います。

若林　言葉は悪いですけど、外からの嫌われ者って絶対に必要なんですよ。……ダメですよ。ストレートに書いたら。○○さんから電話がかかってくるんで、うま～く書いてくださいよ（笑）。

――あのお方から電話がくるかもしれない、と（笑）。いま地上波というと、プロレスだけじゃなく格闘技なんかもテレビ東京が異常に頑張ってるんですよね。

若林　そうですよね。いまは全日本や『ハッスル』の特番をたまにやってますし、今度はドラゴンゲートの両国大会も放送するみたいですね。

――そうですね。格闘技では『戦極』やケージフォースなんかもやってますし。

若林　まあでも、どこがどうとは言いませんけど、ほとんどが持ち込みじゃないですか？

若林健治

「戻せ、地上波！」ってことで、みんなでプロレスを盛り上げていきましょう！

――いわゆる枠買いというかたちが多いみたいですね。

若林　そうですね。数年前、全日本でもやってましたけど、自分のところで番組を作って「これを放送してください」って完パケの素材を渡して買った枠で放送してもらうかたちですね。

――日テレのノア中継のように放映権料はもらえないんですよね。

若林　もらえないです。テレビ東京の地上波といってもいろいろあって、東京ローカルの場合は安いんですよ。だから、同じ深夜でもその時間帯はテレビ東京において全国ネットを張れる時間なのか、それとも関東ローカルの時間帯なのか、それによって値段も違いますからね。

――へぇ～、勉強になります！

若林　全日本が『プロレスLOVE』という番組をテレ東でやってたときは、あれは全国ネットでしたから凄く高かったんですよ。で、結局1年で終わっちゃいましたからね。お金が続かなくて。

――1年間で終わっちゃいましたね。

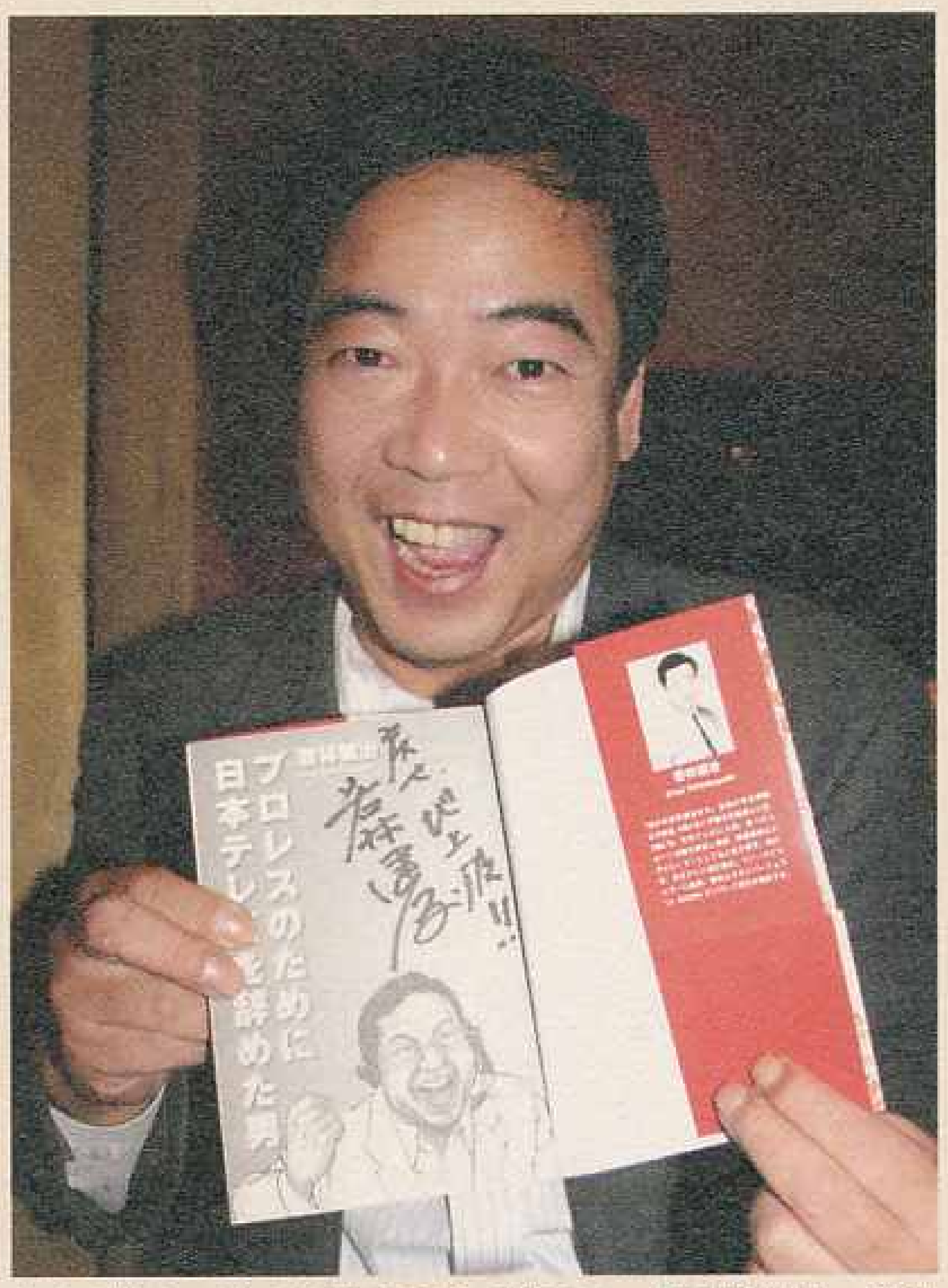
若林　でもね、ちょっと止めていいいですか……（と言ってテレコを止め、マット界の気になる舞台裏を語ってくれた若林さんだったが諸事情によりカット）。

――へぇ～、そんなこともされたりするんですか!?　まあノアに限らず、プロレス関連の仕事に関わってる人にとっては厳しい状況が続きそうですよね。

若林　そうですよね。僕も大仁田（厚）さんと、いわゆる大仁田劇場というかたちでやらせてもらってたじゃないですか。

――プロレスは興味がなくても、あの大仁田劇場だけは欠かさず観ていたアルバイトもウチの編集部にいましたよ（笑）。

若林　ありがとうございます。でもね、ああやって大仁田さんと絡めばニコニコ動画とかで世間に広がるんですよ。俺一人でやってもしょうがない。大仁田さんがいるから「なんか、またやり始めたな」って引っかかる人が出てくるんです。だから、もっと利用しちゃえばいいんですよ。レジェンド連中を。そうやって少しでも努力をしないと、プロレスは世間の話題になんてならないですから。



わかばやし・けんじ■1958年2月23日、東京都出身。法政大学卒業後、81年に中部日本放送へ入社。84年に日本テレビへ入社し「全日本プロレス中継」の実況を担当。95年よりラジオ日本へ出向となるもファンのプロレス中継復帰を望む声により98年に復帰。07年12月に同社を退社、現在はフリーのアナウンサーとしてプロレス界を中心に活躍中。

――いまは世間に届くような話題をプロレス界から発信できていない状況ですよね。たまに報道されても、サスケ逮捕とかインリン様未払い騒動ぐらいですし。

若林　そうですよね（笑）。僕なんかも、いまはCSさんとかで実況をやらせてもらってますけど、ドラディションを二回、健介オフィスを二回、大仁田興行にロックアップ、昭和プロレスも実況をやらせてもらいました。でもね、せいぜい反響があるのは2ちゃんねるぐらいで（苦笑）。

――反響は2ちゃんねるだけ（笑）。

若林　いまサムライTVさんでお世話になっていながらこういうことを言うのもなんですけども、ちょっと悲しいぐらい影響力がないというか。

――やはり地上波に比べると影響力の違いは段違いなんでしょうね。

若林　地上波では深夜の放送のときですら、翌日会社内で「なんかヘンなこと言ってたよな」とか反響がありましたから。だから、地上波での放送がないってことは会社や学校で話題になることもないと思うんですよね。そう考えるとヤバイよなあ、プロレス……どうしよう？

――どうしましょうねぇ。地上波とプロレスといえば、昨年の大晦日の『スガッスル』はご覧になりました？

若林　いや、観てないですけど、『スガッスル』って、もしかして菅（賢治）さんが作ったの？

――そうです。菅さんが髙田総統ならぬ菅総統に扮して、小川直也さんから武藤敬司さん、北斗晶さんに佐々木健介さんなんかが芸人と試合をして、『紅白』の裏では一番高い視聴率も獲ったんですよ。

若林　へぇ～。でも、それだってそうですよ。地上波の、しかもゴールデンだから武藤さんや健介さんも出たんですよ。

――若林さん的にはプロレスラーと芸人が闘ったりするのは抵抗はないですか？

若林　まったくないです！（キッパリ）。ハッキリ言いますけどね、もうなんでもやればいいんです！　プロレスはなんでもありですから。

――『スガッスル』からオファーがあったら喜んで出ると？

若林　全然出ますよ！　今度、菅さんに会ったら「もっとプロレス扱ってよ！」ってお願いしようかな。

――菅さんのことは日テレ時代から知ってるわけですね。

若林　知ってますよ。僕が日本テレビを辞めるときに菅さんに挨拶したら「ああ、そうですか。頑張ってください！」って言ってくれて。あんな大プロデューサーだけど凄く腰が低いのよ。あの人を嫌う人は社内で一人もいませんから！

――そうなんですか。

若林　よし！　今度、菅さんに会いに行こう。

――もしかしたら、ノアよりも先に若林さんが地上波のプロレス中継の実況に復活できるかもしれませんね（笑）。

若林　そうなるように僕も頑張るのでプロレス界も頑張ってほしいよね。でもね、プロレスは絶対になくならない。それだけ素晴らしいものだから。そしてなくしてはいけないと僕は思ってるから。


――では、最後にひと言お願いします！

若林　「戻せ、地上波！」ってことで『kamipro』さんも一緒にプロレス界を盛り上げていきましょう!!

――は、はい、頑張りましょう！

【09年3月10日／都内某所にて収録】

日テレ中継打ち切り決定に寂寥の念!



んあ〜! サダハルンバが ノアを語る!

超上流地帯なFEG代表

谷川貞治



仲田龍さんに恩返ししたいなあ

我らがサダハルンバがプロレス増刊号に登場！今回、ノアの日テレ中継打ち切りの話をフックにプロレスの話をぶつけてみた『kamipro』編集部だが、なんと見事にマット界にピシャリと提言。サダハルンバ流のマット界の理想を聞き出した。

聞き手／ジャン斉藤　撮影／平工幸雄、bodog.com

ボクは格闘技も誰が勝った負けたじゃなくて、人を見てるからね

──谷川さん！『東京スポーツ』紙上でK―1とノアの全面戦争をブチ上げてましたけど、ホントに魔裟斗vsKENTAは実現するんですか？

谷川　んあ〜。実現も何も、あれは『東スポ』のアングルに乗っただけだよぉ。

──やっぱり（笑）。『週刊プロレス』が否定記事を書いたりして、けっこう波紋を起こしてるみたいなんですよ。

谷川　あ、そうなの？　ボクの知らないあいだにそんなことになってるんだ。悪いことしちゃったなあ（サラッと）。

──まあ、最近は『東スポ』の読み方を知らない人も増えてきてるってことなんですかね（笑）。

谷川　でもね、ボク、ノアのフロントの仲田龍さんは好きなんだよね！

──ははーん。谷川さんがそういうことをこぼすってことは、何か裏で企んでる証拠じゃないんですか？

谷川　いや、そうじゃなくて、単純に仲田さんは"ザ・プロレス"って感じがしておもしろいんだよ。要するに、ボクと価値観がまったく違うから「あ、こういうところに固いんだ」「こういうところに柔軟性があるんだ」というのが逆に新鮮なんですよ。

──「カ、カテエ!!」部分に興味がある、と。

谷川　それに、仲田さんには、新生『WRESTLE―1』のときにたくさん選手を貸してもらったからいつか恩返しをしないといけないと思ってるんですよね。だからKENTA選手がK―1MAXに出られるんだったらホントに出てほしいなあって。

──そのノアなんですが、日テレ中継の打ち切りが発表されましたよね。

谷川　うん。凄く寂しい話だね。『東スポ』でその記事を見たときは、思わずテレビ朝日の松本プロデューサーに電話して、「絶対に『ワールドプロレスリング』の放送やめないでくださいね！」ってお願いしたんだから。

──他団体のためにそんなことまでしましたか。

谷川　そうですよ（得意げに）。「プロレスが終わっちゃいますよ」って言いましたから。……ちなみに「格闘技の放送をやめないでください」というのはフジテレビさんにもTBSさんにもいつも言ってますけどね!!（鬼気迫る表情で）。

──ボ、ボクに迫らないでください（笑）。ところで谷川さんってノアは観てるんですか？

谷川　ライブではぜんぜん観てないです（キッパリ）。

──んあ〜。

谷川　05年に東京ドームの大会を観て以来、観てないなあ。なんか昆虫の人（編集部注＝ムシキング・テリー）が出てた記憶はあるよ。

──ぶっちゃけ、もうプロレスに興味ないんじゃないですか？

谷川　ホンッットに興味がないねえ。ぜんぜん観てないし引っかからないんだよ。ただ、観るとやっぱり「凄いな！」と思うよ。とくにノアの試合とか凄いと思うし、あんな危ないことよくやってるなあって。だけど定期的に何かを観ようとは思わないですね。

──それは、K―1やPRIDEが始まってから徐々に離れていった感じですか？

谷川　いや、ボクは猪木さんが選挙に出てから徐々に離れてますね。猪木さんのプロレスが好きだったから。

──つまり、アントニオ猪木という"人"を見てたってことなんですかね？

谷川　そう。プロレスって、人を見るってことだと思う。

──確かに、昔よりいまのプロレスのほうが激しいことをやってるんですけど、なかなか人としては猪木さんほどのスケールがないですもんね。

谷川　ボクは格闘技も人を見るからね。だから格闘技も競技というより人で見ちゃうタイプです。だからDREAMフェザー級GPなんかは、誰が勝った負けたじゃなくて、「この選手たちはどんな人たちなんだろう」という目線でしか見てないですよ。たとえば「子どもの頃、ちっちゃいヤツって気が強くって、危なかったよなあ」ってことを考えたり、その視点で見た


東スポ
K-1 vs ノア全面戦争
魔裟斗
急浮上
KENTA戦
日テレ撤退で障害なし
邪道クイズ
24万円
子育てハッピーセミナー
なぜ生きる
男のための自分探し
自分をダマすのはやめて、自由に生きよう！

「魔裟斗vsKENTA戦急浮上」と見出しが打たれた2月25日の『東京スポーツ』でサダハルンバは「以前から目をつけていたのがKENTA選手です」とコメント。言うほうも言うほうだが、サダハルンバ&『東スポ』の"飛ばし"を真に受けるほうも受けるほう!?

谷川貞治

ときに「そう考えるとコイツはダメだなあ」とか思ってたもんね。

――谷川さんから見てプロレスが盛り返していくには何が必要だと思います？

谷川　ええっと、急に言われてもわかんないなあ～。ただ、ボクが好きなのは〝灰色のプロレス〟であり、スケールが大きいことですね。だからアントニオ猪木 vs アミン大統領みたいなのは観たいですよ。灰色だし、スケールがでかい！

――ありましたねぇ、ウガンダの人食い大統領との決戦プランが（笑）。猪木さんが実現したカードだけでも、ウイリエム・ルスカ、モハメド・アリとか、どれもスケールが大きいですよね。そりゃ、ブームになりますよ！

谷川　そうですよ。いま格闘技であろうがプロレスであろうが、それをやったら絶対にブームになるでしょう。もう交渉の時点から、ガチンコなんだかプロレスなんだかわかんないような感じになっちゃうじゃない。ペレストロイカのときだってそうだと思うけどさ、「チョチョシビリたちになんでプロレスさせるんだ⁉」っていう感じでしょ？

――ペレストロイカというと、89年の新日本ドーム大会での日米ソ3ヵ国対抗戦のときですよね。

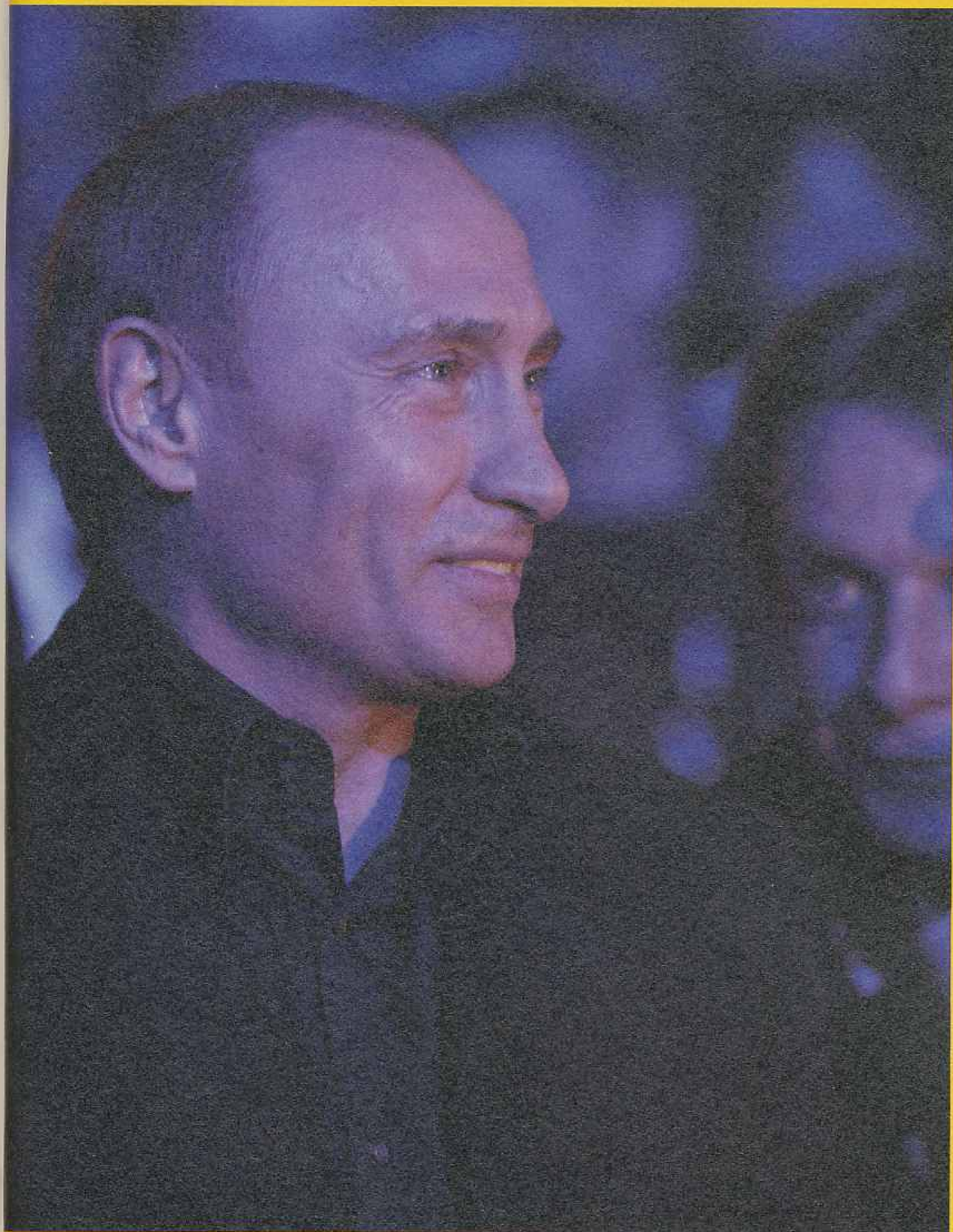
谷川　それに比べると、いまはスケール感が感じられないんですよ。スケールが大きいことに対して人も動くし、お金も動く。それがね、たぶんボクら格闘技界も含めて求められてることだと思うね。

――たとえば、いまUFCの現役チャンピオンを連れてきたところで、そこにスケール感はないですもんね。

谷川　ファンは喜ぶだろうけど、世間は動かない。だから、いまこそ猪木イズムじゃないけど、そういうことを考えないと。逆に言うと、いまのプロレスのおもしろさって小ネタがおもしろいじゃない。『ハッスル』でもドラゴンゲートでも、小ネタでクスッと笑うような感じでしょ？　いまはプロレス界全体がそういう方向に走ってる気がしますよね。

――身内ウケだし、楽屋オチ的なところはあるかもしれないですね。

谷川　やっぱりプロレスや格闘技が小ネタじゃダメ。でも、DREAMもK-1もプロレスも、ボクらは夢を語って元気を出させるのが商売なのに、「どうだっていいよ！」ってことで揉めたりしてるじゃん。



プーチン前大統領に試合をオファーしていたとは、サダハルンバはさすがすぎる!!　自身でも柔道家として格闘技をこよなく愛し、またヒョードルの試合を観戦するなど、格闘技には造詣の深いプーチン氏。これはぜひとも実現させてほしいぞ！

ボクが好きなのは〝灰色のプロレス〟でやっぱりスケールが大きいことが大事

――「そんな理由でこのカードが実現しないの？」ってことが多すぎますよね。

谷川　だから、我々も含めマット界は概念としての〝猪木 vs アミン大統領〟を取り戻すべきだよね。

――そういえば、猪木 vs アミンはレフェリーがモハメド・アリの予定でしたよね（笑）。いまだったら北朝鮮の金正日大統領と魔裟斗が闘って、レフェリーを北島康介がやるみたいな話ですよ。

谷川　あ、じつは去年の年末も一応プーチン前大統領にオファーしたんですよ（ボソッと）。

――エーーーーーッ！　それは凄いっ!!

谷川　ダメだったんだけどさあ。

――そりゃダメでしょう！　でも、オファーしただけでも凄い（笑）。

谷川　プーチン大統領は何年越しであたってるんだけど、なかなか実現しないねえ。

――ちなみに、どのレベルで断られたんですか？

谷川　大統領の秘書官をやってた人の知り合いを通して話をしてたんですよ。

――谷川さん、いろいろ暗躍してるんですねえ。

谷川　だって、そういうの観たいじゃない。プーチン大統領 vs 石井慧をやりたかったんですよ。柔道マッチでいいからさ。一番視聴率も獲りそうだしねえ（ニヤニヤ）。

――世界的に注目されるでしょうねぇ。

谷川　そういうのが勝ちだと思うんだよなあ。プーチン大統領もお金の問題じゃなくて、本人さえよければ実現するって感じじゃない。しかも、あんなに格闘家っぽい人いないし。カッコイイしねぇ～（うっとり）。

――虎を退治するくらいですからね（笑）。

谷川　ねえ、『kamipro』ってプーチン大統領にルート持ってないですか？

――んあ～。ウチに聞くなんて、スケールが小さすぎます！（笑）。

【09年3月9日／FEG赤坂分室にて収録】

1993年の女子プロレス

稀代のスーパースター
栄光と挫折



『1976年のアントニオ猪木』の柳澤健、渾身の14ページジブチ抜き3万字インタビュー!

クラッシュ・ギャルズ
ライオネス飛鳥

前回、アジャ・コングが登場して大好評だった『1993年の女子プロレス』。
今回はシリーズ第二弾として、80年代に空前のクラッシュ・ブームを巻き起こしたライオネス飛鳥が登場!
引退と復帰、そして長与千種—— 激動の現役生活を振り返りながら、
稀代のスーパースターがプロレス人生の光と陰を語ってくれた。

聞き手/柳澤健　撮影/平工幸雄　構成/鈴木佑

驚異の14ページブチ抜き、3万字インタビュー！『1976年のアントニオ猪木』の著者で、「全日本女子プロレスが世界で一番好きな団体」と公言する柳澤健氏を聞き手にスタートした「1993年の女子プロレス」。女子プロ最後のブームとされる団体対抗戦に沸いた93年前後を中心に、女子プロの奥深い魅力について再検証する企画であり、『kamipro Spcial APRIL』でのアジャ・コングの回は多くの反響を呼んだ（内容は各自調査！）。

今回は日本中にクラッシュ旋風を巻き起こし、プロレス史上に不滅の金字塔を打ち立てた伝説のタッグチーム、クラッシュ・ギャルズのライオネス飛鳥が登場！ 過去に飛鳥の人生に迫るルポを執筆したこともある柳澤氏は、彼女のスターならではの栄光と挫折を味わったドラマチックなレスラー人生こそ、女子プロの凄さを伝えるうえで必要不可欠だと熱弁。

そういった経緯で実現した今回のインタビュー。05年の引退後、銀座でクラブを経営する飛鳥は、取材中に何度も携帯にお店やお客さんから電話がかかってくるなど非常に忙しい様子。そんな中、3時間にも及んだインタビューで、飛鳥はその生い立ちからいままでのことを、自分の言葉であますところなく激白。ここでは盟友・長与千種との運命の出会いからお届けしよう。

殻を破った長与との激闘 クラッシュ・ギャルズ結成

——クラッシュ誕生以前の長与千種選手は、顔に原因不明の湿疹ができて、周りから冷たい扱いを受けていたと聞きました。飛鳥さんご自身には、当時の全女内部の人間関係に問題はありましたか？

飛鳥　私はあんまりないですね。先輩に怒られた記憶もないですし、けっこうかわいがられていたほうだと思います。言われたことをソツなくこなして、先輩に楯突くこともなかったから。まあ、やることがありすぎて、暇もなかったっていうのが正直なところですけど。とにかく一日でも早くトップを獲りたいっていうのがあったんで。

——「トップを獲る」という大目標があったんですね。当時は、長与さんとの交流はあったんですか？

飛鳥　千種とは、そもそもデビューが半年違うんです。私は正規のオーディションで入門して、大森（ゆかり）と千種はオーディション外の推薦で入ってきたんですね。そのとき、大量に新人が入ってきたので、私は寮を出てアパートを借りたんですよ。だから千種とは住む場所も違ったし、しゃべることもあまりなかったですね。

——お二人は、どんなきっかけでつながりが生まれたのでしょう？

飛鳥　当時、私は新人王を獲ったんですね。新人王を獲った人間は、年明けに全日本ジュニア王座に挑戦できる権利がもらえた。そこで私は川上法子さんっていうヒールの先輩に押さえ込みで勝ったんですけど。

——"押さえ込み"というのは、要するにシュートということですね。

飛鳥　そうです。その頃は新人王、全日本ジュニア王座、全日本シングル王座のすべてが押さえ込みでした。

——王座戦がシュートって凄いですね。全女ならではというか（笑）。

飛鳥　いまなら考えにくいことですよね（笑）。ジュニア王座は何度か防衛してから返上しました。次の年代に王座を渡さなきゃいけないので、押さえ込みに負けない人は、みんな返上させられるんです。

——負けないから返上。それも凄い話ですね。

飛鳥　そのあと、全日本シングル王者になったんですけど、そこで千種を挑戦者として迎え撃った。

——それが最初の接点だった、と。

飛鳥　はい。そのときの私は、ジミー加山（松永国松）さんから「おまえは強いけど、お客に伝わるものがなくて、試合がつまらない」って言われて悩んでいたんです。私としては「毎日他人よりいっぱい練習しているし、こんなに勝ってるのにどうして？」っていう気持ちもありつつ、「でもプロだからお客さんを喜ばせなきゃいけない、どうすればいいんだろう？」っていう部分で行き詰まってしまって。

——ジレンマに陥っていた、と。

飛鳥　当時は千種もいろんなことで悩んでいて、吹っ切りたかったんでしょうね。全日本を闘うとき、千種のほうから「いままでにない試合がしたい」と言ってきたんですよ。私もとにかく現状を打破したかったので「わかった」と。

——全日本シングル王者でありつつも「試合がつまらない」と言われてしまう自分をどうにかしたかった、と。

飛鳥　そうですね。その少し前にヒザを悪くして、長期で休んだりもしていたので、そういうモヤモヤをまとめて吹っ切りたいという漠然とした気持ちがあって、いわゆる優等生だった私が、千種の発案に乗ったわけです。結局、試合は張り合いから始まって、それまでにはないようなハードヒットの内容になりました。

——でも、アジャさんとブルさんの試合のように、感情がぶつかり合うという試合ではなかった、と。

飛鳥　そういう個人的な感情ではないですね。たとえば私が千種を叩くのは、自分を叩いてるのと一緒なんです。千種が私を叩くのは、自分の中の何かを叩いている。だから「私がここで張るから、こう張り返して」っていうことは、まったく決まっていなくて、単純にどっちが強いかを競い合ったというか。

——なるほど。

飛鳥　はい。だからおもいっきりやり合った末に私が防衛した。体重も



プロレスの枠にとどまらず、日本中のファンを熱狂させたクラッシュ・ギャルズ。アジャ・コングやダイナマイト関西をはじめとする対抗戦ブームで活躍した選手の多くは、この二人に憧れて女子プロレスラーを志した。

クラッシュのカラーはすべて長与千種の発信だった

ずいぶん違っていたし、一発一発の重さが違いますから。その闘いで、必ずしも私たちの中の問題がすべてスッキリしたわけではないんですけど、試合を観た会社が「二人で組め」と言い始めたことから、クラッシュ誕生に向かっていくわけです。

――ペアを組む前には、会社から意思確認とか聞かれるんですか？

飛鳥　いえ、有無を言わさず「組め！」です。そこが全女らしさというか。のちのち私がフリーを経験したときに、プロとして「NO！」と意思表示することは絶対必要だと学びました。会社が傾いて、給料が未払いになっても、最後まで全女に残ってた選手には、会社に対して「NO！」という発想がなかったと思います。私は、よく下田（美馬）とかに「おまえさ、なんでお金もらわらないで試合やってんの？　プロでしょ？」って言ってましたもん。おかしいと思った選手は、自分で団体を立ち上げていったし、最後まで残った選手もいた。どちらがいいか悪いかは別ですよ。自分の選んだことに対して答えを出していけばいいことだと思うんで。

――やっぱり異常な世界ですよね。ビューティ・ペアで大儲けした全女は、何度も神風は吹くと信じていた。

飛鳥　全女って、ノホホンとしてるところがあるんですよ。たとえばマッハ文朱さん、続いてビューティが売れました。で、スター選手が引退してお客さんが入らなくなっても「そのうちまた新しいのが出てくるんだろうな」くらいの感覚でいた。途中でジャガーさんやデビル（雅美）さん、ミミ（萩原）さんにも歌わせたりして。会社が「ここらで当たればいいな。当たんなかったな。でもまた次には、誰か出てくんだろうな」って思ってたときに、たまたま私と千種の人気が出てきたから、「じゃあ、おまえら歌え」みたいな感じだったんでしょうね。

――クラッシュがブームになったのはいきなりだったんですか？

飛鳥　そのへんはあんまり記憶にないんですよね。チョロチョロと紙テープを投げられてたのが、気づいたときにはその人数が多くなって、歌うようになったらいきなりハッピを着てる人たちが出てきた、みたいな感じですね。

――様子が変わってきたぞ、と。

飛鳥　それでどんな地方に行っても1000～1500人のお客さんが集まるようになって。

――そのようにサクセスロードが始まって、全女はクラッシュ・ギャルズを中心に動き出すわけですけど、最初の頃はさぞいい気分だったでしょう？　憧れていたジャッキー佐藤さんのような立場になったわけですから。

飛鳥　いい気分っていうよりも、走り続けてる列車みたいな感じですね。周りの景色を見る余裕もなく、練習する時間もなくなっていったので。



――決められたスケジュールをこなすのに必死だったわけですね。

飛鳥　当時の全女には、ジャガーさんやデビルさん、ダイナマイト・ギャルズ（大森ゆかり＆ジャンボ堀）や極悪同盟もいて、選手が凄い粒揃いだったんです。ウチらふたりは全女全体のことなんて何も考えられないような状況で、ジャガーさんをはじめとした先輩たちが団体をキュッと締めてくれたからこそ、クラッシュの人気も出たし、興行もうまく回った。

――興行としてバランスがとれていた、と。でも先輩の中には、クラッシュのおかげでいい給料がもらえるようになって感謝すると同時に、ジェラシーも感じたと思いますが。

飛鳥　一度、ジャガーさんとそういうことについて話したことがあるんです。でも「実力は私のほうが上って思ってたから、べつになんとも思ってなかった。逆にかわいそうだなって思ってた」と言ってましたね。それに「女子プロレスの看板で働いてくれてることに感謝してた」とも言ってくれて。「ただ、トップは私だから」みたいな感じで（笑）。

――さすがはジャガーさん（笑）。プロレスに高いプライドを持つ人がトップにいたことはラッキーでしたね。

飛鳥　うん。ただ、ジャガーさんにもう一つ言われた言葉があるんです。「アンタたち、いつか人殺すよ」。のちにアジャたちが始めたようなプロレスまではいかなくても、クラッシュが蹴りとかクラッシュドライバーを始めたことで、いままでよりも危険な技が増えていったので。

――ジャガーさんの言葉に対して、飛鳥さんはどう答えたんですか？

飛鳥　「絶対殺さない」と。でも、名前が「クラッシュ＝破壊」だったし、ほかのタッグチームとは違う試合スタイルを主張したい部分もあった。

――新しい潮流を作り出したという自負もあったでしょうしね。

飛鳥　そうですね。でも、いまだから言えることですけど、クラッシュのカラーの発信者は、すべて長与千種なんです。たとえば蹴りを使うスタイルも、髪型を一瞬同じにしたのも、コスチュームのデザインも、アイデアを出すのは常に千種。私はぶっちゃけ、あんまり乗り気じゃないものもあったんですけど、でもやっぱりいま思えばすべてが正解だったと思います。

――前田日明さんやUWFの影響が色濃かった。

飛鳥　そうですね。男子の技やイメージを女子プロレスに持ち込もうとしたアイデアマンが千種とロッシー小川。私やジャガーさんは、男子のプロレスは一切観ないタイプだった。女子は女子という気持ちがあったから。私は女子プロレスラーになりたくてプロレスを観だした人間だから、男子に魅力を感じたことは一度もなかったんです。

――要するに、飛鳥さんが好きだったのは女子プロレスであって、プロレス全体ではなかった、と。

飛鳥　そう、プロレスではないんですよ。猪木さんや馬場さんに会ったときには凄いオーラを感じましたけど、凄いレスラーだと思ったことはない。先駆者として偉大な方ということはわかるんですけど、個人の気持ちとして凄いレスラーだなって思うのは、やっぱりジャガー横田であり、ジャッキー佐藤なんです。

――ちなみに飛鳥さんにとってお二人の違いは？

飛鳥　ストイックさは同じなんですけどね、何が違うんだろう……？　私の中でのジャガーさんは、たとえばいまパンが世の中に1個しかなくて、ここには二人しかいないってなったら、普通だったら半分こするところを「私、お腹空いてないからあんた全部食べな」って言うタイプの人ですね。それは優しさであり、プライドというか。だからといってジャッキーさんがそうじゃないっていう意味ではないんですけど。

――ジャガーさんはそういう人だ、と。

飛鳥　そうですね。やっぱりトップと新人ということもあって、ジャッキーさんとはちょっと距離が離れてましたから。個人的に膝突き合わせられる感じではないというか。その点、ジャガーさんは3年先輩で、一番いい距離感にいた先輩でしたし。

――憧れの存在だったジャッキーさんに対して、幻滅するようなことはありました？

飛鳥　一つだけありましたね。これは幻滅っていうか、私がいけない部分もあったんですけど。全女に入った当初、ジャッキーさんには毎日手取り足取り親切に技術を教えてもらったんですね。でも、そのときに一度だけ私が冗談を言っちゃったんですよ。そうしたら、もう翌日からは一切練習を見てくれなくなって、口も利

ライオネス飛鳥 栄光と挫折

いてくれなくなりましたね。

——ええっ？ そこまで頑なになるほどの冗談だったんですか？

飛鳥 そのときに来日してたモンスター・リッパーがパーマをかけてたんですよ。で、それを見たジャッキーさんが「あら、モンちゃん、かわいいね」なんて言ってたので、ちょうど私もパーマかけてたってのもあって「ジャッキーさん、自分はどうですか？」って軽口を叩いたんです。その一言がダメだったんですよね。

——そんな些細なことで口を利いてくれなくなるのも凄いですね（笑）。

飛鳥 きっとジャッキーさんの中に線引きみたいなのがあったんでしょうね。「おまえはそんなことを私に言えるような身分じゃない」みたいな。

——ジャガーさんに仲を取り持ってもらうとか、相談はしなかったんですか？

飛鳥 もちろんしました、ジャガーさんが同期のミミさんに話してくれて。ミミさんとジャッキーさんは仲良かったから話は通してくれたみたいなんですけど、もう降りてきてはくれませんでしたね。でも、いま考えてみると、自分はジャッキー二世と言われていて、そのまま進んでいったら、いつかその肩書きがジャッキーさんのコピーとして自分の足枷になったって思うんですよね。そういう意味では、パーマの一件があったおかげで独り立ちできたのかなって思いますけど。

スーパースターの苦悩 追い詰められていった精神

——クラッシュ時代にジレンマは感じませんでしたか？ 芸能の仕事に追われて、練習もロクにできなくなるような状況、さらに長与千種という稀代のアイデアマンの主導下に置かれているという部分で。

飛鳥 最初のほうは本当に楽しかったんですよ。憧れていたジャッキーさんみたいになれた、思ったとおりになれたじゃんみたいな感じで。でも徐々に……昔はコールのときも「千種、飛鳥」の順序だったのが、のちのち「飛鳥、千種」って逆になっちゃったんですね。千種が天性の表現能力でバーッて上がってきたときに、自分はどうしたらいいんだろうって凄く悩んだことがあったんですよ。千種と同じことはしたくないし、とか。そこで悩んだときに、私の母親が〝桜梅桃李〟って言葉を教えてくれたんですね。桜は桜、梅は梅、桃は桃、李（すもも）は李、すべて美しさが違うという意味なんですけど、その言葉にちょっと救われましたね。自分はこれでいいんだと思って。

——全女で最高の人気を集めたのは、ジャガーさんでもデビルさんでもなく、断然クラッシュでした。飛鳥さんはWWWAの赤いベルトを巻いてジャガーさんを人気じゃなく実力で超えるっていうような気持ちは持ち続けてましたか？

飛鳥 それはずっとありましたよ。クラッシュでWWWAの世界タッグを獲りましたけど、やっぱり一番って一人しかいないんです。

——タッグじゃダメだ、と。

飛鳥 私の人生においてクラッシュであったということは凄く大きなことなんですけど、やっぱり一番って一人ですから。いま銀座でお店やってても常に一番になりたい、その努力は絶対欠かしたくない、現状にあぐらもかきたくないっていう気持ちはずっと続いてますね。だから当時の自分にとっては、赤いベルトを巻かないとゴールじゃないんですよね。まあ、巻くまでには10年かかりましたけどね。



クラッシュはアイドルレスラーとして『炎の聖書』をはじめ数多くの曲をリリース。ドラマ出演もした『毎度おさわがせします』の挿入歌『嵐の伝説』では、当時の人気音楽番組『ザ・ベストテン』にも出演した。

——でも、赤いベルトを目指すにも、クラッシュ時代は忙しくて練習も全然できなかったわけですよね。

飛鳥 そうですね。一番葛藤するのはそこなんですよ。そこで結局、私はクラッシュとしての芸能活動を放棄しちゃうんですよね。私には、赤いベルトを巻きたい、全女の一番になりたいという気持ちはあっても、団体を背負う、という気持ちはまったくなかったから、芸能を辞められちゃったんですよ。千種はGAEAの大将にもなったくらいだから、全女そのものを引っぱっていこうとする気持ちはあるんでしょうね。それは持って生まれたものだと思います。

——そこがお二人の決定的な違いだった。

飛鳥 だから千種は、クラッシュ人気にせっかく火がついたのにもかかわらず、私が急にちょっとおかしくなっちゃって、勝手に「辞めます」って言ったときは凄くつらかったと思うんですよ。そのあとも一人で歌わされていたし。1年ぐらい経って、私もようやく精神的に安定し始めた時期に、千種が一人でやってたライブの最後に飛び入りで出て、『炎の聖書』を一緒に歌ったんです。もうライブの最後だから、千種も汗だらけなんですよ。その汗に混じるように涙を流しながら、千種が「やっぱりクラッシュには勝てないよ、トンちゃん」って言ったんですよ。そのときに私は「ごめんね」って本当に申し訳なく思えたっていうか……。一人で1年間もずっと重荷を背負ってきて、「やっぱりクラッシュには勝てないよ」ってセリフを言えたアイツは凄い、と思いましたね。

——確かにそうですね。飛鳥さんはどのあたりからクラッシュでいることがつらくなってきたんですか？

飛鳥 なんだろう……たしか24歳ぐらいのときなんですよね。人気がちょっと落ち着きかけた頃にふと思い立ったっていうか。毎日毎日凄く忙しかったのが、たぶんほんの少し前より自分の時間が持てるようになって、なぜ練習ができないのか考え始めちゃったんですよ。いまでは練習する時間がないから練習ができない。毎日のように取材やって、車の中でお弁当食べて、会場に行って着替えて歌って、ダンプと試合して血を流して、早く帰って寝なきゃ、みたいな毎日だったから。たぶん、もともと思い込んじゃうタイプだから「なんでだろう？」って考え始めて、突き詰めちゃったんですよ。「あ、クラッシュ・ギャルズだからだ。私、もっと違うことしたいのに」って。目標はジャッキーさんになることであり、そのためには赤いベルトを巻くことがゴールなんだって。

——アイドルになって歌うことはゴールじゃない、と。

飛鳥 「もういいッスか？ そろそろこっちに行って」みたいな感じでしたね。でもやっぱり、ちょっとノイローゼ気味でしたよ、すべてにおいて。試合でも気持ちが散漫になってたから、腰をグキッとやっちゃって3ヵ月ぐらい休んだりもしましたし。

——アジャさんが言ってましたけど、飛鳥さんがリング上で「私、今日から芸能辞めます」と言ったときに、長与さんが「えーーーっ！」って凄く驚いてたみたいですね。

飛鳥 全然誰にも言ってなかったですから。会社には「辞めたい」とさんざん言ってたんですけど、全然相手にしてくれないから、もうみんなの前で宣言しちゃえって。

——長与さんとはどこ行ってもずっと一緒なわけですし、そのときに話はしなかったんですか？

飛鳥 しないですね。やっぱり忙しいと、会話もだんだんしなくなって

追い詰められていた時期は死んじゃおうと思っていた

くる。よく「仲悪かったんでしょ？」って言われるけど、仲悪いとかじゃなくて、ホントに千種とは正反対の人間だから。たとえば、私はたまにオフがあったら、ジャンボとか大森と遊ぶわけですよ。でも千種は下の子を連れて遊んでた。遊び方も違うし、時間の使い方も違う。だから私生活でリンクする部分があんまりなかった。

――仲が悪いとか、そういう問題じゃないわけですね。

飛鳥　うん。ただ、やっぱり16歳からこの世界に入って、世間も何も知らないのに急に人気が出ちゃって「蝶よ花よ」と扱われる中で、やっぱりこいつがいるから自分は抑制されてるって感情が芽生えちゃったのは正直なところですね。いまだから言えますけど、私には多少なりともありました。たとえば、インタビュー取材を二人揃って受けても、相手が求めてることはクラッシュの答えなわけですよ。だから一つの質問をされて、私と千種の感じてることがまったく違っても、私のほうが歳が一つ上ってというのもあって、やっぱり一歩退いちゃった部分はありましたし。いま思えば、アイデアマンで発信元だったのは千種だったから、千種に発言権があるのが自然だったと思うんですけど、その頃はまだ理解できなくて、少しずつストレスが溜まってっちゃったんです。それは私の考えじゃない、みたいな。

――気持ちを押さえきれなかったわけですね。

飛鳥　うん。やっぱり千種は一番比べられる相手だし、私自身が負けず嫌いということもありますから。

――芸能の部分でも負けたくないという思いはあったんですか？

飛鳥　ううん、それはなかったですね。歌は千種のほうがうまい、でも踊りは私のほうが覚えが早いとか、それは棲み分けはできてたんですよ。歌で張り合おうとは思ってなかったし、そもそも私は上手じゃないからあんまり歌うのは好きじゃなかった。ソロライブをやっても、入りも向こうのほうが多かったし。クラッシュのファンの中でも人気の比率はやっぱり6対4だったりするわけですよ。

――プライドの高い飛鳥さんとしては不満だった？

飛鳥　でもそのときの自分のプライドって、人数じゃなくて来てくれる人が満足してくれればいいや、という感じだったんで。

――ソロライブだと、飛鳥さんが最初から最後までいろいろやらなきゃいけないということですよね。

飛鳥　そうですね。だから……いま思うと楽しかったですけどね。だって、いまはできないんだもん。『あの人はいま』とか出ちゃったりして（笑）。若くて人気がある頃に千種と「絶対『あの人はいま』に出るのだけはやめようね」って誓い合ってたんですよ。でもやっぱり出ますね、生活のことを考えると。ちょっとの露出は必要だな、みたいな（笑）。

――大人になりましたね（笑）。じゃあ「私はもう芸能活動を辞めます」って爆弾発言したときは、団体のことなんか考えてなかったわけですね。自分の発言がどんな波及効果を生み出すかっていうことも、長与さんがどれほど重たいものを背負わなきゃいけないかということも。

飛鳥　全然考えてないですね、自分が一番になることしか考えてなかったです。

――ひたすらワンマンプレーで突っ走ってしまった。

飛鳥　はい。その頃は、周りからも話しかけられたくないから、いつもウォークマンつけてましたね。でも音楽なんて流れてないんですよ、音楽が聴きたいわけでもないから。とにかく一人の世界に閉じこもってた。

――バリアを張っていた。

飛鳥　ジャガーさんともしゃべらなかったですから。あの1年は。やっぱり周りからは「なんだアイツ？」って陰で言われたり、私がいままでと違うから、みんなの接し方も違ってきたし。で、ちょうどジャガーさんがその時期に一回目の引退をしたっていうのも私にとっては凄く大きかったんですよ。しゃべってなくても心の支えというか、お姉さんみたいな感じだったんで。その支えを失なったこともあって、すべてに対して不安定だった。

――振り返ると、どんなことが頭の中をグルグルしてました？

飛鳥　自分のエゴを貫き通すと、やりたいことができない部分も出てくるんですよね。会社には迷惑かけてるから、赤いベルトにまで到達できないわけですし。でもあとにも引けないし、前にも行けないし、右にも左にも行けないしって。もうホント「どこに行ったらいいんだろう？」みたいな感じでした。

――どんどん追い込まれていったわけですね。

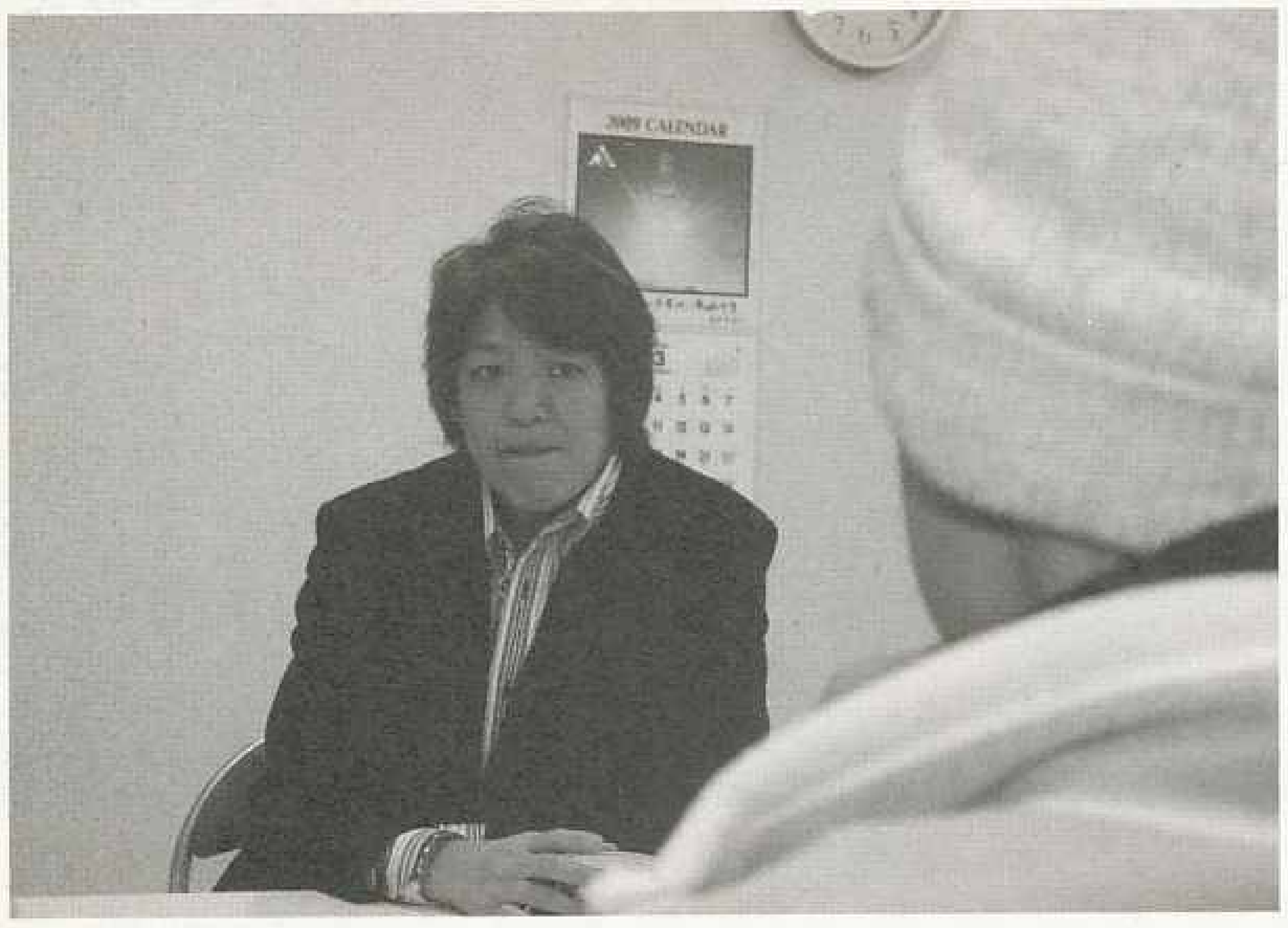
飛鳥　だからそのとき死んじゃおうと思ったんですよ。ホントにビルから飛び降りちゃおうって思ったんですけど、ちょうどその時期に岡田有希子ちゃんの事件があって。で、ジャガーさんは私の性格を知ってるから、「あのコ、バカなこと考えてるんじゃないか」って危惧してたらしいんですね。私も高いところから下を見下ろしたときに、「あ、いまここで死んだら、あることないこと書かれるな」みたいな、一瞬まともな考えがよぎって。凄く波紋を呼んじゃうなと思って踏みとどまったんですけど。

――そこまで追い詰められてたんですね……。以前飛鳥さんに、当時、心を許していた元アイドルのミュージシャンに、「なんでプロレスラーが歌わなくちゃいけないの？」って言われたことが凄く大きかった、と聞いたことがあります。

飛鳥　そうですね。自分でもわかってはいたけれど、言葉には出せなかったことをダイレクトに言われてしまった感じでしたね。そこでスイッチが入ってしまったところはありました。

――これまでのフラストレーションが一気に爆発しちゃったんですね。

飛鳥　そうなんです。で、死ぬのをためらったあと、右にも左にも前にもうしろにも行けないときに、藁にもすがる思いで、1年間も口を利いてなかったジャガーさんに「助けてください」って電話したんですよ。そうしたら「とにかく明日練習に来い」と言われて。ジャガーさんは当時コーチをしてたから、自分たちの教え子の練習が終わる時間を指定してきた。道場に行くと「とにかく一日一緒にいろ」って言ってくれたんです。ジャガーさんは何も言わずに、私の言いたいこと全部を聞いてくれた。私は



過去に何度か飛鳥にインタビューしたことのある柳澤氏だけに、飛鳥も隠すところなく現役当時を振り返りながらプロレスへの正直な気持ちを吐露。



飛鳥は女子プロレス初の東京ドーム大会で現役復帰（10分一本勝負のエキシビションマッチ）。しかし、その動きは精細を欠いたもので、5年間のブランクを隠すことはできなかった。ちなみに長与は当日はレジー・ベネットと対決。

ジャガーさんは私にとって心の支え ピンチのときに何度か救ってもらった

それまで誰とも話してなかったぶん、ずっとずっとしゃべりっぱなしだったんですけど、それに対して「アンタ、これ間違ってるよ」とかは一切なく、全部吐き出させてくれたことで、凄く楽になったんです。

――一番身近な先輩がジャガーさんでよかったですね。

飛鳥　本当にそう思います。ジャガーさんには何度か救われてるんですよ。芸能やってた時期はホントにいろんなことがあって、「辞めます」って言う前から、精神的にちょっとおかしかったんですね。当時、買ったばかりの犬が3日で死んじゃったことがあって、ライブのリハーサルに行けずにみんなをさんざん待たせたりもしたし。

――相当に心が追い詰められてたと。

飛鳥　奇行も目立っていたから、ある日、ついに松永会長に呼ばれたんですね。そこにはジャガーさんもいたんですけど、会長が怒鳴る前にジャガーさんが私を引っぱたいた。あとにも先にもジャガーさんに引っぱたかれたのはその一回だけなんですけど。会長が怒ったら最後だから、その前にジャガーさんが怒ってくれたんですよ。そうすれば会長のほうは「まあまあ、ジャガー、いいじゃないか」ってなるじゃないですか。

――もし会長が先に怒ってたら、飛鳥さんはクビにされていたかもしれないわけですね。

会社への失望、不本意な引退 クラッシュ以降の女子プロ

――そういうつらい時期を経て、クラッシュ復活になるわけですが、その頃にはテレビ中継もゴールデンタイムから撤退していました。

飛鳥　はい、そうですね。

――長与さんが大森さんに勝って赤いベルトを飛鳥さんより先に巻くわけですけど、そのときはどう思ったんですか？

飛鳥　やっぱり仕方ないなって思いました。私はあれだけ迷惑かけたんだし、順番的に先に回ってくるとは思ってなかったんで。団体をどうにかしなきゃっていうのはないけど、やっぱり自分のやってしまったことに責任は取らなきゃ、という気持ちはあったので、順番が回ってくるまでは地道に頑張ろうと思いましたね。

――長与さんも、飛鳥さんが戻ってきて「いいよ」って受け入れるのもたいしたもんだと思うんですよね。

飛鳥　おそらく当時の千種にしてみたら、会社に「NO」とは言えなかったんですよ。ライブの終わりに千種が言った「クラッシュには勝てないよ」っていう言葉の裏には、納得せざるをえない悔しい気持ちと、「私がこの1年背負ってきたんだ」っていう自負の両方があったと思いますね。そういうこともあって、再結成後に一緒に走る距離も短かったんだと思います。

――87年10月に長与選手が赤いベルトを巻いた頃、ジャパン女子プロレスに行ったジャッキーさんと神取（忍）選手がとんでもない試合をしました。その頃長与さんは「神取とやりたい」としきりにアピールしてましたけど、飛鳥さんはその話は聞いていたんですか？



ライオネス飛鳥　栄光と挫折

飛鳥　いや、全然ないですね。「なんでだろう?」とは思ってましたけど。たぶん会社じゃなくて千種個人の主張なんですよ。実現はできなかったけど、ファンは注目したわけじゃないですか。

――要するに飛鳥さんがクラッシュと離れた自分の価値を求めたように、長与選手も「私はこれだけ団体を支えてきたんだ、私だってクラッシュじゃないところで勝負させてよ」という思いがあったのかもしれませんね。

飛鳥　会社に対してというよりは、レスラーとしての自分の主張なんでしょうね。「私、頑張ってきたんだからさ」っていうよりは、レスラーとしての主張なんだと思います。やっぱり、千種の中にもピン（一人）という気持ちもあっただろうし。タッグで終わってない人間の中には、みんな少なからずそういう思いがあったと思いますよ。

――タッグで終わってる人間とは違いがある、と。

飛鳥　まあ、それぞれの人生観だと思うんですよ。私はその人たちを否定はしません。私はピンで最後を締めたかった人間だけど、それだけが正解とは思わないし。たとえば立野記代はまだ現役ですけど、彼女と山崎五紀のJBエンジェルスといったら、アメリカではウチらよりも全然凄い人気ですから。日本の女子レスラーで初めて向こうのベルトを獲ったという意味では、クラッシュより何倍も有名なんです。私たちはWWF（現WWE）にスポット参戦しましたけど、当時のWWFのサーキットの中でやってたのはあのコたちだけなんですよ。全女には所属してましたけど、手助けも何もなかったわけですから。そういう意味では、JBエンジェルスのことは単なるタッグ屋で終わった人間だとは思ってないですね。

――なるほど。飛鳥さんが長与さんから引退の話を聞いたのはいつですか?

飛鳥　女子プロの1時間半番組のロケで中国に行ったときですね。当時、天田麗文というアジャの同期の子がいて、その育ての親に家電製品を持っていこうっていう企画があったんですよ（天田は中国残留孤児二世）。夜、ホテルで千種から「ちょっと話があるんだけど」って言われたんです。聞いたときには否定も何もできないですから、ただ「そうなんだ」って思いました。一つ嬉しかったのは、会社に話すよりも前に私に話してくれたことです。やっぱりクラッシュを大切にしてくれてるんだなって。その晩は一人でいろいろ考えましたね……やっぱりビューティ・ペアの解散も見てるから。

――マキ上田さんがいなくなったあとのジャッキーさんを見てるということですね。

飛鳥　うん。これからどうなるんだろうって。ピンでいきたい気持ちもあるし、チャンスなんだろうけど、どうなんだろうって。会社がファイアージェッツ（堀田祐美子、西脇充子）を売り出そうとしてたのは見え見えだったし、念願の赤いベルトも巻けたし、もうそろそろ潮時かもしれないなって。それで会社に「私は一人で残りたくない、一緒に辞めさせてください」って話をしたら、「後追いになったらおまえもカッコ悪いだろ」って引き留められて3ヵ月は残ったんですけど。

――飛鳥さんは赤いベルトを、引退直前の長与さんを破って巻くわけですが、そのときは長与さんが試合中に肩を脱臼して、不本意なかたちで戴冠することになりましたね。

飛鳥　本当に不本意でしたね。あれは記録上は私が獲ったかたちになってますけど、私の中では返上してるんです。その場で「返上します」って宣言してますし。それで再戦をして私が勝ってすぐに、千種が辞めたって感じですね。

――再戦して獲ったにしろ、長与さんが引退するからベルトを置いていくという流れになっちゃってるじゃないですか。そういう意味では、自分が最もほしかったベルトを、こういうかたちで手にするっていうのは屈辱的なことだったんじゃないですか?

飛鳥　確かにそういう面もありましたね。でも私にとって、10年かかって赤いベルトを獲りましたっていうのは少しも恥じるべきものではないと思うんです。いままでも言ってきたし、いまでも自分で思うんですけど、人間の成長として目標を立てることは大事だけど、その目標を達成することが最大の目的じゃなくて、目標のために努力することが一番大事だと思うんですね。たとえば目標まで到達できなかったとしても、そこまでの過程で学んだことが一番大事だと。それがあとあと自分の中で活きていくし。そういう意味では、不本意なかたちで獲ったベルトではありましたけど、それが私の10年間だったのかなって納得する部分もあります。

――なるほど。10年かけて手に入れた赤いベルトを巻いた瞬間はどんな思いがしましたか?

飛鳥　不本意なかたちだったから、当時は凄く悔しかったんですよ。みんなに迷惑をかけた責任もはたして、チャンスも回ってきたし、フラットなかたちで獲れるかな、というときだったから。でもあとから考えるとすべて意味はあるんだなって私は思ってるんですけど。

――で、ベルトを獲得して半年後に（最初の）引退をするわけですが、その半年間は飛鳥さんにとってはどういう期間でした?

飛鳥　……会社に対する失望はあったかもしれないですね。自分の中でも、やっぱり私は二人で一人なんだなっていうのを思い知らされたと同時に、会社のやり方って凄いなっていうのが。立野も私と一緒に肩叩きされたようなもんなんですよ。まあ、残りましたけどね。

――そうだったんですか?

飛鳥　会社としてはファイアージェッツと海狼組（北斗晶&みなみ鈴香）でいきたかったんですよ。だから私は立野とシングルを組まれることがけっこうありましたよ。セミにはしてくれるものの、やっぱりメインはあのコたちでっていう感じで。だから私たちにそこで成長はないわけですね。立野と絡まない日も、組むんだったら立野だし、みたいな。彼女にとっても私にとっても成長はないって私は思ったんですよね。やっぱり会社に対してもメインで使ってくれとは思わないけど、そんなにいきなり態度を豹変させなくてもいいじゃないかって。

――隅に追いやられていくことをヒシヒシと感じるわけですね。

飛鳥　うん、感じましたね。だったら（長与が引退したときに）私を残さなきゃよかったじゃんって。だから引退式は後楽園でやらせてくださいっていうのは最後のワガママでしたね。

――長与さんの横浜アリーナに対して、飛鳥さんは後楽園ホールでした。

飛鳥　会社としてはもっと客を入れて儲けたかったと思うんですけど、そこはワガママを通しました。千種が大きな会場で凄いイベントをやったんであれば、私は格闘技の聖地といわれた後楽園で引退しますって。

――美学があったわけですね。引退のときは立野（記代）さんとジャガーさんの二人と対戦しましたね。

飛鳥　9年間やってなかったジャガー横田と試合することが、私の中のイベントだったわけですよ。でもジャガーさん、怒られたらしいですよ。「おまえが目立ってどうすんだ!」って（笑）。凄い動きだったんですよ。ウラカンラナやったりとか。でも、やっぱりその頃は現役じゃないから、試合の途中でジャガーさんは頭打ってて、後半1分くらい記憶がなかったそうなんです。最後に私がジャイアントスイングで回したんですけど、ジャガーさんは記憶喪失のまま回されてるんですよ（笑）。映像で観るとおもしろいんですけど。

――あのときはたしかジャガーさんは放送席にいて、突発的なエキシビ

ションマッチという設定でしたね。

飛鳥　記代も最後はジャガーさんにやってもらったほうがいいと納得してくれたんでしょうね。記代は私たちのことをずっと見てきてるから。けっこう記代って私と性格が似てるんですよ。嫌なものは絶対嫌っていうタイプで、これと思ったことはホントにやっちゃう人間だったから（笑）。

――ジャガーさんが飛鳥さんをかわいがったように、飛鳥さんも立野さんをかわいがってたんですね。

飛鳥　そうですね。いまもたまに記代のお店に行ったりしますから。もちろん五紀もかわいいですけど、記代はやっぱり似てるだけあってほっとけないんですよね。クラッシュが再結成したときにJBが帰ってきて、勝ち負けには関係なく、試合すること自体が凄く楽しかったんです。ダイナマイトギャルズとのベルトを賭けた3連戦っていうのは、やっぱり向こうのほうが身体がデカいし、けっこうヘロヘロだったんですけど、JBとは凄く手が合って、試合をやっていて充実してたのを覚えてますね。

――後輩たちがアメリカでウケることを一生懸命考えて、磨き上げてきたプロレスと出会ったことが楽しかったわけですか？

飛鳥　凱旋した彼女たちがプライドを持って、自覚を持ってリングに上がったことを感じ取れたからですね。

アジャたちの試合はお客さんのニーズに応えすぎだと思った

1年しかキャリアが変わらない中で、向こうはアメリカで貴重な体験をしてきた。私たちもまた修羅場をくぐってきたから、互角な関係で試合ができたんですよ。昔はやっぱり先輩と後輩の試合でしかなかったのが、ちゃんと同じ時代を生きた者同士として試合ができたっていうか。

――いい話ですね。さて、クラッシュ二人が引退して、全女は冬の時代を迎えます。ファイアージェッツはなかなかブレイクせず、メデューサを連れてきてもいまいち人気に火がつかない。そんな中でヒールであるブルさんが赤いベルトを巻いたことで、古典的なヒールとベビーフェイスの関係が崩れたわけですが、当時解説席にいた飛鳥さんはどう思いましたか？

飛鳥　ブルが巻いたのは妥当だなと思いましたよ。ウチらがいなくなって、全女に残った後輩たちが違うプロレスを作り上げた。それは彼女たちの努力だし、そういう意味では凄いなと思いますね。このコたちはよく厳しい現状に負けずによくやったなって。

――お客さんも入っていなくて。

飛鳥　そんな中でやっぱり男性ファンを持ってきたのも彼女たちだし、男子のプロレスのよさを、クラッシュとはまた違った意味で持ちこんだのも彼女たち。そういうところは単純に凄いと思いますね。



団体の枠を越えて悪の限りをつくした平成裁恐猛毒GUREN隊は、東京スポーツ新聞社制定『97年度プロレス大賞』で女子プロレス大賞を獲得。男子と混じっても見劣りしない存在感を示した。

――数年前、ジャガーさんは飛鳥さんに「アンタたち、いつか人殺すよ」と言った。クラッシュ・ギャルズのハードアタックの試合が危険だと判断したからです。でも、ブル中野とアジャ・コングの試合はクラッシュよりもさらに危険なスタイルになりました。観てて怖くはなかったですか？

飛鳥　彼女たちの試合を解説していたとき、単純に技の攻防が凄いなと思ったし、尊敬もしてましたよ。でも、一つだけ言い続けてきたのは、ウチらは「これが私たちのプロレスです」とお客さんに投げかけたものを、ちゃんと受け取らせていた。でもこの時代になると、お客さんの「もっと危険にやれ」っていうニーズに対して、選手たちが「なんかやらなきゃ、なんかやらなきゃ」で応えすぎてたという気がするんです。

――客の求めている方向に行くと、どんどん危険な方向に行ってしまう。主体性はレスラーの側にないといけない、ということですね。

飛鳥　選手の側がお客さんに「こうです」と提示することのほうが大事だなと思ってましたね。私も、復帰したあとは机を割ったりロープで吊ったりとか危険なこともたくさんやりましたけど、あれはちゃんと考えてやってることなんですよ。お客さんに「もっともっと」って言わせずに、納得させてましたし。私が観ていたかぎりでは、（ブルやアジャは）お客さんのニーズに応えすぎだよって思ってましたね。

――彼女たちが作り出したのは男性ファン向けのプロレスですよね。周りから観ると「危ないから、もうやめなさいよ！」みたいにハラハラドキドキでしたけど。

飛鳥　思った思った！　とくにアジャvsブルの試合はね。観ながら「わぁ～っ！」とか「うぉ～っ！」とか言ってましたもん（笑）。でも、試合はある程度雑になってましたね。技が高度で危険になっていくのは仕方ないと思うんですだけど、やっぱり私たちがやってきたプロレスでは、頸椎をやる人間っていなかったですから。そこが本当に重要なポイントなんですよ。たとえば、自分たちのバックドロップって横落としなわけです。こんな回転して急角度から落とすなんて絶対なかったし。何より受け身が一番ですから。受け身が取りきれてないからこそ、首をやっちゃうわけでしょ。

――北斗（晶）選手も本名の宇野久子時代に首の骨を骨折しましたよね。

飛鳥　いまだから言えますけど、それも私たちの責任だと思うんですよ。あれは怪我をさせてしまった小倉（由美）に、「そうじゃないんだよ、プロレスは」ってことを納得させてなかったから、ああいう事故が起こってしまったわけだし。当時、一番大きな事故だったじゃないですか。受け身が取れて初めてプロレス。その部分では、技が危険になればなるほど、雑になってるなっていう気がしましたね。

――北斗さんの頸椎損傷に関しては、飛鳥さんも責任を感じた、と。

飛鳥　だから責められるべきは小倉だけじゃなかったんですよ。あのコもよく耐えてずっとプロレス続けたなと思うし、北斗もよく帰ってきたなって思うし。当時は北斗の復帰を全員で反対してたんですよ、「危ないからやめてくれ」って。

――それはそうでしょうね、「誰もアンタのこと殺したくないよ」ってことですからね。

飛鳥　でもそこで何万って署名を集めてきて、どうしてもあきらめたくないって復帰したからこそ北斗なんでしょうけど。

――当時、アジャさんは会社から「男のファンはいらない」と言われたそうです。女の子のファンはグッズも買ってくれてお金を落としてくれるけど、男のファンはプロレスを純粋に観に来るだけだから。

飛鳥　そんなこと言ったんだ、あの会社！　やっぱりなくなって正解かもしれませんね、ひどい！（笑）。

――僕は全女という団体は、最も狂ってるという意味で〝世界最狂の団体〟だと思ってるんです。

飛鳥　うん、狂ってますね。

――でも、その狂ってることと表裏一体のとんでもない魅力が全女にはあるんです。飛鳥さんから見て、全女

ライオネス飛鳥の軌跡

1979〜1989&1994〜2005

1979〈昭和54年〉

12月16日 北村智子（のちのライオネス飛鳥）、全女のオーディションに成績トップで合格。

1980〈昭和55年〉

5月10日 北村智子が大宮スケートセンターでデビュー。

1981〈昭和56年〉

1月4日 後楽園ホールで空位の全日本ジュニア王座を川上法子と北村智子が争い、北村が先輩の川上を破り第2代王者となる。

3月9日 北村智子が高橋由利子を下し、全日本ジュニア初防衛に成功。

5月9日 北村智子がデビル雅美と全日本シングル王座決定戦に臨むも惜敗。

9月21日 北村智子が長与千種を相手に、全日本ジュニア王座2度目の防衛に成功。

1982〈昭和57年〉

5月15日 ライオネス飛鳥がマスクド・ユウとの全日本選手権王座決定戦に臨むも、時間切れでコミッショナー預かりに。

7月19日 ライオネス飛鳥がマスクド・ユウを破って第3代全日本王者となる。

10月27日 ライオネス飛鳥&長与千種組がデビル雅美&タランチェラ組の持つWWA世界タッグに挑むも敗戦。

1983〈昭和58年〉

1月4日 ライオネス飛鳥が長与千種と完全燃焼ファイトの末に全日本王座を防衛。 クラッシュ結成のきっかけとなる。

1月8日 ライオネス飛鳥がレフェリーストップで松本香（ダンプ松本）に破れ、全日本王座から転落。

6月1日 ライオネス飛鳥が松本香に雪辱、全日本選手権を奪取。

8月13日 全選手参加のキャンプにおいて、ライオネス飛鳥と長与千種が「女子プロレスの流れを変える！」と宣言。クラッシュ・ギャルズが結成された。二人の特別コーチには元極真空手王者の山崎照朝氏が就任。

8月27日 クラッシュ・ギャルズがダイナマイト・ギャルズのWWWA世界タッグに挑戦。敗北するも大激戦となり、「第1回全日本女子プロレス大賞」のベストバウト賞を受賞する。

1984〈昭和59年〉

1月4日 クラッシュ・ギャルズが再びダイナマイト・ギャルズのWWWA世界タッグに挑戦するも返り討ち。同日、松本香がダンプ松本に改名。

1月18日 ライオネス飛鳥がマスクド・ユウと両者リングアウトで全日本王座を防衛後、タイトル返上。

6月28日 クラッシュ・ギャルズが初タッグのジャガー横田&デビル雅美の女帝コンビと死力の30分ドロー。

7月9日 クラッシュ人気に火がつき、フジテレビの『全日本女子プロレス中継』が5年ぶりにゴールデンタイム放送開始。

8月21日 クラッシュ・ギャルズがビクターから『炎の聖書』で歌手デビュー。

8月25日 クラッシュ・ギャルズが3度目の挑戦でダイナマイト・ギャルズを破り、WWWA世界タッグ王座を奪取。

9月26日 クラッシュ・ギャルズがジャガー横田&デビル雅美組に、WWAタッグリーグ優勝決定戦で敗北。

12月19日 クラッシュ・ギャルズが「'84全日本女子プロレス大賞」のMVPを獲得。

12月23日 クラッシュ・ギャルズがファン200人参加のハワイツアーを開催。

1985〈昭和60年〉

1月6日 クラッシュ・ギャルズがJBエンジェルズを破り、WWWA世界タッグ2度目の防衛。

2月25日 クラッシュ・ギャルズがダンプ松本&クレーン・ユウ組に敗北、WWA世界タッグを失なう。

4月2日 クラッシュ・ギャルズがダンプ松本&クレーン・ユウ組とのリターンマッチに挑むも、無効試合となりWWWA世界タッグ王座はコミッショナー預かり。

4月6日 結成後、初のクラッシュ対決が実現、30分ドローに。

5月1日 クラッシュ・ギャルズが中野サンプラザでファースト・コンサート。

6月25日 ライオネス飛鳥がダンプ松本を下し、「ジャパン・グランプリ'85」に優勝。

8月22日 6年ぶりの日本武道館大会。ライオネス飛鳥はジャガー横田のWWWA世界王座に挑戦するもジャガー式バックドロップの前に敗北。長与千種はデビル雅美のオールパシフィック王座に挑戦、両者KOで獲得ならず。この日、UWFの前田日明と高田伸彦（現・延彦）が、クラッシュ・ギャルズを激励に訪れる。

10月10日 クラッシュ・ギャルズが「タッグリーグ・ザ・ベスト'85」優勝決定戦でダンプ松本&ブル中野に敗北。

10月21日 クラッシュ・ギャルズとダンプ松本がニューヨークのMSGを視察。

12月10日 クラッシュ・ギャルズがTBS系ドラマ『毎度おさわがせします』にレギュラー出演。

12月16日 ライオネス飛鳥が「'85全日本女子プロレス大賞」でMVP獲得。

1986〈昭和61年〉

3月16日 クラッシュ・ギャルズとダンプ松本&ブル中野が日本女子レスラーとしては初めてMSGに登場。

3月20日 クラッシュ・ギャルズがJBエンジェルズを破り、WWA世界タッグを奪回。

4月5日 全女初の両国国技館大会で、ライオネス飛鳥がデビル雅美のWWWA世界王座に挑戦するもドローにより奪取ならず。飛鳥はこの日、黒い水着で登場、クラッシュとの決別をにおわせた。

5月13日 クラッシュ対決が行なわれるが30分ドロー。試合後、飛鳥は芸能活動停止をマスコミに発表。

10月 『全日本女子プロレス中継』がゴールデンタイムから撤退。

1987〈昭和62年〉

1月4日 クラッシュ・ギャルズが8ヵ月ぶりに再結成、小倉由美&永堀一恵組に快勝。

2月26日 クラッシュ対決がWWWA世界王座挑戦者決定戦として行なわれ、35分ドローとなるが飛鳥に優先挑戦権が与えられる。

4月15日 ライオネス飛鳥が大森ゆかりのWWWA世界王座に挑戦するも敗北。

6月13日 クラッシュ対決でライオネス飛鳥がジャガー式バックドロップで長与千種に勝利。クラッシュ対決に決着。

9月14日 クラッシャ・ギャルズがJBエンジェルズに初の敗北。

1988〈昭和63年〉

2月25日 クラッシュ・ギャルズを相手にダンプ松本&大森ゆかりが引退試合。

3月28日 クラッシュ・ギャルズが首相官邸での「内閣総理大臣招待、スポーツ関係者と懇親のつどい」に招かれる。

8月25日 ライオネス飛鳥が長与千種のWWWA世界王座に挑戦、勝利を収めるも再戦を要求して王座を返上。

1989〈平成元年〉

1月29日 ライオネス飛鳥がWWWA世界王座決定戦で長与千種から勝利を収める。

3月4日 クラッシュ・ギャルズが小倉由美&小松美加組を破り、2年7ヵ月ぶりにWWWA世界タッグ王者に。

4月27日 クラッシュ・ギャルズが海狼組を相手にWWWA世界タッグ初防衛後、タイトル返上。

5月6日 全女が「レッスル・マリンピアード '89」を開催。長与が引退試合で最後のクラッシュ・ギャルズとしての勇姿見せる。ライオネス飛鳥はメデューサに辛勝し、世界統一グローバル王者となる。

5月14日 ライオネス飛鳥がブル中野に反則勝ちでWWWA世界王座を初防衛。

7月19日 ライオネス飛鳥がメデューサを破りWWWA世界王座を防衛後、引退を表明。

8月24日 ライオネス飛鳥が立野紀代を相手に引退試合。そして試合後にはTV解説者のジャガー横田に対戦を要求、師弟対決が実現。

1994〈平成6年〉

10月31日 女子プロレス初進出の東京ドーム大会の合同記者会見で、ライオネス飛鳥が現役復帰を表明。

11月20日 東京ドーム大会、ライオネス飛鳥は小倉由美とコンビを結成、ジャガー横田&バイソン木村組とエキシビションマッチで対戦。

12月4日 ライオネス飛鳥が井上京子とコンビを結成して正式復帰戦（vs山田敏代&井上貴子）。

1995〈平成7年〉

2月26日 ライオネス飛鳥がジャガー横田、バイソン木村とともに雷神隊（ライディーン・アレイ）を結成。しかし、観客の支持、現役選手の反応は厳しいものに。

9月28日 吉本興業がJd'の設立会見。ジャガー横田、バイソン木村が参加。自動的に雷神隊は消滅に。

11月19日 ライオネス飛鳥、アジャ・コングや井上京子とともにWWF（現WWE）の「サバイバー・シリーズ」に参戦。

12月 4日 ライオネス飛鳥がパートナーのブル中野の欠場に伴ない、北斗晶&下田美馬と1vs2のハンディキャップマッチを行なう。

12月23日 ライオネス飛鳥が下田美馬の誕生日会で体調を崩して緊急入院（バセドー氏病）。退院してから体力回復のため木口道場に通う。

1996〈平成8年〉

4月14日 J'dがヴェルファーレで旗揚げ戦。ライオネス飛鳥はジャガー横田と対戦。

5月2日 ライオネス飛鳥がバイソン木村と60分ドロー。

8月13日 全女日本武道館大会、ライオネス飛鳥はヴァーリ・トゥードのトーナメント「U★TOPトーナメント」の準決勝で堀田祐美子にアームロックで敗れる。

1997〈平成9年〉

1月16日 ライオネス飛鳥がJ'dの大阪大会を出場ボイコット。同日北沢タウンホールで行なわれた平成GUREN隊主催興行に出場し、平成GUREN隊、猛毒隊と結託。のちに平成裁恐猛毒GUREN隊と名乗る。

2月19日 ライオネス飛鳥がFMW後楽園ホール大会で、シャーク土屋のパートナーとして参戦。有刺鉄線バットで工藤めぐみと中山香里を急襲。

7月22日 ライオネス飛鳥が冬木軍プロモーション興行で冬木弘道と史上初の男女シングルマッチを行なう。

8月15日 LLPW5周年興行で、ライオネス飛鳥&イーグル沢井&土屋恵理子が初代世界6人タッグ&LLPW6人タッグ王者になるも、ベルトを通路に置き去りに。

1998〈平成10年〉

1月4日 平成裁恐猛毒GUREN隊が東京スポーツ社制定"97年度プロレス大賞"の女子プロレス大賞を受賞。

11月29日 横浜アリーナで全女30周年記念大会。ライオネス飛鳥は歴代WWWA世界王者が揃い踏みしたセミに出場（飛鳥&ジャガー横田&デビル雅美&ライオネス飛鳥vsアジャ・コング&ダイナマイト関西&堀田祐美子）。メインで長与千種が豊田真奈美を相手にAAAWシングル王座を防衛。この大会でクラッシュは再会、飛鳥のGAEA参戦につながっていく。

12月27日 ライオネス飛鳥、GAEAに初登場。長与千種と敵対するアジャ・コング&尾崎魔弓と結託。

1999〈平成11年〉

2月11日 ライオネス飛鳥を中心にアジャ・コング、尾崎魔弓、ラスカチョが緊急合体、GAEA乗っ取りをもくろむフリー同盟SSU（スーパー・スターズ・ユニット）を結成。

4月4日 ライオネス飛鳥と長与千種のクラッシュ対決が10年ぶりに実現。飛鳥がタワーハッカーボムで勝利、SSUがGAEAの全権を手に入れる。

7月18日 尾崎魔弓がアジャ・コングとともにSSUからの離脱を表明。SSUはライオネス飛鳥派とOZ派に分裂。

8月9日 ライオネス飛鳥の憧れの人、ジャッキー佐藤が死去。

8月22日 ライオネス飛鳥が井上京子とTWFシングル王座&WWWA世界王座のダブルタイトルマッチで60分フルタイムドロー。

9月15日 ライオネス飛鳥が長与千種と対決。長与が火炎攻撃からのデスバレーボムでフォール勝ち。SSUは完全崩壊。

12月27日 ライオネス飛鳥が長与千種と歴史的握手。クラッシュ再結成の気運が高まる。また、飛鳥はフリー選手としてさまざまな団体での活躍が評価され、東京スポーツ社制定"97年度プロレス大賞"の女子プロレス大賞を受賞。

2000〈平成12年〉

1月22日 ライオネス飛鳥率いる新ユニット（KAORU、加藤園子）の名前がD or A（デッド・オア・アライブ）に決定。

5月14日 GAEA5周年記念興行でライオネス飛鳥と長与千種がクラッシュ2000を結成、北斗晶&デビル雅美組を下した。

7月14日 ライオネス飛鳥がKAORUをハードコアマッチで下す。その過激な試合スタイルで故障者が絶えないため、D or Aは解散に。

2001〈平成13年〉

6月3日 ライオネス飛鳥がアルシオンに初登場。「これからアルシオンはこの飛鳥が仕切る！」と宣言。

7月15日 ライオネス飛鳥がKAORUと場外カウントなし、凶器使用自由の特別ルールで闘い両者KO。

11月25日 ライオネス飛鳥が浜田文子に勝利、クイーン・オブ・アルシオンの座に就く。

2002〈平成14年〉

1月14日 ライオネス飛鳥が半年ぶりにGAEAマットに復活。

10月20日 クラッシュ2000がラスカチョと対戦、ライオネス飛鳥がLSDで下田に勝利。その後、豊田真奈美が結成した元全に賛同、再び長与千種と袂を分かつことに。

2003〈平成15年〉

5月18日 ライオネス飛鳥が元全vs新世代として里村明衣子と対戦、勝利を収める。

9月28日 ライオネス飛鳥&山田敏代vs広田さくら&長与千種で史上初のバスケットボールマッチが行なわれる。

10月13日 クラッシュ2000がD-FIX（尾崎魔弓&KAORU）と井上貴子を相手に2vs3のハンディキャップマッチ。飛鳥が尾崎を下す。

2004〈平成16年〉

4月4日 5年ぶりにクラッシュ対決が実現。長与千種がライオネス飛鳥に勝利（現役最後のクラッシュ対決）。

4月30日 クラッシュ2000がシュガー佐藤&永島千佳世を破りAAAWタッグ王者となる。

10月3日 ライオネス飛鳥にかつての仲間である土屋恵理子が共闘を申し入れるが、飛鳥は拒否。

11月3日 クラッシュ2000がケガを理由に翌年4月の引退を発表。

2005〈平成17年〉

2月11日 ライオネス飛鳥がKAORUとハードコアマッチ。KAORUが3年越しの決着で勝利を収める。

2月20日 ラフォーレ東京でライオネス飛鳥が最初で最後の自主興行を開催。KAORUとHikaruが試合中のアクシデントで負傷してしまう。

4月3日 クラッシュ2000がタッグのファイナルマッチを勝利で飾り、試合後には『炎の聖書』を熱唱。ライオネス飛鳥はこの日で引退。長与千種も4月10日のGAEA最終興行で引退。クラッシュ2000は幕を閉じた。

はどこらへんが狂ってます?

飛鳥　これはジャンボが新人のときの話なんですけど、足首を粉砕骨折をしたらしいんですよ。それで「痛いんです、痛いんです」って言ってるのに、「サボるんじゃないよ」って当時のコーチに縄跳びをやらされたらしいですから。

——えーっ!　それは考えられないですね。

飛鳥　自分たちの時代も、結局みんなプロレスが好きで入った人間だから、アバラを折ったとしてもタイヤのチューブを開いて巻くわけですよ。で、ケガをしてないふりをして。そうじゃないと試合に出してもらえないから。とくに圧力をかけなくても、選手にそこまでさせちゃう団体なんですよね。当時は団体は一つしかなかったし、ここを出ていけば、一生プロレスラーになるのをあきらめなきゃいけないという強みが会社にはあった。

——じゃあ「ケガしてるから今度の試合ちょっと休ませてください」なんて誰も言わない?

飛鳥　言わないですよ。まあ、ホントに手術とか、外れちゃって歩けませんとか目に見えてわかる場合は「休め」とは言われますけど。それでもやっぱり、私たちもおかしいんだなとは思うんですよね。たとえば私は「これを無理したら一生歩けなくなりますよ」って言われても根性で治して、本来なら1ヵ月休むところを1週間で戻ってるんですよ。やっぱり狂ったところには狂った人間が集まるんですよ（笑）。

——どうやって治すんですか?

飛鳥　自分で治すんですよ。普通だったら「一生歩けなかったら困るから、少し多めに休んで静養しなきゃ」とか思うじゃないですか。だけどあの団体は「この足がダメになってもいいからいまリングに上がりたい」みたいな気持ちにさせるんですよ。常に「おまえじゃなくてもいいんだから」みたいな感じだから。だからふるい落とされないように、ケガを隠してでもしがみついていないといけなかったんですよね、自分の夢を達成するためには。

——恐ろしい団体ですよね。

飛鳥　恐ろしいですね。

復帰後の屈辱の日々　起死回生のヒール転向

——その全女を引退して5年、飛鳥さんは対抗戦ブームの最中に行なわれた94年の東京ドーム大会で復帰しました（ライオネス飛鳥&小倉由美vsジャガー横田&バイソン木村）。でも正直言って、観客の反応は「なんでいまさら?」って感じだったと思います。飛鳥さんはどうして復帰しようと思ったんですか?

飛鳥　ぶっちゃけたことを言ってしまえば、生活のためですよね。当時は芸能の仕事をしてましたけど、結局は女ヤクザ役とかアクション系ばかりで、そんなにお金にならなくて。千種もその1年前に復帰してたし、私もプロレスに戻ろうかなっていう軽い感じだったんですよ。

——復帰しても、すぐに自分の居場所が見つかるだろうと思った?

飛鳥　引退から5年も経っていたし、女子プロの流れも全然変わってしまっていることを目の前で見てるにもかかわらず、自分の中では「できちゃうだろうな」という感覚があったんでしょうね。それでジャガーさんに「復帰しましょうよ」って声をかけたのがきっかけです。

——飛鳥さんから話を持ちかけたんですね。

飛鳥　はい。ジャガーさんはいままでも時折プロレスをやってますし、誰よりもプロレスを愛してる人だから誘いに乗ってくれて。たぶんプロレスを仕事とは思ってないんじゃないかな（笑）。



98年11月の全女30周年記念大会。6人タッグで飛鳥は、ライガーボムでダイナマイト関西を呼吸困難に陥らせてしまう。試合後に泣き崩れた飛鳥を慰めたのは、メインでの豊田真奈美戦を控えていた長与だった。これをきっかけに二人は再び交わり、飛鳥はGAEAに参戦をはたす。

——もはや生き方だ、と（笑）。

飛鳥　それでバイソンにも声をかけて、「じゃあゴンゴン（小倉）も呼んでタッグマッチでやろうよ」って話になったんですよ。

——で、そのあとにジャガーさんとバイソンさんと雷神隊（ライディーン・アレイ）を結成して、本格的に全女に参戦するわけですね。

飛鳥　そこで初めて現実を感じましたね。もう私がやってた頃とは全然かたちの違うプロレスになっていて、ついていけないわけですよ。

——クラッシュ時代のプロレスと対抗戦時代のプロレスは、具体的にはどこが違うんですか?

飛鳥　なんていうか、作戦の練り方が違うんですよ。クラッシュ時代も、たとえばJBエンジェルスとやるときには「どう出てくるんだろう?」っていうのを楽しんでいたんですけど、対抗戦時代の子たちはその先の先まで見てるっていうか。ゴングが鳴ってから終わるまでのプロセスをすべて計算してやってるような感じで。

——選手各々が自分の試合の演出プランを持ってる、と。

飛鳥　まあ、そのとおりにいくかどうかは、相手もあることですからわからないですけど。あとね、技についていけないんですよ。単純に痛いし、「そんなおもいっきりやらなくてもいいじゃん」っていう（笑）。

——ハードヒットなんですね。

飛鳥　そう。忘れもしないんですけど、10月31日に復帰会見をした翌日に、レギュラーだったテレビ番組の打ち合わせにバイクで行こうとしたらコケちゃったんですよ。それで救急車で運ばれて。

——ドーム大会は11月20日でしたから、それは大変だったんじゃないですか?

飛鳥　でもカード発表しちゃってるし、代わりは利かないわけじゃないですか。だからあんまり練習時間もないままやって、内容的にも評判がイマイチで。そのあと全女にスポット参戦するわけですけど、呼ばれるのはバイソンが一番多かったですね。やっぱり、自分がバカにされてるのも凄くよくわかったし。

——現役の選手から?

飛鳥　そうですね。それはもうみじめでしたよ……（しみじみと）。で、ある日の練習後、ジャガーさんを車で送っていったんですけど、そのときに「じつは、吉本女子プロレスJd'（のちのJDスター女子プロレス）に行くことになったから」って言われたんですよ。話を聞いてみると、どうやら（ビューティ・アスリートという）吉本の構想から私は外れてるんだなっていうのがわかって。

——バイソンさんもJd'に合流しましたよね。

飛鳥　うん。でもなんで李（由紀）が入るんだって私はツッコミましたけど（笑）。結果的に私は置いてけぼりを食らったかたちですけど、それぞれ生活もあるし仕方ないって思いました。「私が同じ立場でもJd'を選びますから大丈夫です」って答えて、ジャガーさんを降ろしたあと、凄い泣



活動期間はわずか7ヵ月ながら、飛鳥、アジャ、OZアカデミー、ラスカチョと、まさにその名に恥じない豪華メンバーで構成されたSSU。謀略を巡らしてGAEAを翻弄、政治的な力を持った頭脳派ヒール集団だった。

いたのを覚えてますね。悔しいのとこれからどうしようっていうので。そのあともしばらくは一人で全女に上がってたんですけど、ちょうどその時期にバセドー氏病になってしまって体調が最悪だったんですよね。

――大変でしたね。その頃には北斗と下田（美馬）と1vs2のハンディキャップマッチなんて無茶な試合も組まれました。

飛鳥 最初は、私とブルのタッグだったんですよね。でもブルが怪我して欠場してしまって、会社から「おまえ、1vs2でやれ」って言われたんです。私がフォールを取られたあとに、サプライズ的に北斗と下田のシングルが始まって。結局、私はラスカチョの刺身のツマだったわけですよ。そんな使い方しなくてもっていう絶望感がありましたね。

――ひどい話ですね。

飛鳥 私もそのときは病気で体力もなかったから、体重の軽い下田をジャイアントスイングで全然回せなかったんですよ。そのすぐ前後にはブルに3分ぐらいで負けた試合もあったし。そこでもう限界だったと思って、入院というかたちで休憩に入るわけです。

――心身ともに悲鳴を上げてたんでしょうね。

飛鳥 そのときにはさすがに「こんな惨めったらしいことないな。もう辞めちゃおうかな」って思いましたね。たぶん『東スポ』だと思うんですけど、「ライオネス飛鳥はゴミ同然」だったり、「なんで戻ってきたんだ」みたいなことを書かれた。半分は辞めちゃおうかなって思いつつも、やっぱり悔しかったんです。

――意地っぱりなんですね。

飛鳥 このままフェードアウトしたら、これまでやってきたことの意味がなくなると思ったんです。プロレスにかけた自分の10年間がムダになってしまうって。そこで気合いを入れ直して、病院の先生のOKが出てからコンバットレスリングに通い始めたんです。

――木口（宣昭）先生のところですか？

飛鳥 はい。そこで練習つけてもらって体力をつけて。あのときは佐藤ルミナくんたちとも練習してましたね。とにかく身体を元に戻したかったんですよ。バセドー氏病は座っててもフルマラソンしてる状態で、エ

復帰したときは昔と全然違うプロレスについていけなかった

ネルギーを使ってしまう病気だと聞いてたし、体重もいきなり60キロぐらいになっちゃったから。

――あの頃はホントに体調悪そうでしたからね。で、結局はジャガーさんが声をかけてくれたんですよね？

飛鳥 そうですね。最初に吉本の構想から外された時点で、私は「もしJd'に呼ばれても絶対行かない」と思ってたんですけど、ジャガーさんが「私が責任取るから飛鳥を呼んでくれ」と吉本に言って私に声をかけてくれたのは嬉しかったし。ヴェルファーレでやったプレ旗上げでジャガーさんとシングルマッチをやらせてもらったのは凄く感謝してますね。

――Jd'は飛鳥さんとしてはどんな団体でしたか？

飛鳥 なんか中途半端に感じましたね。巡業も定期的にやってるし、お金はかけてるけど、リング上のストーリーに起承転結がなかったので「これでいいの？」と思いました。当時は女子プロレスが何団体かある中で、Jd'は一番ケツだったし。どうにかしなきゃいけないなと思っていたら「ヒールになったらどうか？」という提案があったんです。

――ジャガーさんからですか？

飛鳥 いや、FMWでレフェリーをやってた伊藤（豪）さんから。それが平成裁恐猛毒GUREN隊の元になるわけですけど。最初に話を聞いたときには「えっ？ これでコケたらどうしよう」とは思いましたけどね。いままではヒールにやられる立場だったから、自分にヒールができるかどうか自信もなかったんですけど、このまま中途半端になるよりは、一か八かやってみようと思ったんです。で、やり始めたらメッチャメチャ楽しくなっちゃったんですよ（笑）。

――やっぱりシャーク土屋さんやイーグル沢井さんと出会ったのが大きかったんですね？

飛鳥 そうですね。軍団結成の最初に、かつてのライオネス飛鳥が有刺鉄線木刀を持って、工藤めぐみに殴りかかったというシーンもファンには衝撃的だったんじゃないですかね。

――「こんな悪い人になっちゃって！」みたいな。

飛鳥 そうそう。でもおもしろかったですよ。本当おもしろかった！

――ヒールのどういう部分が楽しいんですか？

飛鳥 とにかく、自分で考えてやることがおもしろかったんです。初めてのことだらけだし。罵倒されるのも凄く楽しくて。かつて自分がやられてたことだから、けっこうコツをつかめるわけですよ。

――ああ、やられる側からやる側に回るだけですものね。

飛鳥 そうそう。やっぱり最初はついていけなかった対抗戦以降のプロレスにも、体力が戻ってきてからは順応できるようになった。そうする

と、今度は「話題を作り出したい」という気持ちになるんですよ。団体を引っぱっていく気はないけれど、私が出ているJ'dが話題になってくれないと困るって気持ちです。

――勢いに乗った平成裁恐猛毒GUREN隊は、ついには冬木（弘道）さんたち男子レスラーとも試合をしてしまいます。

飛鳥　あれは凄く貴重な体験でしたね。やっぱり凄いなと思った。何が凄いって、まず手加減しないんですよ！

――手加減をしない？

飛鳥　手加減しないっていうのは、やたらめったら殴るということではなくて、意識を手加減しなかったって意味なんです。「どうせ女子だろ？」と見下すような態度が冬木さん、邪道、外道にはないんですよ。たとえば私の延髄蹴りとか逆回し蹴りとかも、バカにしないでちゃんと受けてくれる。いちレスラーとしてちゃんと認めてくれてたんです。

――飛鳥さんは冬木さんと史上初の男女シングルマッチもやりました。ドキドキしましたか？

飛鳥　まあ、やったことないですからね。「どうすんですか、冬木さん？」みたいな感じだったけど、やっぱり楽しかったですね。冬木軍のプロレスに対する姿勢が大きかったと思います。やっぱり、女子をバカにする人っていますから。普通の男の人でも「俺のほうが女子プロより強い」って口にする人もいるわけだし。でも、冬木さんたちには、肌を合わせた瞬間、そういうものをまったく感じなくて。

――長与さんが05年に引退したときに「男子の興行に呼んでもらえなかったことが私にとって唯一心残りだった」と言ってましたけど、飛鳥さんと冬木さんの試合を指していたのかもしれませんね。飛鳥さんにとって、ヒール街道は楽しい旅行みたいな感じでしたか？

飛鳥　『東スポ』のプロレス大賞で、97年に平成裁恐猛毒GUREN隊で女子プロ大賞を獲って、99年には私がピンで同じ賞をもらったんですよ。そのときには「あ、私、やっとここまで来たな」って思いましたね。

――復帰してどん底まで落ちたのに、そこからよく這い上がりましたよね。

飛鳥　病気したことやジャガーさんたちと別れたこと、ヒールをやるうえで悩んだことも、すべてにおいて意味があったって思うんです。どれか一つでも欠けてたら、私はいまここにいないんじゃないかって。たぶんこれから先も悩むことはあるでしょうけど、それもあとになれば、そういうふうに感じられるんだろうなって思いますし。



00年5月14日に「クラッシュ2000」として復活した飛鳥と長与の名タッグ。懐メロでは終わらない現在進行形のタッグチームとして、対抗戦ブームの落ち着いた女子プロレス界の一躍中心的存在に。

運命のクラッシュ再結成 そして栄光のピリオド

――98年からは盟友であった長与さん率いるGAEA JAPANのリングに参戦するわけですが、それに伴なって、平成裁恐猛毒GUREN隊は自然消滅するかたちになったわけですか？

飛鳥　そうですね。あとでほかのメンバーには「あのときはごめんね」って謝りましたけどね。だから私は自分勝手なレスラーなんですよ（笑）。

――飛鳥さんの独断で決めたことだった、と。

飛鳥　そうですね。だって、ずっと同じことやってても発展ないじゃないですか？　土屋や沢井は団体に所属してるし、言ってしまえば食い扶持はあるわけで。私はフリーだから、自分の食い扶持は自分で見つけていかないといけないという気持ちはありましたね。

――当然です。さて、飛鳥さんの現役生活の集大成となるGAEAでの話ですが、飛鳥さんはアスリートとして凄いと思いますけど、長与さんは"ザ・プロレスラー"という感じがします。

飛鳥　そうですね、ホントにそう思う。そういう意味では、のちのち私がヒールとして自分をプロデュースしていったおもしろみは、全女のクラッシュ時代には一切感じられなかったんですよ。

――それはどうしてですか？

飛鳥　その役割は全部千種が担ってたから。でもその時期があったからこそ、私も（試合を）プロデュースするおもしろみを理解できたっていう部分はあると思うんです。

――飛鳥さん中心に、アジャさんや尾崎（魔弓）さん、ラスカチョと結成したSSU（スーパー・スターズ・ユニット）はいかがでした？

飛鳥　あれはもう、私にとっては最高の芸術でしたね！　短期間だったからこそよかった。やってて本当におもしろかったですもん。

――ヒールとして、存分に観客の心を動かすことができたからですか？

飛鳥　できましたね。おもしろいように反応もあったし、やっていて凄く充実してた。SSUはみんなプロレスができるコたちだったから、誰と組んでも試合が成り立ったし、相性もよかった。でも、GAEAには当時フリー選手がいっぱい上がってたから、サバイバルでしたよ。自分をいかにプロデュースして売っていくか。

――フリーとしてどう生き残るかの戦略が必要だった？

飛鳥　そう。だから私も、ある時期にはGAEAに上がらずに、アルシオンに出たりもしてましたし。それは自分の価値を確認すると同時に、自分に付加価値をつけていく作業だったんです。

――J'dでやった井上京子さんとの60分フルタイムドローも凄かったですね。飛鳥さん、もうそんなに若くなかったのに（笑）。

飛鳥　あれも芸術でしたね。私はあのとき36歳だったんですけど、動きっぱなしでほとんど休み技を使ってない。で、試合中に私が京子を2階から突き落としたんですけど、そのときに京子が「怖い！」って言ったんですよ。あとで京子が「トモさん、私が恐怖を口にしたのはあれが最初で最後です」って言ってましたけど（笑）。

――へぇ～、天才・京子が恐怖を感じたんですね。

飛鳥　そうみたい。だけど、あれは京子だからできた試合。京子との何連戦かっていうのは、自分の中で凄く大事な試合ですね。あの1試合で4キロぐらい痩せましたけど、私まだまだできるなと思いましたもん。

――大先輩から自信を引き出してくれる井上京子というレスラーは凄いですね。

飛鳥　うん、ある種の天才だなってホントに思う。ジャガーさんは別格として、私が認めるレスラーっていうのは井上京子とアジャ・コングと長与千種なんですよ。認めてるとこ

クラッシュ再結成のときはお互いの役割が本能で理解できた

ろは三者三様で全然違うんだけど、凄いなって思いますね。並の選手とアンテナが違うっていうか。

——アンテナというのは？

飛鳥　なんかあるんですよね。お互いのアンテナがあって、それを探り合うっていうか。違うアンテナを指してくる選手もいて、そこがおもしろかったり。たとえば、こっちが「あ、ここを持っていけるな」って思うところを、パッと持っていかれちゃったりとか。マイクパフォーマンスなんかもそれにあてはまりますよね。もともと私なんか、もっともマイクパフォーマンスなんて苦手なタイプの人間だったんですけど、選手生活の後半は誰にも負けなかったと思いますよ。凄くノッてたっていうか（笑）。

——昔は「時代の扉を開けたぞ！」（クラッシュ再結成のときのマイク）なんて言う人じゃなかったし（笑）。

飛鳥　恥ずかしくてそんなこと言えなかった（笑）。「いや、無言でいいでしょ」みたいなスタンスだったんですけど、アジャたちが時代を変えてからは、このプロレスに自分が加わっていくためには必要なことだなって。

——復帰する前とあとではすべてが変わったんですね。

飛鳥　ルール、見せ方、お客さんの受け入れ方のすべてが変わった。郷に入ればじゃないけど、そこで的確に自分が一番を目指すためには意識を変える必要があると思ったんですよ。だって、時代を反対に一人で走ることは絶対無理だから。だったら、この中で流れに乗って一番になっちゃえ、みたいな感じですね。

——フリーになったこともあって、考え方が柔軟になったんでしょうね。GAEAで長与さんの敵に回ったのも衝撃的でしたね。

飛鳥　アジャや尾崎たちにイジメられてる千種のところに私が駆け寄って、観客が「飛鳥が助けに来てくれた！」っていう大きな期待を持ったところで、それを裏切るように千種の握手を拒否したときの観客の反応！　あの気持ちよさっていったらなかったですよ（笑）。

——GAEAファンの多くは、もともとクラッシュファンですからね。

飛鳥　あの頃は凄い楽しかったですね。ヒールのライオネス飛鳥を認めてくれるファンの人がいたから。U★TOPトーナメントとか格闘技戦をやったことで、ライオネス飛鳥って強いレスラーだと認められたのも嬉しかったですし。

——すべては飛鳥さんが自分の力で切り開いた道ですから。

飛鳥　でも、最終的にクラッシュ2000として引退したことで「ああ、やっぱりな」って思ったところはありますね。二度と一緒のリングに立つことはないと思ってたのに、最初はリングでライバルとして対峙して、さらにゆくゆくの流れでクラッシュ2000を組むことになって。最初は戸惑いもありましたけどね。「私、ここまで自分でやってきたのに、結局はクラッシュなんだな」っていう。

——GAEAに上がる段階で、ゆくゆくはクラッシュを再結成するっていう話が決まっていたわけではなかったんですか？

飛鳥　いや、なかったですよ。ヒールで上がってくれっていうのはあったんですけど、クラッシュの話はなかった。

——じゃあクラッシュ再結成の話はどういう中で？

飛鳥　あれはホントに自然の流れなんですよ。二人で敵対して闘っていく中でドラマが生まれていった。でも、私自身はあんまり意識してなかった。それまで自分で好き勝手にやってきたから、ゴールがクラッシュなんて考えてもいなかった。

——なるほど。

飛鳥　だからクラッシュ2000が走り出したときも、復帰してからやってきたこととギャップがありすぎて、ちょっと埋めるのが大変だったですけどね。

——ヒールで成功したのにまたベビーですもんね。

飛鳥　そのギャップを埋めるための一つの策がハードコアスタイルだったんですよ。クラッシュやりながらも、ハードコア形式の試合もできるよっていうところを証明したかった。記者の人に「ハードコアなら飛鳥の右に出る者はいない」と言わせたぐらいの追求もしてたし。それはKAORUというレスラーがいたからこそできたんだなっていうのもありますけど。

——KAORUさんもあれで新境地を開拓したわけですから、飛鳥さんには感謝してるでしょうね。長与さんと再びタッグを結成していかがでしたか？

飛鳥　やっぱり「パートナーってコイツだな」って思いましたよ。おもしろかったです。あと、お互い成長したなって実感しましたし。最初のクラッシュのときは、千種がなかなかタッチにこなかったりするとイライラするわけですよ（笑）。ぶっちゃけ、「こっちの出番も作ってよ。そんなにやられなくていいからさ」みたいなのもありましたからね。

——千種さんがいいところを全部持っていっちゃうわけですね（笑）。

飛鳥　でも再結成のときには、お互いに別々の場所でいろんなことを経験してるから、今度は「おまえが行ってこい」、「いやいや、おまえが行ってこいよ」みたいに譲り合ったり（笑）。でもそこはうまい具合にお互いの役割がわかってたし、そうじゃないとタッグが成り立たないということを本能で理解できるようになった。

——お互い大きく成長したうえでの再結成だった、と。

飛鳥　あと、私がクラッシュの再結成で最初に主張したのが、コスチュームのことだったんですね。その当時、千種ってけっこうヒラヒラがついたピカピカのヤツを着てて、私はシンプルめなのを着ていて正反対だったんですけど、長与千種とライオネス飛鳥のそれぞれの個性があってこそのクラッシュ2000にしたいってちゃんと言ったんです。それをGAEAも千種もわかってくれたから、二人のコスチュームもキラキラとシンプルと両方が入った半々のイメージのものになった。

——要するに飛鳥さんがアイデアを出せるまでに成長した、と。

飛鳥　そうですね。そこまでが長かったですけど（笑）。

——フリーになってからは、男子のプロレスも研究しましたか？

飛鳥　WWEのハードコアは観てましたね。あとは闘龍門。下田たちが「クレイジーマックスっておもしろいよね」って言ってましたけど、女子で一番最初に目つけたの私ですから（笑）。

——そうでしたか（笑）。

飛鳥　だからちょっと盗んで取り入れたものもありますし。

——05年2月にはラフォーレ東京で引退記念自主興行もやりましたね。でも、KAORUさんとHikaruさんが試合中のケガで続行不可能になってしまって残念でした。

飛鳥　そうですね、あれはちょっとね……KAORUは凄くノッてたときだったから、まいったなって思いましたね。しかも大腿部骨折っていう凄く大きなケガだったし。私、オルパ（オールパシフィック王座）は一度も巻いたことなかったから、引退記念にと思って、当時王者だったHikaruとメインでやったんですね。でも、こっちも途中で足を脱臼しちゃって。Hikaruはこれからの子だったし、道を譲るって言ったらあれですけど、そういう場所を作ってあげたいっていう気持ちもあったんですけどね。

——度重なるアクシデントだけでな

クラッシュ全盛期よりも復帰してからのほうが楽しかった

く、そういった思いもはたせなかったこともあって、リング上で号泣されていたことをよく覚えています。

飛鳥　全女やGAEAの協力があって成り立った自主興行だっただけに「どうしてこんなところで！」っていう思いもありましたね。だからホント泣きましたね、リング上で。

――そういったハプニングこそありましたけど、あの興行は、音響や照明もかなりハイセンスでプロレスっぽくない演出でした。

飛鳥　プロレスの枠を越えて、違うところのターゲットにも広げたいっていうのもあったんですよ。そういう意味ではやった意義はあったかなって思いますよね。

――レスラー生活を振り返ってみて、飛鳥さんが一番印象に残ってる試合というと？

飛鳥　いっぱいあるなあ。もちろん京子とやった60分フルタイムもそうだし。千種と横浜でやったのもそうだし、あとはKAORUとのハードコアマッチ。SSUも捨て難いしな……とにかく全部ですね。あの11年間の全部です。

――大ブームを巻き起こしたクラッシュ全盛期の試合ではなく？

飛鳥　全然それはないですね（キッパリ）。もちろん、あの時期はあの時期で感謝すべきところはたくさんありますけど。でも、私はレスラーとしてワガママなんですよ。そういう意味で、あの11年間は凄くワガママにやれたから楽しかった。挫折して何クソって思ったり、ヒールに転向したり……とにかく復帰してよかったなって思いますね。

――復帰してよかった、と心から思える選手は、そう多くないと思います。

飛鳥　いいところで、きれいなかたちで退けたと思いますよ。おもしろいことに、最初のクラッシュのときの引退は私が後楽園で千種が横浜アリーナ。今回の私の引退は、アリーナではないですけど横浜文体で、千種が後楽園なんですよ。運命というかめぐり合わせを感じますね。



らいおねす・あすか■1963年7月28日、埼玉県出身。80年5月にデビュー。83年、長与千種とクラッシュ・ギャルズを結成、大ブームを巻き起こす。89年8月に引退後はタレント活動を続けるが、95年11月に現役復帰。00年12月には長与とクラッシュ2000を結成。05年4月に二度目の引退、現在は銀座で会員制のクラブを経営。

やなぎさわ・たけし■1960年、東京都出身。慶應義塾大学法学部卒。在学中からまんが専門誌『ぱふ』の編集を手がける。空調機メーカーを経て84年に文藝春秋に入社。『週刊文春』、『Number』編集部を経て03年退社。以後フリーとして各紙誌に寄稿。09年3月、『完本・1976年のアントニオ猪木』を発表。

――因縁を感じますね。しかし、飛鳥さんの印象に残ってる試合がすべて復帰後ということは興味深いです。

飛鳥　記憶に新しいということもあると思うんですけど、やっぱりクラッシュが大ブームの頃って、自分の試合ではなかった。もちろん自分が練習して、自分が闘ってはいるんだけど、これは自分じゃないみたいな感覚があった。

――自分の考えが追いついてなかったんでしょうね。

飛鳥　復帰してからは、常にプロレスのことを考えてましたから。昔は巡業から帰ってきたら、プロレスは一切私生活から切り離してたんですよ。でも、あの11年間は常に考えていた。下のコたちにも「常に考えろ、考えてないと他人より先には行けないよ」と言うんです。だからJ'dでファング鈴木とかザ・ブラディーとか藪下めぐみとかの若いコたちが金網デスマッチをやったときも、「考えろ」とずっと言い続けたことがかたちになってるんだな、と思いましたね。私は何も教えてない。考えてるのも勉強したのもあのコたち。だから人って、育てていくものじゃなくて、育っていくものだと思います。

――とくにヒールはそうかもしれませんね。

飛鳥　そうそう。私はいま銀座のクラブを経営していて、人を育てていく立場として思うのは、自分が大きくなるためには何かを教えてもらうんじゃなくて、自分で学んでいくもんじゃないかなと思うんですよね。

――人間としてということですか？

飛鳥　そうですね。すべてにおいて。だからいまも「この不況なのに忙しくていいね」って言われるんですけど、そこにあぐらもかきたくない。ライオネス飛鳥という名前でやってはいますけど、この世界ではまだ何年目ですってちゃんと頭も下げる。結局、一番を獲るためには何が必要かっていうことを、いまも常に考えてる。だから肝臓も使うし、神経も使う。だけど生きていくためにいまの仕事を選んだからには仕方がない。サボッてる人間は絶対に一番を獲れないんですから。

――一番を目指す姿勢はレスラーとしてデビューした頃から一貫してますね。飛鳥さんはもう復帰は考えてないんですか？

飛鳥　よく「上がらないんですか？」って言われるんですけど、私はもう一度復帰してるし、いいピリオドも打ってるから、二度とリングには上がりません。もしかしたらプロデュースする側として挨拶はするかもしれないけど、レスラーとしてはないです（キッパリ）。

――そうでしょうね。最近、長与さんとは会いましたか？

飛鳥　私の店のオープンのときに来てくれましたけど、もう2年くらい会ってないですね。ジャガーさんの興行で会ったのが最後じゃないかな。

――お互い別のところで頑張ってるわけですね。

飛鳥　そうですね。私もいまの生活の中で余裕ないですし。現役のときに常にプロレスのことを考えてたように、いまは仕事のことをいつも考えている。起きてからこれしてあれして、あの人にメールして、伝票つけてとかって、寝てる以外はすべて仕事のこと。恋愛も遊ぶ暇もないけれど、凄く充実してるんです。

――飛鳥さん、前にお会いしたときに比べて凄く顔が若返ってる気がしますよ（笑）。

飛鳥　本当ですか？　嬉しいです（笑）。疲れてはいますけど、いまは仕事をすることが楽しくてしょうがないですからね。

――それはきっと自分の頭でやってるからでしょうね。

飛鳥　そうですね。使われてるときとは違いますね。自分が経営して、自分で考えて。思ったとおりにならない日もありますけど、やったことに対して人の気持ちが返ってくることが凄く嬉しいですね。いまは銀座の街が私にとってはリングです（笑）。

【09年3月5日／都内・池尻大橋にて収録】

ライオネス飛鳥 栄光と挫折

緊急告知!!

4/5（日）より kamiproMove カミプロムーブ にて

柳澤健による

「1993年の女子プロレス 外伝」

連載開始!!

今回のインタビューでは未掲載となった、飛鳥の知られざる生い立ちから憧れの全女への入門、そしてデビューから新人時代を徹底網羅！ いかにして飛鳥がスーパースターの道を歩んでいったのか、柳澤健がその軌跡に迫る！



第一弾はライオネス飛鳥！（全4回予定）
最狂団体全女の秘蔵エピソード満載!!

主要3キャリア全端末対応（※端末により一部非対応コンテンツあり）

アクセス方法				
iモード	iメニュー	メニューリスト	スポーツ	格闘技/大相撲
EZweb	EZトップメニュー	スポーツ・レジャー	格闘技	
Yahoo!ケータイ	メニューリスト	スポーツ	格闘技	

サービス利用料 月額 315円（税込）

enterbrain 株式会社エンターブレイン 〒102-8431 東京都千代田区三番町 6-1

［お問い合わせ］株式会社エンターブレイン カスタマーサポート TEL.0570-060-555（受付時間／土日祝祭日を除く 12:00 ～ 17:00） メールでのお問い合わせは support@ml.enterbrain.co.jp まで。



近藤朱里20歳、まだ誰のものでもありません

（KGの本名）

『ハッスル』に舞い降りた妖精の魅力を徹底特集!!

KG 空手美少女

『ハッスル』期待のニューヒロイン、KG（空手ガール）が可憐に登場!
キレ味抜群な空手殺法に、その類まれなるルックス……。
近い将来、スターになること間違いなしのこのダイヤの原石に、
7ページに渡って急接近だ!　あ、あんまり顔は近づけないでください!

聞き手／鈴木佑　撮影／山口比佐夫

私、視力が悪いんですけどお金がないからコンタクトが買えないんです

君はKGを知っているか？『ハッスル』で活躍する空手美少女、それがKGこと近藤朱里ちゃんだ！ え？ なんで唐突にKGをプッシュするかって？ そんなのかわいいからに決まってます！ それだけで「プロレス上流地帯」に認定！ いずれ"マット界の妹"と呼ばれる日もそう遠くないであろうこの逸材、その魅力とはいったいなんなのか？ 観る側を勝手にほっとけない気持ちにさせる20歳の素顔をクローズアップ！

ああ、GKかわいいよGK……あ、間違えた、KG！

――今日はリング上とはうって変わって、女の子っぽいかわいらしいファッションですね！

KG ありがとうございます！（笑顔で）。

――普段はそういう感じの服装なんですか？ と言いつつ、こちらからのリクエストなんですけど（笑）。

KG アハハ！ でも、今日みたいな服装をしてることが多いですよ。こういう仕事をしてると、プライベートはいつもジーパンにTシャツとかって思われたりするんですけど。

――へー、オシャレさんなんですね。ちなみに今回のポイントは？

KG ワンピースのヒラヒラの部分がレースになってるところですね……似合ってますか？

――バッチリです！ さて、今回はいろいろとKGさんの素顔というか魅力に迫りたいなって思ってるんですよ。

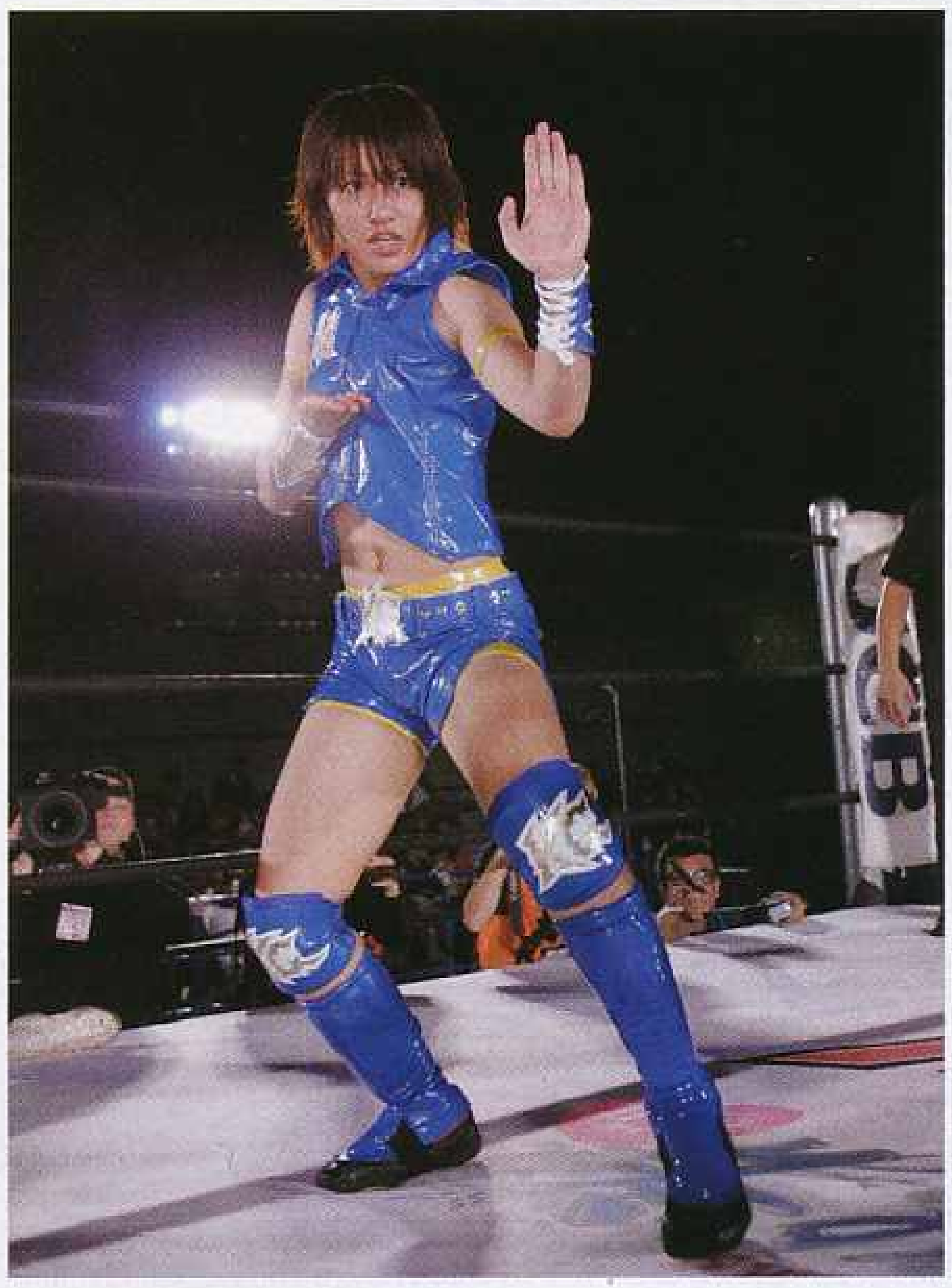
KG はい、よろしくお願いします！

――まずは『ハッスル』のことから聞いていきたいんですけど……KGさんの給料は未払いですか？（笑）。

KG え？ はい。あ、いえ、大丈夫です、ちゃんといただいてます（笑）。

――それは安心しました（笑）。でも、いまも『ハッスル』以外でバイトしてるって聞いたんですけど？

KG 時間があるときは派遣バイトで漫画喫茶とかで働いてます。



チェストー！ 空手初段で全国大会に出場経験もあるKGだけに、構えもじつに堂々たるもの。空手はお父さんの影響で小学校3年生から始めたというから、すでにそのキャリアはグレート・サスケ先生もビックリの10年選手なのだ！ 押忍ッ！

――それは練習の合間とかに？

KG はい。だからバイトのときはちょっとくたびれてたりしますね。

――頑張り屋さんですね～。どうですか、『ハッスル』にはすっかり慣れました？

KG デビューして半年くらい経ちますけど、ちょっとずつ慣れてきた感じですね。いまも技や見せ方の部分でわからないことがいっぱいあるので、先輩方に教えてもらってます。

――あとで自分の試合は見直しますか？

KG 一応、復習のために観るんですけど、すっごく恥ずかしいんですよね（赤面）。できてないことがいっぱいあるので、ほかの方の試合を観て勉強して。やっぱりTAJIRIさんやアン・ジョー司令長官は、お客さんの盛り上げ方とか凄いなって思います。

――もともとKGさんは演技のお仕事をやってたって耳にしたんですけど、そういう意味では『ハッスル』の世界観にすんなり入っていけたんじゃないですか？

KG はい。でも前にリング上で、RGさんの名前をおもいっきりHGさんって言っちゃったことがあって……。

――確かに豪快に間違えたことがありましたね（笑）。そのあと、取り繕うように「RGさん！」って連呼してましたけど。

KG ほんっと、あのときは恥ずかしかったです（笑）。まだまだだな～って思いました。

――セリフを覚えたりするのは苦手だったりします？

KG う～ん、物覚えはそんなによくないかもしれないです。スキットの撮影とかでカンペを出してもらうこともあるんですけど、私は目が凄く悪いので見えなかったりもして。

――ちなみに視力はどのくらいなんですか？

KG 0・06とかです。

――けっこう悪いですね。じゃあ試合のときは外すにしろ、普段はコンタクト着用で？

KG いえ、普段からしてないんですよ。

みんな大好きKG！ 『ハッスル』ときめきメモリーズ



やっちゃった！ KGのNG大賞!!
本文中にあるように、KGはRGに向かって「HGさんは最低ですね！」と名前を間違えてしまう。すかさずRGに突っ込まれ、場内はなんとも微笑ましい雰囲気に包まれたのであった。



見よ！ 華麗なるKGムーブ!!
武器は空手だけじゃない！ 抜群の運動神経で繰り出す空中殺法も見ものであるKG。劣勢のときの苦しげな表情もまた素晴らしいので、生KGを堪能したい貴方は会場へGO!!



ズコッ！ 空手美少女は天然素材!?
KGはRGとの公開練習の際に、「はい！ はい！」というかけ声をハイキックの指示だと勘違いしてハイキック一閃！ その威力はRGが「俺の頭がない」と、ドス・カラスJr.ばりに呟くほど。



期待のニューカマー！ KG初登場!!
レイザーラモンの行きつけの喫茶店『ともだち』でウェートレスのアルバイトをしているKG。ちなみにKGの命名者は残念ながらRGだったりする。

やっぱりコンタクトってお金がかかるじゃないですか？

KG　一応メガネは持ってるんですけど、似合わないからかけたくないっていうのもあって。

――全然見えないと困りません？

KG　でも、慣れちゃいますよ。いまって視力を回復するエピレーシックとかあるじゃないですか？　あれを凄くやってみたいんですけど、私には治療費が高すぎて……。

――やっぱり先立つものが先立たない、と（笑）。何か目が悪くなったきっかけってあるんですか？

KG　あの、私、凄く目が悪いことに憧れてた時期があるんですよ。

――……えーと、何を言ってるんですか？（笑）。

KG　中学生のときに身近な友だちがメガネをかけてるのを見て、「頭よさそうに見えるし、かわいくていいな～」って思って。それで友だちによくメガネを貸してもらってたんですね。でも度が入ってるし、そんなのかけてたら絶対に目は悪くなるじゃないですか？　たぶん、それが原因で視力が落ちたのかなって思います。

――身から出たサビですね（笑）。じゃあ、いまはお金が貯まったらとりあえず……。

KG　レーシックをやりたいです！

――なるほど（笑）。演技のお仕事は学生時代からやってたんですか？

KG　はい、高校3年生からやり始めました。

――それは原宿の竹下通りで遊んでてスカウトされたとか、友だちが勝手に事務所に応募してみたいな？

KG　いえいえ、そういうのじゃなくて自分からエキストラの仕事に応募したんです。元々そういう世界に興味があって。私、お母さんの影響でダンスをやってたからなのか、人前に出ることが凄い好きだったんですね。なんか、自分の世界観を表現したいっていうか。

KG

――じゃあ学校でも目立ってたんでしょうね。あ、共学でした？

KG　はい、中学も高校も共学でした。

――ズバリ、モテましたか？

KG　え⁉　あ、いや、はい、そんなことは……（しどろもどろ）。

――モテたな（笑）。

KG　でも、けっこう男の子と話したりはしなかったですね。私、人見知りが激しいんで。

――そうは言いつつも、人前に立つのは好きなんですよね？

KG　舞台とかで人前に立つのは大丈夫なんですけど、普段、男の人と話したりするのは照れちゃうっていうか、そっけなくなっちゃうんですよ。話しかけられると「ど、ど、どうしよう」みたいにキョドっちゃって（笑）。仲良くなれば楽しく話したりできるんですけど、自分から話しかけるとかはちょっとダメですね。

――へ～、けっこうシャイなんですね。エキストラ以外にはどんな仕事を？

KG　あとは顔の矯正治療のイメージガールとか。雑誌の読者モデルも自分で申し込んでやってましたね。『MINA』っていう女の子のファッション雑誌とか。そのときは本名の近藤朱里で出てました。

――珍しい名前ですよね、〝シュリ〟って。首里城の〝首里〟でしたっけ？

KG　……違いますよ～！（悲しそうな表情で）。〝クビ〟じゃないです、朱色の〝シュ〟です！

――あぁ、失礼しました（笑）。名前の由来は聞いたことあります？

KG　一回聞いたことあるんですけど……忘れちゃいました（笑）。両親が凄くいい名前をつけたって言ってた記憶はあるんですけど。

――ちなみに友だちからはなんて呼ばれてました？

KG　高校のときは普通に「朱里」って呼ばれてましたね。小学校の頃はなぜか「マリオン・ジョーンズ」とか「マリオン近藤」って……。

――ずいぶんパンチの効いたアダ名ですね（笑）。けっこうKGさんってイジられキャラじゃないですか？　前に話を聞いたときに、よく周りから天然扱いされるって言ってましたし。

KG　それ、自分ではまったく思ってないんですよ！

――天然の人はだいたい自分は天然じゃないって言いますよね（笑）。

KG　……たまに日本語がおかしいとか、一般常識に欠けてるとかは言われますね。でも、私はお母さんがフィリピン人なんで、「ハーフだからしょうがないじゃん」っ

かわいすぎてけしからん！
発掘！　KGお宝写真





いまよりややポッチャリめなところが愛嬌を感じさせる読者モデル時代のKG。そのガーリーな出で立ちを見つめていると、天龍さんの延髄斬りを食らったみたいにクラクラしてくるってもんである。一週勝ち抜き！



こちらはちょっぴりおすまし、お姉さんモードのKG。モデル立ちもサマになっててイイ感じ！　これでなおかつ平成生まれだっていうんだから、天は二物も三物も与えてるってもんである。二週勝ち抜き！

て、言い返すんですけど（笑）。

――それもまた凄い理由ですね（笑）。

KG でも確かに友だちからはけっこうイジられますね。私、イジられると最初は大丈夫なんですけど、けっこう責められるとあとから悲しくなっちゃうんですよ。

――性格的にへこみやすい？

KG そうかもしれないです。でも凄い負けず嫌いなんで、へこんでもへこたれないようにしてます！

――意外とKGさんは感情の起伏は激しいほうですか？

KG 激しいです！ とくに自分でも引くくらい泣き虫なんです（笑）。小さい頃からなんですけど、泣きたくなくても涙が出ちゃうんですよ。

――じゃあ『ハッスル』でも感動したり？

KG はい。最近だとゼウスさんが『ハッスル』を卒業するシーンで、川田（利明）さんとやり取りしてるのを観てたら、「あぁ、感動！」ってウルウルモードでしたね。周りにも人がいたから我慢してたんですけど、自然と涙がポロリって。

――泣いたら強くなるタイプっていうのもおもしろいかもしれないですね（笑）。KGさんは空手以外にもスポーツはやってましたか？

KG いろいろやってましたね、部活もずっと体育会系で。小学校の頃は器械体操部と卓球部、中学は陸上部、高校に入ってからはテニス部でした。

――じゃあ体育の成績はずっと5で？

KG そうですね。

――ほかの科目は？

KG まあ……ボチボチです（笑）。

――ボチボチ（笑）。

KG 優等生かどうかはわからないですけど、クラスじゃ真面目なほうだったと思います。はっちゃけた感じではなかったですよ。

――ヤンキー連中とはつるんだりはせず？

KG べつに普通にしゃべったりはするんですけど、そこまで仲がいいとかじゃなかったですね。

――さすがにヤンキーも空手少女にはカツアゲとかしないですよね。

KG べつにカツアゲから身を守るために空手をやってたんじゃないですよ～。

――失礼しました（笑）。空手以外にキックボクシングもやってるって聞いたんですけど？

KG キックは去年の7月からやってます。ある舞台で共演したアクションが上手な役者さんに、「演技にも役に立つし、空手やってたならキックもやってみたら？」って勧められたのがきっかけですね。

――ちなみにそれはどういうお芝居だったんですか？

KG 『スーパーマーケットおさげや』っていう演劇で、〝なんとかレンジャー〟みたいなヒーローが出てきたりする舞台だったんですよ。で、私はそのヒーローの中身もやったりして。ちなみにその演劇のサブタイトルは「ハイスピード極道ラブアクション」だったんですけど（笑）。

――どんな舞台だか想像もつきません（笑）。ほかにスポーツ以外に続けてたことってあります？

KG やっぱりダンスですね、ヒップホップジャズっていうジャンルで。お母さんは私をダンサーにさせたかったみたいで、つきっきりでダンスを教えてくれたり、ほかにダンススタジオにも行かせてくれて。

――それはかなり本格的ですね～。

KG もともとお母さんは凄い音楽が好きな人で、ディスコでウェートレスやりながら自分もダンサーをやったりしていて。

――へ～、ファンキーなお母さんなんですね！ まだお若いんじゃないですか？

KG 43歳です。あの、私、お母さんのことを凄く尊敬してるんですね。中学1年のときに両親が離婚したんですけど、それから女手一つで私を育ててくれたので。

――母一人娘一人なんですか？

KG 警察官をやってるお兄ちゃんがいるんですけど、いまはお父さんと暮らしてます。最近は私もあっちも忙しくてあまり会えてないんですよね……ちょっと寂しいです。

――母一人娘一人だと、もちろん炊事洗濯とかも自分でやったり？

KG 小さい頃から自分のことは自分でやってましたね。

――偉いな～。ちなみに得意料理とかあります？

KG ニラたまです！（笑）。あとはハンバーグも得意です。前はお弁当とかも作ってたんですけど、いまは疲れちゃってるとコンビニとかで間に合わせちゃいますね。

女手一つで私を育ててくれたお母さんのことを凄く尊敬してます



なんとも異国情緒あふれるドレスに身を包むKG。そして、その隣にいるじつにお美しい女性こそKGのお母さんだ。いつファイティング・オペラの舞台に上がってもおかしくない存在感、ぜひともステージママとして登場希望！





KG





——学生のときは部活のかたわらでアルバイトもかなり頑張ってたんですよね？

KG はい！ 高3で進路が決まったあとは学校もほとんど行かなくてよかったんで、そのときは八百屋にビラ配りに牛丼屋、3つのバイトを掛け持ちしてました。

——タフですね～！

KG もう進級しないで芸能の道に行くつもりだったんで、これからはバイトをしてお金を貯めなくちゃって思って。

——ちなみに八百屋をやりながらモデルの仕事もしてたんですか？

KG そうですね、並行しながら。八百屋さんでは糠漬けも売ってたんですけど、糠に手を突っ込んでたらメチャクチャ痒くなって、しかも臭いが全然取れなくなったのはすっごく困りましたね（笑）。

——モデルなのに糠臭いのってちょっとヤですね（笑）。

KG あ、あとほかにはお弁当屋さんでも2年近くバイトしてました。そのときはお弁当の入れ忘れとかをお客さんの自宅に届けて、お詫びに唐揚げをサービスしたり、クレーム処理とかもしてましたね。

——は～、若いのにいろんなことやってますね。いまおいくつなんでしたっけ？

KG 20歳になりました！ 今年成人式だったんです。

——それは芸能界的にサバを読まずに？

KG はい、正真正銘の20歳です（笑）。でも、できればずっと10代でいたかったですね～（シミジミと）。『ハッスル』でデビューしたときは19だったんですよ。

——自分の同年代の友だちと比べたときに、「私って歳のわりに人生経験豊富だなぁ」とか思ったりしません？

KG 周りからは「気づいたらいろんなことやってるよね」とか言われますね。「凄い変わってるよね」とか。いま思い返すとけっこういろんなことがあったかもしれないです（笑）。

——そっか～、コク深い人生を歩んでるんですねぇ。

KG あ、あの、取材の事前に頼まれてたアンケート用紙を持ってきたんですけど……（別枠に掲載したアンケート回答用紙を取り出しながら）。

——あ、ご協力ありがとうございます！ どれどれ……、「好きな有名人は？」の欄に「髙田延彦」って書いてますね。こういう気使いも欠かさない、と（笑）。

KG いえいえ、そういうのじゃなくて本当に尊敬してるんです！（動揺しながら）。

——え～と、「好きな歌」は『Ｂａｂｙ ｉｆ……』。これは誰の歌ですか？

KG フェイレイさんっていうアーティストです。ボイストレーニングに通ってた時期に歌い込んでた曲なんですよ。私、もともと歌に凄いコンプレックスがあったんですけど、いまは少しはマシになったと思います（笑）。

——ダンスもできるんだし、まさに〝歌って踊れて試合もできる真のハッスラー〟ですね（笑）。あとは……なんですか、この「人にされて悲しかったことは？」が「メガネを踏まれた」っていうのは？（笑）。

KG 聞いてください、これは衝撃的なんです！ 高校生のときのテニス部の話なんですけど。私、試合中は裸眼で、応援するときはメガネをかけてたんですね。で、試合が終わってベンチに戻ったら、そこにちゃんと置いといたはずのメガネが割れてたんですよ！ 「メ、メ、メガネが～」って、凄いショックで（悲しい表情で）。

——ダハハハハ！ つくづくメガネに縁がないですね（笑）。あ、「いま注目してい

キミのことがもっと知りたいんだ! KGに聞く30の質問



Q1. 最近のマイブームは?
お風呂にゆっくりつかる
『超ファイバープラスビタミンC』を飲む

Q2. 一番好きな漫画は?
『腐女子彼女。』(エンターブレイン刊)

Q3. 一番好きな映画は?
『シックスセンス』

Q4. 好きな有名人は?
(男女一人ずつ)髙田延彦／大竹しのぶ

Q5. よく遊びに行く街は?
横浜

Q6. 好きな色は?
赤、緑

Q7. 好きなブランドは?
グッチ、アナスイ、LB-03、ロキシー

Q8. いま使っているケータイの着メロは?
JAZZ

Q9. 財布の中身はいつもいくらくらい?
1,000円～5,000円くらい

Q10. 貴女にとって大金とはいくら? それが手に入ったら何に使う?
[10万円]
エピレーシックをやるためのお金として貯める

Q11. 毎日欠かさずやっていることは?
週1～2回やらないときもあるけどキックの練習

Q12. 貴女の口癖は?
「押忍!」、「～っすよね」、自分のことを「自分」って言うこと

Q13. 芸能人で似てると言われる人は?
浅尾美和

Q14. 自分の好きなところ、嫌いなところは?
好きなところは負けず嫌い
嫌いなところは頑固でマイペース

Q15. カラオケで必ず歌う曲は?
『Baby if...』

Q16. 初恋はいつ?
幼稚園

Q17. 異性のグッとくる姿は?
真面目に何かに打ち込んでる姿
スポーツをしてる姿

Q18. もし貴女が男だったら何をしたい?
男物の洋服をいろいろ着てオシャレをする
スポーツのあとに上半身裸で筋トレをする

Q19. 人に言われて嬉しかったことは?
「うまくなったね」、「個性的だね」、「変わってるね」、「ミドル効くわ!」

Q20. 人にされて悲しかったことは?
メガネを踏まれた

Q21. 貴女の座右の銘は?
あきらめず努力すれば必ずかなう!

Q22. あなたにとっての宝物は?
母

Q23. 子どもの頃の夢は?
空手で優勝しまくって有名になり、お婆さんになったらお爺さんといっしょに駄菓子屋さんとかをやって平和に仲良く暮らす

Q24. ドラえもんの秘密道具が一つだけ使えるとしたら何がいい?(その理由も)
[どこでもドア]
すぐいろんなとこに行けて時間を凄い有効に使えるから

Q25. いま注目している人は?
風香さん、グレイシャア亜紀さん、田嶋はるさん

Q26. あなたが幸せを感じる瞬間はどんなとき?
一人の空間でボーッとしてるとき

Q27. ハッスラーになっていなかったら何をしていた?
プロキックボクサー&芸能活動

Q28. もし人生がやり直せるとしたらいつに戻りたい?
高校1年生

Q29. 地球最後の日には何をしたい?
お母さんと最後においしいものを食べる

Q30. 地球最後の日には何が食べたい?
アイスクリーム

いま思い返すと、私の人生って いろいろあったかもしれないです（笑）

KG

る人」の中に風香選手の名前が入ってますね。これはあれですか、「私のほうがかわいいわよ！」っていう？
ＫＧ　違いますよ〜！　風香さんはけっこう雑誌とかでも目にするし、シュートボクシングにも出場したり立ち技もやってるので、私と共通点があるなって。
—ちょっと意識してるわけですね。えーと、「もし人生がやり直せるとしたらいつに戻りたい？」に対する解答が「高校1年生」。これはなんでまた？
ＫＧ　なんか……やり直すならこの時期かなって。なんとなく……なんとなくです、はい！（はぐらかすように）。
—何か隠してますね（笑）。あ、さっきからお金には困ってるようなことを言っておきながら、「好きなブランドは？」にシレっと「グッチ」って書いてある！
ＫＧ　いや、グッチは好きなんですけど、一つも持ってないからほしいなっていう憧れでついつい書いちゃって……すいませんでした（恐縮して）。
—何をあやまってるんですか（笑）。ちなみに買い物に行くときは友だちとですか？
ＫＧ　いえ、基本的に一人ですね。友だちと行くとけっこう気を使っちゃうんですよ。ちゃんと買いたい物が見れなくなっちゃうので。
—けっこう気使いＫＧなんですね。「芸能人で似てると言われる人は？」が「浅尾美和」か。あ〜、小麦肌でエキゾチックなところとか似てるかもしれないですね。



けー・じー■本名・近藤朱里。1989年2月8日、神奈川県海老名市出身。『ハッスル』オーディションを経て08年10月26日の栃木大会でデビュー。『ハッスル』では、ほんこんがマスターを務める喫茶店『ともだち』の看板娘としても活躍。164cm、51kg。ブログ『☆朱里のハッとした出来事☆』http://ameblo.jp/aaabbbcccdddabcd/

ＫＧ　ほんとですか？　たまに言われるんですよね。私、ほかに誰か似てる芸能人とかいます？
—そうですね……ルビー・モレノ（笑）。
ＫＧ　ルビー……⁇
—ひと昔前に日本で活躍してたフィリピン人の女優さんです。エステル・モレノじゃないですよ（笑）。
ＫＧ　エステル……⁇
—一昔前に日本で活躍してたルチャドーラです（笑）。それはさておき、「幸せを感じる瞬間」が「一人の空間でボーッとしてるとき」ってことですけど、ＫＧさんは基本的に一人が好きなんですかね？
ＫＧ　もちろん友だちといる時間も凄い好きなんですけど、やっぱり一人でいる時間を大切にしたいんですよね。なんていうか、心の充電期間っていうか。
—オン・オフがハッキリしてるんですね。そんな自分の性格を一言で表わすと？
ＫＧ　頑固！（即答）。表面上では合わせるんですけど、じつは心の中では……。
—意外と腹黒ＫＧ？
ＫＧ　いや、そこまでじゃないんですけど（笑）。たとえば人に相談とかしても、心の中では自分の答えが決まってることが多いですね。
—なるほど。天然だけど芯は固いって感じですかね。なんだかとりとめのない話が続きましたけど、最後にＫＧさんに今後の目標を語ってもらいましょうか？
ＫＧ　え？　あ、え〜と、私はハッスラーとしては表現力とかがまだまだなので、そういう部分でもっと上達したいですね。お芝居とかもやってましたけど、やっぱりリング上だと違う部分もたくさんあるので。これからもっともっとハッスラーとしてお客さんに気持ちが伝わるような存在になりたいです！
—素晴らしい！　山口日昇社長に聞かせてあげたいです（笑）。では『ハッスル』以外での目標は？
ＫＧ　やっぱり空手をずっと続けてきたこともあって、単純に格闘家として強くなりたいっていう願望もあるので、いま以上にたくさんキックボクシングの練習をして、ゆくゆくは試合にも出たいと思います！
—よ、ＫＧ！（笑）。立派な心がけですね、これからのご活躍も期待してます。
ＫＧ　ありがとうございます！　……あの、私、ちゃんと話せてました？　メガネの話とかしすぎてませんでした？　私、こんな感じで大丈夫ですかね？
—ダハハハハ！　大丈夫です、ＫＧさんは「こんな感じで」というか「こんな感じが」いいと思います（笑）。

【09年3月3日／都内・ハッスル道場にて収録】



「鈴木さんの原チャリの音が聞こえただけで当時の若手は震えあがりました（ミヤマ）」

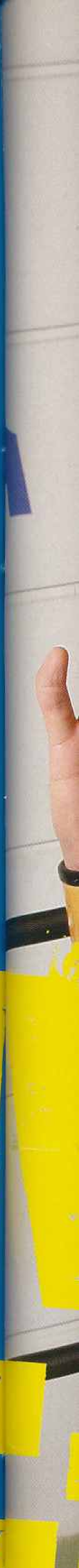
鈴木みのる×ミヤマ☆仮面（垣原賢人）

新日本プロレスやUWFの合宿所といえば、そのハチャメチャなエピソードには事欠かないことで知られているが、その上流地帯たる両団体を股にかけて暴れた男がいる。そう、"世界一性格の悪い男"鈴木みのるだ! これまでその数々の伝説は、当時の若手レスラーのあいだで語り継がれてきたが、その真の姿をいまここにあきらかにする!

聞き手／堀江ガンツ　撮影／乾晋也

第二次U
最狂伝

"世界一性格の悪い男"が一番"悪かった"時代



――今日は第二次ＵＷＦ時代からの「鈴木みのる伝説」を垣原さんにいろいろとうかがいたいんですけど（笑）。

ミヤマ　えぇ～～！　ご本人を前にそういう企画なんですか⁉

鈴木　じゃあ、垣原一人でいいじゃん。

――いや、本人の前で言うのがまたいいかな、と（笑）。

鈴木　なんか垣原が俺のあることないこといろいろ言ってるって、高山（善廣）も言ってたなあ。

ミヤマ　い、いや……。

鈴木　ま、ほとんど事実だけどね（笑）。

――伝説ではなく、事実でしたか（笑）。

ミヤマ　やっぱり新生（第二次）ＵＷＦのときの練習生にとっては、鈴木さんはメチャメチャ怖い先輩でしたので。鈴木さんは原チャリで道場に通われてたんですけど、その原チャリの音がするだけで、僕らは震えあがってましたから。

――山本小鉄さんばりの鬼軍曹伝説が20歳ぐらいのときにもうあるんですね（笑）。

鈴木　鬼軍曹っていうか、まあヤンチャだったんだよ。当時は自分のストレスのうさ晴らしがあったかもしれないですね。

ミヤマ　そういう理由だったんですか！

鈴木　いつもイライラしてて。ちゃんとしないヤツにはムカつく、みたいな。

ミヤマ　だからスパーリングなんかホントに怖くてですね。一応、若手が自分から「鈴木さん、お願いします！」って言わないと鈴木さんに怒られちゃうんで、誰が言いにいくか練習生で会議ですよ。

――誰が犠牲になるか（笑）。

ミヤマ　「誰が行く？」みたいな感じで。

鈴木　ちょっと待て！　なんか自殺志願するみたいなさ。

――生贄ですよね（笑）。

ミヤマ　いや、入念な会議が実際にありまして。それで冨宅（祐輔、現・飛駈）さんが「今日は自分がいきます」って言ってくれて、凄い安心してたら、鈴木さんに「おう、垣原。シューズ履け！」って言われたことがあって。そのときはもう……天国から地獄に落ちたような気分でしたね。

――赤紙が届いたみたいな（笑）。

鈴木　当時スパーリングはね、みんなでラウンドごとに回るなんていうのはそのあとの時代なんで、1対1が主流だったんですよ。それも30分とか1時間とか。

――じゃあ、垣原さんは鈴木さんにその日は1時間ずっとグチャグチャにされて。

ミヤマ　そういうことです（笑）。

鈴木　俺のストレスを身体で受け止めてくれた。

――でも鈴木さん以外にもUWFには先輩はたくさんいますよね？

ミヤマ　そうです、船木（誠勝）さんとか。

――そして鈴木さんはUWFは〝中途入社〟ですし、デビューも宮戸（優光）さん、安生（洋二）さん、中野（龍雄）さんより遅いわけですよね。

鈴木　遅いですね。ホントは垣原と2年ちょっとしか変わらない。

――ですよね（笑）。

ミヤマ　僕がデビューしたのが90年で。

鈴木　俺、88年だから。

ミヤマ　あっ！　ホントに2年ぐらい……。そんなに近い先輩とは思いませんでした……。

――その差はなんなんですか、鈴木さんの上に立ちっぷりっていうのは。

鈴木　いいんですよ。だって俺、新日本に一番下で入ってきたときから、どうやって上のヤツを引きずり降ろして自分が上に行こうとしか考えてなかったもん。ホントにそれしか考えてなかった。で、「ここはそういう世界だ」とも言われてたんで。「実際にやったのはおまえが初めてだ」とも言われたけど。

――ガハハハハ！　なるほど。

鈴木　「先輩の言うことは絶対だ」「いや、『蹴落とせ』って言ったのはあなただ」って、よく前田（日明）さんとケンカしてました。

――ガハハハハ！　じゃあ、鈴木さんは船木さんと一緒に新日本から移籍してきたときも、「ここを俺たちの場所にしちゃおう」ぐらいの感じだったんですか？

鈴木　いや、俺たちの場所にしちゃうじゃなくて、ここは俺たちの場所だと思ってた。

――ああ、最初から（笑）。

鈴木　そういう確信はありましたね。

――鈴木さんたちが移籍してたときっていうのは、垣原さんはもう入門されてたんですか？

ミヤマ　いや、僕はまだ入ってないです。

鈴木　垣原は入門テストを見た記憶があるんで。田村（潔司）はもう入ってましたね。

――じゃあ、移籍していきなり若手のトップみたいな感じですか？

鈴木　いやいや、若手の中で新弟子を除いてキャリアは僕が一番下ですから。みんな先輩ですよ。でも、対抗心はあったから「中野さん」とは呼んでも、「こんなヤツには絶対負けねえぞ」っていうのは常にあったんで。いつもピリピリしてた。

ミヤマ　中野さんと鈴木さんの試合、おもしろかったですよね。

鈴木　だって本気だもん。

――ガハハハハ！

ミヤマ　ガッチガチなんですよ。

鈴木　でも、それも昔の話ですよ。

――合宿所生活は？

ミヤマ　僕、鈴木さんの隣の部屋だったんですよ。隣っていっても襖を隔てただけ、みたいな。もう緊張しましたねえ。

鈴木　でも俺、ほとんど合宿所にいなかったよな。

ミヤマ　そうですね。

――合宿所には帰らない人だったんですか？

鈴木　あんまり帰らなかった。その頃、彼女がいて、そこに出入りしてたから。そうこうしてるうちに、合宿所出て、その家に転がり込んだんで。

――そういうの許されたんですか？

鈴木　許されないですね。

――勝手に出ましたか（笑）。

鈴木　怒られた記憶はあるんですよ、「なに勝手に合宿所出てんだ」って。

ミヤマ　ただ、練習生たちは正直ホッとしてましたけど（笑）。

鈴木　ハハハハハ！

ミヤマ　寝れないんですよ、鈴木さんがいたら。もう気配があるだけで緊張して。

鈴木　気配っておまえ！　イノシシとかじゃねえんだから。

ミヤマ　自分たちの音がちょっとでもうるさいとあれかなと思って、そういうは凄い気を使いましたからね。だからなるべく物音を立てないように。

――合宿所はかなりボロかったらしいですね？

鈴木　あれはひどかったよ。

ミヤマ　ホント、オバケ屋敷でしたよ。

――あれだけ大ブームと言われたUWFの選手が、そういうところに住んでたっていうのも意外ですね。

ミヤマ　それが原因で辞めた練習生もいましたからね。UWFの合宿所は鉄筋コンクリートのきれいなところだと思ってて、「こんな汚い部屋にいられません」って

ご本人の前で当時の鈴木さんのお話をするというのは……（ミヤマ）

まあ、ヤンチャだったというか。憂さ晴らしみたいなもんか（笑）（鈴木）


第二次UWF時代の先輩後輩として、絶対的な上下関係があった二人の対談。あれから20年近くが経っているが、いまもミヤマ☆仮面は鈴木の前では正座なのだ！

第二次UWF 最狂伝説



89年春、UWFには新日本プロレスから藤原喜明、船木優治（当時）、鈴木実（当時）が移籍。このとき鈴木は、まだキャリア2年にも満たない新人だったが、リング内外で我が物顔で暴れ回ったのだった。

Minoru Suzuki Miyama☆Kamen

辞めたのがホントにいましたね。

鈴木　勘違いされちゃってるんだよね。当時のUWFは売れ始めの芸人と一緒ですよ。テレビ関係の人に聞いたんですけど、売れ始めの芸人って、ギャラが安いからいっぱいテレビに出られるけど、儲かるようになるには2年ぐらい売れ続けないとダメらしいからね。

ミヤマ　そうなんですか。

鈴木　だから最近よくテレビ出てんなってヤツ、全然儲かってないらしいね。忙しくてバイトもできなくて、給料も安いわけじゃないですか。当時のUWFの若手もそんな状態です。

——なるほど（笑）。

鈴木　だってUWFって俺が入って2年、全部合わせても3年しか続かなかったわけじゃないですか。「さあ、これから」ってときになくなったんで、儲かった人はいないんじゃないかな（笑）。道場も倉庫のままだったしね。

——では、儲からないながらも、青春を送ってた感じなんですね。

鈴木　だから、当時の連中でいまでもプロレス業界に関わってるヤツに会ったりすると懐かしいですよ。垣原もそうだし、長井（満也）もそうだし。俺が一方的に懐かしいだけで、当時の新弟子は忘れたい過去かもしれないけど（笑）。

ミヤマ　でも、鈴木さんに感謝していることもたくさんありまして。一つは僕の「カッキー」というあだ名をつけてくれたのは、鈴木さんなんですよ。

鈴木　そうだっけ？

——覚えてない（笑）。

ミヤマ　道場にお客さんが来ると、当時の練習生が「挨拶しろ！」って先輩に言われて。で、挨拶するんですけど。たとえば「冨宅です」とか「長井です」とか、みんな普通に言ってもつまらないということで、鈴木さんが「『カッキーでーす！』って振りつけつきでやれ」って言われたんですよ。

鈴木　そのシーンだけ覚えてるわ（笑）。

ミヤマ　それでお客さんが来ると、僕は「カッキーです」って言うようになってですね、それで定着して、雑誌とかでも「カッキー」と書かれて、全国にその名前が広がったんですよ。

鈴木　全国に広がって……ちょっと大きく言ってるけど（笑）。でもみんな「カッキー」って言うよな。

ミヤマ　そうなんですよ。垣原の名前は知らなくても、カッキーは知ってるっていうぐらいになったので。

鈴木　じゃあ、その名前で仕事したら、俺に20パーセントちゃんと入れろよ（笑）。

——ガハハハハ！　新弟子をあだ名で呼んでくれるっていうのはいいですよね、ちゃんと人間扱いしてるってことですもんね。

鈴木　でも、あんま覚えてないから。

ミヤマ　そういえば、へんなこと思い出したんですけど。バブのことで。

——バブ？

鈴木　当時、俺が飼ってた「バブ」っていう犬がいたんですよ。

ミヤマ　凄くかわいくて、けっこう癒されるんですけど。ただですね、練習生って唯一日曜日が至福のときじゃないですか。唯一、朝ゆっくり寝れるんですけども、なぜか日曜日の朝になるとバブが僕の部屋を駆けずり回ってるんですよね（笑）。

——それはもちろん鈴木さんの仕業なんですか？

鈴木　そう。鎖外して「行け！」って言うと、部屋の中を大騒ぎで駆け回るんですよ。

——まったく寝てられない（笑）。

第二次UWF最狂伝説

ミヤマ 『元気が出るテレビ!!』の早朝バズーカみたいでしたからね。寝てたらブワーッて犬が走り回ってるんですよ。

鈴木 しかも意外とデカい犬でね（笑）。でも、そういうことをやり始めたのは、プロレス界に入ってからじゃなく、ガキの頃からやってたんで。

——鈴木さんにとっては日常ですか（笑）。

鈴木 たとえば高校時代、レスリングの合宿とか行くと、横浜高校って山の中にあったから、カナブンとかカブトムシをいっぱい捕まえてきて、寝ている後輩の口の中にガバーッて入れたりね。

ミヤマ えーっ、口の中にですか!?

鈴木 そう。カナブンとカブトムシをドッサリ。

ミヤマ そうですか……それには同情します。それを考えれば、犬が駆け回るぐらい全然マシですね……。

鈴木 あとはうつ伏せに寝てるヤツの布団をはがして、両脇に手を入れてギュッと持ち上げて、目が覚めた瞬間にジャーマンですよ！

ミヤマ えーーーーっ！ 凄い！

鈴木 そしたら周りのヤツが「ワン、ツー、スリー！」ってやってね。

ミヤマ それテレビの企画とかで観たいですね。

——早朝ジャーマン（笑）。

ミヤマ 観るほうは腹抱えて笑いますよ。やられるほうはたまんないですけどね。

鈴木 それは高校1、2年の頃だけど、楽しかったな～。

——そういうイタズラは年季が入ってるわけですね（笑）。

鈴木 新日本、UWFでは、船木さんと一緒にやってたんですけどね。ただ、その一番そばにいた先輩である船木さんが、UWFではどんどん上に上がっていくわけですよ。いつも一緒に遊んでいた同い年の仲間なはずなのに、憧れの存在になっていくんですよね。

——第二次UWFでは、何度もメイン張ってましたもんね。

鈴木 その憧れっていうのは、垣原なんかは練習生だったからとくにそうだったと思うし。俺でもそうだったんで。そして勘違いし始めるんですよね。俺も船木さんみたいになりたいって、頑張ってはみたけど、やっぱりダメだったりするんですけど。

——どういう方面で頑張るんですか？

鈴木 髪の毛伸ばそうかな、とか。

——ガハハハハ！

鈴木 俺も船木さんみたいな腕時計買おうかな、とか。そういうのがホントにあったんで。

——Uインター初期に、田村さんがハチマキ巻いて入場してたのも、あれ絶対に船木さんの真似ですよね。

ミヤマ たぶんそうですね（笑）。僕もバンダナ巻いてましたから。

鈴木 当時一緒にやってたヤツは、みんな船木さんが憧れの存在だったんじゃないかな。だって自分と歳も背格好も変わらないのに、バンバン勝ち上がって、あっという間に前田さんと肩を並べてメインイベントに出てましたからね。憧れもあり、悔しさもあり。垣原なんかだと、悔しさはたぶんなかったと思うけど。

ミヤマ 憧れだけでしたね。

鈴木 俺はすぐ上のお兄ちゃんみたいな存在だったから、自分が置いていかれるようで、悔しさもあったけどね。

——前田さんとか、高田さんなんかは違いすぎて、そういう感情は抱かないけど。

鈴木 そう。上すぎて、そういう存在じゃなかった。いろんな意味で、俺たち若手にとっての"敵"ではあったかもしれないけど。

——UWFは3派に分裂してしまいますけど、若手は団結してたんですよね？

鈴木 やっぱり一緒に汗を流してる時間が長かったから。逆に一緒に汗を流さないと、なんか壁を感じちゃうというかね。

——ファンから見ても、上と下では壁が感じられましたからね。

鈴木 だからUWFの試合は、若手の試合と柱になってる上の選手の試合は、全然色が違いましたからね。垣原は俺と試合したことなかったよな？

ミヤマ はい。

鈴木 俺がプロレスに戻ってからもないと思うけど。

ミヤマ ないですね。一度、新日本の地方で組まれたことがあるんですけど、当日マッチメイクが変わってしまって、結局一度も対戦させてもらってないんですよ。

鈴木 タッグを組んだ記憶はあるんだけどね。そうだよな、垣原とは試合してないんだよな。今度やるか？

ミヤマ いやいや（笑）。

鈴木 鈴木みのるvsミヤマ☆仮面でいいじゃん。

ミヤマ いや、こんな引退した人間がプロレス界のトップとやるなんて、恐れ多いですから……。このあいだリアルジャパンで鈴木さんの試合を見せていただいたんですけど、凄い存在感でしたからね。

鈴木 べつになんもしてないよ。

ミヤマ いえいえ、2試合目からずっと観てたんですけど、セミで鈴木さんが出てきたら、あきらかに会場の空気が変わりましたからね。お客さんが鈴木さんの一挙手一投足を凝視してる感じで。で、興行が終わったあと、実況をやっている方に聞いても、やっぱり「一番インパクトがあったのは鈴木さんだ」っておっしゃってましたし。あの興行で一番輝かれてましたね。

鈴木 昔、垣原がやってた新日本ジュニアのプロレスと、いま俺がやってるプロレスは同じプロレスだけど、ちょっと方向性が違うんで、おもしろく感じるんじゃない？ 新日ジュニアって、基本的には他人がやらない技をやるとか、凄い技をやるっていうのが柱になってるよね。でも、こっちはいかに技をやらないか、だから。

ミヤマ だからインパクトがあると思うんですよね。少ない技で組み立てられればいいって邪道さん外道さんも言いますから。「今日はパンチだけだった」って満足してたり。

鈴木 たぶん邪道・外道とかと、俺はちょっと違うかもしれないけど。

——猪木さんのプロレスもある種、鈴木さんが考えてるものと近いんじゃないですか？

鈴木 どうかな？ 昔の人だから、技がないだけっていうのもあると思う。

——なるほど（笑）。

鈴木 あと早い段階で個性が確立されたから、お客が観たいものが固定されてたところもあったんじゃないかな。

ミヤマ ウルトラマンのスペシウム光線みたいなもんですかね。

鈴木 それができるのは、やっぱりジャイアント馬場であり、アントニオ猪木ですよね。そして、いまの日本のプロレス界でそこに足を踏み入れているのが武藤敬司ですね。

——確かに武藤さんはかなり、その域まで行ってますよね。

鈴木　俺は全国を一緒に回ってるからわかるけど、客は武藤敬司がガウン着て入場してきた時点で80パーセント満足してますからね。

ミヤマ　そこまでなんですか⁉

鈴木　ホントだって！　で、試合でドラゴンスクリューやって、味つけで低空ドロップキックと4の字とかやって。最後にシャイニング出して「ワン、ツー、スリー」のあと立ち上がってポーズとったら、もう120パーセント満足させてるから。

ミヤマ　それは凄いですねえ。

鈴木　凄いよ。でも、そこらへんのレスラーが同じことやっても、全然違うから。やっぱり積み上げたものが必要だろうしね。こういう世界を知っちゃったら、垣原ももう一度プロレスやりたくなるよ。

ミヤマ　いま思い出したんですけど、デビューの前日に道場で鈴木さんにこういったプロレスの話をしていただいたんですよ。「プロの試合は、こういうことを頭に入れないといけない。俺も昔、猪木さんにこう言われた」みたいなことを。

鈴木　それは俺の教えじゃなくて猪木さんの教えなんだよね、要は。

ミヤマ　客席のどのあたりを見て闘えとか、ロープエスケープをするときはこうしろとか、そういうお話を。

鈴木　そういうことはファンに言うなよ。プロレスラーの秘密なんだから。

ミヤマ　ええ。ここはぼやかしてほしいんですけど。

——でも、そんなプロレスラーの奥義をデビュー前に授けてくれるなんて、いい先輩ですね。

鈴木　いや、ただの自慢じゃないの？「俺はこんなことまで知ってるんだぞ」っていう（笑）。

一番怖い先輩だった鈴木さんと宮戸さんにいまは一番感謝しています（ミヤマ）

俺は昔の仲間とか友だちがなんか好きなんだよな（鈴木）



すずき・みのる■1968年6月17日、神奈川県出身。88年に新日本プロレスでデビュー。翌年にはUWFへ移籍し、藤原組を経て、93年に船木誠勝らとパンクラスを旗揚げ。03年よりプロレスに本格復帰し、06年にはプロレス大賞MVPも獲得した。178cm、102kg。

みやま☆かめん■1972年4月29日、愛媛県出身。本名・垣原賢人。90年にUWFでデビュー。Uインター、キングダムで活躍後、全日本を経て、02年には新日本プロレスに入団。06年4月に頸椎損傷により引退。現在はミヤマ☆仮面として「クワレス」をプロデュースしている。

Minoru Suzuki
Miyama☆Kamen

——そうなんですか（笑）。でも、UWFからパンクラスまでいった鈴木さんが、プロレスの観客論にたどり着いたというのも、意外というか、おもしろいですね。

鈴木　いまプロレスをやってる時間が凄く楽しいからね。プロレスの試合をたくさんやれれば毎日満足だから。不思議だよね。もともと俺は新日本プロレスにいて、UWFに入って垣原と出会ったりとかして。とにかく当時は俺と船木さん、冨宅、垣原、田村の5人で一緒にいることが多かった。

ミヤマ　そうですね。

鈴木　練習するのも、飯食いに行くのも、遊びに行くのも、いつも一緒だった。それがバラバラになって。いま俺は本籍がパンクラスにあるけど、現住所は全日本プロレスという感じになってる。

——そして垣原さんはミヤマ☆仮面になって。

ミヤマ　UWF戦士から昆虫になっちゃいましたね（笑）。でも、鈴木さんは若い頃は怖い先輩でしたけど、いまは真面目に感謝してるんですよ。僕が練習生のときに一番怒られたのは鈴木さんと宮戸さんだったんですけど、引退したときに声をかけてくださったのも鈴木さんと宮戸さんで。引退試合のときもお花や泣けるメッセージカードをいただいたりして。

鈴木　それは俺じゃねえな。スタッフだよ。

ミヤマ　えっ……そうなんですか？

鈴木　嘘だよ（笑）。

ミヤマ　だから当時は怖かったですけど、いまになってみると、あれは愛の鞭だったんだな、と思うし。

鈴木　いや、俺のストレスのはけ口だよ。

——せっかくいい話だったのに（笑）。

鈴木　ホントにそんな大それたもんじゃないよ。でも、昔の仲間とか友だちとか、なんか好きなんですよ。だからメッセージカードも素直な気持ちを書いただけだよ。素直な気持ちで「ご苦労さん」みたいなね。

ミヤマ　でも、ホントに感動しましたね。涙が出ましたから。引退って、いわば選手としての葬式みたいなもんじゃないですか。そんなときに一番怖くて、一番殴られた先輩からメッセージカードやお花が来たら、やっぱり泣きますよね。

鈴木　でも、これ以上美化するのはやめろ。俺はそういうキャラクターで売ってるんじゃねえんだから（笑）。

ミヤマ　あ、すいません。営業妨害でしたね（笑）。

——では、これからは垣原さんに「いい話」のほうの鈴木みのる伝説をこっそりと語り継いでいってもらいましょう！

【09年3月5日／横浜市・パンクラス横浜道場にて収録】

心臓の弱い方はご注意ください!!

インディー界を席巻するフリーキースタイルの恐怖の双生児が『kamipro』降臨!
いったい何がどうなったらこうなっちゃうのか、その摩訶不思議なバラモンの世界を徹底解剖!
イケメンレスラー好きの人が間違えて読んで、トラウマになったって知りませんよ!

聞き手/鈴木佑　撮影/金山フヒト　写真協力/みちのくプロレス、Makoto Tsuruta



バラモン・シュウ

――あたりまえですけど見た目は本当にソックリですね～。何か決定的な違いってあるんですか?

ケイ　パッと見はわからねえけど……俺のほうはな、タ●キンが一つしかねえんだよ（ボソっと）。

シュウ　ククククッ。

――え、なんですか?

ケイ　（大声で）だから、俺はタ●キンが一つしかねえんだよ!

――いきなり凄いカミングアウトだ（笑）。それは先天的なもので?

ケイ　産まれたときからだよ。そのせいで小さい頃からタ●キンが一つのほうとか言われてな……（シミジミと）。

シュウ　ただでさえ弟だと兄貴より下に扱われがちなのに、そのうえタ●キンが一つ。コッチのほうが背負ってるもの、世の中に対する不満が大きいんだよ（笑）。

ケイ　ガキん頃に、噂でヨソの小学校にタ●キンが3つあるヤツがいるっていう都市伝説があって、そいつからもらっちゃえって話もあったんだけどな。それでそいつの名前が玉三郎っていうんだけど（ニヤリ）。

――それ、絶対にネタでしょう!（笑）。え～と、それはさておき今回はですね、いまプロレス界で抜群のカルト人気を誇るバラモン兄弟のお二人が、いかにしてこのようなスタイルになったのか、「バラモン兄弟の作り方」をテーマにいろいろと……。

シュウ　（さえぎるように）あのさ、『kamipro』っていまプロレスは扱ってねえんだろ?

――いえいえ、今回はプロレスに特化した増刊号の企画でして。

最狂カルトツインズ

バラモン兄弟



バラモン・ケイ

ケイ　へ～。昔の小さい頃のヤツ（『紙のプロレス』本誌）はカルトっぽいから読んでたけどな。

――『紙プロ』はカルトでしたか（笑）。そもそもお二人は熱狂的なプロレスファンだったんですよね？

ケイ　ウチは4人兄弟なんだけど、二番目の兄貴が猪木信者だったんだよ。で、一番上の兄貴と二人で、俺ら双子を取り合って対戦させてさ。

――お兄さん二人がセコンドになって？

シュウ　そうそう。80年代前半とかだから、まだ俺らが5歳とかクソガキんときだ。兄貴たちにとって俺らはオモチャみたいなもんだから、「あれ出せこれ出せ、アキレス腱固めだ」ってけしかけて、こっちは言われるがままに取っ組み合いするんだよ。

――お兄さんが猪木信者ってことはお二人も新日派で？

ケイ　いや、俺らは全日も観てた。やっぱ、あの頃の全日の外国人レスラーはガキを惹きつけるもんがあったからさ。

シュウ　ハンセン、ブロディ、ブッチャー、シーク、マスカラス……みんなキャラが立ちまくってたからな。

——小さい頃からプロレス漬けだったわけですね。

ケイ 幼稚園の頃からスクワット1000回とかやってたから（笑）。

シュウ あと粘土でブッチャーとかカブキを作ったり。

ケイ そうそう、あの頃はカブキが凱旋してブームだったんだ。そういやコイツは、その頃からプロレスラーになるって言ってたな。

シュウ リングネームまで「ザ・シャーク」って決めてたからな。ザ・シークなのか鮫なのかよくわかんねえけど（笑）。

——で、お二人は闘龍門に入団されるわけですけど、なんでもその前に歌舞伎の養成所に行ってたとか？

シュウ 当時はプロレスラーになる気はなかったからな。そもそも歌舞伎の養成所に入ったのは、大学受験に失敗したのが原因なんだよ。進級できなくて、何か芸能関係の仕事をしたいって思ってたときに、とりあえず和楽器でも始めようと思い立って。

——なんでまたそこで和楽器だったんですか？

シュウ べつにたいした理由はねえよ、ちょっと興味持ったからやろうってレベルの話。三味線でも笛でもなんでもいいやってくらいでな。そしたら、入所した国立劇場の養成所がプロにもなれるようなところでさ。

ケイ 二人で一緒に入って、コイツは笛で俺は役者。もともと俺のほうは芸能事務所に所属してて、ちょこちょこエキストラみたいなことはしてたから。あのな、俺らが高校を卒業した頃っていうのは〝超〟のつく就職氷河期だったんだよ。

シュウ 俺らはロストジェネレーション、〝失なわれた10年〟の世代だから。

ケイ そうそう。だから就職するようなところは全然見あたらなかった。歌舞伎と出会ったのも、フラフラさまよってたら、たまたまたどり着いた場所って感じだな。

——養成所にはどのくらいいたんですか？

シュウ 2年間研修を受けて、そのあとはプロとして半年間くらい舞台に立ってた。

——凄い！ プロの歌舞伎役者だったんですね。

ケイ 俺らはリアルグレート・カブキだよ（笑）。ちなみに俺の先生は中村又五郎っていう人間国宝だったんだけどさ、じつは先日亡くなって今日がお通夜なんだよ。

——え〜、そうなんですか？

シュウ おまえ、ソッチ行くべきだろ（笑）。

ケイ くしくも『Kamipro』の取材があるから行けないんだよ。

シュウ おまえ行けよ、又五郎だよ？ アッと驚く。

ケイ そりゃ為五郎だよ！

——あ、やっぱ息が合いますね（笑）。では、誌面を通じて追悼の意を表明していただくとして……で、歌舞伎からどういう経緯でまた闘龍門に？

シュウ 単純にこの先々、歌舞伎で食えていけるかわかんなかったんだよ。それでこれからどうするかって考えたときに、グルティモ・ドラゴンってヤツがレスラーの学校をやってるのを思い出してな。

ケイ もう普通に就職する気もサラサラなかったし、ここしか行く場所はなかったって感じだな。当時、身長と体重の制限がなくて、誰でも入れてプロレスを学べるっていうのは闘龍門しかなかったし。

——たどり着くべくしてたどり着いた場所だった、と。

シュウ そうだ、あのときはウチの親父が面倒だったんだよな〜（シミジミと）。

——え、それは入門に反対されたとか？



カルト教団を思わせるコスチュームに身を包むバラモン兄弟。そんなギリギリな二人を育て上げたのが、これまたギリギリな雰囲気のバラモンの父だ（写真・左上）。バラモンの家族に栄光あれ！

ロストジェネレーションの俺らにはプロレスしかなかったんだ（シュウ）

AN BROS.

シュウ いや、アイツはそれ以前の問題だな。俺らが闘龍門に入ることが決まって、「明日から神戸に行くから」って言ってたにもかかわらず、俺らがウチ出たらすぐに「息子たちがいない！」って警察に捜索願いを出しやがったんだよ（笑）。

——ダハハハ！ お父様は少し変わった方で？

ケイ 少しどころじゃないね、アレはヤバい（笑）。凄く戦時中の香りのする人間だな。

シュウ まだアイツは鬼畜米兵と闘ってるよ、竹ヤリで見えない飛行機を落とそうとしてる（笑）。まず、PCも何もかも現代機器は一切使えないからな。ごくごく最近、CDの聴き方を覚えたくらいだから。

シュウ 「CDが聴けないぞ！ なぜ聴けないんだ？」って大騒ぎして、CDプレイヤーをパカっと開けたらディスクが逆さまに入ってたとかザラだからな（笑）。

ケイ ほんと、いちいち昭和の臭いがプンプンがするんだよ。

——もう平成も21年だっていうのに（笑）。

ケイ 前に親父が「車に轢かれた！」って大騒ぎして帰ってきたときに、「嘘だろ？」って思いながら親父の着てた背広のうしろを見たら、真っ直ぐタイヤの跡がついてたこともあったな（笑）。

——どんな轢かれ方ですか（笑）。ちょっと話が脱線したんで元に戻すと、お二人はいまでこそオカルティックな出で立ちですけど、最初はアイドルユニットとして売り出されたんですよね。

シュウ セーラーボーイズか……俺らにとっては黒歴史だな。

ケイ あれはグルティモ・ドラゴンのプロデュース能力のなさ！

シュウ うん、アイツはセンスがない！

——いやいや、校長はいろんな選手をプロデュースしてきたじゃないですか（笑）。

ケイ ウチらは失敗作なんだよ、これはグル本人も言ってたから。

シュウ ウチらがヒールになった直後に「そのほうがいいな、ベビーは失敗だったな」って（笑）。おまえが言うなよって話だよな。あの頃は本気でプロレス辞めようと思ってたくらいだから。

——でも二人とも凛々しい顔立ちですし、それこそ小さい頃からアイドル的な扱いだったんじゃないですか？

シュウ だからそういうのが心底嫌だったからこういうふうになったんだよ。

ケイ チヤホヤされたいとかそういうのはまったくないから。俺は寺山修司の舞台を観て役者を目指したんだけど、所属した事務所の若い連中はテレビスターを夢見るようなチャ





現在、宇宙大戦争中のサスケとは、ニュー・セーラーボーイズを結成して名曲『KEEP ON JOURNEY』を熱唱したことも。ちなみにバラモン兄弟いわく、サスケの歌う『セパラードス』には宇宙人語が混じっているらしく目下研究中だとか。もう、何がなんだか。

ラチャラしたのばっかだったから、たえずムカついてたな。

——生粋のヒール志向なんですね。セーラーボーイズでいうと、現在「宇宙大戦争」と題して抗争中のサスケさんともアイドルユニットを結成してましたけど（笑）。

シュウ あれはもっと黒歴史だからノーコメント！

——振り返りたくもない、と。

シュウ 俺らはサスケのことを宇宙人扱いしてるけど、もはや空想上の生き物だな、ありゃ。ペガサスとかドラゴンと一緒。

ケイ 俺らもカルト的だけど、あいつは存在自体がカルトだから（笑）。

——最近も事件を起こして世間を騒がせてましたね。

シュウ あ、あれはプロレスラーとしてはおおいにアリだったな！ いままでプロレスラーで何人かパクられてるけど、それと比べるとプロレスラーとして正しいパクられ方をしたね（笑）。

ケイ 警察の取り調べに本名を名乗らずに「ザ・グレート・サスケだ！」って答えたのは、敵ながらあっぱれだと思ったな（笑）。

——まさにグレートというか（笑）。

ケイ サスケはイジると、勝手にコッチの電波が反応するようなリアクションをするんだよ。

——打てば響くというか、スウィングしてるというか。

シュウ いや、アイツとスウィングしてるとは思われたくない（笑）。

ケイ 俺らも客はべつに置いてけぼりでいいと思ってるし。まぁ、一種の電波合戦だな。

——電波が引っかかる人だけでいい、と。お二人といえば、試合で生きた虫を使用するスタイルが物議を醸してますよね。『週刊プロレス』では「たとえ虫けらでも生命ある生き物だ！」っていう正義の言葉とともに、写真の掲載も見送られてましたけど（笑）。そもそも虫を使うようになったきっかけは？

シュウ もともと俺らはホラー映画が大好物だったんだよ。

ケイ そう、グロいのが好きだったんだ。エグくてエゲつなくてグロいのが。

シュウ で、試合でそういうのを表現したいと思ってたときに、虫喰い芸人の佐々木孫悟空っていうのと知り合ってな。こいつはイモムシでもミミズでもなんでも生きてるままの虫を食い散らかすんだけど、こういうのを俺らの試合にも取り入れたらおもしろいんじゃないかって思ったのがきっかけだな。

ケイ ただグロいだけじゃなく、一種の表現としてアーティスティックな要素もあるしな。

シュウ それでべつに正義を振りかざすような人間からどんな反感を買おうが、俺らは一向にかまわない。何が正義だって話で、正義なんて人間の数と同じだけあるんだからな。

——根本的にお二人は他人の理解を得ようとは思ってない？

シュウ ウチらの電波は、全体の2割くらいにしか届かないって思ってるから。たとえばテレビなんかは大多数の人間に電波を与えてるわけだけど、ウチらは逆にあえて少数派に向けて発信してる。

ケイ あのな、少数派っていうのは社会で追い込まれて、ともすればスイッチが入ったらいつでもモンスターになってもおかしくない連中のことなんだよ。言うところの犯罪者予備軍っていうか。

——唐突になんてこと言い出すんですか（笑）。

シュウ それか自殺を考えてしまうような人間。そういう病んでる奴らに対して、俺らは電波を飛ばしてるんだ。それによってそいつらが何かを考えるきっかけになるかもしれないしな。

——は～。そういうマイノリティに向けて発信するようになったきっかけは？

ケイ さっきも言ったけど、俺らはロストジェネレーションなんだ。社会から弾かれて追い込まれていったっていう意識は、根底にあるかもしれないな。

シュウ 若い頃はなんとかなるだろう、社会とリンクして生きてけるだろうって感覚だったのが、俺らは気づいたら徐々にそのレールから外れていってたんだよ。

俺らもカルト的だけど、もはやサスケは存在自体がカルト（ケイ）

ケイ　そしていつの間にか闘龍門からも追われ、セーラーボーイズのときにリングで歌えば客にとってはトイレタイムでしかない。そういう屈辱を感じてた時期に、私生活でも思い返したくもないようなことがあったりな。

——次第に鬱憤が溜まり積もっていった、と。

シュウ　まぁ、とにかくすべてが何をしてもおもしろくなかったんだ。そんなときに、これからはもう自分たちがおもしろいと思うものをやればいいって、プチンと何かが弾けたんだよ。そこからだな、本格的にヒールに開眼していまみたいなスタイルになったのは。

——ちなみにお二人の電波が届いてるファンは、具体的にどんな感じの人なんですかね？



うわ、うわ、なんなのこの地獄絵図!?　昨年12月のバラモン兄弟自主興行「大バラモン展」は、虫の死骸が飛び交う阿鼻叫喚空間に。『週プロ』が掲載を見送ったのもうなずける（ウチは載せるけど）。しかし、ただの狂気の沙汰と思うなかれ、そこにはきっと隠された意味があるの……か？

シュウ　相当キテるよ。ファンレターも「私は北朝鮮の工作員を調べてくる」みたいなブッ飛んだ内容だったりな（笑）。

——そんなこと報告されても困りますね（笑）。あの〜、お二人が幼少の頃に人格形成上で一番影響受けたものってなんでしょう？

シュウ　ウチはもともと映画をよく見せる家庭だったんだよ。でも、「これは名作だから観ろ」って言われて渡されたのが、いわゆる『ローマの休日』とかそういうのじゃなく、さっき言ったみたいなホラー映画だったっていう（笑）。そういうのが小さい頃から刷り込まれたってのはあるな。

——やっぱり家庭の影響というか、幼児体験が大きいんですね。

ケイ　上の兄貴とは10歳離れてるんだけど、夏休みの深夜に呼び出されて『死霊のしたたり』（注★1）とか一緒に観てたから。あとはジョージ・A・ロメロ（注★2）のゾンビ三部作とか、レイ・ハリー・ハウゼンの『アルゴ探検隊の大冒険』（注★3）。ほかにもカルトばっかり作ってた頃のサム・ライミ（注★4）のヤツとかな。

——そこまでいくとある種の英才教育ですね（笑）。家庭はいいですけど学校とか別の社会集団に入ったときに、そういう趣味嗜好って理解されました？

シュウ　俺は無理矢理理解させようとしてたな。幼稚園の頃にゾンビとかアルゴ探検隊の絵を描いて周りに見せてた記憶がある。まぁ、結局は嫌がられて誰にも理解されなかったけど（笑）。

心が病んでる人間に対して俺らは電波を飛ばしてる（シュウ）

ケイ　小学生時分はまだいいけど思春期の頃になると、もう俺らは徒党を組んでる連中たちには入り込めなかった。俺は高校のときは友だち一人しかいなかったし。

シュウ　俺らは同じ高校だったんだけどクラスは別だったから。俺も学校じゃほとんど一人でいたな。

ケイ　コイツ、学校じゃ一人でずっと落語の本を読んでたんだよ（笑）。

——ダハハハ！　なぜだ（笑）。

ケイ　俺は体操部で、部活の顧問がコイツの担任だったんだけど、「おまえの兄貴はいつも落語の本を一人で黙々と読んでるんだけど、俺はどうしたらいいんだ？」って相談されたからな（笑）。「きっと落語家になりたいからほっといてやってください」って言っといたけど。

シュウ　うるせえな（笑）。あの頃は立川談志にハマってたんだよ。深夜にやってた『落語のピン』って番組をずっとビデオに撮って。談志師匠が言ってたけど、落語っていうのは「人の業の肯定」なんだよ。人間は業の深いヤツばっかりなんだから、落語は聞かなきゃいけないね！（噺家口調で）。

——やっぱりこうしてお二人の話を聞いてると、スタンスがサブカル寄りという感じがしますね。マイノリティの香りというか。

バラモンを読み解くキーワード

注★1　『死霊のしたたり』
85年制作のスチュアート・ゴードン監督による、マサチューセッツの総合大学病院を舞台に"死体蘇生"を研究するマッド・サイエンティストの暗躍を描くホラー映画。原作は怪奇小説の大家H・P・ラブクラフトの『死体蘇生者ハーバート・ウエスト』。

注★2　ジョージ・A・ロメロ
1940年2月4日、アメリカ出身の映画監督。ゾンビ映画の第一人者として知られる。代表作は『ナイト・オブ・ザ・リビングデッド』、『ゾンビ』、『死霊のえじき』のゾンビ三部作。とくに68年のデビュー作『ナイト・オブ・ザ・リビングデッド』は、以降のすべてのゾンビ映画に影響を与えたとされている。

注★3　『アルゴ探検隊の大冒険』
63年制作のドン・チャフィ監督による、ギリシア神話のイアソン率いるアルゴ船探検隊の冒険を描いた作品。「シンバッド七回目の航海」を筆頭に多くの作品のSFXを担当した特撮映画の巨匠、レイ・ハリー・ハウゼンの最高傑作として有名。

注★4　サム・ライミ
1959年10月23日、アメリカ出身の映画監督。83年全米公開の『死霊のはらわた』以降、カルト映画の名手として名を博す。いまや『スパイダーマン』、『クイック&デッド』、『ギフト』など、ハリウッドを代表するヒットメイカーだが、そのマニアックな演出や醸し出されるB級テイストで古くからのファンも魅了し続けている。

注★5　『ドグラ・マグラ』
35年刊行の探偵小説家、夢野久作の代表作。独特な文体、物語構成など類例のほとんどない特異な作品であり、『黒死館殺人事件』（小栗虫太郎）や『虚無への供物』（中井英夫）と合わせて日本探偵小説三大奇書に数えられている。

注★6　見沢知廉
1959年8月23日、東京都出身の新右翼活動家、作家。82年、「スパイ」リンチ殺人事件を起こして逮捕。95年に獄中で執筆した『天皇ごっこ』を発表。第25回新日本文学賞の佳作となる。その後、『囚人狂時代』、『獄の息子は発狂寸前』などを発表。05年9月7日、自宅マンションから飛び降り自殺（享年46）。

「バラモンの裁きを受けよ!」それが俺らの試合テーマだ(ケイ)

ケイ　まぁ、確かにそうだな。たとえばお笑いにしろ、二人して中学のときから大川興業とか浅草キッドとか、コアなヤツばっか観に行ってたし。キッドが『オールナイトニッポン』をやってたときに開催してた「お笑いリングス」ってイベントを、いまは取り壊された中野南部公会堂まで観に行ったりな。

―そういうこだわりみたいなものを持ち続けるのって、一人だとけっこう孤独な作業だと思うんですよ。二人だから貫き通してるっていうのはありませんか?

シュウ・ケイ　あるな(声を揃えて)。

―あ、息が合いますね(笑)。

ケイ　いまだって、30すぎて一人でこんな頭やってたらどうかしてるだろ?(笑)。

シュウ　自分を肯定する対象、素材がすぐそばにいるっていうのは、何かを表現をしていくうえで強みになるな。

―認め合う部分がある、と。逆にお互いのここが許せないってところは?

ケイ　俺はコイツのロリコンなところが許せない(キッパリ)。

シュウ　いいだろ、それは!　おまえは熟女好きじゃねえかよ!

―双子で好みがかぶらなくていいじゃないですか(笑)。

ケイ　コイツは子どもが性欲の対象なんだぜ?　この犯罪者予備軍め!

シュウ　おまえはなんてことを言うんだよ!

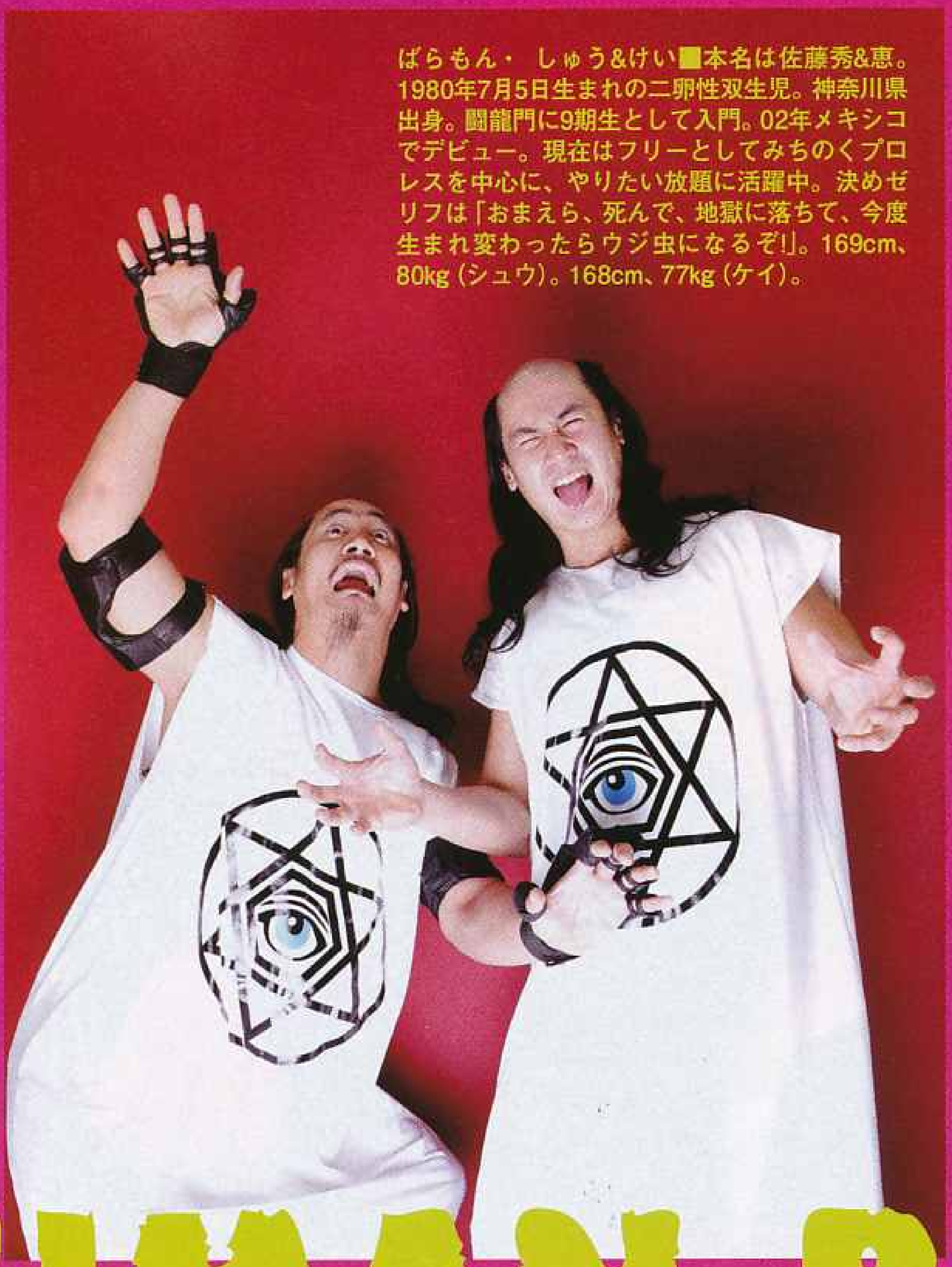
―ちょっと話がデンジャーな方向になってきたので……え~と、お二人が最も影響を受けた本というと?

ケイ　……『ドグラ・マグラ』(注★5)とか。

―あ~、探偵小説家の夢野久作の代表作ですね。

シュウ　俺は水木しげる先生の『寝ぼけ人生』だな。あとは江戸川乱歩の世界観も好きだし、見沢知廉(注★6)とかもよく読んだ。

―けっこう読書家だったりします?



ばらもん・しゅう&けい■本名は佐藤秀&恵。1980年7月5日生まれの二卵性双生児。神奈川県出身。闘龍門に9期生として入門。02年メキシコでデビュー。現在はフリーとしてみちのくプロレスを中心に、やりたい放題に活躍中。決めゼリフは「おまえら、死んで、地獄に落ちて、今度生まれ変わったらウジ虫になるぞ!」。169cm、80kg(シュウ)。168cm、77kg(ケイ)。

BRAHMAN BROS.

シュウ　いや、どっちかっていったら映画とか漫画から受ける影響のほうが大きかった。

ケイ　『ドグラ・マグラ』も映画観て理解できたくらいだし(笑)。

―絵のほうが入ってきやすい、と。

シュウ　まぁ、そうだな。本のほうが頭の中でイマジネーションできるからいい場合もあるけど。

ケイ　落語とかラジオも頭で絵を想像するもんだしな。そういや俺、キッドの『オールナイトニッポン』のハガキ職人だった(笑)。

―つくづくマニアックなんですね~。お二人はプロレス界でいうとマッスル坂井さんに近い匂いを感じますね。ちなみにマッスルさんはお二人のことを「双子は神話の時代から対立するものなのに、あの二人は争わない。そのぶん、内に溜め込んだものが外に向かって放たれてる感じがする」ってなことを言ってたんですよ。

ケイ　は~、凄いこと言うな。やっぱり大学行ってる人は違うな!

シュウ　そんなこと思ったことないもんな!　早稲田の中退は違うな!

―ダハハハ!　このリングネームの"バラモン"の由来って、漫画の『瑪羅門の家族』なんですよね?　これもまたカルトな作品ですけど。

ケイ　俺らは『魁!!男塾』直撃世代だから、宮下あきら先生の作品が大好きなんだよ。『瑪羅門の家族』は、法では裁けない悪を裁くっていうストーリー。だから俺たちも「バラモンの裁きを受けよ!」っていうのをテーマに、俺らの正義を観客に向けて発信してるわけだ。

シュウ　客からはヒールって扱われてかまわないけど、俺ら自身は自分たちを悪だとは一切思ってない。正義として正しい行ないをしていると思ってるから!(キッパリ)。

―人の数だけ正義がある、と。

ケイ　だからサスケとの宇宙大戦争も、観てる側からしたら単なるヒールとテクニコの試合に映ってるかもしれないけど、俺らは地球を乗っ取ろうとしてる悪いサスケ星人を倒すためにやってるんだしな。サスケの本体を倒さないと何万何億のサスケが地球に降ってくるんだぞ?

シュウ　ヤバいだろ、バルタン星人みたくあんなのにエラい数飛来されても(笑)。

―それは非常に困ります(笑)。あの、結局のところ、お二人にとってプロレスってなんなんですかね?

シュウ　俺らにとってのプロレス……はじめの頃は普通に与えられた試合だけをこなしてればよかったんだよ。ただ、世の中に対する鬱憤が溜まっていくと同時に、自然とそこに自分たちなりの表現をどう乗せていくかってことに重きを置くようになってきたな。そういう意味ではプロレスは目的というよりは表現の手段になってきたのかもしれない。虫を使うのもその一環だし。あとは客が俺らの電波をどうキャッチするか。まぁ、俺らは自分たちがおもしろいと思ってることをやってるだけだな。

ケイ　一つ言いたいのは、客もただ観に行けば楽しめるんだっていう意識じゃなくて、おまえたちも頭を使って考えろってことだ。テレビの料理番組でおいしいって言われればおいしいと思う。お笑い番組でもおもしろいって言われればおもしろいと思う。それはおまえらで考えて選んでねえからだろっていう。

シュウ　与えられたものだけを額面どおりに受け取って、自分で善悪なりを判断する能力がなくなってきてる人間が大多数なんだよ。そんな大多数が正しいとは、まったくもってかぎらない。

ケイ　だから俺たちは少数派にしか届かないようなことをやって、こういう選択肢もあるんだぞっていうのを見せていきたいんだよ。まぁ、それが一番届いてるのが犯罪者予備軍や追い込まれてるヤツらなんだろうけどな(笑)。

―なるほど(笑)。今日はバラモンの世界の奥深さを垣間見た気がします。ありがとうございました!

【09年2月27日/都内/『kamipro』編集部にて収録】


「サユほど私を立ててくれる人はいないよ！」
「マユと私は似たもの同士なんです！」
SAYURI KOKUSYO × MAYUMI OZAKI

“魔性”のアラフォーマブダチ対談!!

国生さゆり×尾崎魔弓

「マユ!」「サユ!」とお互いが呼び合う仲よしコンビが初登場！　じつはOZアカデミーで尾崎魔弓のセコンドを二度も務めている国生さゆり。
おニャン子クラブと、ジャパン女子プロレスでデビューもほぼ同時期だったという同年代のこの二人。
試合でも悪の連携を見せているサユとマユの女子プロ上流地帯タッグがセコンド登場の裏話からプライベートまで語りまくった!!

聞き手／真下義之　撮影／平工幸雄　大会写真協力／OZアカデミー

昨年11月、突如としてOZアカデミーの新宿FACE大会に、タレントの国生さゆりさんが尾崎魔弓のセコンドとして出現！「プライベートで交流があった」という尾崎のコメント以外は謎のまま、国生さんは相手のアジャ・コングと「殺す、殺さない」の舌戦まで繰り広げる大活躍！
さらに今年の2月にはOZの後楽園大会にも出現し、チェーンを首にかけた姿で登場、尾崎に凶器を手渡しする好サポート。リング上ではダイナマイト関西に蹴りも入れる暴走ぶり！
いったい国生さんに何が起きたのか？マブダチの尾崎との対談で真相を直撃！

――まずお聞きしたいのは「どうして国生さんがプロレスのリングで尾崎魔弓さんのセコンドをしてるんだろう？」っていうことなんです。多くのプロレスファンがみんな不思議がってるんですよ。

尾崎　そうかもしれないね。

国生　そもそもマユと私は同期なんですよ。で、たまたまマユがデビューしたときの試合を観たんですけど、凄く鮮烈だったんです。

――あ、尾崎さんのことはデビュー当時からご存知なんですか？

国生　はい。こんなにきれいな顔をしているのにやることが悪くて。当時はダンプ（松本）さんとかブル（中野）さんの時代だったじゃないですか。

――確かに尾崎さんはいままでにないヒールでしたね。

国生　そう。それにこんなに身体はちっちゃいのに、凄くエンターテインメントしてるからビックリして。コスチュームもビスチェとか着てるし。で、2年ぐらい前にね、たまたま共通の知人がいて、一緒にごはんを食べに行って。

尾崎　それからの付き合いだよね。

――国生さんはもともとプロレスが好きだったんですね。

国生　ええ。格闘技は好きです。

尾崎　身体は細いだけで気性が凄いもんね。私より凄いの（笑）。

国生　ふふふ。それでね、マユは歳を言うとイヤがるけど、40歳であれだけ身体が動いて、いまでも現役でやっている。それが凄くカッコいいから応援したかったんです。

――尾崎さんはもちろん国生さんのことはご存知だったと思うんですけど。

尾崎　はい。

――まさかご自分のことを気にされていたっていうのは……。

尾崎　ぜんぜん思ってない。だからサユといると、自分が凄い人なんだってわかる（笑）。だってサユだけだもん、こんなに自分をほめてくれるの。

――ガハハハハ！　ここまで持ち上げられたことはありませんか？

尾崎　ないないないない!!

国生　だってマユは凄いもん。瞬発力にしても受け身にしても。練習生のときから一番大変な練習してるから、きれいに受け身を取るもん、やっぱり。

尾崎　サユは見るところが違うの。普通のファンと違うの。コアなんだよね（笑）。

国生　マユは昔からカッコよかったの。いまもカッコいいけど（笑）。

尾崎　あ、そう（笑）。

国生　だってね、正規軍の顔立ちなのにヒールなんだよ。

――そのギャップで尾崎さんはウケたっていうのがありますよね。

国生　それが凄いおもしろかった！



サユはサバサバした〝姉さん〟的存在 おニャン子とのギャップは凄いよ（尾崎）

尾崎　こんな私でもそうやってほめてくれるんだよ。たぶんサユと持ってるものが一緒なんだよね。

―国生さんはもともとおニャン子クラブから登場して、ザ・アイドル的な感じだったと思いますけど、尾崎さんはどういう印象を持ってました？

尾崎　やっぱりおニャン子の国生さゆりのイメージが凄く大きかったんだけど。じつはサバサバした〝姉さん〟的存在なんだよね。だからおニャン子とのギャップが凄かった。もっと女っぽくてドロドロした性格なのかなと思っていたたから。

国生　（性格が）近いんだよね。

尾崎　うん。だからいま仲がいいんだと思うし、惹かれ合うものがある。

国生　だってね、最初に初めてごはんを食べたとき、マユはいきなりカウンターに入って後輩の飲みものを作り始めたのよ。この人トップでしょ？　ずっと座っててもべつにいいわけじゃん。後輩に「あれ、持ってきて！」って言えばいいのに。

尾崎　それに気を使っちゃうのがサユなの。この人は凄い気ぃ使いだから、「なんであんたたちがやらないの！」ってその後輩を怒ってたよね。

国生　「なんで尾崎さんがやってるんだ⁉」って話。

尾崎　でも、そのときはべつに後輩が動かなかったわけじゃなくて、私がやったほうが早いだけだから。

―しかし、尾崎魔弓と国生さゆりが気を使い合う飲み会っていうのも凄いですけどね（笑）。

国生　だって私たち、先輩後輩で鍛えられたもんね。

―お二人ともに女の世界というか、女の団体にいらっしゃったんですもんね。そういえば、国生さんは去年『バレンタイン・キッス2008』をリリースされてましたけど、じつは尾崎さんも以前CDを……。

尾崎　イヤな話するねぇ！　いいよ、その話は。

国生　ふふふふ。マユは唄おうとしないんだよね、自分の歌。ほかの人の歌はカラオケで唄うんだけどね。

尾崎　だって何十年前の話よ！

国生　女子プロの選手ってね、カラオケうまいよ。でね、おもしろいルールがあってね、みんな一面ずつしか唄わないの。

―一面？

国生　あれ、なんて言うの？

尾崎　一画面ね。カラオケの画面が変わったら次の人が歌うの。

国生　そうそう、それでどんどん回していくの。

尾崎　で、最後に唄った人がイッキ飲みね（笑）。

―それはおもしろいですね。国生さんも参加されるんですか？

尾崎　もちろん。この人はソファの上に立って唄うんだよ。

国生　私ね、立たないと唄えないんですよ（笑）。

―さすがは元おニャン子ですね（笑）。

私がしばらくメールをしないときはマユから逆ギレのメールがくる（国生）

──お二人の関係は、食事と飲みっていうパターンが多いんですか？

国生　メールもする。すっごいおもしろいんだよ、私がしばらくメールしないと。すっごい悲しそうなメールが届くの。「あんたさ、私がメールしないとさ、メールこないよね」っていう怒り気味のメールが。

──なんで逆ギレしてるんですか（笑）。

国生　そう、逆ギレしてるの。あとケンジっていう共通の友だちがいるんだけど、私が先にケンジに話して、それをケンジがマユに話すと、マユはもうそれだけで怒るの。「なんでケンジが先なの！」って。

尾崎　そうそうそう、ヤキモチ焼いて（笑）。

国生　おもしろいでしょ？　やっぱりこの歳になって会ってよかったなと思ったの。若いときに会ってたら、お互いとんがってたから友だちにはたぶんなれなかったと思う。似すぎてるから。

尾崎　でも、私は御徒町がどこにあるのか知ってるよ（笑）。この人、「御徒町どこ？」って言いましたからね。

──あ、御徒町の場所を知らないんですか（笑）。

国生　「御徒町ってどうやって行けばいいの？」って（笑）。「電車に乗ったことなんてないんでしょ」って怒られて。

尾崎　新宿とか渋谷しかわかんないんだよね。「御徒町にいる」って言ったら「温泉にいるの？」って言ったの。

国生　東京じゃないと思って（笑）。

尾崎　どこと間違ってんのかと思って（笑）。でも一緒に遊ぶと楽しいんだよね。

──そんな交流からセコンドにつくまでに発展したわけですからね。

国生　私が「セコンドやってみたい」ってお願いしたら「いいよ！」って快諾してくれて。「でも、約束してほしいのは、選手に手を出さないのと、あとリングには上がらない」と。

──リングの下にいるんだったらオッケーだ、と。

尾崎　でも酔っぱらって約束したから、全然覚えてなかったの。

国生　そうそう。ごはん食べて飲んでるときの話だよね。二人で飲んだら凄いんだもんね。ベロベロだもんね。それで新宿FACE大会の二日前にマユに「何時に行けばいいの？」って聞いたら、「えーっ？　ホントに来る気なの？」って言われて。「ちょっと待ってよ！」みたいな感じで。

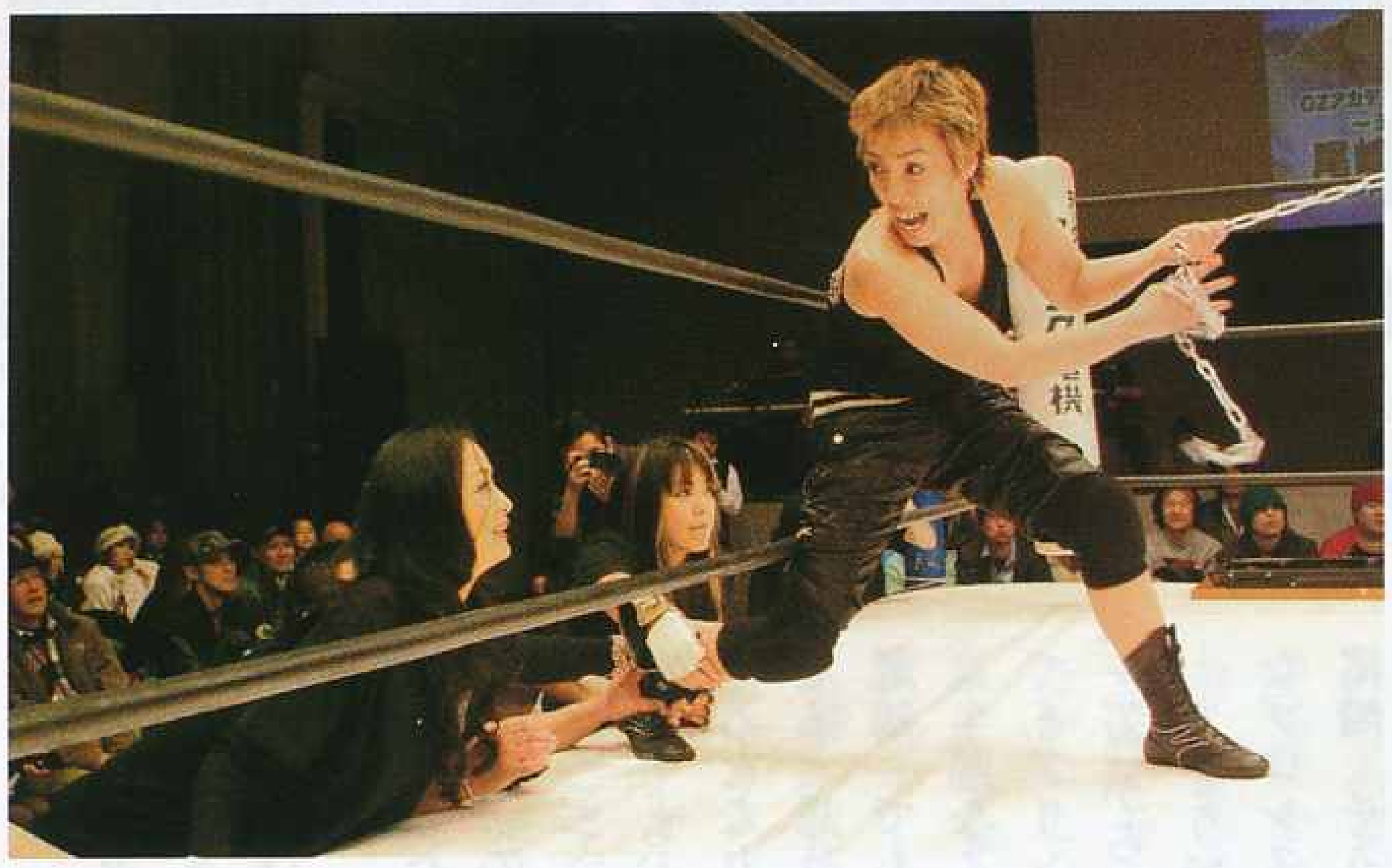
──国生さんはすっかり出撃状態だったのに（笑）。

尾崎　まさか本気だと思わないもん。

国生　ウチのマネージャーさん、大賛成でしたよ。スケジュールもパツンと空けて。

──じゃあホントに土壇場で決定したんですね。だから事前告知も一切なかった。

尾崎　だって約束した記憶ないから。



私生活でもツーカーな二人は、試合でも見事な連携ぶり。尾崎の誕生日パーティでも誰よりも働いていたのは国生さんだったというから、ハンパな献身ぶりではない。

国生　凄く心配だったのは、私がセコンドでいることを気にして、マユが試合に集中できないのはよくないことだから、ジャマだけはしないようにって。私もテンパってて、マユが「チェーン！」って言ってるんだけど、（机の）板を渡してんのよ。

尾崎　そうそう（笑）。

──ダハハハ！　まるでコントですね。

国生　マユに「違う！　チェーン！」って言われて「ハッ!?」みたいな（笑）。

尾崎　だけど、セコンドとしては何年もやってる子より凄い気ぃ使う。

──それは一流のプロレスラー並みに、場の空気を読んでリアクションするっていうことですか？

尾崎　そう。この人、人間的にできてるの、そういうことが。

国生　嬉しい言葉だね～。ヒールってね、やっぱりカッコよくないとダメなんですよ、基本的に。ヒールはカッコよく立ってないといけない。っていうことは、周りが尾崎魔弓をちゃんとティーアップしないといけない。それをきちんとやりたいなと思って。ホントに花道を通ってライトを浴びてバーッと出てくるから、そこは周りがちゃんとしないとマユがカッコよくならないから。

尾崎　あ、その日にね、（ダイナマイト）関西がリング上から復帰の挨拶をして。それを私とKAORUがチャチャ入れに行ったの。で、控室に帰る途中、花道のカーテンを自分の手で上げようとしたら、勝手



魔性のアラフォータッグ
国生×尾崎劇場とは？

08年11月3日、OZアカデミーの東京・新宿FACE大会。この日は尾崎魔弓 vs AKINOの試合が行なわれたが、この試合のセコンドとして突然あの国生さゆりさんが登場！

首にチェーンを巻いて登場した国生さんは、尾崎のためにロープを開けたり、チェーンでAKINOを殴ったりと見事なセコンドぶり。試合後は敵側のアジャ・コングと「殺すぞ！」「殺してみろ、コラ！」と叫び合うシーンも。

この参戦は本文にもあるとおり、尾崎が飲みの席での約束を「すっかり忘れていた」ため、OZのスタッフにもド直前に知らされ、事前告知なしの完全なサプライズとなったが、尾崎は「今後も可能な限りセコンドについてもらいたい」とコメントし、継続参戦を示唆！

さらに今年の2月22日の後楽園大会では、尾崎魔弓 vs ダイナマイト関西戦のセコンドとして登場！　この日もチェーンを首にかけてヤル気マンマンの国生さんだったが、セコンドが手出し無用の試合形式のため、国生さんも動けないよう手錠で固定されるという場面も。だが、この日も適所で見事なサポートぶりを発揮し、大乱戦の中でリング上の関西に蹴りを見舞うシーンもあった。

最後は敗れてしまった尾崎だが、国生さんは関西にガンを飛ばすなど、この日もキラーモード全開で存在感を見せつけた。

取材後も次回参戦日を相談していたマユとサユのマブダチコンビ、いったい次の登場はいつになるのか？

にカーテンが開いて。「あれ？ 珍しい。今日のセコンド凄いじゃん」って驚いていたら、サユがやってたの！

―国生さんが自ら幕引きをやってましたか（笑）。

尾崎 凄いでしょ？ 普通はできないでしょ？ プロレスラーでもできないんだよ！ 「サユ、ありがとうね」って言ったら、「そういうときはカッコよく帰ってこなきゃ」って言うわけよ。そういうことを平気でやってのけるの。

国生 楽しいの、そういうことをするのが。そういうことをしたいわけよ。だって、マユが自分でカーテンを上げるなんてカッコ悪いでしょ。

―ちょっと裏方志向みたいなところもあるんですか？

国生 そう、大好き。でも、ほかの人にはやらないよ。マユだけ。

尾崎 サユを彼女にしたら凄いよ（笑）。

―好きな人にはつくすタイプというか。

国生 とにかくカッコよくいてほしいし、一日でも長く現役をやってほしいから「身体も絞って」ってお願いして。

尾崎 「腹筋を割って！」とかね（笑）。

―国生さんといると、ハードルがドンドン高くなるんですね（笑）。

尾崎 サユみたいな人に言われたら「やらなきゃ！」って思っちゃうじゃん、やっぱり。同世代でさ、世界は違うけど、ホントに一生懸命頑張ってるんだし。

―国生さんは「リングに立ちたい」みたいな気持ちはあるんですか？

国生 リングには立てない。だってちっちゃいもん、私。痛いの弱いもん。打たれ弱いもん！

尾崎 でも、この人、レスラーだったら凄く強いよ。精神的に強いから。

国生 何言ってんの。あなたの裏拳なんかもらったらアゴ割れるよ。だって近くで見れば見るほど、ホントに「リングに上がっちゃいけない」っていう意味がよくわかったんですよ。

尾崎 サユはのめり込むタイプだから「相手に向かってったらどうしよう？」とか心配したんだけど（苦笑）。それだけならいいけど、ケガしたら……だってこんな細いんだよ、筋肉はあるけど。

国生 やっぱり1戦目は、正規軍の後輩たちもちょっと遠慮気味で、私のことをスルーするわけ。そうしたらね、2戦目につかみかかってこられたの。

尾崎 ホントに？

国生 彼女たちもやっぱり本能的になったんじゃない。

尾崎 マジで（笑）。



どうだいこの暴れっぷり！ 2月22日の後楽園大会にて、リングで関西を踏み台に尾崎軍と気勢を上げる国生さん。黒で統一したセコンド衣装は、まさしく「ダースベイダー大好き！」な国生さゆりダークサイドと言えよう。

一日でも長く現役でいてほしいから「身体を絞って」とお願いしたの（国生）

国生 だから3戦目からどうしようかと思って。とにかくマユの近くにいて「マユ！ マユ！」ってずっと言ってようかなって。

尾崎 で、またサユの声が通るの。ポリス（尾崎のボディカード）の次に通るの。

―ポリスの次に（笑）。

尾崎 うん。だから試合をやってるときも「マユーッ！」って声だけが聞こえてくるわけ。

国生 私だけだから、マユのこと「マユ」って呼ぶのは。ほかの選手は「尾崎！ 尾崎！」って言うから。

―でも、国生さゆりさんがリングに上がるとなれば、興行的にはもの凄く売りになると思うんですけども。

尾崎 でも、この人の性格的にそういう中途半端なことは絶対しないと思う。だってインリンとかカイヤとかはさ、『ハッスル』だからできるじゃん。

―そうですね、彼女たちができるようなプロレスの作りになってますから。

尾崎 そうそうそう。それをサユは絶対に望んでないし、私も望んでない。やってもらうんだったら、とことんやってもらうから（笑）。

国生 だから無理だって（笑）。

―「リングには魔力がある」って言われますけど、国生さんはそういうものを感じました？

国生 それはあると思うな……。やっぱりね、心のどこかで悪に憧れている部分があって。ダースベイダー、大好きだし。

―ダークサイドが好きですか（笑）。

国生 そこをやっぱり本筋で行ってるから、マユは。だからそんなマユを応援して、私も〝悪〟になるっていうか。あの衣装を着てメイクして、メデューサみたいな髪の毛にしたり。凄く楽しい！

―セコンドにつくときは〝ダーク国生〟なんですね。

尾崎 ダークなのか、素なのか（笑）。

国生 人間ってさ、生きてるといい人じゃないといけない部分があるでしょ。だからプラスマイナスゼロにするみたいな。

尾崎 怖いわ……それ、わかんない。

国生 なんで？ いつも悪いことしてるじゃん！ この前なんかビックリしたよ、蛍光灯!! 蛍光灯の飛び散った破片の上でガーンッて投げてるから「な、何やってんの⁉」と思って。あれは怖かったな。

―蛍光灯は危ないですよね。

国生 この前の試合のときも傷だらけだったもんね。凄いなと思って。あと試合前、大変なんだよ、口利かなくなって。

尾崎 ごめんね。

国生 で、ずっと動いてるの。座ってないよね。

尾崎 落ち着かないんだよね。

国生 鏡の前に座ってお化粧してないもん。立ってお化粧しながら、後輩の面倒を見たりとか。デーンとしてるようなんだけど、やっぱり落ち着かないよね。そのときは「あ、触っちゃダメだな」って。背中をポンポンってやってあげたいんだけど、触っちゃダメだなと思って。



マユのこと「マユ」って呼ぶのは私だけ ほかの人はみんな「尾崎」だもん（国生）

サユは試合でも凄く声が通るから「マユーッ」って声だけ聞こえる（尾崎）

MAYUMI OZAKI × SAYURI KOKUSYO

こくしょう・さゆり■1966年12月22日生まれ、鹿児島県鹿屋市出身。85年4月おニャン子クラブ（会員番号8番）でデビュー。86年にシングル『バレンタイン・キッス』が大ヒット。87年におニャン子を卒業後は、女優としてドラマ出演、タレントとしても絶賛活躍中。08年には『バレンタイン・キッス 2008』をセリフリメイクして話題となる。

おざき・まゆみ■1968年10月28日生まれ、埼玉県川口市出身。86年にジャパン女子プロレスに入門。同年8月にデビュー。当時から悪役レスラーとして活動し、風間ルミと抗争を展開。92年からJWP所属となり、キューティー鈴木らと女子プロ対抗戦ブームの中心人物として脚光を浴びる。96年にはOZアカデミーを結成。現在も一線で活躍中。

——そこもやっぱり一線は越えられないと？

国生　ドアが開く瞬間までは。でも心配なんです。40歳で20代の選手と闘うって凄いことだよね。身体の柔軟性もなくなってきてるわけだし。この前もテーピングをガチガチに巻いてて。それでもやっぱりやるからね。

尾崎　いま考えると、「もっと若い頃に辞めて第二の人生を歩めばよかったな」って気もある。だけどいまやってることには後悔はない。ここまでやったんなら、動けなくなるまでやりたいって気持ちもあるから。でもやっぱり違う人生も歩んでみたかったって気持ちも本音。

——ちなみに違う人生っていうとどんな人生を？

尾崎　結婚とか、子どもも産んだりとか。そういう人生も歩んでみたかった。

国生　でもまだ大丈夫だよ。私がマユに望むことは、ケガをしないで一日でも長く現役を続けてほしいのと、あとやっぱりタイトルマッチで見事にフォールして決めてほしい。それと、やっぱりOZの校長だから「辞めないの？」って言うんだけど、マユはもう辞められないわけよ。

——自分の名前が団体になってるわけですからね。

国生　それもそうだし、やっぱり次の世代がまだ育ってない、マユみたいに名前が通ってないわけじゃない、みんな。

——そうですね。

国生　難しいでしょ？　だから、若い子をキチンと育ててほしいなって思う。私が言うのもへんだけど、ちょっとかじったぐらいで言うのはへんだけど、やっぱり女子プロというものがもっとみんなに人気者になってほしいからね。やっぱりゴルフの世界でもそうだけど、宮里藍ちゃんや横峯さくらちゃんのような選手が出てきて、その世代とマユたちが組めて、ガッチャンガッチャン盛り上がったらなと思うので、それは凄く希望する。だから辞められないのよ、マユは。

尾崎　そうかもね。

——そういう意味でも「協力したい」っていう気持ちがあるんですね。

国生　もちろん。だから私がセコンドさせてもらうことで、少しでもOZという団体があるってことを知ってもらって、若い子たちが育ってくれればいいですね。

——そのためだったらアルミ缶攻撃も受ける、と。

国生　そうですね（笑）。私たちはやっぱり……こういう言い方をしたらマユに凄い失礼だけど、往年の女子プロを知ってるからね。いま寂しいところもあるよね、やっぱりね。あのときってホントに凄かったじゃない。もう一度というわけではないけども、やっぱりもっと大きい会場でマユを観たいしね。

尾崎　うん、わかったよ。ありがとう、サユ。頑張るね！

——お二人の今後の活躍を期待してます！

【09年3月4日／都内・テレビ朝日スタジオ楽屋にて収録】



アカデミー賞主演男優賞ノミネート

映画『レスラー』のミッキー・ロークは“寅さん”だった!?

カミングアウト時代に出現したプロレス映画史上最高傑作がこの6月、ついに日本上陸!!
今回は映画には一家言あるマッスル坂井に先行試写を観てもらい感想を直撃!!
映画『レスラー』に“プロレス上流地帯の向こう側”は見えたのか?

聞き手／ジャン斉藤　写真協力／日活　©Niko Tavernise for all Wrestler Photos



マット界随一の“文系”プロレスラー

マッスル坂井

まっする・さかい■本名、坂井良宏。1977年11月5日生まれ。新潟県新潟市出身。早稲田大学第二文学部在学時にDDTに参加。04年10月に新機軸のプロレス団体『マッスル』旗揚げ。お笑いや映画監督でも活躍する異能のプロレスラー。186cm、120kg。

—坂井さん、その頭はどうしたんですか？

坂井　プライベートでミッキー・ロークばりにいろいろありまして……。坊主にさせてもらいました。

—はあ（笑）。で、今日は映画『レスラー』のお話なんですけども。

坂井　ホント、よかったですよ！　でも、率直な感想としては「やることなくなっちゃったなぁ」と。

—やることがなくなっちゃった？

坂井　「これがやりたかったのに！」って。ただ、この映画の細部に渡ってIGFに上がってるネクロブッチャーが構成作家的に演出に関わってるという情報を聞いたんです。確かに現場にプロレスラーがいたら監督はいろいろ聞くじゃないですか？

—プロレスの技術面とか。

坂井　いや、試合前の控室シーンとか。おおまかな状況設定はあるんでしょうけど、細かい台本が用意されてるわけじゃなく現場を知ってるネクロに聞きながら作ってるなら……たぶんネクロは来日したときに観た『マッスル』を参考にしたんじゃないかな、と（真剣な表情で）。

—都合がいいなぁ。

坂井　『マッスル』を観て、「リング上でここまでバックステージのやりとりを出していいなら、フィルム上も問題ないだろう」と。「日本ではここまでやってるんだ！」と言って現地のボーイズを納得させてたんじゃないかな、と。そういう意味で08年のナンバーワン映画に関われたことは嬉しいですね（真剣な表情で）。

—はぁ……さいですか。

坂井　「『ビヨンド・ザ・マット』（プロレスの裏側を描いたドキュメンタリー映画）に着想を得た」と監督は言ってますけど、プラス『マッスル』だろう、と。スローモーションのシーンもありましたし。

—ワハハハハ！　いままでもプロレス映画ってありましたし、カミングアウトを触った映画もありますが、今回は決定版みたいな感じで。

坂井　あ、そう見えちゃいます？

—映画自体の出来がいいし、強調して描いてないから気にならないですけど。控室の描写を見ると日本のメジャー団体は触れられないだろうな、と……。

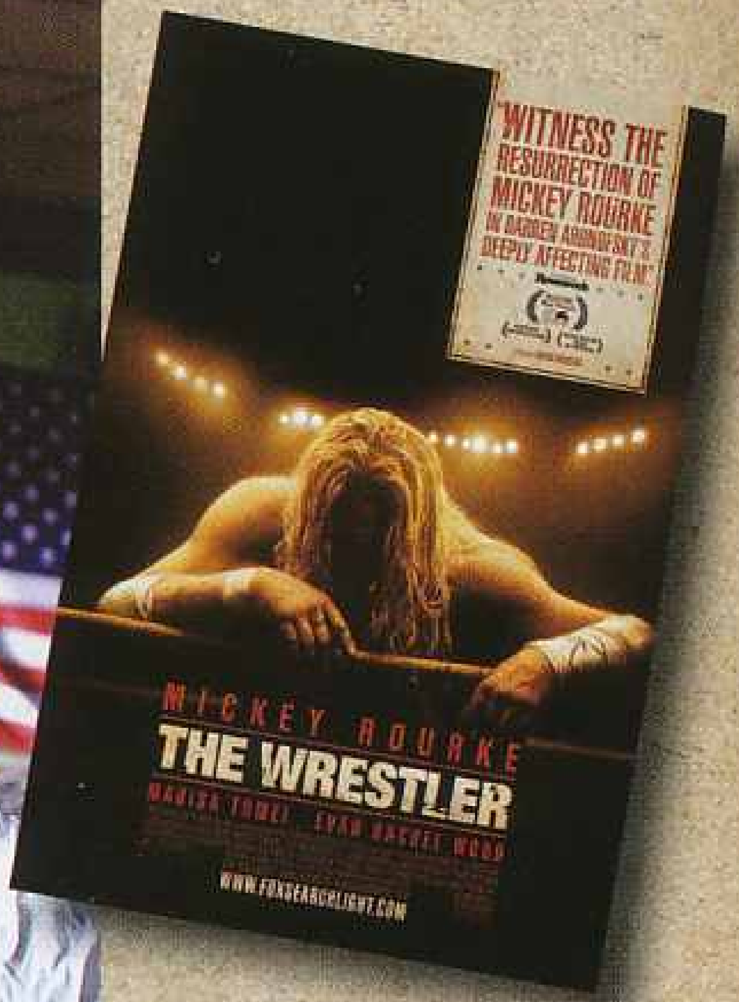
坂井　いやいや！　何を言ってるんですか？　あんたバカじゃないの？（ミスター高橋調で）。

—ワハハハハ！

坂井　これ、映画ですよ！　作りものじゃないですか！　エルサレム賞での村上春樹さんのスピーチを聞いてらっしゃらないんですか？

—賛否両論になったイスラエルの文学賞の授賞式に出席したときの談





映画『レスラー』とは？
80年代の大スターでその後、低迷した俳優ミッキー・ロークが人生の再起をかけるプロレスラー役で出演。人生を投影迫真の演技を見せてアカデミー主演男優賞ノミネート。同時にプロレスの裏側も描いた問題作。08年ヴェネチア映画祭金獅子賞受賞。6月上旬にシネマライズ、TOHOシネマシャンテ、シネ・リーブル池袋ほかで全国ロードショー。

話ですね。

坂井　村上さんは「本気でどれだけ上手に大きなウソをつけるか」「その作り話で小説家は真実を暴くのだ」と。この映画で描かれていることは真実であるとも言えますけど、すべからく現実であると受け取るのもおかしいと思いますよ。

——疑ってかかるべきだ、と。

坂井　ストーリーも基本はプロレスあるあるネタじゃないですか。ホントの話じゃないし、こんな人いないし、ミッキー・ロークなんて汁レスラー役じゃないですか。ハリウッドの汁俳優であり、汁ボクサーですよ！

——汁ボクサーだけは間違いないですけども（笑）。

坂井　ただ、流血シーンでミッキー・ロークは額をホントに切ったみたいですね。試合で自ら額をカットするシーンで普通、血ノリを使うところを、ホントにカットしてるらしいんです。

——カミソリで自分の額を切っているシーンで、映画ではウソの血を使えばいいのに、ホントの血を使ってる、と。複雑な話ですけど（笑）。

坂井　はい。ネクロの親友の掟ポルシェさんから聞きました（笑）で、その姿を見てスタッフやレスラーはミッキー・ロークをリスペクトしたって美談になってますけど……、それもウソっぽいなって。

——その考え方もかなり極端ですけど（笑）。

坂井　でも映画ってそう観ないといけないものなんじゃないか、と。あの町山智浩さん（映画評論家）が選ぶ08年のベストワン映画ですから生半可じゃないですよ。それにプロレスを描くときにある程度、リアルに思わせることって凄い技術だと思うんです。プロレス自体がスポーツや格闘技のパロディじゃないですか？

——デフォルメしてるというか。

坂井　「こんなふうにしたら、闘ってるように見えますよ」って部分をさらに脱構築化してフィルムに落とし込んでいくんだから、凄く難しいことだと思うんです。ただね、この映画ではミッキー・ロークが演じる主人公のレスラーをさも過酷そうに描いているけど……この人、そんな困ってないと思いますよ（キッパリ）。

——いやいや、家賃払えなくて追い出されそうになってましたよ。映画の話ですけども（笑）。

坂井　でも、管理人に鍵を閉められるくらいだし、一人暮らしだし、ビールとペインキラーがあれば、ハッピーじゃないですか？

——日本の現状のほうがツライ、と？

坂井　日本のインディーレスラーも、「食えない」とか「金がない」とか、「激しい試合をしてギャラが1、2万円」とか、それすらもらえないとか、ヒモとか……そんなの誰もツラいと思ってないんすよ！

——映画みたいに切なく思ってくれるな、と。

坂井　ええ。それに主人公はあきらかに楽しそうじゃないですか？

——客観的に見たら、凄く自分勝手な話だと思う人はいるでしょうね。

坂井　チャップリンが言う「悲劇＝喜劇」じゃないですか。もの凄い自由人の話ですもん。

——ただ、この映画を観た船木（誠勝）さんは「残念ながらこの映画を観てプロレスラーになろうと思う人はいないでしょう」と言ってました。

坂井　そうですかね？　でも……普通の人が子どもをマトモに育ててたら、この映画に出てくる主人公の娘みたいにかわいくならないですし、プロレスラーだからきれいなお姉さんとも付き合えるんでしょうし。

——だから「プロレスラーになったほうがいい」と（笑）。

坂井　たとえば、芸人になる前のビートたけしさんがこの映画を観たら間違いなくプロレスラーになってたと思いますよ！　フランス座ってストリップ劇場の幕間で漫才をやってたわけだし、近いムードはありますから。

——なるほど。ただ、船木さんが黄金時代のプロレスを観て「プロレスラーになろう」と思った時代とは違う動機でしょうね。

坂井　船木さんは違いますけど、「プロレスラーになろうと思ってプロレスラーになった人」は成功するのって難しいと思うんですよ。だって、プロレスラーになった時点である意味、夢がかなってるわけじゃないですか。

——以前、『マッスル』のレスラーにも同じことを言ってましたね。

坂井　結局これもたけしさんの言葉ですけど、ちっちゃい頃の夢がかな

この映画はネクロブッチャー経由で『マッスル』も参考にしたんだろうな、と

映画のテーマは『男はつらいよ』だし初期の寅さんもこんな感じですよね

マッスル坂井

うのなんて宝くじに当たるようなもんじゃないですか？　だからその世界で成功するなんて２回続けて宝くじに当たるようなもんだし、「１回は当たるかもしれないが、２回続けて当たる人はいない」と（笑）。

――馬場さんもプロレスラーになりたくてなったわけじゃないですしね。

坂井　「この世界なら天下を獲れる」と思った人じゃないと成功できないでしょう。でも、今後は「プロレスラーになりたくてなる人」が多いでしょうし、僕も映画のような世界をＤＤＴの渋谷のクラブＡＴＯＭ大会で観て、「カッコいいな」と思って入ったクチですから。

――でも、プロレスの巨大なバブルがスケールダウンしてきた句読点みたいな映画のようにも思えましたね。

坂井　いや、これが自然なんですよ。昔が不自然というか。言いづらいですけど、そこまでのものでは……。

――原点に戻って「小さいサーカスで充分だ」と？

坂井　大きくてもいいんですけど。いまはサーカスですらないですよね。移動もそんなしないし。本来、移動に適した運びやすいステージとしてのリングだったのにリングがあるから使ってるだけですし。それにサーカスは進化し続けなきゃいけないですから。

――う～ん、進化してる感じはしませんね。

坂井　エンターテインメントをきわめたいなら『シルク・ドゥ・ソレイユ』を目指さなければいけないわけです。でも、いまのプロレスラーは「楽しいかどうか」っていう快楽の部分しか考えてないですし。

――この主人公もリングという快楽に固執してますしね。

坂井　そういう人が正しい生活を選んだらどうなるか？　家庭を作ろうとしたり、離ればなれの娘と関係を修復したいと思ったら、彼は平日にアルバイトをしていたスーパーで「週末にももっと仕事を入れてくれ」と言うわけですよね。つまり家族と向き



元人気レスラーの主人公ランディ（ミッキー・ローク）は現在はインディー団体でドサ回りの日々で一人娘のステファニーとの関係も最悪状態。心臓発作でドクターストップになって以降は関係を修復しようとするが……。仕事か？　家庭か？　人生のバランスを痛感させられる濃密な映画だ。

合うことで、スーパーという社会に向き合ったわけです。で、恋人とも娘ともますますうまくいく。でも、その状況は一般的には上がってってもプロレスラー的には下がってるんですよ。幸せグラフは上がってるように見えるけど、プロレスラー活動は減ってるわけですから。

――女性の立場からしたら「正しい」かもしれないですけど。

坂井　でも、僕ら的には「勘弁してよ！」と。職場でそういう人がいたら寂しいでしょ？　「結婚したらすぐ家に帰るようになったし、遊ばなくなったよな」とか。でも、この主人公はこういう生活を50歳までやってるんですから。家庭と両立するのは難しいですよね。

――ただ、プロレスファンにはプロレスにしがみつく主人公の気持ちはわかりましたけど、一般人が観たらそこまでリングにかける情熱は伝わりにくいんじゃないかとも思いましたね。

坂井　でも、いい会社に入ることとか、係長から課長になることが「そんなにいいことなのか？」と言われると「そうでもない」のと近いかなって。「何に幸せの基準値を置くか？」ってことだし、そこにプロレスという特殊な職業を持ってきてわかりにくくしているんだと思います。「気持ちがわからない」と思わせておいて、「俺が楽しいと思ってやってる工場の仕事と変わらないんじゃないのかな？」と。

――特殊と思いきや、じつは普遍性のある話だ、と。

坂井　工場で働いてても「毎日、できあがるネジの本数が上がってる、40歳で技術が上がる俺って凄い」とか思ってるハズなんですよ。だから、自分にも突っ込ませてくれる。割れた鏡で自分を見てるような錯覚におちいる映画なんです。

――この映画はアクシデントとかじゃなく主人公のダメな部分がドラマの基点になってるんですね。そういう部分は失礼だけど、「プロレスラーらしいな」「こういう人いそうだな」って。

坂井　ええ。それ以外でも身につまされる部分はちゃんとありますし。自分は逆に主人公に憧れましたね。

――坂井さん的にプロレスラーとプライベートの幸せバランスは？

坂井　いまプライベートはむっちゃ下がってるんで、映画でまさに主人公が社会生活を捨てるところです。

――両立はできないですか？

坂井　僕はたぶん、いまは無理でしょうね。みんなは結婚して幸せになっていいと思いますけどお山の大将は狂ってないとダメなんじゃないかって。……凄く寒いこと言ってますけど（笑）。

――ワハハハハハ！

坂井　自分もホントは結婚したいんですけど。プライベートで迷惑をかけた人に謝って回ってると、しみじみ言われますもん。「おまえはそれでいいんじゃないの？」とか。

――いっそ坂井さんを映画化したいですね（笑）。ちなみに、この映画って続編も作るとしたらミッキー・ロークがもっと妥協した寅さんっぽい感じになるのかなって。

坂井　そう、寅さんなんですよ！　じつは『男はつらいよ』の最初ってこんな感じだったんです。ただのヤ○ザでクスリもやれば、立ちションもするし。

――最初のテレビ版は粗暴な性格で、それが初期の映画に引き継がれて。

坂井　途中で松竹の社長が「ウチの看板にしよう」とヒールからベビーターンさせるわけですよ。

――シリーズ化してほしいですね。

坂井　あ～、そういうことか（笑）。『レスラーはつらいよ』として。この映画のテーマは『男はつらいよ』ですしね。

――でも、いろんな女に恋をしながら流浪のレスラー稼業を続けていくミッキー・ロークは観たいですね。妹はいないから、（ビンス・マクマホンの娘と同じ名前の）娘のステファニーがさくら的な位置で。「さくら、元気か？」って感じで。

坂井　「ステフ、元気か？」と（笑）。

――ワハハハハハ！

坂井　「ハイ、ステフ！」と（笑）。もしかしてミッキー・ロークがWWEの社長的なポジションになってるかもしれませんね。毎日、会社で娘に無視されて。あとはネクロブッチャーのスピンオフとかもありそうです（笑）。

――それ、ホントにありそうだなぁ。今回もありがとうございました！

【09年3月18日／都内・『kami-pro』編集部にて収録】

WWEスーパースターがプロモーションで来日

バティスタ

筋肉だけじゃ スーパースターにはなれない

聞き手／坂井ノブ



BATISTA■1969年1月18日、ワシントンDC出身。身長198cm、体重131kg、首回り50.8cm、ウェスト91.4cm、大腿部73.6cmという規格外のサイズのWWEが誇る肉体派。常にベルトに絡むポジションで闘い続けるトップファイターだ。

プロモーションで来日したWWEスーパースターのバティスタ。さまざまな媒体のインタビューを受けていたのに疲れた様子もなくエネルギッシュなオーラを身にまとっていた。いま映画『レスラー』が話題になっているが、現役バリバリで上流地帯の頂点WWEのトップにいるプロレスラーは本当に輝いている。バティスタはもともとボディビルをやっていて、WWEの中で最も凄まじい筋肉を誇っているが、その肉体へのこだわりとプロレスラーとしての心がけを聞いてみた。

——もともとプロレスは好きだったんですか？

バティスタ　イエス。一番のめり込んで観てたのは90年代の終わり頃だね。DXやnWoみたいな軍団抗争が好きだったんだ。当時、ゴールドバーグも存在感が大きくて破壊力があったから、自分と重ね合わせて観てたよ。当時から自分も筋肉は大きかったし、風貌というか雰囲気も似てたんで共感を覚えたんだ。

——それで自分でもやってみたいと思ったんですか？

バティスタ　いや、ゴールドバーグじゃないよ。きっかけは単純さ。生活のためだ。クラブでバウンサーをしながらプロのボディビルダーで食べていこうと思ったんだけど、その将来性に不安を感じたんだ。そこでプロレスを始めたんだ。

——ボディビル時代と鍛え方は違いますか？

バティスタ　まったく違うね。ボディビルで上に行くためには筋肉を大きくすることが一番の目的だった。要求されるのはアスリートとしての運動神経じゃなくて、とにかくサイズだけなんだ。当時は一日に12回も食事を摂って、わざわざ食事のために夜中に起きたりしてたよ。

——そこまでしなきゃデカくならないんですか！

バティスタ　ああ。でも、レスリングの世界は筋肉だけじゃだめだ。身体能力が優れていないと。何年もかけて大きくしてきた筋肉を少なくしながらいまの身体になったんだ。苦労もしたよ。もともとすぐに筋肉がつく身体だから、いまはセーブしながらトレーニングしてるよ。

——筋肉だけじゃ成功しないわけですね。プロレスには試合以外で表現することも多いと思うんですが、そのへんは難しくないですか？

バティスタ　最初は与えられたキャラクターを演じなきゃとダメだと思ってたんだ。でも、演じることは素人だから全然できなかった。ただ、自分の内面から出てくるキャラクターを自然に出せるようになったとき、初めていい演技、いいパフォーマンスができるようになったと思ったよ。そうすると観客も自然とついてきたんだ。自分の内面から出てくるものを楽しむことが一番だね。

——なるほど。そんなパフォーマンスの総決算が『レッスルマニア』になるわけですが、あなたは出場するんですか？

バティスタ　ケガの回復次第で出るかどうかわからないな。『レッスルマニア25』は記念すべき大会だから出たいんだけどね。

——7月7日、8日にはWWE『スマックダウン』日本大会がありますね。その頃には復帰してますか？

バティスタ　たぶんね。でも、復帰後に所属ブランドが『ロウ』になるか『スマックダウン』になるかわからないんだ。また日本に戻ってくることができたらいいなと思うよ。

【09年3月6日／東京・渋谷　WWE JAPANにて収録】

　というわけで写真撮影の際に、7月の日本大会のチラシを持って撮影させてもらおうかと思ったら、WWEのマネージャーから「来日するかどうかわからないから」とストップが！「代わりにこれでどうだい？」と天山広吉&息子が表紙の『kamipro Special』にサラサラとサインを書いてニッコリと写真に収まるバティスタ。う～ん、なんだかよくわからない写真になってしまったが、オーラは出てる。さすがだ！

『レッスルマニア』はスカパー!で観ろ

スカパー!、スカパー!e2で放送中のPPVスペシャル番組は4月放送予定の『レッスルマニア25』よりハイビジョン化、イベント開催日から11日後に短縮した編成枠にて放送が開始される。

▶WWE『レッスルマニア25』

4月16日（木）22:00～ 初回放送よりハイビジョン化、繰り上げ枠放送

- 番組タイトルは『レッスルマニア09』となります。
- 詳しい放送スケジュールはスカパー!WEBサイトにてご確認ください
- 放送時間は変更となる場合があります

※放送に関する詳細はJ SPORTSオフィシャルWEBサイト(http://www.jsports.co.jp/)、その他WWEに関する最新情報はWWE公式WEBサイト(http://www.wwe.co.jp)またはWWEモバイルサイト(http://m.wwe.co.jp/)にてご確認ください

WWE『スマックダウン』LIVE

●日時・会場

7月7日（火）、8日（水） 17:30開場 18:30開始

東京・日本武道館

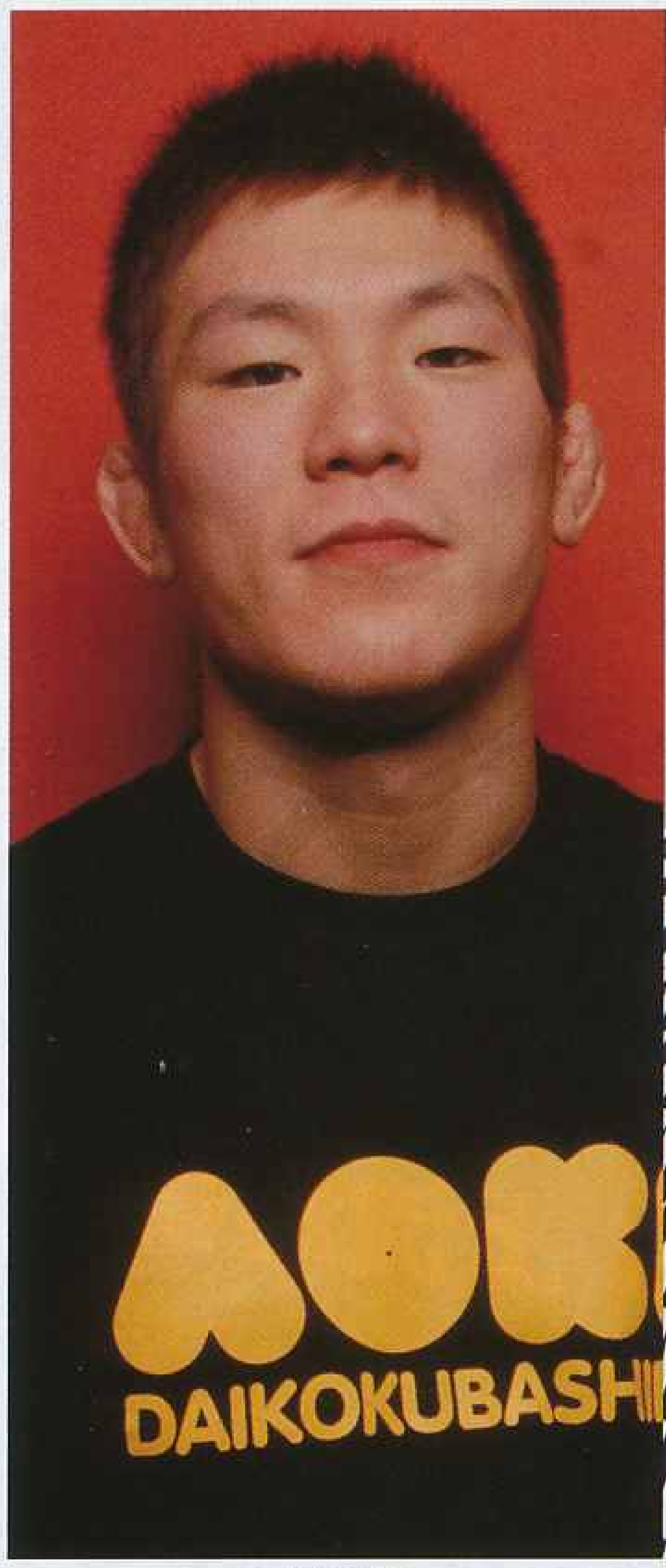
●入場料　※全席指定・消費税込み

SS 20,000円／S 15,000円／A 10,000円／B 5,000円／C 3,000円

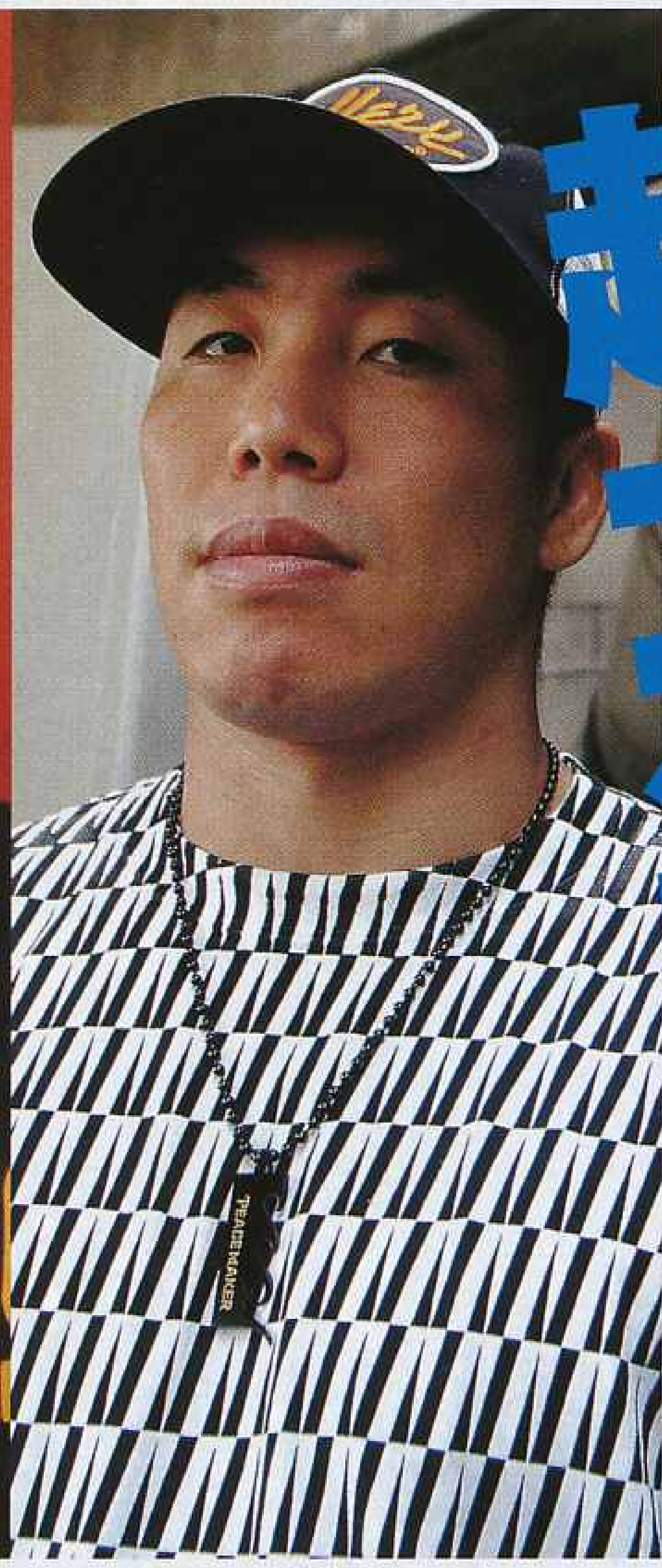
●問い合わせ

キョードー東京 TEL.03-3498-9999／WWE JAPAN TEL.03-5464-6053

超強力なコラム陣が連載中!!



青木真也
『週刊ワオ木真也』



長南亮
『ピラニアUSA日記』



金沢GK克彦
『こちらプロレス村役場ドットコム』



新日本プロレス
『週刊新日本プロレスNOW通信』

月替わりで美女が登場!! 写真と文章で毎日お届け!!

JEWELS WOMEN'S FIGHTING ENTERTAINMENT Blog



◀4月の担当は
元SM女王様
HIROKO

4月から
スタート!!

原タコヤキ君presents『mimipro』



カリスマ司会者の原タコヤキ君が毎週多彩なゲストを迎えてお届けするポッドキャスティング番組。ドッキリもあるよ!?

試合結果



注目の試合、重要な大会は細かくお届けしています。写真はもちろん各試合の短評も充実! 試合後のコメントもここで読もう!

ニュース



カード発表の記者会見や衝撃的な発表など記者会見の内容をいち早くお届け! また、会見内容もできるだけ詳しくお伝えします!

最新号情報

次号の表紙は? 内容は? そんな疑問にいち早くお答えします! 雑誌『kamipro』およびkamipro booksシリーズの発売情報はこちらで!



このほかにもインタビューや読者プレゼントなど企画満載!



プロレス&MMAのニュースサイト

kamipro.com

MMA & PRO-WRESTLING MAGAZINE

カミプロドットコム

こちらは無料です!

レッツ毎日アクセス ➡ http://www.kamipro.com/

変態さんも大喜びのプレゼントがいっぱい

kamipro PRESENTS

応募要項

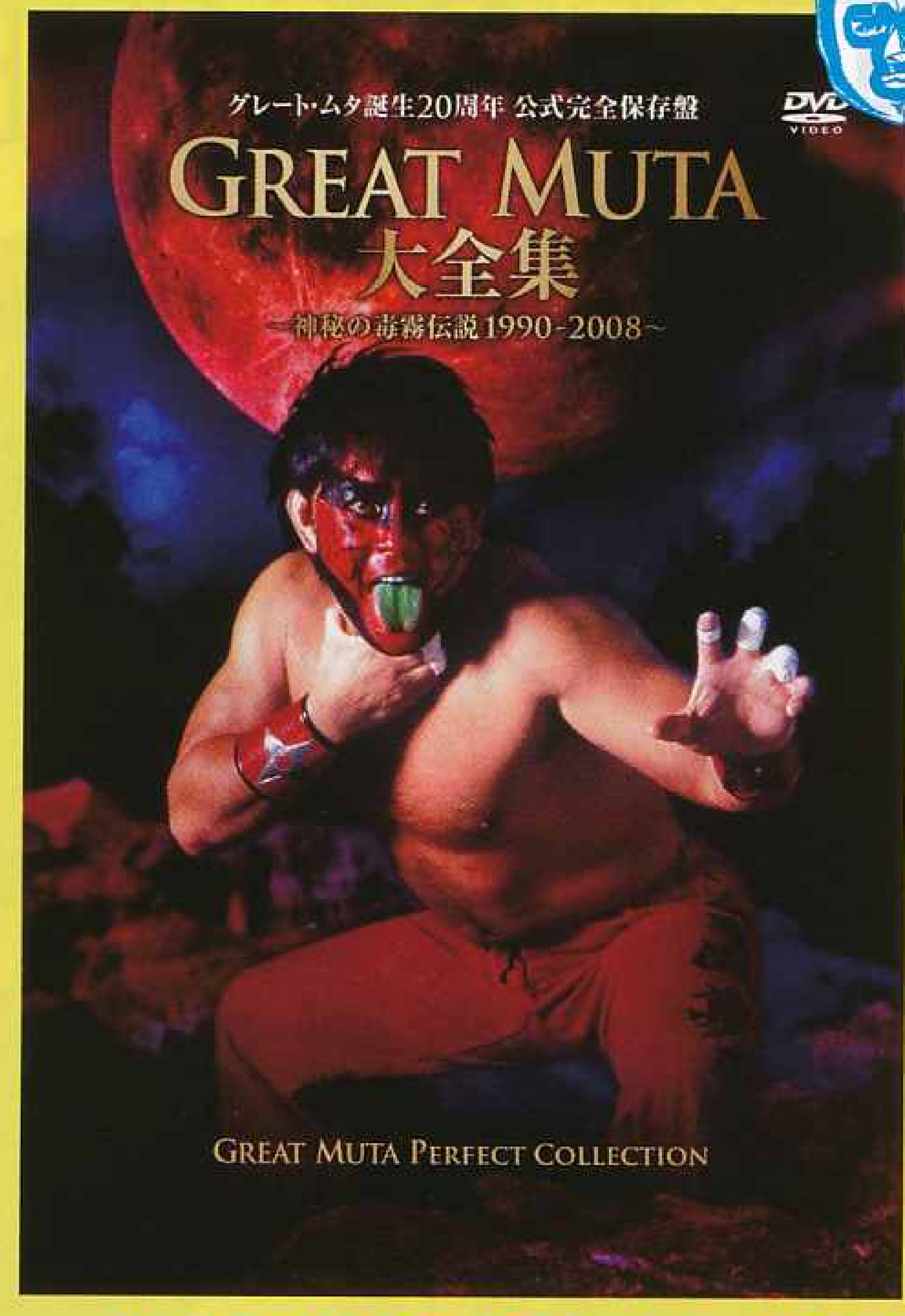
ハガキに応募券を貼り、①～⑧の質問の答えをご明記の上、下記の宛先まで郵送してください。応募多数の場合はそれぞれ抽選で決定いたします。ただし、雑誌公正競争規約の定めにより、懸賞に当選された方は、この号の他の懸賞に当選できない場合がありますのでご了承ください。なお、当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます(商品は2009年5月7日(木)頃発送予定です)。

【質問事項】①郵便番号・住所・電話番号②氏名③年齢・職業④希望賞品⑤おもしろかった記事&その理由⑥つまらなかった記事&その理由⑦一番好きなプロレスラーは?⑧一番好きなプロレス団体は?

【宛先】〒151-0051
東京都渋谷区千駄ヶ谷5-16-6パレ・ジュノ2F
(株)ダブルクロス『kamipro』編集部
「プロレスLOVE?」係まで

※応募締切は2009年4月27日(月)当日消印有効

PRESENT*01





1名様

disc-1
「魔界からの降臨1990-1992」
リッキー・スティムボート、スティング、スタイナー・ブラザーズ、長州力、馳浩らとの激闘を収録。

disc-2
「世界への挑戦1993-1997」
ハルク・ホーガン、ザ・グレート・カブキ、阿修羅原、アントニオ猪木、天龍源一郎らとの激闘を収録。

disc-3
黒の幻想～nWo武多～1997
nWo時代のムタの試合を25試合収録。スコット・ノートン、越中詩郎、スティーブン・リーガルらとの激闘を収録。

disc-4
激動狂騒組曲1998-2004
グレート・ニタ、ザ・グラジエーター、橋本真也、パワー・ウォリアー、愚零斗孤士らとの激闘を収録。

disc-5
魔界幻想2004-2008
小島聡、TAJIRI、後藤洋央紀、鈴木みのる、白使、川田利明、諏訪魔らとの激闘を収録。

DVD BOX『GREAT MUTA～神秘の毒霧伝説1990-2008～』

[ポニーキャニオン/¥20,160(税込)]

武藤敬司の分身であるグレート・ムタの誕生からトップヒールになり、日本に帰国して新日本～全日本で活躍した中での名勝負をあますところなく収録! 日本マット91試合中81試合をDVD5枚に収録! 伝説となったグレート・ムタのすべてがわかる大全集だ。絶賛発売中!

ポニーキャニオン■http://www.ponycanyon.co.jp/

PRESENT*02



2名様

天山広吉&西村修サイン色紙

[非売品]

天山&西村の新日本プロレスの爆笑対談が大好評間違いなし! というわけで、お二人のサイン色紙をプレゼント!

新日本プロレス■ http://www.njpw.co.jp/
全日本プロレス■http://www.all-japan.co.jp/

PRESENT*03

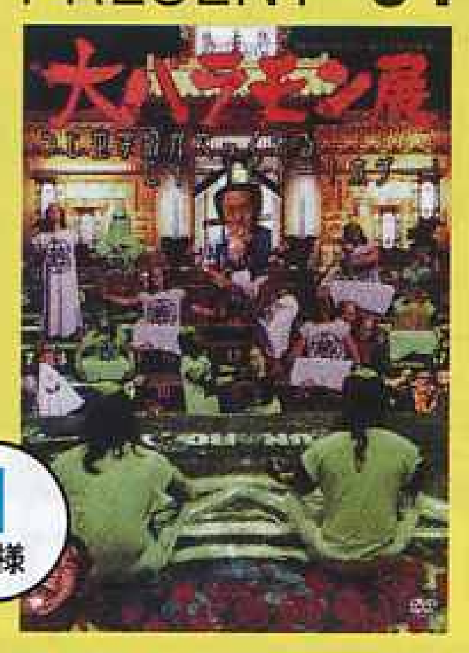


1名様

DVD『大バラモン展 ～世界ビックリうじ虫人間コンテスト～』

[エルドラド/¥2,900(税込)]

PRESENT*04



1名様

DVD『大バラモン展 うじ虫学級がやって来る ヒィー! ヒィー! ホゲー!』

[エルドラド/¥2,900(税込)]

バラモン兄弟DVD販売店は「プロレスショップマッキー」〒466-0003愛知県名古屋市昭和区曙町3-20 TEL.052-735-6969

プロレスショップマッキー■ http://www.puroresuya.com/baramondvd.html

PRESENT*05



2名様

コアチョコ『黒い猛牛COAGE Tシャツ』

[ハードコアチョコレート/¥3,500(税込)]

昭和プロレスの歴史に黒く輝く柔道の猛者が「コアチョコ・プロレスレジェンド」Tシャツシリーズに登場! サイズMとLを各1名様に!

ハードコアチョコレート■ http://blog.core-choco.com/

PRESENT*06

1名様



DVD『ハッスル・ツアー2008 DVD 3』

[エンターブレイン/¥5,040(税込)]

「ハッスル」最大のイベント『ハッスル・マニア2008』を収録したDVD。泰葉vsアン・ジョー・司令長官の激闘もこれで観よう!! 絶賛発売中。

エンターブレインショッピングサイト■ http://ebten.jp/

PRESENT*07

1名様



リバーサル『JIU-JITSU ABSOLUTO CLEANER』

[リバーサル/¥1,050(税込)]

リバーサルの携帯ストラップ兼クリーナーです。柔術家がモチーフになっており、ぶ厚くて大きいのが特徴的。カラーはRED。

リバーサル■ http://www.rvddw.com/

PRESENT*08

1名様



ウルティモ・ドラゴン『LUCHA FIESTA 2009』パンフレット

メキシコ大使館が後援したウルティモ・ドラゴンプロデュース興行『LUCHA FIESTA2009』の大会会場で販売されていたパンフレットをプレゼント!

ウルティモ・ドラゴン■ http://ultimodragon.eplus2.jp/

kamipro SP 応募券 アラフォー

ちぎって持ってっちゃダメだぞ!!

こちらでも毎週プレゼント実施中!! http://kamipro.com/

プロレスの“上流地帯”方面で話題のライセンス制度をkamiproでも導入! もちろん非公認!!

ウェルター級GP開幕の4.5『DREAM.8』はどうなった!?
kamipro No.134は4月22日(水)発売予定!
※地域によって発売日は多少遅れます。

パンクラス超大特集! 3.20『戦極』フェザー級GPも徹底詳報してます!!
Kamipro Special 2009 MAYは絶賛発売中!!

(本籍)
(生年月日)

ADDRESS
東京都渋谷区千駄ヶ谷5丁目16番6号 パレ・ジュノ2F
2009年度用

プロレスラーであることを証明する

平成21年4月1日

紙のプロレスリング・コミッシ
カミプロ一朗

WEIGHT

写真貼付

(キリトリ線)

LICENSE No.

NAME

POSITION

SITUATION

まだライセンスをお持ちでないというプロレスラーの皆さま、よろしければどうぞ!!

MMA & PRO-WRESTLING MAGAZINE
kamipro Special
2009 SPRING
2009年4月16日 発行

発行人
浜村弘一

編集人
斉藤慎一

編集統括本部長
ジャン斉藤

編集スタッフ
坂井ノブ
堀江ガンツ
阿修羅チョロ
松下ミワ
真下義之
大川義之
スズキィ
八木賢太郎(命名のため非番)

終身名誉バイザー
吉田 豪

助っ人
ジャイ子

編集次長(○○しました!!)
松林 貴

デザイン大将
出田さん(TwoThree)

デザイン司令長官
金井ヒサくん(TwoThree)

デザイン
松坂マツくん
谷タニやん
廣田ブンちゃん
野口ノグッチー
白木みのるちゃん(以上、TwoThree)

カメラマン
乾 晋也
菊池茂夫
平工幸雄
山口比佐夫
吉場正和
平 専英
戸成嘉則
丸山剛史
タイコウクニヨシ
梅木麗子
金山フヒト

お勘定
工藤ちゃん

4Lペットボトル
入江大五郎(TwoThree)

雑誌営業
堂前秀隆
中村宣忠

助っ人営業
上野宏樹

業務部
樽本“黒箔”義之

編集庶務
原 正典
山内ユリコ

終身名誉編集庶務
高木由美子

編集チアガール
金川“今夜は芋ロック”奈津子
白倉明子

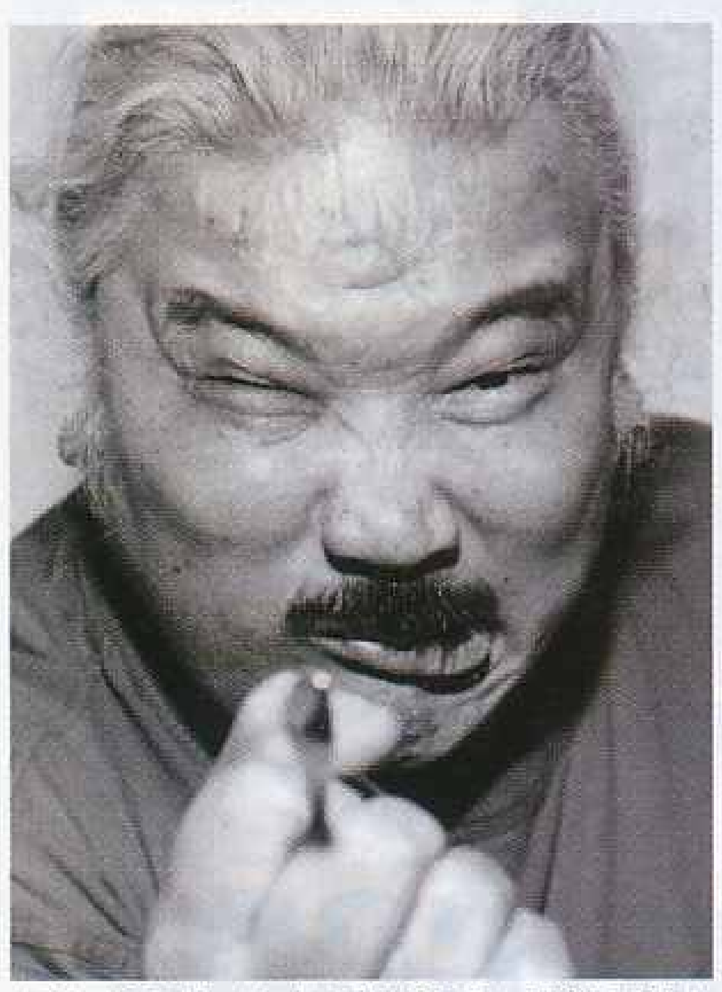
上流地帯マダム
廣橋久美子

発行所
株式会社エンターブレイン
〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1
☎0570-060-555(代表)

印刷
大日本印刷株式会社

協力
BUSHIDO KOVOTOJO KELIAS
FightSport

■広告掲載のお問い合わせは下記まで
株式会社エンターブレイン スポーツ企画編集部
☎03-3265-7166



俺はいまでもライセンスを持ち歩いてるっちゅーの!

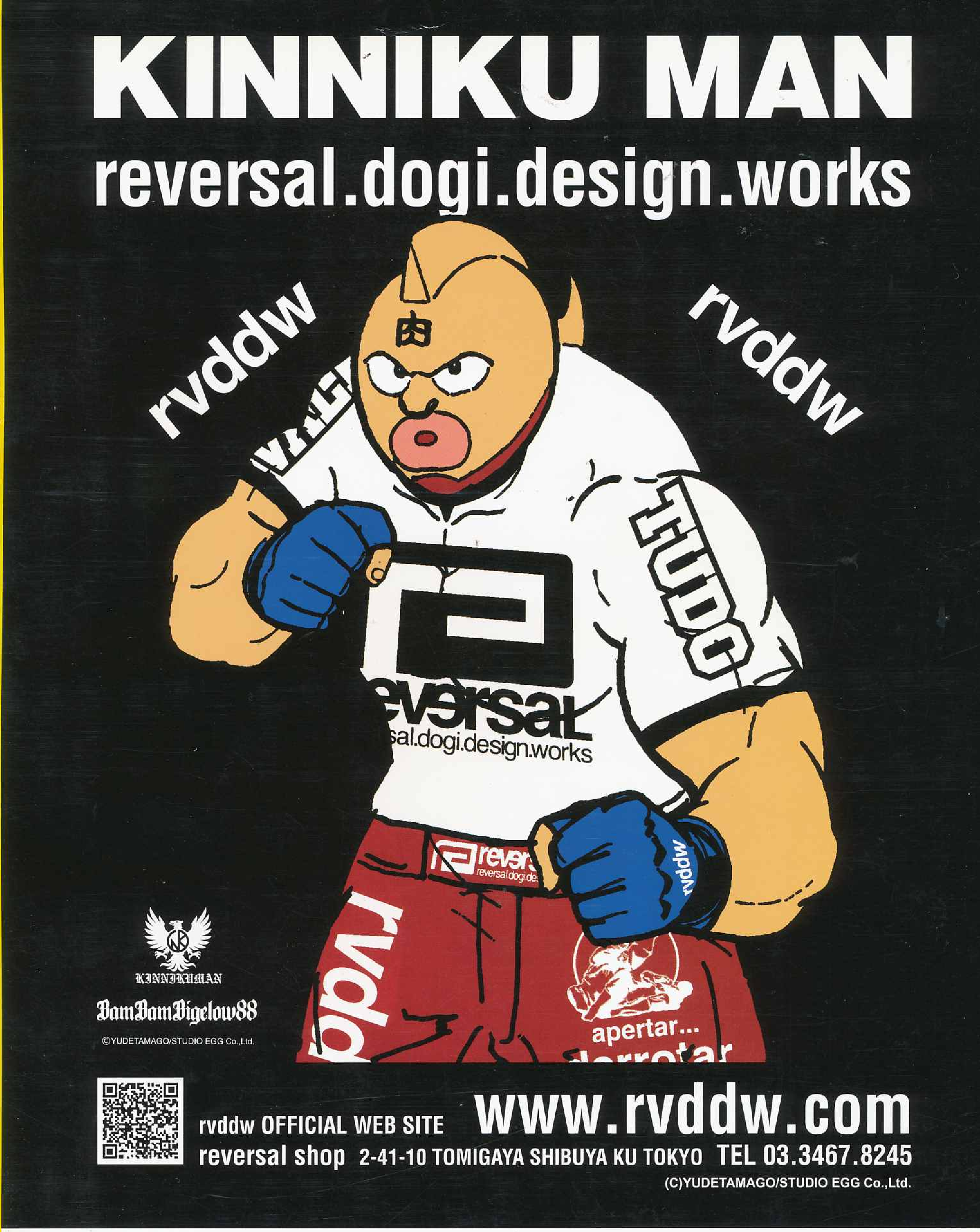
※イメージモデル/ライセンスにはうるさい上田馬之助さん

本書の内容、不良品交換等についてのお問い合わせは下記の窓口までお願いいたします。なお、内容につきましては記載以上の詳細につきましてはお答えできませんので、あらかじめご了承ください。

[カスタマーサポート] ☎0570-060-555(受付時間/土日祝祭日を除く 12:00〜17:00) メールアドレス support@ml.enterbrain.co.jp

●個人情報の取り扱いについて
本書にお寄せいただいたハガキ、各種のお問い合わせに関連してご提供いただいた個人情報につきましては株式会社ダブルクロス、および株式会社エンターブレイン(URL:http://www.enterbrain.co.jp/)、それぞれのプライバシー・ポリシーの定めるところにより、取り扱わせていただきます。

MOOK
kamipro Special 2009 SPRING
いまこそ"プロレス上流地帯"宣言せよ!!
俺、変態のミカタです……
2009年4月16日
発行人／浜村弘一 編集人／斉藤慎一 発行・発売所／株式会社エンターブレイン
〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1 ☎0570-060-555(代表)
印刷・製本／大日本印刷株式会社 ©2009 ENTERBRAIN,INC. ©2009 DOUBLECROSS
eb! enterbrain



9784757748743

定価: 本体819円 +税

雑誌61957-29 Ⓗ2010.5

Printed in Japan 大日本印刷株式会社

ISBN978-4-7577-4874-3
C9476 ¥819E

1929476008190